女性改造

大正十三年十一月一日發行 大正十三年十月十二日印刷納本



十一月號


純無鉛
クラブ白粉
自然の白さ！
色は白く
美しくなり
顔は若く
晴れやかになる
クラブ水白粉の清新な化粧美


イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
到る處の藥店にあり
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和ゴム製作所
電話墨田局四二一、一〇三三、一〇三四番
特長
◎伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◎大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔◎着脱に手數がからず、洗濯はたゞ水をかける計りで奇麗になります◎かさ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
(別製) 小形(二號)七〇錢 (特製) 八〇錢
(別製) 大形(三號四號)八〇錢 (ゴム製) 九〇錢
純ゴム特製 一圓十錢 一圓卅錢
◎振替口座東京一三〇〇二番
直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい。



女性改造十一月號目次

菊池寛著

戀愛病患者

定價壹圓五拾錢
郵稅拾五錢

新刊

菊地寛氏は、現文壇に活躍せる勢威盛んなる活火山である。その天に冲せる噴煙は、あらゆる讀書人の注目を惹かずにはいないだらう。本集は、氏が最近の創作中より、小説の粹と戯曲の精とを蒐めたもので、就中「戀愛病患者」の如きは、氏が戀愛至上に對する猛烈なる否定を主題とし、戀愛至上主義者に對する一大痛棒をなすものだらう。小説「羽衣」の如きは、その奔放なる構想と大膽なる落筆と相俟つて、天人共に揶揄し去つたものだらう。その他小説戯曲十數篇、悉く快刀人[illegible]

信康母子
震災餘譚（戯曲）
浦の苫屋（戯曲）
戀愛病患者（戯曲）
ある記錄
頸縊り上人
微苦笑
羽衣
世評（戯曲）
[illegible]

東京市愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

電話高輪四九九三

現代の女性と
ビクトリヤをきり
はなして考へる事は
出來なくなりました
日々何々……
日々何々……の

他製品や御手製の月經帶を御使用になつた方も結極はやはり
ビクトリヤに歸へられますそれほど**ビクトリヤ**は至巧なる構
造と至廉なる
定價の許に發賣されてをります

御婦人は月經時も**ビクトリヤ**に依つて始めて
絕對の御安心が得られます



純ゴム製罐容器附 月經帶

ビクトリヤ

到る處の藥店小間物店にあり



定價
一號品 純ゴム製丸罐入 金五十五錢
二號品 朱几（?）製衣附角罐入 金七十錢

直接發賣元へ御注文の節は郵稅四十五錢添へ前金に願ます◎代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい

發賣元 **大和ゴム製作所**
東京向島寺島町（曳舟驛前）
振替東京一三〇〇二番
電話番號 (新線) 一三四二 〇〇九 三三二五 三四一七



水浴する女　　ロート



山川菊榮夫人への反駁

——『婦人非解放論の淺薄さ』について——

生田長江

一

性、性慾、戀愛、結婚、離婚、婦人、婦人解放等の諸問題について、私が私自身の意見を公表しはじめてから、もうだいぶになります。そして其意見の當否、價値無價値は暫くをき　兎に角他の人達の意見とかなり距りのある、かなり特色

のある物であるに係らず、是認共鳴は愚か、非難攻撃をさへ浴びせかけられるに至らず、單に等閑視されてばかり來てゐるのは、私が此上もなく遺憾に思ふところのものでありました。

それ故先日雜誌社の方が來られて、『生田長江氏の婦人論を評す』と割註された貴女の評論を示された時、ただその標題を一瞥しただけでもう、私はかなりに自分自身を幸福に感ずることが出來ました。なぜと云つて、婦人評論家の間に第一人者を以て許されてゐる貴女のやうな方から、しかも婦人問題に關する私の所見を問題にして頂いたと云ふのは、私にとつて甚だ光榮であると思つたからであります。又貴女の普に聞えた、精嚴にして周到なる批判の筆に依つて、私は一面私の婦人論の多少なり有意義なる部分を、少しでも廣い社會へ行き亙らせる上の大なる便宜を獲、他面私の考察の不十分なるところを補正する上の此上なき機會を與へられるであらうことを期待したからであります。

然るに、山川さん、やがて貴女のかなり長い批評を通讀し了つたあとでの私は、さうしたお芽出度い私の期待が殆んど悉く裏切られてゐたことを見出したばかりでなく、さきに私に取つて甚だ光榮であると思つた事をさへ、餘り光榮でもなささうだと思ひかへさねばならなくなつた位であります。

先づ第一に遺憾な事として貴女は、貴女御自身さへ『短い文章』と仰しやるほどの、あの短い感想『婦人解放論の淺薄さ』(本誌六月號)に於てはじめて私の婦人論の一片鱗に觸れ、しかもあの一片鱗からして私の婦人論全體に對する概念を無造作につくり上げてお仕舞ひになりました。

しかし乍ら、それが單に短いと云ふばかりでなく、ある意味に於ては、私の從來の婦人論からの拔萃にすぎない物であり、論理的展開を甚だしく省略した物であり、從つて獨立して十分の意味をなしにくいやうな物であると思つた私自身は、あの短文のあとにわざわざ斷り書きをして置いたではありませんか——(附記。私は此種類の主張を餘程前から發表してゐます。私の立脚地を駁撃しようとする方は、他の諸論文をも參照して下さるやう希望して置きます)と。

わざ〳〵斯うした斷り書きのなされてゐる場合、それを無視して單にあんな『短い文章』からのみ私の立脚地を駁撃するといふのは、決して十分に深切な態度とは云はれないでせう。加之、さうした不深切をやりながら、それの止むを得なかつた事情をも何をも斷らず、全く當りまへのやうな顔をしてゐるのは、不深切以上の何物かでなければなりますまい。

だが、山川さん、貴女のは更にそれ以上ではありませんか。なぜと云つて貴女は、それらの不深切と不深切以上の何物かとを敢てして尚ほ足りとせず、單にあの『短い文章』に見えたる私の意見だけを批評しながら、私の婦人論全體を批評し去つたかのやうにさへ御吹聽なさるからであります。

貴女も、『些かは良心に刺戟を感ぜられてもよい筈である』などと仰しやるところを見れば、良心といふ言葉だけは御存じのやうですが、しかし、論敵に對する貴女の實際の態度なぞを見れば、良心といふ言葉によつて何が意味されてゐるかは、まだ十分に御解りになつてゐないらしいですね。

それとも貴女は、黨派根性の濃厚な大抵の論客等と同じやうに、目的は手段を神聖にするといふゼスヰツト主義の信奉者であつて、神聖なる『婦人解放論』に弓を引くやうな逆賊共に天誅を加へる爲めには、如何なる手段、如何なる武器、如何なる戰術に訴へても構はないのだと、さう云ふ風に考へてゐらつしやるのでせうか。

若しさうだとすれば、この上貴女の道德意識を問題にすることの愚かしさは思ひ切りますが、それにしても貴女御自身は、神聖だと思ひつめてゐた目的が、ちつとも神聖でなかつたのを發見して、かなり自分自身を馬鹿らしく感ずることから、どうしても御逃れになれまいかと思ひます。なぜと云つて、貴女が貴方がたの正面の敵だと早合點してお仕舞ひになつたところの私は、實際上必ずしも一切の婦人解放を否定するものでなく、寧ろ或る意味での、或る條件を附した上での、かなり熱情的な婦人解放論者であり、從つてさうした私に『天誅』を加へようとすることが、それほど神聖な目的で

あるとも云ひがたく、それほど神聖であるとも云ひがたい目的の爲めに、貴女の取られたやうな手段を取るといふことが、結局餘り氣のきいたものであり得ないからであります。

少くとも私から見て、婦人解放問題の最も重要なる二三點に就いて、私の考と貴女の御考との間に、餘り大きな距りのないといふことは、貴女にして若し私の希望した通り、婦人問題に關する私の他の諸論文をも、せめて『愛の本質について』、『性及び性的なもの』（『ブルヂヨアは幸福であるか』の中に集められてゐます）等二三篇をでも一讀して下すつたなら、十分諒解していただくことが出來たらうと思ひます。

それ故、貴女の誤解の大部分をとく爲めには、右の拙文數種を貴女の所へ御送りして、それを讀んで見て頂くだけで、大抵間に合つたかも知れません。

しかし、さうした方法では綺麗になくしてしまふことの出來ないやうに見える誤解もあるのです。そしてそれは單に偶たま貴女から受けた誤解であるのみならず、ともすれば一般社會主義學者、特に唯物史觀派の人達から受け勝ちな誤解であり、一言にして云へば、貴女がたに共通したある謬見、謂はば或る社會主義的先入見にもとづいてゐるもののやうであります。

その貴女がたの先入見を、機會ある毎に批判し解剖するのを一の義務だと心得てゐる私は、この度の機會をも逸するわけに行きませんので、かたがた貴女への此反駁文を書く氣になつたのであります。

總じて黨派根性の濃厚な人達に、その間違つた信條を棄てさせることが容易でない如く、貴女がたをして貴女がたの先入見の誤謬であつたことを知らしめるのも、かなり困難な事でせう。誤謬であつたと言はしめるのは一層困難な事でせう。だが、公開されたこの貴女への反駁文は、貴女及び貴女の周圍を聊かも說服し得ない場合にすら、尙ほ且つ公明なる讀者諸君の頭腦と心情とへ訴ふるところの何物かを有つてゐる限りに於て、決して無意義でないだらうことを信じます

二

山川さん、貴女は先づ『婦人問題とは、社會の經濟的發達に伴うて起つた婦人の地位の變化に關聯する一切の問題をさして云ふ名稱である』と仰しやつてゐる。苟くも社會的な問題である以上、經濟的發達と相伴はないで起るやうな事象を取扱ふ筈もないので、貴女の定義は定義として十分なものとは云へないが、しかしまあ、太した誤謬を含んでもゐないやうです。

けれども、そのお言葉の直ぐあとにつゞけて、『既に經濟關係によつて惹き起された問題である以上云云』と仰しやつてゐるところを見れば、貴女もまた唯物史觀派の多くの學者等と同じやうに、『に伴うて起つた』と『によつて惹き起された』とを同一視してゐらつしやるやうですね。言ひ換えれば、時間的に又は時間的及び空間的に相伴うて起る若干現象の中、その一を勝手に撰び取つて、それが他の物の原因であると云ふ風に御考へになるんですね。

例へば、明治十年の某月某日西郷隆盛が城山の露と消ゆるや、恰かも其日私共の敬愛する米國伯爵山崎今朝彌氏が信州の某地にこゝの聲をあげたと聞くとき、貴女がたは直にその二大事件の中の何れかを、他の物の原因であるとなさるんですね。彌次郎兵衛が喜多八と相伴うて東海道五十三驛を練り歩いたと云へば、貴女がたは直に、彌次郎兵衛が喜多八の家來だと速斷してお仕舞ひになるんですね。

斯うした貴女がたの常習的非論理を追窮するのも、『唯物史觀の淺薄さ』などを批判する上には興味のある仕事ですけれど、差當り『婦人解放論の淺薄さ』や『婦人非非解放論の淺薄さ』を解剖する場合には、餘り重要なことでもありませんから、これはこれだけにして置きます。

何なら此場合一つ讓歩して、貴女が『に伴うて起つた』と仰しやるのは、單に時間的に、或は時間的空間的に相伴うて

起つただけでなく、一の物の結果として他の物が起つたといふ意味であり、つまり『によつて惹き起された』と同じ意味であるとしても宜しいです。

だが、山川さん さうしても矢張、貴女が婦人問題を經濟關係によつて惹き起されたる問題だと仰しやる時、貴女は『專ら經濟關係によつて惹き起されたる問題』を意味してゐらつしやるに相違ない。なぜと云つて、その次ぎの頁の二行目には、『それは單純な經濟組織の作用の結果であつて』云云とも仰しやつてゐますから。

ところで、婦人問題の一部分である婦人勞働問題ならば格別、廣義に所謂婦人問題が、專ら經濟關係によつて惹き起された問題であると云ふならば、苟くも社會的な問題の何物が、同じく專ら經濟關係によつて惹き起された問題であり得ないでせうか。文藝復興、宗教改革、愛蘭自治なぞは無論のこと、自然主義、印象主義、表現主義等の諸運動すらも、それが社會的な問題となつた限りに於て、皆悉く、專ら經濟關係によつて惹き起された問題といふことになり得るではありませんか。

乃ち、一切の社會的な問題が悉く皆、專ら經濟關係によつて惹き起された物であると言はれない限り、婦人問題が專ら經濟關係によつて惹き起された物であり、經濟關係以外のさまざまなる物質的原因とさまざまなる精神的原因とによつて惹き起された物でないとは、さうは言はれないやうに思ひます。

しかし、差し當つてのところは再び讓歩して、貴女の仰しやる通り、婦人問題が專ら社會の經濟關係によつて惹き起されたものであり、單純な經濟組織の作用の結果であるとしても宜しいです。

さてさうしても、それ故婦人問題が經濟的見地を離れて考究し、論斷することの不可能な問題であるといふ貴女、及び貴女がたの論理は、隨分奇怪な、笑ふべき論理であると云はざるを得ません。

まあ、考へても御覧なさい。ここに一人の男があつて、食べ物が惡く、勞働がひどすぎる爲めに、即ち貧乏故に病氣に

なつたとします。その内、彼は幸にして大變なお金持になりましたけれど、前からの病氣はやはり其儘になつてゐるとします。そして或るお醫者の處へ出かけて行つて其病氣の治療を乞ふたと致します。その場合お醫者は單に醫學上の智識及び技術によつて、その病氣を治療してやることが十分に『可能』ではないでせうか。加之、その病氣のそもそもの原因が、貧乏といふ經濟的事情にある故、經濟的見地を離れては、其病氣をなくする方法を決定することが出來ないと言つたらどうでせう。

　勿論、私が右の如き比喩を持ち出したのは、貴女及び貴女がたの論理の粗漏さを指摘する爲めであつて、婦人問題に原因をなしたる經濟的事情が、既になくなつてゐるといふやうなことを言はう爲めではありません。だが序を以て云へば、婦人問題のある部分〳〵に原因をなしてゐたところの經濟的事情は、既になくなつてゐるのだと云へるかも知れません。そしてその場合、さきのお醫者が彼の患者になしたる如く、婦人問題のその部分〳〵について、經濟的見地を離れたるさまざまの考究論斷を試みるといふのは、一向に差支のない事ではないでせうか。

　山川さん、私の右の比喩に於ては、貧乏故に病氣になつた男が、貧乏でなくなつた後尙ほ依然として病氣をもつてゐると云ふのでした。これに對して、餘りにもありすぎる如く、依然として病氣をもつてゐると共に、依然として貧乏であつたらどうだらうといふのは、まことに自然なる疑問であると思ひます。

　偖て今、貧乏故に病氣になつた男が、依然として貧乏の中にゐながら どうしても其病氣を治されねばならないとします。問題は勿論、經濟的見地からも解決されることを必要とするでせう。しかし、單に經濟的見地からのみ解決さるべきでないことは、餘りにも明白ではないでせうか。

　ところで山川さん、よし婦人問題が貴女の仰しやる通り專ら經濟關係によつて惹き起された問題であるにもせよ、尙ほ且つ單なる經濟的見地からのみ解決されないやうな、例へば生物學的、心理學的見地なぞからも考察されねばならないや

うな物でもあり得ることを、貴女は御認めになりますでせうか。いや、それだけの事は、どうしても御認めにならざるを得ないでせうね。

そしてそれを御認めになるならば、更に貴女は、婦人問題が例へば生物學見地心理學的見地なぞを離れて考究し論斷することの不可能なものであり得ること、強いてさうする結果は大なる見當違ひに陷るかも知れないことをも、當然御解りになるだらうと思ひます。

但し、山川さん、かうした私の議論の半ばに於て、あまり早合點をなすつては困ります。私は決して單に生物學的見地心理學的見地なぞから婦人問題を解決しようとした私自身の態度が間違ひなら、單に經濟的見地からばかり婦人問題を解決しようとする人々の態度も間違ひだといふ風に云つて、五分五分の勝負に片附けてしまふ積りではありません。そして寧ろ、婦人問題を申分なく立派に解決したつもりでゐる婦人解放論者の大多數こそ、非常に間違つた態度をとつてゐるけれど、彼等の主張の誤謬や不合理を指摘するところに中心點を置いた私の婦人問題觀は、それほど間違つた態度の下になされてゐるのでないといふことを明らかにしたいのであります。

即ち、婦人問題に對して成るべく行屆いた解決を下す爲めには、成るべく廣い見地から考察することを必要とし、又それぞれの見地が成るべくしつかりしたものであることを必要としてゐるにかかわらず これまでの大抵の婦人解放論者は、生物學的、生理學的、心理學的の諸見地をあまりにも閑却してゐます。或は、彼等の立てたそれらの諸見地は、あまりにも怪しげなものであります。從つて彼等の態度は非難されることを免れません。

けれども婦人解放論に對する私の批判の如く、他人の主張の誤謬や不合理を指摘するところに中心點を置き もしくは範圍を限つてなされる言論に於ては、單なる專門家すらも其專門の見地からして所見を述べることを十分に許されるべきです。加之、批判されてゐるところの主張が、結局に於て成立し得ないものであると宣言することの權利をさへ有つて

ゐるのです。

特に私自身の場合を云ふと、私がどれだけ廣汎なる見地に立ち得る人間であるかは暫くをき、所謂婦人解放論を批判するに當つて、その大なる誤謬と不合理とが、經濟的見地の閑却もしくは經濟的考察の不徹底より來るよりも、寧ろ生物學的、生理學的、心理學的等の諸見地の閑却、もしくはそれらの方面からの考察の不徹底より來てゐると見て取つたのであります。そして專ら、或は主として生物學的、生理學的、心理學的等の諸見地から、『婦人解放論の淺薄さ』を證據立てやうとしたのであります。

山川さん、斯うした私の態度のそもそも何處に、貴女の仰しやるやうな『不用意』がありますか。

序ながら申上げて置きますが、經濟的考察が議論の表面に露出してゐないからと云つて、直に、經濟的見地その物が閑却されてゐるかのごとく速斷するなぞは宜しくない事です。苟くも經濟的見地に立つた以上、そんな馬鹿々々しい事が言へるものでないと、さう思はれる時にこそ、はじめて經濟的見地の閑却されてゐることを推定すべきです。具體的に云へば、私の書いた短い文章たゞ一つを、しかもいい加減表皮的に讀んで見たゞけで、私の婦人問題觀に經濟的見地が閑却されてゐるものと斷定してしまふなぞは、單に輕卒であるのみならず、日頃社會主義學者として御自分の、或は御自分達の經濟的見地に慢心してゐられることから來た一の結果のやうで、なんだか一寸氣の毒に思ひます。

三

山川さん、次ぎには少し長いけれども貴女の御言葉を引用します――

『勿論いつの時代にも、いかなる社會に於ても、男女間には生理的分業があると同時に、それに關聯して或程度の社會的分業のあることは事實である。しかし其社會的分業の範圍は、其社會其時代の產業や經濟的發達の情態によつて異

るもので、かの生理的分業、卽ち女子に於ける分娩哺育の任務の如く、決して一定不變のものではない。ところで現代は、産業上に於ける一大變革の時代であつて、生產方法の變化に從つて、男女間に於ける社會的分業の法則も自ら變化し、再組織せらるべき機運に遭遇してゐる時代である。ところが此一定不變の自然的分業、卽ち男女の生理的差別と、それに準じて起つたものではあるが、時代により、社會進化の程度によつて或る程度まで——そしてかなり廣い範圍に亘つてまで——變化の可能性ある社會的分業とを混同する結果、現代婦人の要求に對して種々なる誤解や無理解が生ずるのである』云々。

貴女の此の御言葉は、これまでの大抵の婦人非解放論に對する反駁として、かなりあたつてゐるやうです。しかしながら、一定不變の所謂自然的分業と變化の可能性ある所謂社會的分業とを混同しない場合にも、これまでの大抵の婦人解放論に對する駁擊は十分になされ得るのであります。なぜと云つて、これまでの大抵の婦人解放論者等は、男女間に於ける社會的分業が決して一定不變のものでないといふとき、尙ほ且つその法則が、男女の生理的心理的差別に準據しながら變化され、再組織されねばならないことを忘れ、又從つて社會生活に於ける男女間の差別が全然無視されてよいかの如く考へてゐるからであります。

ある時代、ある社會に於ける社會的分業の方式が、次ぎの時代、次ぎの社會に於ても其儘持續されねばならないとは、私共も勿論考へません。ただ其方式が如何に變革されやうとも、必ずつねに男女間の生理的心理的差別に準據しなければならないものだと言ふだけであります。つまり男女は永久に、全く同一の社會的生活を爲すことを許されず、從つて全く同一の權利、全く同一の義務を有することが出來ないと言ふだけであります。

ところで、山川さん、此點についての貴女の御意見は、私共の意見とだいぶ異つてゐるやうですね。なぜと云つて、『男女間の自然的差別でなく、婦人の天性を損ふて其自由な發達を妨げるやうな不自然な、人爲的な社會的差別に對して撤廢

の必要を認めること』云々の貴女の御言葉からも推定される如く、貴女もこれまでの大抵の婦人解放論者と同樣、一切の社會的差別が『婦人の天性を損ふて其自由な發達を妨げるやうな不自然な人爲的な』ものであるとなし、それの撤廢を必要と認めてゐられるやうに見えるからであります。

だが、貴女が一切の社會的差別を撤廢することを必要としてゐらつしやるか、それともさうでないかは、此場合の肝要事ではありません。ともあれ、これまでの大抵の婦人解放論者が、男女間の一切の社會的差別をなくして行くのを必要と認めたことだけは、貴女からも十分に承認して頂ける事實でせうね。

偖てこれを事實として、男女間の一切の社會的差別をなくしようとすることが、やがて實際には男女間の生理的心理的差別を無視することにならないものでせうか。換言すれば、私の所謂『男女の一切の差別をなくして』しまはない限り、男女間の一切の社會的差別をなくすることが出來ないものではないでせうか。

若しさうだとすれば、これまでの大抵の婦人解放論者等が意圖したのでなく、意識したのでさへないとしても、尚ほ且つ避けがたき論理的歸結として彼等は、男女の一切の差別をなくしようとしたことになるではありませんか。

加之、婦人解放論がまだ生理的心理的見地なぞからの駁擊を受けないでゐた時代にあつては、論者等は多くの場合、專ら社會的差別をのみ念頭に置いたであらう故に、社會的差別を一切の差別と思ひなし、男女の社會的差別をなくして行くことの必要を『男女の一切の差別をなくして行くことの必要』として表白したらうことも、たやすく想見されるではありませんか。

山川さん、貴女は、『男女の一切の差別をなくして行くことが必要である』と主張した『婦人解放論者の或るもの』とは、果して何人であるか云々と、何だか皮肉らしい御口を利いてゐらつしやいますね。

今不圖、盜人猛々しいといふ言葉を思ひ浮べましたが、これを貴女への批評に用ひることは差控えませう。そしてた

だ、よくもよくも、そんな白々しい事が云へますねと、單にそれだけ申し上げて置きません。

勿論、『男女の一切の差別をなくして行くことが必要である』と、丁度この言葉通りに主張した者は、婦人解放論者のうちにただの一人も見出されないでせう。と同時に、斯うした意味の事を主張した婦人解放論者が如何に多くあり、かうした意味の事を主張しなかつた婦人解放論者が如何に少かつたことでせう。そして現に貴女御自身さへも、實質においてこれに近い事を主張してゐらつしやるではありませんか。

生憎手許に書物がない爲め、うろ覺えの儘を申上げて失禮ですが、ヘブロック・エリスはその『社會衞生學』の中に言つてゐます――これまでの婦人運動は大部分婦人が男子を摸倣すること、婦人が男子と同じ仕事と權利とを獲得しようとすることにのみ範圍を限られてゐたと。

エレン・ケイもどつかで言つてゐます――從前の婦人解放運動は、婦人の權利を單に人間の權利としてのみ確立しようと努力した。言ひ換えれば 彼等は婦人にも男子と全く同樣なる總ての權利を與へ 全く同樣なる生活を許せよと主張したのであると

尙ほ、私共から申上げるまでもなく、先刻御承知の事とは思ひますが、一昨年あたり、所謂フエミニスト・マグナ・カルタ二十八ケ條を發表した亞米利加の『婦人黨』なぞは、現在男女の絶對的平等を要求する具體的な運動をやつて居り、又その爲めに、男女間の一切の差別をなくしようとするものとして、特に生理的差別を無視するものとして、保守的な、並びに進歩的な各種の婦人團體から、非難攻撃を加へられてゐるではありませんか。加之、婦人も特に勞働婦人に對する保護法の撤廢といふ問題に關しては、一部の婦人勞働團體から猛烈な反對運動が起つて居り、その反對運動者等は、『婦人黨の人達はブルジョア階級の婦人達の集りであつて、勞働婦人の生活に容喙するのは僭越である。あの人達は貪婪あくことを知らない資本家等とひそかに欵を通じてゐるであらう』なぞとさへ言つてゐるではありませんか。

いや、こんな事を長々と申し上げる必要はない。これまでの大抵の婦人解放論及び其實際運動が、エリスやケイさへ云つてゐるやうなものであつたこと、また今日に於てもさうした種類のものが決して少くないといふことは、苟くも見るところを正直に言ひ得る、總ての常識ある人々が言つてゐるのであります。いかにゼスキット主義者の貴女でも、あんな白々しい事を言つて論敵を逆襲することなぞは、やつぱり御止めになつた方が得策のやうに思はれますね。

それから、つまらない事ですが、貴女は私が婦人解放論者の中の『特に勇敢なる者』と言つた時、それをわざわざ妙な意味にとつてゐらつしやる。しかし、あれが『特に思切つた事を言ふ者』の意味である位は、前後の關係からして、餘りにも明白すぎる事ではありませんか。そして私の記憶にして誤りなくば、他の點で私共の大に尊敬してゐる與謝野晶子夫人の如きも、曾つてさうした人達の中の御一人であつたかと思ひます。

山川さん、貴女はまた私の用ひた『本質的差別』といふ言葉を、甚だ曖昧な意味合の物のやうに言つて見たり、或は男女の本質的差別を强調することが、直に男女の價値の不平等を意味するかの如く早呑込みをして、自分の目で造り出した幽靈に、矢鱈と切りつけて見たりしてゐらつしやいます。

『本質』といふ言葉が如何にさまざまに用ひられ得るにもせよ、少くとも私の用ひた用ひ方に於て、それは少しも曖昧な意味合のものでなく、男女間の本質的差別といふのが、貴女の所謂社會的差別に對する自然的差別、即ち生理的心理的等の差別であることは、分りきつてゐるではありませんか。

又、さうした生理的心理的差別なぞを强調すれば、それが直に男女の價値の不平等を證據立てることになるかの如く考へる、そんなお芽出度い婦人非解放論者等が、世上にどれだけ多くあらうとも、私は私一個の言論に對してのほか責任を負ふわけに行きません。言ひ換えれば、私自身が人間としての男女の價値に高下を附しようとしたかの如く臆斷されたことを、少々ばかり迷惑に感ずるのであります。そして一方では、こんなあてずつぽうを發足點にして論歩を進め、『生田氏

の男女の本質的差別論は、婦人解放論の淺薄さを示す代りに、却つて非解放論の淺薄さを暴露したものではないだらうか』なぞと仰しやる貴女を、同じく少々ばかり滑稽に感ずるのであります。

四

前きに私は、少くとも私から見て、婦人解放問題の最も重要なる二三點に就いて、私の考と貴女の御考との間に餘り大きな距りのないと云ふことを申上げましたが、その二三點の中の一は、さまざまな生理的心理的差別を有するにかかわらず、結局男女の人間としての價値に高下はあり得ないといふことであります。

所謂婦人解放論の淺薄さを、かなり以前から、熱罵し冷笑して來てゐるところの私は、男女の本質的差別を、從つてその社會的差別を、貴女がたよりずつと重要視してゐると共に、人間としての男女の同一價値といふことを承認し力說する上にも、貴女がた以上の眞面目さと熱情とをさへ有つてゐるのであります。

しかも此事實は、貴女の御讀みになつたあの短い文章の中にさへ、全然示されてゐないことはありません。そして苟くも、何等の成心をもさしはさむところなくしてあれに對した人ならば、少くとも私が男女の價値問題に關して、普通一般の婦人非解放論者等と同一見地に立つてゐると速斷するに躊躇しなければなりません。

私はあの中で『婦人の領土たる家庭の內にあつては、男子は時として外賓であり、又時として臣僕であるに過ぎない』とも言ひ『男子は婦人よりも、一層人間的であると共に、また一層自然を遠ざかつてゐる』とも言つてゐます。貴女の推斷された如く、婦人の人間的價値を男子のそれより劣つたものに言ひなさうとする私が、何の爲めにわざわざかくの如く、明白に自分自身の論據を危うくするやうな事を言明するでせうか。

同じくあの文章の中で私は、『婦人は男子よりも以上に本能的であり、男子は婦人よりも以上に理性的である』と言ひな

から、理性と本能とに對する一般人の道德的評價を顚倒して、婦人の爲めに非常に有利なる心理的並びに倫理的解釋を試みてゐるのではありませんか。

勿論、私が平生からしてそれほど熱情的に、男女の人格的同價を强調してゐるといふことを想見して頂くべく、あの短い文章は少々ばかり短かすぎました。加之、『一般に小兒により近い婦人の能力が、小兒からより遠い男子の能力に比して、どれだけかお粗末なものであるべきは』云々と言ひ、『大體に於て、大人と子供との間に尊卑の差別を立てることが許されるならば、男子と婦人との間にも、何等かの程度に尊卑の差別を立てることが許されなければなるまい』と言つたところなどは、私としてかなりの不注意を犯して居ります。少くともあの不注意な言葉遣ひの爲めに、世上の所謂男尊女卑論者と餘り遠からぬ見地に立つてゐるかの如き嫌疑を受けましても、餘り苦情の言へないことを承認いたします。

しかし乍ら、同時に、右の如き嫌疑を斷定にまで移してしまつた人は、念入りな先入見の爲めに、それを反證してゐるより重要なる部分をわざわざ看過したといふことの責任を負はなければなりません。

私の不注意であつたあの個處を、少しばかり辯明さして頂くならば、私が婦人の能力を男子のそれに比して、どれだけか『お粗末』であると言つたのは、自然的であり、野性的であり、幼稚であり、未發達であり、粗惡であると云ふほどの意味でありました。そしてかうした斷定の裏面には、男子の能力が婦人のそれに比して、どれだけか自然を遠ざかり過ぎたものであり加工され過ぎたものであり、一口に云へばデカダン的なものであるといふことの今一の斷定がかくされてゐたのであります。

又、尊卑の差別云々について云へば、これまでは勿論、今後といへども、大人は尊敬されるべきものであり、子供は愛護されるべきものである限り、大人と子供との間に尊卑の差別を立てることは許されると云へるかも知れない。そして、もしそれが云へるならば、男子と子供に近い婦人との間にも、何等かの程度に於て、右の差別に類似した尊卑の差別を立

てることがまた、同様に許されると云へるかも知れない。しかも斯うした意味での所謂男尊女卑が、男女の人間としての價値に高下を附するものでないのは、大人と子供との間にあゝした尊卑の差別を立てることが、大人と子供との間に何等の人格的價値不同のあることを意味してゐないのと同じである――と斯う云ふ風に考へてゐたのであります。

だが、山川さん、こんな生ぬるい辯明なぞにいつまでも拘泥してゐるのは私の趣味に適當してゐませんから、以上の辯明で不十分だと仰しやるなら、私はあの不注意な言ひ方を綺麗に私の失言として置いて、次ぎにはさうした失言にもかかわらず、私が如何に世上の所謂男尊女卑論者と異つた立場に立つてゐるか、如何にエコヒイキなく男女双方の味方であるか、また如何に、これまでの人々に氣附かれないでゐたところの婦人の美點を、その長所を、指摘したり説明したりすることに努めてゐるかを明らかにすべく、私のこれまでに書いた物の中から、立派な證據を舉げて來て御目にかけませう。

『愛の本質』（南天堂出版部發行『ブルジョアは幸福であるか』の中に收められてゐます）に於て私は、性慾病理學的見地から、一般に男子の性慾がサデイズムス的傾向をもつて居り、女子の性慾がマソヒズムス的傾向をもつて居るといふこと、さうした男子の性慾に於て、何等かの程度に殘虐的な行爲を加へるのが、相手を征服する爲めの手段であり、さうした女子の性慾に於て、何等かの程度に殘虐な行爲を加へられるのが、相手から征服される爲めの手段であるといふこと、相手を征服するのが所有する爲めであり、相手から征服されるのが所有される爲めであるといふこと、そして征服したり征服されたりするのが、一に結合して新しく生きて行く爲め、新しき個體を創造する爲めであるといふことなぞを論定したあとで言つてゐます――

『かくの如く見て來れば、男子が女子を所有すると、女子が男子から所有されるとは、その形式を異にしつつも、その內容を同じうしてゐるものではないか。

即ち、男子は所有の形に於て所有されて居り、女子は被所有の形に於て所有しこ居るものではないか。

又男子が女子を征服すると、女子が男子から征服されるとは、別々なる外觀の下に同樣の實質を含んで居るものではないか。

即ち、男子は征服するが如く見えながら征服されて居り、女子は征服されるが如く見えながら征服して居るものではないか』と。

次ぎに私は『性及び性的なもの』（同上）の中に、生殖が、從つて性欲的乃至戀愛的結合が、個體を超越しての成長であるといふこと、換言すれば、一の個體がそれ自身だけで生存しつづけて行けなくなつた時、他の一個體と補足的に結合して、一の新しい個體を創造し、その內に生き續けて行くのだといふことを、生物學的考察から說明したあとに言つてゐます――

『より善き半分であると、より惡しき半分であるとは暫く措く。苟くも生きつゞけて行く爲めに『必要なる半分』としての異性を、如何なる男子が輕蔑し得るか。如何なる女子が（復讐的にでも）輕蔑し得るか。

男女の平等を人格としての、人間としての平等であると言つただけでは、尙ほ十分でない。彼等は半人格としての、半人間としての平等なる權利を有つてゐるのである』云々と。

更に私は『婦人解放よりの解放』（表現社發行）に於ても言つてゐるのです――

『或る一つの仕事に對して、男女いづれがより適當した能力をもつてゐるかは言ふことが出來る。一般的に、全體的に男女いづれの能力が優つて居り、劣つて居るかは、言ひ得られるものでない。』

『本能と理性との對立に於て、理性を重しと見る場合には、女子と小人とは養ひがたしである。古來の聖賢とさへ云はれた人達が、特に女人の罪障を深いもののやうに考へたのは、恐らく理性を偏重したことの結果にほかならないであらう。』

『男女は男女として如何ほど相異つてゐようとも、人間たることに於て同一であり、無差別であり、平等である。』

『人間たることに於て同じであり、無差別であり、平等であるところの男子と婦人とが、現在の人類社會に於て十分に同じもの、無差別なもの、平等なものとして扱はれてゐるか、認められてゐるか。それは言ふだけ野暮である。』

『婦人の解放が、婦人を人間扱ひされるやうにしてやることである限り、その運動の意義を認め、その運動に直接間接參加しようと心掛けてゐる點に於て、私共も決して人後に落ちるものではない』云々と、

山川さん、いかに根強い先入見を御有ちになつてゐる貴女でも、右に引用したやうな私の言葉を御覽になるならば、私が男女の人間的價値もしくは能力の總體を如何に優劣なきものに見てゐるかといふこと、又その點について貴女が如何に間違つた臆斷を私の上に加へてゐられたかといふことを、流石に御認めにならないわけには行かないでせう。殊に兩性の能力の比較といふことに關して云へば、その後天的優劣をさへ私は、貴女が見てゐられるよりずつと小さく見てゐるかも知れない位であります。

なぜと云つて、貴女は仕事の同じ分野、或は男子に適當した仕事の方面に於て、男女の能力を比較しようとなさる故、と

もすれば婦人に、、、不利益なる結論となり勝ちであるのに對し、私は男女の能力がつねにそれぞれの分野に於て計量さるべきであると考へる故、大抵の場合性質の差異を強調するに止めて、程度の如何をあまり重要視するに至らないからであります。

例へば、貴女が『歴史上に名を留めぬ不遇の天才——遂に發達の機會を與へられずに葬られた無數の天才の中に、女性の數が何ほどを占めて居つたかは別としても』云々と仰しやる時、貴女は專ら男子の分野に於ける天才者的活動をのみ眼中に置き、さうした男性的天才型のほかに、女性特有の天才型のあることを閑却してゐらつしやるやうに見える。

これに對して私は、婦人の所謂家庭外に於ける活動を輕視するのではないけれど、その所謂家庭内に於ける仕事がまた、保守的な、及び進歩的な、殆んど總ての人々に考へられてゐるより、ずつと有意義なものであることを力説したあとで、次ぎのやうに言つてゐるのであります——

『家庭の内にも、火鉢の灰をかきならしてゐる素張らしいレオナルドオがゐる。子守唄をうたひ、お伽噺をしてきかしてゐるすばらしいゲエテがゐる。その温かな涙で實踐理性の何物であるかを知らしめてゐるすばらしいカントがゐる。そしてそれぞれにすばらしい事業をしてゐる。

レオナルドオや、ゲエテや、カントと丁度同種類ではないけれど、同程度以上の偉大なる天分をもつた婦人であつても、彼女が其天分を家庭内の仕事に發揮し得られないものであると輕斷するのは、寧ろ笑ふべき事に屬する。

單に賢母であり、良妻であるだけでも、天才者はその天才者たるところを十分に發揮し得るのである』と。(以上、『婦人解放よりの解放』)

男子の天才者が、その才分を母親からも承けついでゐるとかゐないとか云ふやうな問題については、人間的價値の遺傳しないものだと云ふことを說いた拙稿『何故鳶が鷹を生むか』(婦人公論八月號所載)をでも讀んで、貴女がたの謬見を正していたゞくとして、男子の天才者を生み、育て、その才能を發揮し大成させるまでの、母親の忍苦や犧牲を云ひ立て、その功勞を天才的事業その物に對置しようとなさるなぞは、母親のさうした忍苦や犧牲の內に天才的事業その物を見ようとする私の態度と比較して、むしろ餘りにも生ぬるく齒がゆい貴女の、否貴女がたの態度と云ふべきではありませんか。

先天的にも後天的にも、婦人の缺陷が男子のそれより大きいことを云ふ爲めでも何でもなく、單に婦人が男子よりも小兒に近いと云ふ事實を指示する爲め、『婦人には小兒の冷酷さ、殘忍さ(平氣でトンボの頭をねち切るやうな)に近いものがある』と私が云つたのに對し、山川さん、貴女はそれを、餘にも粗雜な、輕卒な獨斷ではあるまいかと仰しやいます。そして、私の獨創的觀察でも何でもなく、大抵の『人間通』の間には一種の定說ともなりきつてゐるあの命題を覆へすべく、男兒が女兒よりも殘忍な、冷酷な遊戲を好むとか、戰爭や侵略の下手人がつねに男子であるとか、殘虐な犯罪や殺人行爲も十中十まで男子の爲すところであるとか云ふやうな、實に驚くべく笑ふべき證據を持ち出していらつしやる。山川さん、貴女のやうな物の見方をする方は、かりに誰かゞ、『婦人は男子よりも復讐心が强い』と言つたなら、きつと大眞面目に仰しやることでせうね――

『そんな馬鹿なことはない。なぜと云つて、昔から蘇我兄弟でも赤穗の四十七士でも、カタキウチをしたものは大抵男子ばかりだから』と。

これこそは實に驚くべき笑ふべき淺薄さであります

男性があらゆる場合に於て顯勢的で、發動的で、攻撃的であるのに對し、女性があらゆる場合に於て潜勢的で、靜止的で、受動的で、守勢的であるといふこと位、生物學者や心理學者の講義を待つまでもなく、貴女だつて先刻御承知でせうが、既に男女兩性の間にさうした根本的傾向の相違がある以上、殘忍さ冷酷さといふやうなものにしても、男子の場合と婦人の場合と、それぞれに異つた姿となつて我々の目に映じて來るのは當然の事ではありませんか。從つてイクサゴツコだとか、實際の戰爭だとか、殺人罪だとかいふやうな、外部的な『行爲』に現はれたところだけを見て、男子をより殘忍でより冷酷であると斷定し、婦人が内面的に、時としては内面的な行爲に於て、しかも婦人特有の形式に於て、如何により殘忍な、より冷酷なものであるかを看過するなぞは、それこそ餘りにも『お粗末』過ぎる『能力』ではありませんか。

私が、ああした前後の關係に於て、婦人を『禽獸に近い』と云ひ、又小兒との近似點として『素朴』、『無邪氣』、『天眞爛漫』、『粗惡な、露骨な自我主義』等を擧げたのに對しても、貴方はそれが一概に婦人を侮辱する爲めの言葉でもあるかの如く邪推し、方角ちがひのさまざまな抗議を提出して、前の『殘忍』さ、『冷酷』さの場合同樣な、『能力』の『お粗末』さを見せてゐらつしやるけれど、わざわざ取上げて問題にすることは見合せます。

五

山川さん、貴方は私がウォオドの女性中心說の、自からにして與へる一の暗示を基礎に、詩的に、空想的に、兩性のエコヒイキなき對立を描かうとしたのに對し、そこにも私を男性中心主義者と早合點をして、大變に憤慨しながら仰しやつてゐる――一再ならず紹介されたウォオドの女性中心說をすら正解し得ぬ程に、男性中心主義のチヤムピオンの『能力』は『お粗末』なのであらうか云々と。

紹介されたのと、紹介されないのとにかかわらず、ウォオドの女性中心說を理解する位の、貴女御自身さへあまり困難な

ものに思つてゐらつしやらない仕事を、この私がなし得るかなし得ないかといふやうなことは、貴方よりも私自身よりも、廣い世間の人々がずつとよく知つてゐるだらうと思ひます故、そんな馬鹿々々しい問題をわざわざ問題にはしますまい。ただ、貴女のあの念入りな、見當はづれの論駁について一言して置きたいのは、第一に貴女が、私の使つた『暗示される』といふ言葉の意味を、全然誤解してゐらつしやることであります。

そもそもウォオドの學說全部を金科玉條視してゐない私にとつては、男女關係の將來に對する彼の意見その物がどうあらうと、差し當つての問題ではない。私はたゞ有名な『女性中心說』に於ける、過去の經過に對するああした解釋を、かりに十分に根據のあるものとした場合(私ははつきりさう書いてゐるのです)、その限りに於て兩性關係の將來の展開を、私共が如何に空想させられるか、生物學的に如何なる想像を畫かせられるか、その事を言はうとしただけでありまして、ウォオド自身が私共にどういふ推定をさせ、どう云ふ結論をつけさせるつもりであつたか、何を暗示する氣であつたかを問題にしてゐません。從つて、彼の『女性中心說』に於ける過去の說明だけを、成程さうかも知れないと思ひつつも、彼のその他の學說意見に興味をすら有たない場合、『人類が將來、過去の歷史を逆にたどつて、男性中心に向つて生物學的進化を遂げ、絕對的男性中心の社會を作り出す』のかも知れないと、そのやうに想像して見る私共のあることが、ウォオド及び其學說の信奉者等にまで、いかほど惑迷至極に感じられようとも、それはいかんともしがたき事柄に屬して居ります。

今一つ、女性中心說に關聯して申上げて置きたいのは、『人類の生物學的進化は旣に其限界に達してゐる』といふ、貴女及び貴女がたの獨斷を、私及び私共が、生憎ながらどうも、認容して差上げるわけに行かないと云ふことであります。そして失禮な口眞似を一つさして頂くならば、『生物としての人類が、今日以上に著しい進化を遂げるものでないかどうかは、いかに獨斷ずきな山川さん達の言說を以てしても、如何ともすることの出來ぬ、全く未確定な問題であります。』

かくの如く甚だしく貴女がたと見るところを異にしてゐる私は、人類今後の進化が單に社會的なものでなければならぬ

と考へません。從つて下等動物から人類への生物的進化に伴うて、女性中心から男性中心の方へと近づいて來た傾向が人類から人類以上のさまざまな存在への生物的進化にも伴うて、いつまでも持續されるかも知れないと、さう云ふ風には想像して見ました。けれども單に『文明の發達に伴うて、女性中心に向つて進み、今後も永久的に同じ方向に向つて進むといふ』やうな拙劣なことを、主張した覺えはありません。

他人の意見の正當なる土臺を取りはづしてしまつて、そのあとに手製の獨斷をはめ込んで置きながら、その他人の意見を理屈に合はないと云つて攻撃なさるのは、それは山川さん、貴女の惡意を證據立てないまでも、少くとも貴女の頭のよさ加減を疑はせるには足りますね。

六

在來の日本婦人の理想的典型が、今日の『婦人解放』論者等が無批判に輸入してゐる新しき婦人の理想的典型より、どれだけより精練された、より醇化された、より高貴なものであるかは云々と――私の述べた言葉に對して、山川さん、貴女は隨分面白いことを仰しやつてゐる。即ち、在來の日本婦人の理想的典型といふやうな、封建時代の幻影にあこがれる者は、今一たび地球の上に封建制度の再興を企てるより外に道がないと云ふやうなことを。

改めて云ふまでもなく、在來の日本婦人の理想的典型は、將來の社會に於てあるべき婦人に對する私自身の理想その物ではない。私はただ、在來の日本婦人の理想的典型すらも、多數の婦人解放論者達が畫いてゐる『新しき婦人』に對する理想的典型より、ずつとずつとましであると言ひたかつたのです。彼等の考へてゐる理想的典型が、それほど無價値なものであることを言ひたいのです。

それ故彼等の、或は貴女がたの理想してゐられるやうな新しい婦人が、來るべき社會の婦人の典型である位なら、まだ

しもあの、封建時代に理想されてゐたやうな舊い婦人の典型が、再び地上に現はれて來ることを希望するのです。そしてさうした希望の充たされる爲めに、封建制度その物の再興されることをさへ我慢しようと思ふのです。なぜと云つて、貴女がたの理想してゐられるやうな新しい婦人が、婦人の典型となるやうな殺風景な、沒趣味な、間違つた社會より、まだしも封建時代の社會の方が、忍耐し易いかも知れないとさへ感じてゐるからであります。

要するに貴女がた御自身のもつてゐる『新しい婦人』の理想よりほかに、『新しい婦人』の理想があり得ないかの如く考へ、從つて貴女がたのもつてゐる『新しい婦人』の理想を輕蔑することが、直に『舊い婦人』の典型に對する無條件な憧憬讃美ででもあるかの如く速斷してしまふのは、餘りにも蟲のよすぎる、そして餘りにも頭の惡すぎる話ではありませんか。

七

だいぶ長くなりました故、大體まづこんな事にして置きますが、最後に今一つ申添えて置きたいのは、婦人非解放論者として見ればさう見られないこともなく、婦人解放論者として見ればさう見られないこともない此私が、何故特に婦人非解放の看板を掲げてゐるかといふことに就いてであります。

それには色々の理由もありますが、この場合に必要な物として唯だ一つ二つだけを申上げれば、第一に私の婦人觀は、山川さん、生憎貴女によつてこそ取り違へられたけれど、大抵の場合ちよん髷老人の婦人非解放論と取り違へられる心配がない。これに反して惡く新しがつた、その癖ちつとも新しくない普通の婦人解放論と取り違へられさうな危險は、隨分ありさうに思へるのです。しかも前者と取り違へられたのは、誤解をとくのにも樂であり、それだけ我慢のし易い事であるのに對し、後者と取り違へられたのは、誤解を一掃するのにも一寸骨が折れ、それだけ不愉快な事であります。

私が婦人非解放を標榜する今一の理由はほかでもない。即ち、ちよん髷老人の習俗主義を攻撃するといふやうな啓蒙事業は、私の才能にも趣味にも適してゐないのに反し、あの惡く新しがつてゐる、その癖ちつとも新しくない若い人達、若い御婦人達の謬見を打破するのは、私にとつて、少くとも大變に愉快な仕事であり得るからであります。

いや、少々蟲のゐどころも惡かつたらしく、まことに失禮な事ばかり申上げました。これを御覽になつた貴女が、箸にも棒にもかからない奴だと御考へになり、すつかり私を輕蔑しきつてお仕舞ひになり、そしてなんにも反駁めいた物を御書きにならないとしましても、それは全く貴女の御自由であります。その代り山川さん、もしかして御書きになつた貴女の御反駁を拜見した私が、その時の量見次第では、なんにもお答へしないかも知れないといふことを、あらかじめお斷りして置きたいと思ひます。

――一九二四年九月――

愛の一つの相としての戀愛の本質

石原純

一

私はこゝに再び戀愛の本質を考察しようとするに當り、戀愛なる言葉の意味が通常の餘りに亂雜に、そして餘りに卑俗に解されてゐることを感ぜずにはゐられません。

現代に於て戀愛について語る人たちは寧ろ甚だ多いやうに思はれます。併し果してどれだけの人が戀愛の價値を正しく解してゐるでせうか。

私は諸家の戀愛に關する所論に接するときにさへ、そこでは戀愛なるものが種々の意味に用ゐられて、必ずしも一定しないのを見ます。多くの世人は極めて通俗的に、戀愛をもつて男女間の單なる思慕的感情として解します。例へば或る一人の男性が或る一人の女性に對して何となき思慕の情を抱き、漸次之が昂じては熱烈なる牽引を感ずるに至ると云ふやうなそれです。固より斯やうな有樣は私たちの本能的性意識に基づくところの一つの結果であつて、寧ろ自然的であり、從つて亦それ自身に於ては善惡の判斷を離れたものです。けれども單にこの意味に於て或は戀愛を肯定し、又或は之に於て

價値を無視しようとすることは、その思想の淺薄さをもの語る過ぎません。
若し戀愛が單に男女相互の思慕若しは之に伴ふ肉的結合に終るものであるなら――私は寧ろ之を戀慕又は戀（戀情）としての通俗的な言葉によつてあらはし、私たちが哲學的價値を討究しやうとする眞の戀愛と差別したのでした――私たちは之を私たち人間の本能の一つとして肯定する以上には之により多くの價値を與へることは出來なかつたでありませう。固よりこの感情が強度にあらはれるときに、その熾烈な熱情は他のあらゆるものに超え、特に人間に於て常に離れ難い、そして最も屢ゝ忌はしさを醸すところの利慾の念の片影をさへ殘す事なしに、自己のすべてを犧牲にして悔まない點に於て、恐らく最も純粹に自然の感情に甘んじて浸り得ることは、一つの美の極致であり、人間の一つの憧憬すべき境地でもありませう。古來の小説戯曲等の大多數がこの戀を題材に取り扱つたものであり、之れなしには私たちの藝術創作のいかに多くが失はれるであらうかを思ふときに、私たちはこの間の消息を十分に覗ふことが出來ます。しかも人間が彼の感情生活のみを辿ることは、必ずしも彼が價値を追ふ所以ではないのです。世に戀愛至上を是非するもの丶多くの人たちが（例へば婦人倶樂部十月號諸家の言、參照）戀愛をかやうな感情としてのみ解する場合に、半ば之を否定することも亦寧ろ當然でありませう。
私は併しながら戀愛をそれ程價値の低いものと解して安易に滿足しやうとは思ひません。人間として地上に生活する私たちが、私たちにゆるされたあらゆる本能を利して私たちの生活を價値あらしめ、依つて至高な理想に到達すること、それのみが私たちのなし得る最高の善であります。しかも本能として最も強大熾烈にあらはれ得る精神的エネルギーの潜むものを最も能く利用し得る可能性のある點に於て、戀愛は特にその性質の異常を示すことの出來るものでありませう。只同時に同じ理由によつて私たちがその途上に迷ひ易いことは、聊かも戀愛そのもの丶文化的價値にわづらひする所以をなしはしません。若し愼しみぶかい心をもつて一つの戀愛が完成せられたとしたならば、そこに人間生活の一つの至高の美

があらはれるのを讃仰しなければならなかつたでありませう。

二

私は既に戀愛が愛の一種であることを説きました。廣い意味での愛はすべて本來人間の本能的感情に起因するものであつて、私たちが或る對象に接しておのづから好惡の情を感ずるに際し、より多く好むものに對して愛を生ずるに至るのであります。

この關係に於ては美も亦同樣であると私は思ひます。私たちは即ち或る對象に對して快又は不快の感情を起します。快なるものを美と觀念し、不快なるものを不美即ち醜として觀念することは、私たちがこの場合にとるところの最初の思念であります。そして例へば花の紅や黄を眺めることが先づ快であり、從つて之を最初に美しい色彩として觀ずるのでありますが、併し人間の複雜な感情の錯綜は一つの固定された對象のみをいつも必ずしも快と感ずるわけにゆかないと共に、一方で私たちが美を理想として高めるに當つて、もはや單に快なるものを美の理想に應ずるものとしては見做し得なくなるのです。

之と同樣に、私たちはその好むところのものに先づ愛をもつことが本能的作用ではありますが、愛のこゝろを理想の一つとしてゆるすためには、單なる好もしさの感情をもつて愛の内容となすわけにはゆきません。

即ち理想價値としての美が、單に原始的な感情で美しいと觀ずるものとは異つてゐると等しく、理想價値としての愛は單なる好愛のこゝろに應ずるものとするわけにはゆきません。然らば、かやうな愛の内容は果して何でありませうか。私は之を次のやうに解したいと思ふのです。

私たちが美なるものと然らざるものとを差別すると同樣に、私たちは先づ愛すべきものと愛すべからざるものとを差別

しなくてはなりません。何を美とすべきか、又何を愛すべきかは、最初から私たちに知られてゐるのではありません。美を探し求めることが藝術の永遠なる追究目的であると同樣に、眞に愛すべきものを探し求めることは私たちの精神生活の永遠なる追究目的でなければならないのです。

嚴格なる意味に於て愛すべきものは、同時に亦美であり若くは眞理でなければなりません。古希臘の哲學者たちは彼等の哲學を同じ意味で「愛知」の學として建てようとしました。知は私たち人間の愛すべきものの全體となされたからです。

私たちは又人間性のなかに眞に愛すべきものを追究して、そこに人格價値を求めなくてはなりません。若し神の人格的內容が語られるとすれば、私たちは之をあらゆる人格價値の綜合たる理想的實在者となすより外はありません。嘗て私が理想的に完成せられた人格の普遍的認識を假定して之に神性なる名を與へたのも亦之に外ならないのです。

それですから、私は貪慾の情に發する金錢、財寶、利權に對する愛、自負慾に發する名譽や權勢に對する愛、若くは或る好奇慾に發する惡魔的性格行爲に對する愛といふが如きは、一種の好愛としては數へられるかも知れませんが、併しそれらを眞に愛すべきものへの愛として見做すわけにはゆかないと思ひます。眞に愛すべきものを愛することは、その他の人格的純粹行爲と共に客觀的には亦一つの美でなくてはならないのです。

愛の對象が種々に異つても、若し愛が以上の意味で終始するならば、そこに愛としての差別はあり得ないわけであり、私たちは亦同時に愛すべきもの丶すべてを愛することが出來るわけです。併しながら、私たちの愛行爲は、その第一段に於て愛すべきものと愛すべからざるものとを見判けて、先づ愛すべきものを愛すると共に、決して之だけで終るものではなく、更に第二段に於て愛すべからざるものを愛すべきものに發展成長せしめるように働らきかけることによつて愛の完成を期しようとするのです。之が實に愛にとつて極めて重要な部分を形作るものであつて、そこに始めて種々の愛の間に差別を生じ、又屢々一方への愛が他方への非愛を結果するかの如き矛盾をも惹起するに至るのです。

愛行爲のかやうな第二段が必要とせられる所以は、愛の對象として現實の人間が選ばれるからであります。私たちがここに論じようとする戀愛も亦謂ふまでもなくその一つの場合として考察されなくてはなりません。

三

神は固よりそのあらゆる性格に於て完全なるものと思惟せられるのですから、私たちの愛すべきものゝ隨一であること勿論です。神を愛することは、それ故に私たちの愛に於て最も正しいものでなければなりません。しかもこの場合に私たちは自からの性格が神のそれに對していかに缺陷多い耻づべきものであるかを自覺することによりて、神への限りない崇敬を湧かせるに至るのです。かやうにして神を聖なるものとして禮拜することは、最も正しい宗教に入る最初の心でなければなりません。私たちは卽ちこの神への愛を一つの敬愛として體驗するのです。

誤解のないやうに尙ほ言葉を費すならば、私たちは決して神の性格を現實的に知つてはゐないのです。之を求め之を悟る處に、禮拜と共に私たちの宗教的求道が大切になるのであると思ひます。

神への敬愛と同樣に、私たちが他の尊崇すべき人格者に接する場合には、私たちの之に對する愛は亦一つの敬愛としてあらはれなくてはなりません。私はすべての人間の間の愛が多少ともこの敬愛の念を含むことに於て、私たち人間の敬虔なるこゝろの存在を見たいと思ふものです。

この敬愛は私が上に述べた愛行爲の第一段をもつて完了すべき種類のものに屬しますけれども、更に之に對立して愛行爲の第二段を主とする種類の愛が生じます。その最も代表的なものを私は神の人間に對する慈愛であると思惟します。

神から見て人間はまことに憐れむべき愚かな存在であります。けれどもそれにも拘らず人間は亦神の手によつて創られた愛し子であり、之を敎へ養ふことによつて等しく神の國に入らしめることの出來るものに違ひないのです。神はこゝに

於て常に人間に慈愛を垂れて之を導き護つてゐます。

この言葉は勿論甚だ宗教めいた云ひ表はしに依るものではありますが、私たちが究竟的な理想として或る普遍的な神性を追求するといふことを、神の主觀として云ひ換へたものに過ぎないと私は思ひます。ともかくも私たちは、この慈愛によつて代表せられる愛行爲の第二段は人格完成への一つの教化に歸せられなければならないことを之によつて知ることが出來るのでせう。

母性愛の如きはその對象が無知な小兒であるために、本質的に神の慈愛に最も近いものでありますが、一方に戀愛などと等しく自然的な本能愛の要素を最も多く保有するがために、やゝもすれば誤つた溺愛に陷る虞れがあります。小兒の思ふが儘になし、之をして徒らに安逸享樂ならしめることは決して母の眞の愛ではありますまい。いかなる程度に於て小兒を叱り、いかなる行爲に對して彼を戒めるかは最も愼重に考慮しなければならないのであつて、畢竟、眞の母性愛は小兒の人格をして最も正しきものへ教化育成せしめるものでなければならないと私は思ひます。

要するに敬愛と慈愛とは、對象を異にするに從つてあらはれる正しき愛の兩面であつて、上に擧げた以外の人格的對象にありては、この兩者が多少とも相交錯してあらはれるのが常です。例へば友情愛の如き、同等な人格的對立を豫想するものにありては、相互の人格のなかに敬すべき處を見出して之を敬愛し、缺くる處のものを見出して慈愛のこゝろをもつて忠告助成すべきであります。只極めて親しい友情のある場合を除いては、尙ほ他の獨立人格に對して濫りに立ち入ることを避ける愼しみ深い心から寧ろ敬愛に傾くことが多いのを可しとするでせう。之に反して最も親しい人格的交渉を期待する戀愛に至りては、敬愛と慈愛との兩念を最も深く相互に盡し合はねばなりません。そして亦それ故に之等の効果を最も高め得る所以もこゝに存するのです。戀愛が自己並びに對象者の人格完成を目的とし、之を果すことに於て、始めてその理想價値を體現し得るとするのは、之によつて明らかになるでありませう。

四

最近私は北昤吉氏が、その概博な知識と深い思索とによつて愛の種々相を論ぜられた一文（「女性」十月號）に接しました。北氏は先づ、

「愛に種々相のあることは何人も疑ふ餘地のないほどに瞭然たる事實である。しかし愛の本質とその發現の種々相との關係に就いては、我々はいまだ充分に考察してゐない。この問題に就いては、愛はそれ自體異質的であつて、發現の種々相はそれの必然的の發展であると考へることも可能であるし、また、愛の本質は等質的であるが、その發現の種々相は唯一の本質の分化であると解することも出來よう。……しかし愛の種々相にも拘らず、等しく愛と呼ばれるからにはその本質は唯一であり、等質的であると假定するのが自然であらう。若し愛の種々相を通じて何等かの共通點がないならば、それ等を押しなべて愛と稱することだも不可であらう。從つて我々はこの問題に深く論じ入ることを止めて他の一層緊切な問題へと轉じて行かう。それは愛の種々相相互の關係に就いての問題である。」

と述べてゐられます。

私はこゝで、愛の種々相そのものに就いて個々に論じようとするものではありませんが、併し戀愛を愛の一つの相としてて見做すに當つて、愛の本質それ自體を聊か明らかにする必要を感じます。今、北氏がこの本質に關する問題を安易に通過し去られたのに對し、私は寧ろこれより深く考察することによつて、北氏が設問せられた次の問題の解決さへも一歩進めることが出來るであらうことを玆に注意したいと思ひます。

北氏は即ち愛の種々相が等しく愛と呼ばれるために等質的であり、少くとも之等を通じて何等かの共通點があるとせられながら、この愛の種々相のもとに、神の愛、天の愛、慈悲、博愛、人類愛、祖國愛、愛郷心、友愛、母性愛、戀愛ばかりで

なく、自然、藝術品、眞理、動物及び生命に對する愛、金錢、名譽、權勢等に對する愛、更に變態的には醜惡、冷酷、殘忍等に對する愛をさへ數へて居られます。けれども之等のすべてに共通なるものは、私が既に上に説いたやうに單なる本能的な好愛に過ぎないのであつて、若し私達が愛に理想價値を歸屬せしめようとするならば、そこに眞の愛と然らざるものと差別しなければならないこと勿論であると思ひます。そして私たちがその眞正の愛についてのみ語らなかつたであらうなら「愛は相互の衝突なき限り何れも擁護さるべきものである」とは亦決して云はれなかつたでありませう。

私は併し、この眞正の愛を特質づけて、似而非なるものと差別するに當つて、そこに敬愛と慈愛とによつて代表される二種の要素が存在することを明らかにしたのでした。この兩者が寧ろ本質的に異なるとして取扱はれなくてはならないことは、その一方の好意が愛するものにのみ存在し、他者が愛せられる對象へのはたらきかけを期待する點に於て判然としてゐます。私はそれ故に愛をどこまでも等質的と解することは出來ないばかりでなく、この要素の判定なしには、北氏が「他の一層緊切な問題」として擧げられた愛の種々相の分類並びにその階層關係を論ずることも、恐らく十分には可能でないであらうと思ふのです。

實際に北氏が指摘せられた通りに、從來「愛に就いては主張され吹鼓され稱揚されたのみで、いまだ説明されず、解釋されずに」殘されことは、私たちの甚だ不滿足に感ずる處であると共に、北氏が問題として提起された愛の種々相間の事實的因果關係並びに價値的階層關係を明らかにすることは、極めて重要なものであるのを同感します。特に又私は、愛の種々相の間に何故に矛盾撞着があらはれるであらうか。又かやうな場合に私たちが愛のいづれを先づ擇ばなくてはならないかを思索することが、實踐的に甚だ重大な問題として常に私たちのまへに置かれることを思はずにゐられません。戀愛に關する爭鬪や苦惱も又多くは之に關することを省りみるときは、私たちは最も用意ぶかく之等の問題に立ち入らなくてはならないのを感じます。

五

私が上來考察した處に從ひますと、愛に種々相のあらはれる所以は私が上に示した愛行爲の第一段たる慈愛の念のはたらきが、愛の對象の異なるに從つて、そこに入り込む程度を異にするからであると思はれます。

私は慈愛のこゝろが對象者の人格をより完全に導き高めることを、その正當な行爲目的としなくてはならないのを説きました。私たちは宗教的に神の慈愛を解してかやうなるものと見做さなければならないのであつて、こゝに又あらゆる至高價値が歸せられなければならないのだと思ひます。それですから私は人間の愛に於てもこの慈愛の念がより深くあらはれ、依つて人格完成の目的により多く與かり得るところの愛をもつて、價値的により高い階層にあるものとして比判するより外に、より正當な價値比判の根據をもたないであらうと信ずるのです。

なぜなら、愛行爲の第一段たる敬愛に於ては、その對象が等しく愛すべきものとして見出される點に於て差別をもたないばかりでなく、愛すべきものに對して敬愛を示す限りに於て、その間に何の矛盾撞着も生ずる筈はないのであつて、從つて嚴にその間に階層關係を差別的に思惟する根據と必要とを見ないからです。

人間の愛の種々相のうちで、上の根據によつて最も高い階層にあるとせらるゝものを、私は求めて、先づ最初に自己愛を舉げなくてはなりません。自己愛は愛する者と愛せられる對象とが同一の自己に屬する點で、他に例を見ない一つの特殊の相であります。この特殊の事情は一方に強固な本能的自己愛慾と、他方に自己行爲の自由とを相待つて、最も強く且つ深く人格完成のはたらきを及ぼし得るようになし、從つて愛の價値をして絶高ならしめる可能性を最も十分にもつてゐるものです。併しながらこの事情は亦同時に最も容易く單なる自我主張若くは自己欲望と合致して私たちを誤れる道に導き、實際上その効果の發現を困難ならしめるばかりでなく、他の對人的愛に伴つてあらはれるところの、そしてその附帶

的特質として最も尊重せらるべき犠牲行爲を本質的に缺いてゐるために、古來多く愛として稱揚されることも殆どないと云つてよいくらゐです。それにも拘らず正しき自己愛は人間として最も大切なものであり、愛の最高階層に位することは疑を容れない處であります。他を愛することも亦一面から見れば、自からの人格價値を高める點に於て自己愛であると云ふことも出來ませうし、又多くの論者たちが例へば戀愛至上を論じて必ずしも無條件に之を容れることに躊躇し、他の道德、藝術、宗教、科學等の價値を省りみる必要を說くのは、勿論私も亦大體に於て肯定する處であつて、畢竟之等の價値を追究することそれ自身は自己愛の一端として見做さるべきであるとも考へられます。

自己愛に次ぐものは、恐らく親の子に對する愛でもありませう。この場合に子の人格が尙ほ發達の最初の階段にあるといふこと、並びに子のすべての養育が親に任ぜられてゐるといふ事實的關係は、特に慈愛を必要とすること、神の人間に對する關係と似たものであります。併しこの慈愛は子の成育に從ひその人格的獨立が保證せられるに應じて、漸次減失すべきものであつて、單に肉身的關係のために一生を通じて存在するのではありません。文化價値としての慈愛が本能的慈愛と異なる處がこゝにあるのを私たちは注意する必要があります。既に成育した子と親との關係はお互が人格的獨立をもつところの一つの血族愛に歸するのであつて、それは一般的にはもはや次に擧げる戀愛よりもより高い階層に屬するとは云ひ難いでありませう。

その他の對人愛としての友情愛や、郷土、祖國、社會等を含む集團愛や、更に一般的な人間愛に至りては、價値的階層關係に於て前述のものゝ下にあることは恐らく謂ふまでもないことゝ思はれます。只或る種の人爲的集團、例へば國家の如きものに於ては、之を準人格的に見做した場合に、その所屬の一員として之を愛するものと被愛者との間に再び獨立性を缺く事實があらはれるのであつて、若しこの愛者が國家に於ける謂はゆる有力な一人であるならば、國家の有機的關係は彼の思ふが儘に左右せられること、恰も自己愛の場合と同樣になるでもありませう。私は國家愛卽ち忠心が古來多く特に

稱揚せられた事實の正當な根據をこゝに求めなければならないのを感ずると共に、從つて國家なる集團がもつべき文化的價値の如何によつて之に對する愛が正しいかどうかをも批判さるべきであると思ふのです。

六

私は愛の種々相を說いて、こゝに戀愛の特質に云ひ及ぼすことが出來ると思ひます。

戀愛は或る性意識によつて結びついた男女相互の間に成立する愛の一つの相であつて、それ故に文化價値的にはやはり他の愛と等しく對象者の人格完成を目的とする行爲を意味しなければならないと私は思ひます。そして之が戀愛であるためには男女兩者がこの性意識に基づく特殊の結合關係におかれなければなりません。この關係は、或る除外例を除くの外、當然彼等兩者の性的交渉に導き、又この關係を完全に期するために出來得る限り生活を共にするといふ必要を持ち來します。私たちは之を名づけて結婚生活と呼ぶのであつて、それは決して單なる社會制度によつて生れるものでもなく、亦之によつて强ひられる筈のものではありません。ともかくもこの戀愛者間の生活共同と、性的交渉によつて相互に肉體の最內奧を知悉するまでに相許し相親しむことは、彼等兩者をして生活のすべての快樂苦痛を共同的に經驗せしめ、又相互に精神的に援助し合ふ最も親密なる關係を維持せしめるに至ります。たとへ親子兄弟の如き最も近い血族者間に於ても、少くとも既に彼等が人格的獨立を保證される限り、夫妻間の特殊な親しさには及び得ないのです。實際、夫と妻とは、その各に於て人間としての人格的獨立を保つものであるとは云へ、戀愛生活の機能に於ては相互に扶け合ふことの深さによつて、殆ど獨自的存在を缺く同心異體であるとも云ひ得るでありませう。この最深の親密さ、言ひ換へれば全人格的融合に於て相互の人格完成が十分なる慈愛のこゝろをもつて果し努められなくてはならないのは勿論です。從つて戀愛は價値的階段關係に於て親の子に對する愛と對比すべきものであり、しかも後者が子の成育時期を超えてはその特殊の事情を

漸次減失するに反し、前者は戀愛生活にあるべき一生を通じて永續すべきところのものであります。戀愛が相愛的であるべきことは、私の更に言葉を費す必要のない處であると思ひますが、それは友情愛と等しく各の對象者に對する敬愛を含むと云ふ意味の外に、抑も男女兩性の存在の深い自然的な意味から結果する當然の歸結でもあります。

七

戀愛そのものに關する私の解釋は既に以前に公けにした所論（改造七月號及び女性改造八月號）に於てもほゞ盡したつもりです。それらの内容に關し、土田杏村氏は再び戀愛價値の檢討（婦人公論九月號）なる一文に於て意見の相違を示されましたことは、私自らの思索への反省の機會を與へられたことに於て深く感謝しなければならないのを感じます。

併しそのなかで、私が嘗て「人間の相愛が男女兩性の間にあらはれ、そしてそれが特殊の強度に於て對象者の全人格を必然的に包容する場合に之を之を戀愛と名づけたいと私は思ひます」と云つたのに對し、土田氏が再び「單に論理的にさへ」さしはさまるべき疑問があるとして擧げられたところについては、私はこゝに改めて論理的な解答を呈出しておきたいと思ひます。たゞ固よりこの引用されたものは出來得る限りの短い言葉で戀愛を云ひ表はさうとしたものであつて、そこには尙ほ說明を必要とすることも當然であつたかも知れません。しかも私は之に斷じて少くとも論理的な疑義を含みはしないと信ずるものです。

土田氏は第一に、私の所言に對して

「戀愛とその他の愛との相違は單に強度的のものであり、質的のものではないから、戀愛も其の強度を弱めれば普通の愛となり、普通の愛も其の強度を強めれば戀愛となる」

と云はれました。戀愛は男女兩性間にあらはれることをその必須條件とするものですから、こゝに述べられた「他の愛」とか「普通の愛」とか云ふ言葉も私は男女兩性の間にあらはれるものを指してゐると解するのが正當であるとしませう。さうすれば、それは卽ち通常云はれるところの異性愛であるより外にありません。若しさうであるならば、異性愛は本來單なる友情愛に屬すべきものではありますが、それが異性間に起ると云ふことのために、實際屢々戀愛との差別を困難にする場合のあるのは、恐らく土田氏も否定されはしますまい。勿論、戀愛が異性愛と判然たる差別をもたないのは、それの未完の時期に過ぎないのであつて（私が女性改造八月號の一文に指摘した單なる戀、卽ち或る異性に對する思慕は、その對象者に愛としてはたらきかける行爲を缺く點に於て、一つの友情愛でさへあり得ないのです）本論文に說いたやうに、戀愛の特質たる全人格的融合が、その當然の結果として生活の上にあらはれ、謂はゆる結婚生活を形作るに至れば、之と單なる異性愛とを明らかに分つことが出來るでせう。ともかくも併し之等の事情は、異性愛と戀愛とが愛の強度によつて差別せられ得ることを示すのであつて、戀愛よりもより強度大なる異性愛は存在し得るものではなく、亦異性愛は漸次強度を強めて戀愛となる可能性をもつことは確かです。

土田氏は第二に

「わたくし達の經驗の敎へる處では、強度の弱い戀愛、強度の強い宗敎愛もあり得るが、博士の所說では其れの說明がつかない」

と云はれてゐます。私はこゝで先づ土田氏が單に「強度」と云ふことにのみ力を入れて、その外の愛の種々相の成立要件について全く無視せられてゐるやうな態度を寧ろ意外に思ひます。ひよつとしたら、第一の疑問に於ける「他の愛」とか「普通の愛」とか云ふのも、男女兩性を離れた意味で用ひられたのであつて、私の解したやうにそれが單に異性愛を指すのではなく、もつとその外のものを意味したのでもあつたらうかとさへ疑はれるのです。私たちには併し「男女兩性の

間にあらはれ」るとすることは、いつも戀愛を語るに當つて餘りに明白な事實でもあります。戀愛の强度を弱めれば宗教愛になるとはまさかにいかに巧妙なる論理學者も私の前記の文からは演繹し得ないでもありませう。

土田氏の第二の疑問はその外に「愛の强度」と云ふことの意味を私の意味するものとは全く異つて解されたことから、併せて起つたのでした。抑も愛の强度とは何であるかは愛の考察にとつて亦極めて大切な問題であるにも拘らず、多くの論者はこの點の正しい思慮を缺いてゐるやうです。

土田氏は「其の感情の强度如何に拘らず、いやしくも戀愛價値が戀愛價値である所以の質を見たい」とせられてゐると同時に、私の云ふ愛の强度なるものを、安易的に感情の强度と解釋して、私の意味する戀愛を「主觀的、個人的、主我的なる一つの感情興奮狀態であるに過ぎない」とまで誣ひられ、私の主張するものは「じつは戀愛ではなくて溺愛であろ」とさへ明察されました。私は土田氏の透徹明敏なる頭腦に依賴して、もう一度私の前文並に本論文を平靜なるこゝろをもつて讀み返して頂きたいと思ふばかりです。私の言葉の何れの一隅に愛の强度を主我的な感情興奮のそれであるとなしたものがあるでせう。私は却つて屢々戀愛を單なる本能的感情としてゞはなく、相互の人格向上完成を期待する一つの價値的行爲としてのみ解すべきことを繰返しました。そして最も明確に正しい愛と溺愛との差別をもこゝに依らしめようとしました。若し以前の說明が足りなかつたとしたならば、もう一度本篇によつて、私の眞意とは餘りに懸隔ある土田氏の推察を適宜に處分して頂きたいと思ふのです。

私が更にこゝに附言して土田氏の注意を仰ぎたいことは、私は愛の强度といふ言葉を用ひたとしても、決して氏が勝手に推慮せられたやうに、戀愛の强度とまどこにも云はなかつたことです。なぜなら私には戀愛は一つの理想價値であつて、そのなかれ强度による差別を想像することが出來ないからであります。廣い意味に於ての愛も亦同樣に理想價値であり、之が要素としての上に擧げた敬愛及び慈愛はそれ自身のなかに强度を考へることは恐らく出來ないものであります

が、しかも對象の異なるに從つて戀愛としてはたらきかけ得る程度分量を異にし從つて愛の種々相を形づくるのです。私はこの程度分量の如何によつて愛の價値的階層關係を批判し得るであらうとする立場から同時にその量的差別によつて愛の強度を比較することが許されるであらうと思ふのです。

愛行爲に當つて、感情興奮がどれ程強いかどうかは、行爲の實踐上の效果には影響するでありませうが、行爲そのものの本質的價値には少しの與から處ないことは、私の特に云ふまでもないことであると思ひます。

八

土田氏の第三乃至第六の疑問は、戀愛と性慾並びに生活との關係についてであります。このうち戀愛と生活との關係については、私は改めてその考察を公けにする必要があると思つてゐます。なぜなら私は前文に於て戀愛の理想價値を考究しただけであつて、まだ殆ど之に關聯せる生活價値には云ひ及ばなかつたからです。

戀愛と性慾との關係について土田氏の云はれたのは、多くの論者が戀愛を性慾の純化であるとするのに對して、私が之を否定して、性慾は戀愛に對して單に機縁として存在するものであると主張したことに向けられた疑問です。私は固より一人の哲學々徒をもつて自任するものではなく、從つて又戀愛を論ずるに當りて哲學上の方法論的考察に依らなくてはならないと自らを縛するものではありません。たゞ私は私の省察の赴くまゝに極めて自由に、併し私に可能である限りの最も愼重な思慮をもつて深く戀愛の本質にたづね入り、之を私たちに取つての一つの價値行爲として求めたいと思ふばかりなのです。若し私の所論の何れかに戀愛の哲學的考察に資する處のあるものがあつたとすれば、それは私のみの幸ではないのですし、若し又それが「結局は戀愛考察の一發想たるに過ぎない」かつたとしても、私は少くとも自分の眞摯な思索に對して恥づる處はないと信じてゐます。

それですから、私は戀愛を性慾の純化であるとする通俗的な表現にはどこまでも滿足することは出來ませんが、性慾と戀愛との本質的關係を深く考察して、之を哲學的術語としての純化若くは人格化といふ關係で云ひ表はしたとするならば、この言葉の妥當性について更に云爲しようとは思ひません。用語を系統だてることは純粋に哲學學徒の一つの仕事であるからです。私は只性慾と戀愛との關係がそこに正當に求められてゐるかどうかを問題にすればいゝのです。

けれども私は尚ほ不幸にして土田氏の考察をその儘承け容れることが出來ないのです。恐らくは土田氏と私との間に戀愛そのものについての概念的意味を異にしてゐるのであらうかをさへ私に疑はせるのです。氏が

「いかに行動するが戀愛であるかを絶對的に言ひ表はした法則はない。其れは同じい意味の道徳的法則、藝術的法則が求められないと全く同じい根據に隨ってである」

と云はれるのは私も亦勿論肯定しようとする處です。しかし之に續いて

「若し強いて戀愛の根本法則を求めんとすれば、『此の汝の性慾を省りみて、汝自身に忠實であり得るやうに性慾を發せよ』とか、『普遍妥當なる爲方に於て性慾を實現せよ。換言すれば戀愛意識に對して全然妥當的なる爲方に於て性慾を實現せよ』とかいふより外は無いであらう。其れがわたくし達に殘されてゐる哲學的可能な、けれどもまた絶對的に嚴密な表現の爲方なのである」

といはれるに至りては、私はかやうなものを『戀愛の根本法則』とすることに斷じて異議を挾まなければならないのを感じます。勿論私は其の表現の爲方を彼是云ふのではありません。私の思惟する戀愛なるものは既に屢々言ひ及んだやうに人格の向上完成を目的とする一つの相愛行爲に歸するのであつて、決して性慾實現の方法を否定する法則などが之に含まれるものではなく、從つて又性慾が「強度を增せば戀愛の強度も增大する」と云ふやうな因果關係が決して兩者の間に存在するやうなそれではあり得ないのです。

性慾實現をいかにすべきは、一つの生活上の問題であり、そこには肉體的効果の外にすべての精神的狀態をも極めて敏感に思慮せらるべきものではありませうが、そして戀愛生活に於てはその最も妥當的な方法で之がなされる筈のものではりあませうが、併しそれはどこまでも戀愛生活の或る一事に過ぎないのであつて、まして私達が價値づけようとする戀愛そのもの〻根本法則では決してあり得ないのです。私は特殊な事情のために性慾を全然實現しないでも戀愛生活は可能であると信じます。例へば戀愛者同志が遠方に離れてゐる場合、又は肉體的に性慾實現が避けられなければならない場合にも、戀愛行爲は勿論成立しなくてはなりません。戀愛の價値は決して性慾實現の如何には拘らないからです。

之に反して私は戀愛行爲に於て常に或る性意識が自覺的に存在することを認めようと思ふのです。尚ほ正確に云へばいかなる事を行ふにしても、之が戀愛行爲の一つである爲には、その對象者に對して、之を自分との唯一の對偶者たる異性であるとする意識を顯在的に若しくはたとへ潛在的にでも必要とするのです。之れなしにはそれは廣い意味の愛ではあり得ても、戀愛ではないのでありませう。ところで私は異性間の性意識が、對象者を自分との唯一の對偶者として見做すまでに發展するためには、相當の經過を必要とするものであり、そしてその經過過程のなかには必ず性慾衝動が一つの重要なる要素として入り込むことを見遁すわけにはゆきません。私が戀愛を以て、性慾を機緣として喚び起された特殊な愛であると云ひ表はしたのは、たとへ機緣なる言葉が稍曖昧であつたとは云へ、實はこの意味に外ならなかつたのであります。私はこ〻に以前の云ひ表はし方の不足であつたでもあらう處を補つて、私の本當に意味するものを明らかにしておきたいと思ひます。

九

私が今述べた戀愛者間の特殊の性意識と、並びに一般的な性意識が之に發展するまでの過程とは尚ほ或る考察を必要と

するでありませう。特に後者、即ち戀愛への豫備過程に於ける種々の問題は、戀愛そのものと關聯して愼重な思索を向けられなければならないものであります。異性思慕即ち私が單に戀として云ひ表はした感情の如きも亦この間に發生する處のものであつて、通俗者が之と戀愛とを混同する所以も、上記の性意識の伴ふ戀愛と、之への性意識發展の豫備過程とを差別しないのに基づくと思はれます。

戀愛が性欲を機緣として喚び起されるといふことも（土田氏は私のこの云ひ表はし方への論理的疑問の一つとして「戀愛の強度を高めるための機緣は性欲だけではなく」云々といふことを擧げられましたが、私は「喚び起される」といふ言葉が當然「強度を高める」と云ふ言葉に變化せらるべき論理的歸結をいかなる前提のもとにも見出すことは出來ません）實はこの豫備過程をもつと精密に考究した上で云はれなくてはならないのでありませうが、私は尚ほこの過程の間に個々の場合の機緣としては性欲以外の種々の感情欲求がはたらき得ることを勿論認めるのです。只私は一方に戀愛を性欲の純化であるとする關係を否定して、戀愛と性欲との關係を一は他を機緣として成立するとして云ひ表はしたかつたと同時に、他方に機緣の最も一般的な且つ必在的なものを性欲と見なさうとしたのです。それ故に私は

　　戀愛は性欲を機緣として喚び起された特殊の愛である

とは云ひましたが、逆に

　　性欲以外の感情欲求を機緣として喚び起された愛は戀愛ではない

と主張するものではありません。

中桐確太郎氏も亦私の所說を論じて（婦人世界十月號）

「性欲だけを機緣とする時は、ややもすれば眞正の戀愛と擬似戀愛とを混同するに至るの恐れもないではないと私は思ひます」

と云はれましたが、擬似戀愛とは何であるか、少くとも私の說く戀愛は之に唯一の理想價値を歸すべきものであつて、性欲を機緣とすることによつてその價値を少しも減ずるものではありません。「やゝもすれば」とか、「恐れもないではない」とか云ふことは、他の曲解者に屬することであつて、自分の關する處でない限り、私は自分の所說に忠實であることを自分の良心に依賴し得ると思ひます。

中桐氏は更に戀愛を惹起する機緣を異性美であるとし

「異性美とは人間が特に異性に對して有つて居る欲求を調和的に滿足せしむべき理想的對象である」

と解釋し、その異性に對する欲求を頒ちて、肉交欲、生殖欲、異性によりて自己を完成せんとする欲求、及び異性に於て神を見んとする欲求の四つとせられてゐます。

私は先づこゝに數へられた欲求のうち、後の二者の如きは「特に」異性に對して有つ欲求であるとは思ひませんが、この「特に」を見遁がした處で、之等の四つの欲求のすべてを「調和的に」滿足せしめる「理想的對象」が異性美であるとするならば、かやうな異性美は恐らく容易に現實的に存在しはしますまい。私は戀愛への機緣として少くともより現實的なものを考へなくてはなるまいと思ひます。しかもあらゆる男性と女性とが戀愛を可能とすることを私たちが肯定する以上、戀愛への機緣として見らるべき異性美は、あらゆる人間が所有すべき筈のものでなければなりますまい。私はそれがかやうにして中桐氏の意味されるやうな「理想的對象」ではなく、寧ろ通俗的に用ひられる極めて輕い意味での異性美でしかあり得ないと思ふのです。果して然うであるとすれば、或る個々の場合にすぐれた異性美が戀愛への機緣としても性欲よりもより多く與かるとは云へ、一般的には本能的により強い性欲衝動がその機緣をなすとすることが寧ろ至當であると考へられます。何故に同性に於けるよりも常に異性に存する同程度の美が心を惹くかを考へたならば、この異性美を感するといふ心のなかに既に性欲本能が潛在的にはたらいてゐることを悟られるでもありませう。

一〇

愛の種々相が何故に矛盾撞着を生ずるかといふ重要な問題がなほ最後に殘されてゐます。

私は愛の要素として含まれた敬愛のこゝろがいかなる場合にも矛盾撞着すべき少しの理由をも見出すことは出來ません。すべての事物、すべての人格のなかに愛すべきものを見出して之を敬愛することは、私たちの常に理想としてもつべき處であるからです。

けれども私たち人間は現實的に極めて多くの缺陷をもつてゐるのです。この缺陷を除去して完全なるものに近づかしめんがために、人間は相互に慈愛のこゝろをはたらかせ合はなくてはならなかつたのです。しかも人格的に缺陷のある私たちは種々の境遇におかれて、餘りに屢々お互に相爭ひ相背き、相僞り相欺かうとします。かやうにして私たちは慈愛の心をいづれに向けてよいかに迷ひ、眞の慈愛がいかなる行爲によつてあらはるべきかに惑ひ、そして又一方への慈愛が他方への戰を生まねばならないことを歎かなくてはならないのでした。愛の種々相の矛盾撞着がこの間にあらはれるかの如く見えるのは當然です。

けれども極めて嚴格な倫理的見地からすれば、この矛盾撞着は恐らく外見的に過ぎないのであつて私たちは常により正しいものに味方することによつて之を救ふことが出來るのではないかと思はれます。なぜなら、責むべきを責めることは亦憐愛の一つであると解されるからです。

それ故に愛の種々相が矛盾憧着して見える際に、私たちがいづれの愛の相を守るべきかといふことは決して單に愛の價値的階層關係の高下によつて判斷すべきではなく、この矛盾憧着が起る所以の倫理的不正を見出して、その正しいものに赴くべきであると思ひます。たゞ私たち人間はこの倫理的批判に關しても常に正當であり得ないと云ふ事情は必ずしも

私たちをかやうな嚴格な立場におくことをも不可能ならしめ、愛の爭鬪としての最も悲痛な體驗をも生むのでありますが、少くとも理論的に私たちはこの嚴正さを保たなくてはならないのを感じます。

それ故に愛の價値的階層關係はその理論的意味に於て決してかやうな愛の矛盾撞着の場合に私たちの行動する方向を指し示すものではなく、單に愛の種々相の間にそれらが價値多くあらはれ得るかどうかを比較したものに過ぎん。併したゞ私たちが行爲を自由に取捨し得る場合にありては、先づその最も價値多く可能であるものを探ることは自然です。この意味ですべての愛のなかに價値的に最高階層にあるとせられる自己愛を選ぶことは正當であるとしなければなりません。故有島武郎氏の「惜みなく愛は奪ふ」といふ言葉は、卽ち之に相應するものであると私は思ひます。若し更に自己を擴張して、異體同心なるべき戀愛配偶者を含ましめるならば、そのときに私たちは亦同樣な意味で戀愛至上を語ることがゆるされるでもありませう。

現代文明批評

野口米次郎

(一) 米國人

米國人には必要のない場合でも自分を餘り主觀的に表現しようとする惡癖がある。この惡癖のためいつも舞臺の主役を勤める代表者たらうとする、俗にいふ『出しやばり』過ぎる。米國人位自己を忘却し得ない國民は世界に無い。米國人は無邪氣だといふのも間違のない彼等の半面ではあるが、多くの場合に彼等は不釣合で粗雜な感を與へる。代表者であると自任するといふことも威嚴のある一見識であると見ることが出來る、尊敬に價するには相違ないが、米國人がそれを維持する爲め人間の力を無益に浪費する點を指摘したい。活動して居るといふことを他人に認めさせようとすることは米國人に限つたことでないが、彼等位自箇廣告を先天的に持つて產れた國民はゐない。こゝに一人の富豪の米人があるとする、彼は力を擧げて自分の富を說明するであらう、彼は『どんな生活をして居るか』を人に示さうとするであらう、彼は金錢の力で自箇廣告をするであらう。客人でも彼の所へ來るとすると、彼は客人の誰であるかを問はずに、午後五時のお茶へ招いたり或は晩餐を共にしたりして熱心な歡迎振を示すであらう。彼は新來の客人を人に紹介して愉快な顏をして納まつて居るであらう。彼は邸宅を開放して自由に入らしめるであらう、繪畫室と云はず食器の部屋と云はず寢室に至るまで見せびらかして誇らんとするであらう。彼が如何にも開放的で、眞價に依つて評價されたいといふビジネス・ライキの態度は男性的ではあるが、彼の大きな高慢心には人間の訓練を

欠いて居ると云はねばならない。歐洲人の交際社會へはさう容易に入込めないと聞いて居る、自然私など幾度渡歐して彼地に住んでも、彼等の社會の詳細は知ることが出來ない。それとは反對に米國人は自分で進んで自分の説明をするのであるから私共門外漢でもその眞相を掴み易い。

私はずつと以前にニユウポートを米國上流社會の代表地として、それから米國人の心理を説いたことがある。ニユウポートは米國大西洋岸ロウド・アイランドに屬する小い島の中にある避暑場で、マサチユウセツ州のホール・リバーを南の方へ十七哩行つた所である。米國人の理想の一つは夏の邸宅をニユウポートに作つて、それから花の都の巴里で死にたいといふにあるといふ言葉も行はれて居る。今日米國人に對して巴里が以前同様な權威があるかどうかは知らないが、ニユウポートは今日でも米國人が二六時中齷齪と蓄積した黄金を最も放恣に最も不規則に撒放する避暑場である、米國の言葉でいふとショウ・ヲフ（見せびらかす）場所である。私は歐洲大陸で彼地の交際社會がどこへ集つて派手を競ふて居るか知らないが、壯高な邸宅と中以下の連中を絶對的に拒絶して入れないといふ二つの點からいふと、ニユウポートは佛蘭西のカーンに似てゐるさうである「羅馬は世界的である、フロレンスも世界的である、又このカーンも世界的であるが、米國のニユウポートは徹頭徹尾米國的である。然しニユウポートが米國的であつても、それは米國自身を代表して居るといふ意味でない。ニユウポートは米國の所謂上流社會の代表地であるに止つて居る。米國の上流社會といふと、人にその奢侈と贅澤を想はせる、心ある人から見ると空虚で外面的にその生活振は嗤笑の至りだといふであらう。ニユウポートは黄金の結晶體で、米國の上流社會が黨を組んで金の力で囃かうとする場所に過ぎない。もとよりこの場所は米國を代表したものでないが、それを見ても、米人の長所も弱點も了解することが出來る。ニユウポート研究は確に米人の心理を研究する上に必要であることは云ふまでも無い。私はニユウポートは世界的でないといつた。歐洲の貴族や富豪がこゝへ遣つて來ても、飽くまで歡待はするが自分共の社會へ入れない、贅澤三昧を見せびらかして彼等歐洲人の荒膽を抜いて仕舞はうとする、さうしてカーテンの陰から彼等を笑はうとする。、詰り彼等を愚弄しようとする有様を見ても、如何に米人の文化なるものが年若く粗暴なものであるかを知ることが出來る。この年の若い粗暴な行爲は米國人のどんな階級を通じても見ることが出來る特質であるといふことが出來る。

大きな邸宅の前に青い柔い草庭がある。草庭には樹木が其處や此處に植えてある、樹木の下には青銅の像などが立つて居るであらう。女關のバレンダには日本の常春藤が爬つて居る。常春藤は一年草で一年毎に新しく生長するといふ點から批評して、忍耐を知らない性急な米人氣質をよく代表して居るといふことも出來よう。邸宅の建築模樣は千差萬別で、ある邸宅は四角で地面に蹲つて居る。ある邸宅は高くて細い、ある邸宅は細くて長い。かういふ邸宅がベレブ・アベニユウとかナラガンセツト・アベニユウとかいふ町に櫛のやうに行列して居る。これ等の建物に一つ共通な點がある、それは皆な大きなベー・ウヰンドウが付いて居ることだ。米國に古い歷史を持つたものが無い。このニユウポートも近代的避暑場である。こゝが避暑場となつて米國の富豪連の住所とならない以前の情態は、海岸附近で木造の二階屋などに住んで居る下層社會を見ると容易に想像することが出來る。所謂舊ニユウポートは殖民時代の祖先が山から切つて來た材木で手づから建築した小屋の行列ともいふことが出來る。困難な窮狀を說明するこの生活を黃金の堆積ともいふべき一方の狀態に比較するとその相違の大いのに驚かされる。米國は貧民でなければ富豪だともいふことが出來る。大西洋岸の富豪連がこの地に夏の邸宅を建て始めてから三十年とはなるまいに、かういふ米國に比類のない避暑場を作り上げたことを見ても、所謂ゴー・アヘツド主義（突進主義）が遺憾なくこゝで開展して居るといふことが出來る。さうして避暑場であるから、このニユウポートは高々年に三ケ月か二ケ月を暮す爲めの場所である。又ある邸宅の主人の如きは年中商賣に忙はしいので全然自分の邸宅を知らずに、たゞ妻君や娘だけの贅澤品と邸宅を見て居るものもある。然し米國の交際社會には男子は不必要である、この社會は女護島で、男子は女の從者たるに止つて居る。この女護島といふ米國の交際社會は女の談話會で、男子は女の談話を謹んで聽く端役を勤めるに止つて居る。この點は米國の如何なる階級を通じても同樣であるといふことが出來る。

ある米國人は英國好きでエリサベス女王朝の寺院建築に興味を持ち、そのまゝの邸宅をニユウポートに建てる。ある米國人は佛蘭西熱心でフレンチ・ルネツサンスの形式そのまゝの別莊を建てる。又ある米國人はテンプル・ヲブ・ゼ・サンのやうなコンシヤン的圓柱のするトライアン城類似の建築を造る。驚くべき處はこれ等の建築は單に模造でなく、一本の柱一個の石に至るまで苟もして居らないことだ。かういふ邸宅

を見て、これ等の所有者の中に昨日まで無一物の人間であつたものが多いといふことを聞くと、たれでも米國は黄金の國である又夢の國であると感ずるであらう。『人間はパーセノンを造るとが出來なければ、須く三角塔を築くことだとかフロウベルはいつたさうだが、正しく米國人は理想のピラミツトを金力で建てようとするのである。太平洋の桑港やシヤトルではその活動もその富も左程驚くに足らないであらうが、紐育の中央停車場を去つて第五街の角に立つと、たれでも恐らくは『社會主義者ならば怒つて反逆心を起すであらう、奢侈を好む貴族的傾向を好む人間ならばきつと隨喜の涙を流すことであらう』と思ふに相違ない。心理學者を待たなくても、米國社會の内部には放縱な暴れ馬の性質がこぼれて居る。手綱で自由を束縛されて居らない米國心の奔馬の狀態を言葉で語ることは六ケ敷い。中庸を知らない米國主義は、建築ならば高く建てすぎさせる。鐵道ならば早く走りすぎさせる。贅澤な家ならば餘りに贅澤すぎさせる。新聞ならば餘りに頁を多すぎさせる。金錢を殖やすとすると餘りに澤山貯やさせすぎる。この點は勿論弱點とのみ論じ去らるべきもので無いが、過ぎたるは及ばすの感無きを得ない。長所としても又弱點としても、この突進主義は米國のどこへ行つても表現されて居る。

私は再びニユウボードに戻つて言葉を續ける。今そこにある一邸宅に入るとする。人はまづ部屋のフロアに敷いてある敷物の澤山すぎるのに驚くであらう。又飾られて居る繪畫の數が多過ぎる。部屋に懸けてあるタペストリーも澤山すぎる。寢室へ入ると其處にも多過ぎるほど裝飾品が散亂されて居る。食堂へ入ると此處にも銀製の食器や飾り花の數も多過ぎるのを眺めて、中庸を知らない米國の物質主義は無趣味な粗野に外ならないと感ずるであらう。米國にアメリカン・ビユチーといふ薔薇がある。これは長い花托の花で、眞紅の花を大きく開いて強い香氣に觸れると自然の花とは思はれない。このアメリカン・ビユチーは人に愛せられる爲の花よりは、寧ろ人に見せびらかす花たるに近い。米國の富豪の邸宅乃至生活はこの薔薇に比較することが出來よう。彼等の邸宅は住居する爲めの邸宅で無く、人に見せびらかす爲めの邸宅である。彼等の生活は平靜安寧を語るもので無く、活動と誇示を説明するものである。彼等の發展力と縱横に動く勢力には驚くけれども、たれも彼等の無意味な奢侈と空虛な生活を非難するであらう。

彼等は矢鱈に世界の美術品を買入れるけれども、其物の藝

術的價値を見ずにその物の市場に於ける代價を尊重する。過去半世紀間に米國人が佛蘭西を始として英國伊太利亞、ボーランド、グリース、エジプト印度支那日本といふやうに世界各地から買込んだ繪畫やタペストリー乃至は陶器の類は莫大なもので、故モルガンの如きは輸入税を恐れて自分の美術品の保存を英國家に托して居る位だ。米國どこの都會へ行つても其地の富豪の邸宅は小美術館の觀を呈して居るといつても過言であるまい。彼等の使用する椅子や机は英國製で、彼等の部屋を飾るカーテンや食事のナプキンは佛蘭西製であるといつたやうな工合で、自國製のものは指を屈する程である。米國の女は自分の衣服を巴里で作り、さうしてその衣服は今日流行のもので無くて明日の流行を暗示するもので無くては滿足しない。巴里の衣服製造人の言葉に『まづ米國の女に着せて見よう、出來上りが良ければ自國の女にも着らう』といふのがあるさうだ。米國の女は巴里の呉服商の爲め試驗用に供せられて居るが、彼等はそれを喜んで居るであらう。米國人は歐洲から持つて來た美術品を眺め、歐洲で出來た衣服を着て、自由に放恣に富を濫用する生活をして居る。歐洲の上流社會には極端へ走らしめない習慣の規律があるが、米國のそれには纏つた習慣の規約さへ成立して居らない。

米國の交際社會に於ける男子の地位は無勢力である。この點が特に歐洲の交際社會とは異つて居る。米國の男子多くは事業に携つて、產れ乍ら交際社會の人であるといふものは少い。『上流社會』といふ特權を祖先から世襲したもので無い。彼等の多數は鑛山とか鐵道とかで富を作つた所謂成金なるものであるから、低いは低いなりに彼等の習慣も理想も趣味も平均されて居る。然し今日では米國も歐洲化して、所謂上流社會もスノビッシュ（勿體振る）になり、有りもしない自分の系圖の古きを爭ひ、あやしげな祖先を鼻に懸け、ホーア・ハンドレット（四百）と稱する特種な交際社會を形造るに至つて居る。彼等の物質的盛衰の激甚なることはいふまでも無く、彼等のあるものは急に富を失ひ、又あるものは歐洲に移住するといつたやうな譯で、この『四百』も堪えず移動して居るが、昨日今日の新成金が頭を擡げてその補缺を埋めて行く。交際社會として米國の上流階級に一特色がある、それは歐洲の交際社會に見るやうな冒險者を見ないことである。歐洲の交際社會では、男なら富豪や貴族の女に結婚しようとし、女ならば金の有りさうな男を捕へようとする戀愛戰の例が極めて多い。複雜な歐洲の交際社會は欺き易く又欺かれ易いものであらう、然し金錢に鋭い事業家を主として組成

されて居る米國の交際社會はさう容易に欺かれるもので無い。所謂ビシネス・マンで交際に長く堪えられる人で無くては其社會の人間となれない。萬一の僥倖を當てにして入込む冒險者があつたとしても、日々の入費に堪えられるものでない。又身元の明瞭でない女が入込まないといふことも米國の交際社會の特色と見ねばならない。佛蘭西の交際社會には所謂デミモンデがある、日本の社會にも藝者が居る。米國では主人公は概して事業に多忙で不在勝ちである、故に米國の交際社會は婦人の社會であるから彼等如何はしい女は入りこむことが出來ないのは自然である。若し交際社會に清淨なものがあるとすると、それは米國のそれである。又その爲めロマンチツクの半面を缺いてゐて詰らないともいふことが出來よう。

東洋人は過去に於ては女を奴隷視して來て女の活動を禁じて居つた。それは男子が女を絕對的に專有したいといふ情熱の希望から來たものだともいふことが出來る。故に東洋人の戀愛には悋氣とか嫉妬とかいふ動物心の感激が多分に交つて居る。歐羅巴でも羅典人種は戀愛の上では東洋人に似て居る。然るに英國人はどうであるかといふに、英國人は女に自由を許して居る。さうしてその原因は英國の氣候や敎育や宗敎が英國人の性質を穩健ならしめて彼等の感情を適度に冷却させて居るからだといふことが出來る。英國の男子は女を單に感情の點からのみ眺めない、それと同時に女子も敎育が發達して居る。平たくいへば英國では異性に對する專有慾がさほど熱烈で無い。それが米國となると英國以上に女に自由を與へて居る。又女の獨立心も極めて旺盛である。かういふ米國の女の精神的發達をなすに至つた理由を考へてみると、第一に米國といふ國の成立に溯らねばならない。米國人の祖先はどの位國の建設のためにエナジーを費やしたか知れない。彼等は自然との爭鬪その外土人とも爭はなければならなかつた。又商賣を營む外政治上の活動をせねばならなかつた。詰り一人で十人の仕事をせねばならなかつた。彼等は粗食に甘んじ粗酒を飮んで神に祈禱したのである。女の數が男子の十分の一にも足らなかつた結果女を尊敬し遂に女性崇拜とさへ成るに至つた。女性崇拜は女を單に性的感情の上から比判することを許さなかつた。かういふ心理狀態が遺傳的に米國人に傳つて、今日でも女に對しては崇拜に近い程度の態度を取つて、悋氣嫉妬の奴隷となることを人間の恥辱とさへ考へて居る。さうして女の方では智識敎育が盛んで同權を男子に要求する結果、今日では男子の職業さへ奪つて居る。一般的に

いふと米國位男女の關係が淡白で淸潔な國はあるまい。女で持ち切つて居る交際社會に怪しい女の侵入することが許されないと共に、怪しい女は男子の社會へも表面入ることが出來ない。男子が倶樂部の集合で語る談話の問題は殆ど女に渡らないとして居る。所謂スポートの問題でなければ文藝演劇の談話である。然らざれば事業の問題である。もとより米國人に節操の如何はしいものは澤山ある。だが他の國に比較すると放蕩放埒な生活の實例は少いといへる。女が米國では精神的內面から男子に强ゐて生活の淸潔を維持させるのだとも見ることが出來る。

歐大陸の交際社會は政治を左右することがあると聞いてゐるが、米國政治家は交際社會に用が無い。ニユウポート於てばかりで無く如何なる米國の交際社會に集つて居るものでも米國の選擧に有力なものは稀れである。又なにかのインスチユーションを設けて藝術や演劇の發達でも計るかといふに左うでも無い。畢竟米國の交際社會は無意味ではあるが自由に淸潔に金を散布するに止まつて居る。米國の女は一般に屋外運動好きで壯健な體格の所有者であるが、上流社會の女と來ると特にさうである。彼等の血色は良い骨は太い、旺盛な氣力を彼等の誇として居る『古手袋の樣な』といふ言葉があるが、彼等には適用されない。自信力を誇る彼等は壯健と淸潔とを二つの合言葉として居る。特に彼等が夏の避暑場で快樂とするところは家外の運動以外に無い。

彼等は每朝所謂ヘーチー・ブレツキフアストで腹一杯食すると直ぐ馬上の運動を始めるであらう、二時間も海岸の潮風（ニユーポートであるならば）に吹かれて十一時頃歸家すると、今度は衣裳を替へてキヤシノへ出掛けるであらう、其處へ出掛ける時年若の友達一二人と二つ三つの姉分で結婚して間が無いといつたやうな女を同伴するであらう。キヤシノといふのは交際社會の連中の集會所で、其處の建築には日本の常春藤が爬上り、廣い運動場があつて、女共は思ひきり瀟洒な着物で其處へ出掛ける。米國では萬事が分業であるやうに着物も時間と場所に依つて異つて居る。朝飯の時の衣裳と倶樂部へ出掛ける時着る着物とは異つて居る。又午後のお茶時分の着物と晩餐の衣服とは異つて居らねばならぬ。上流社會の女となると一日中着物を脫いだり着たりして暮して居るとさへいふことが出來る。彼等は十二時半にもなると、キヤシノを出て自分の遊船へ晝食を食ひに出掛けるであらう、四時頃晝食が濟むと遊船を去り又もやキヤシノへ出掛けてポロゲームを見物するであらう。午後五時半頃になると晩餐近くな

るから、彼等はキヤシノを出て歸家し、歸家すると直ぐ着物を替へて晩餐に就く用意を急ぐであらう。かうして彼等は夏の二ケ月を費やすのである。彼等が晩餐に招いて置いた客人の中には大學生も居るであらう、世界を遊び廻るといふ老獨身者も居るであらう、巴里と紐育で半年々々に暮し世界の芝居演劇或は小說を見盡し讀盡したといふ女も居るであらう。彼等は自分の生活をどう考へてゐるであらうか、彼等は之れを滿足な生活だと思つてゐるであらうか。彼等はそんなことを考へる隙を持たないであらう。人に自己反省の餘地を與へないといふ點が米國生活の最大特徵と云はねばならない。

佛蘭西の女は上手な雜談家で相手を退屈させないと云はれて居るが、米國の女はポイント・ヲブ・ビユウを持つてゐる點から彼等に優つて居らう。英國の女は無口だが、米國の女は多辯である、又豐富な話題も持つて居る。深くはないがすべての問題に觸れて居る。敎育と周圍の事情が彼等を快活ならしめるに十分で、『女第一』の國の女として無遠慮に自分を主張するといふも自然の發達と見ねばなるまい。彼等は男子に劣らない活動力を持つて居るに相違ないが、いさゝか人を退屈させ疲勞させる。友人として彼等は惡くはないが、私共東洋人から見ると、彼等は女として幾多の疑問を持つて居る。

（二）露國人

私は幾度も日本人の感情は愛蘭土人の感情に似て居ると書いた。情調の幻想を歌ふ愛蘭土の詩人が、日本人の中に澤山の稱讚者を持つてゐるといふ理由は、彼等が日本人の感情に潛んで居るセルチツク情緒を喚起させるからだと云へる。日本人が悲しい自然の諧調に對し、又寂しい人間の運命に對し直接な反應を與へるといふ場合には、愛蘭土人と同樣な精神狀態であるからであらう。さういふ場合には日本人は自分を堅くしたり又曲たりする嚴肅な支那道德と印度佛敎の專制的所說から離れようとするのである。私は西洋の評論家の口からしば〳〵露西亞人が感情の上で愛蘭土人に似て居るといふことを聞いた。さうして彼等兩國民との間に相違があるとするならば、露國人が餘りに野蠻である爲め自分の衝動に抵抗することが出來ない點にあるとも聞いて居る。露西亞人の心の不安狀態は野蠻で背景付けられて居るので優鬱の一種となり、常に最後の避難場を運命論の中に求めて居るといふ批評は是認すべきものであらう。露西亞人の心は、日本人乃至愛

蘭土人の心のやうに、可なり抒情的で、宛も大きな地面が半分目覺めて急に生き〳〵した自然の歌をうたひ出したといふやうな形である。抒情的國民は豐饒な感念の所有者である、又正直で無邪氣な感念の半面も明瞭ではあるが、概していふとこの半面は健康なものでない場合が多い、平つたくいふと無責任な行爲を平氣で遣つてのけることが多い。露西亞人は規則や責任以外に生きる事が好きだといふ言葉も容易に了解することが出來る。ゴルキーの話の中に出てくる人物のやうに、海の水の動搖を聞き乍ら長が〳〵體をねそべらせて、機械的な實質的な人生に觸ふれることを餘りに恐れすぎる。その點でゴルキーは良く露國人の心を語つて居る。

露西亞人を想像的な國民であるといふことは必ずしも眞實でないかも知れない。然し日本人を神秘的だといふことが出來れば、露國人も同樣に神秘的だと評することが出來る。露國人は『眞實に感ずる國民である』といふことに對して誰も疑惑を抱かないであらう。實際彼等は理論をして自分の實感を害せしめない國民であるから、彼等の感情の發動はいつも自由である。自然である。故に彼等は、不條理な感情の貪慾に捕はれることが少い。彼等は精緻な受動的性質の所有者である理由から、場合によつては餘りに大膽である。又場合によつては餘りに臆病である。世界の中で露國民のやうに强弱兩端を握つて居る國民は有るまいと私は信じて居る。彼等は正當な釣合を缺いて居る衝動の影響を自由に受けて、自然に彼等は中性的安全地帶の心理狀態を輕蔑して居るやうに見える。一言で蔽ふと彼等は愉快なエキストリミストである。

私は日本人が露國人のやうに極端論者であるか無いかは知らない。然し議論も無く研究も無く新奇なものであればそれを直ぐ無茶苦茶に取入れるに躊躇しない點では、日本人も露國人も相互に類似して居ると思ふ。露國人も日本人もセルチツク感情の惡戲から、前に受入れたものでも隨時隨所に理由無く路傍に放棄して平氣な顏をして居る場合が多い。露國人の無責任は日本人のそれ以上であるかも知れないが、彼等は同じ熱心さを以て異つた二箇の聲を耳に入れることが出來る。如何にも彼等は非論理的で、野蠻的で衝動的で極めて單純である。國こそ西洋に延じては居るが露國民は私共同樣に西洋人である。

セルチツクの心は創造的力を缺いて居るとすると、日本人も露國人も同化力の上で豐富であるといふ理由も自然に明瞭であらう。日本人を模造的だといふと同じ理由で、露西亞人も模造的國民といふことが出來る。眞實の意味で日本は若い

國である。露西亞も年の若い國民である。年の若い國民の常として兩國共に事物に熱心な所もある。かう見て來ると日露兩國民はお互に東洋人として中々多い類似の點を持つて居る。露國が文學を通じて、如何に素朴な心理狀態に歸つて大地の現實を感觸するかを西洋に數へた大きな仕事は天下の普く知つて居る所である。私共日本人は西洋文明の皮相な式樣に不愉快を感じて居る時に當つて、一層親しく露國に接觸して彼等を了解するといふことは必要であらねばならない。

私は露西亞人を東洋人だといつたが、それは露國人の皮一枚爪で搔くと直ぐ韃靼人の木地が出るといつた評言をそのまゝ贊成したからで無い。十年以前に私は伯林から三人の露國人と一緒に汽車に乘つてモスコウに向つたことがあつた。私と汽車の部屋を同くした露西亞人はツルゲネフのやうな花車な指の所有者で、舌の上では六ケ國の外國語を語ることが出來るといふ模範的露國人であつた。私は彼等と一緒にモスコウへ着いて、私は直ぐこの都會に非常な興味を持つことが出來た。此處には無邪氣で人を感動させる色合に滿ちて居る。多少熱帶的で自然に不合理で、けば〳〵しく塗り立てた壁や屋根や無茶にぴか〳〵させた圓屋頂のある寺院や立派な圓柱のある旅館の入口が、見るから見窄しい小さい家屋とごちや〳〵して一種不規則極る狂狀を實現して居る。小さい狹い紆曲した街では十字を切り乍ら通行人がぞろ〳〵歩いて居る。私が最初こゝから受けた印象は、これは非文明の人間の都會だといふことであつた。野蠻な放肆といつたやうな感情が文明的な半面と抱合つて互に笑つて居る。此處では原始的な粗朴だが温い感情が淸澄な空氣のなかに流れて、私共始めて來たものは一種重い雲にでも上から壓服されるやうな感じが無いでも無い。規則的で淸潔であるのが主要な都會の特質の一となつて居る伯林とは非常な相違と云はねばならない。又巴里とも異つて居る。巴里では冷い肉官が純な知覺と混合してゐて、私共の批評的本能が自覺する。然るにモスコウでは、私共人間は赤裸になつて自由な行動で働くことが出來るといふことが出來る。

今日革命以來どうなつてゐるか知らないが、私が始めてモスコウに入つた時のクレムリンは聖地であつた、精神的な堡壘であつた、露西亞人に云はせると露國の信仰が湧きでる原泉でもあつた。私はそこで單純以上で奇怪とさへ見える露西亞の信仰が表現される光景を見ることが出來たといふのは、だれかゞセントに祭上げられる記念祭が催されて居つたからである。そこへ集つた幾千人の田舍から遣つて來た巡禮者は

みな革靴に踵を固めて、背後に粗末な木綿の布團を背負つて居つた。私がチュウドル僧院の前に立つた時は、數の知れない人間の列が、宛も死人の行列でも見るやうに、無言の敬意を挪つて僧院内へ入る順番を待つて居つた。かういふ光景にはたゞ〳〵宗教的勇氣の表現を見るのみで、興味を起されたといふよりは寧ろ一種異樣な衝動に私は撃たれたのである。彼等巡禮者の動かない忍耐と、全然時間の感念を超絕して居る態度を眺めると、私はだれかゞいつた言葉にあるやうに露西亞人は皆な哲學者であると思つた。又ゴルキーの書いた浮浪人のやうに、孤獨と避け難い憂欝の運命に反抗する力をぢつと持ちこたへて居る人間だとも感じた。この不思議な宗教的忍耐と時間を超脫する態度は東洋的でなくて何であらう。私はその時モスコウは宗教的から見た京都の半面によく似て居ると思つた。京都もモスコウも文明と非文明とがからみ合つて、こゝに異樣に色彩のある模樣美を織りだして居る。革命以來外面的には露國は變化してゐるであらうが、どうして露國人の心はさう急に變ることが出來やう。

私は日本人として、露西亞が非文明であつてしかも文明の感じを人に與へる點を尊ぶものである。



支那といふ國

殷汝耕

一、天然に惠まるゝ經濟生活

或る一國の國民の生活狀態を考ふる時、それのすべてに最も重大な影響を及ぼしてゐるものは、その國の經濟狀態であるといふことは誰れしも氣のつくことである。我々人類が靈魂と肉體とを兼ね有してゐる以上は、その國の經濟狀態が、その國の——國民の思想や藝術や、宗敎や乃至は政治形態やのすべてがそれに支配されるのは當然であらねばならぬ。

だから、いま私は支那といふ國——國民のことを語るに當つて、順序として支那の經濟生活から始めて思想、藝術、政治といふ風に述べやうと思ふ。そしてそれは、諸姉の印象を明瞭させるために、出來るだけ日本のそれと比較照應しながら話しを進めやうと思ふのである。

昔はさて措き、我々は現在の日本と支那とを比較して見ると、そこにいろ／＼の點に於いて大きな相違のあることを發見する。

まだ支那に行つて見たことのない方々でも、支那といふ國は、豐饒なる天然の惠みの懷に生きてゐる國だといふことは御存じであらう。その通りである。しかしその天然の惠みが、如何に限りなきものであるかは、想像だけでは到底呑み込めるものではない。

云ふまでもなく支那は廣大な國である。それを承知してゐても、始めて支那にいつて目のあたり限りなき沃野を眺めた人は、それまでの想像がまだ如何に小さいものであつたかに驚くといふ位である。

或る日本人が、始めて船で揚子江に乘り込んだ。「これが河

です」と、説明したが、その人は頭を振つて「いや、海だ。馬鹿な、こんな河があるもんか……」といつて中々納得しなかつた。その筈である。河幅は五十支那里、(約日本の十里)や、狭いところでも二十何支那里（約日本の三里）といふ程あるからである。

甞つて私は、揚子江の北の方に日本の技師を連れて旅行したことがあつた。そこは百五十里（日本里）平方位ひの平原である。従つてその間、山といふやうな山もない。見渡す限り地上に立つてゐるものは、少しばかりの樹や人家だけである。陽を遮る何物もない。丁度それは大水災の後であつた。日本ならば洪水が出たといつても、数日たつと水が退くが、支那ではさうはゆかね。一ケ月も經たその時、まだ地上一面に三尺位の水が湛えてゐた。その水の上に帆前船を浮べて走つてゆく。芋畑などが水の底に見える。海のやうな大平原の水の上を、民船に帆をあげて悠々と走る情景！　日本の諸君に想像出來るだらうか？　しかも、四日も五日も際限がない。技師もこれには驚いた。そして訊いた。「いつたい　、この水はどの位ひ經つたら退くだらうか？」私は答へた。「全部退き終る迄には少くも三ケ月はかゝる」

ある時、――今から五六年前、支那の北五省に大旱魃があつた。その時外國の新聞は、あれだけ廣大な被害面積であるから、罹災者は約千五百萬人はあらう。だから若し救濟にして當を得なければ、何百萬人からの餓死者を出さねばならぬと大いに憂慮した。果して救濟はうまく行はれなかつた。殆んど救濟らしい救濟は行はれなかつた。所がどうであらう。然し悲惨な境遇に陥ちたものは極めて少數に限られた。これはどうした理由か？

旱魃でいよ〱作物が獲れないと見極めがつくと、その地方の人々は、呆然と救濟を待つてはゐなかつた。みんな勝手にどん〱逃げ出した。北京へ！　奉天へ！　ハルピンへ！　又北京から張家口と、綏遠の方面へ！　悉く無賃列車に乗つて逃れた。そしてそこに落付いて飢餓から免れたのである。前述べた水災の時も同様であつた。つまり支那に於いては天災を被むる地域が非常に廣大であるにかゝはらず、それ以上廣大な、豐饒な、罹災者を包容して尚餘りある土地があることを説明してゐるのである。

江蘇省のやうに交通の發達した、比較的文化に浴してゐる地方でさへ未開墾地、荒蕪地――といつて土地が痩せてゐるわけでは決してない――がざつと百萬町歩もある。そして人口も稠密で、従つて農業に就いても可なり進歩してゐるとこ

ろでも坪當りの生産力は日本のそれに較ぶればやうやく五分の一にしか當らない。つまり工夫を加へればまだ〳〵生産力は増加する余裕をもつてゐるのである。石炭の包藏量の如きは、全世界の何千年もの使用に堪えると謂はれてゐる。

要するに支那は天然力に富んでゐる國であつて、しかもそれは、未だ充分に利用されてゐない。掘つても〳〵盡るなき寶庫に充されてゐるのである。故に支那の國民は、どうしても天にたよるといふ氣風が生じて來るのは自然である。水災旱害に會つても自然のまゝに動く。そこに、自然に順應し、服從するといふ國民性が醸成されるのである。何事につけ無理をして押し通さうといふやうな考へはない。御承知の通り支那は今あれほど混亂してゐる。けれども國民は都會を除くの外は極めて暢氣にくらしてゐる。

之れに反して日本は、全然、人力によつて經濟を保つてゐると思はれる程である。歐米の物質文明をとり入れてかくの如き進歩を遂げた事は、支那にとつて學ぶべき多くを示してゐるけれども、經濟――殊に天然の惠みは、もはや余力がないやうである。日本は自給自足と稱し、農業本位といふけれど、すでに日本の土地は、人力の加へられるだけを盡してゐるやうである。おなじ一町歩の土地から、日本は、支那の五倍にも當る生産をしてゐる。が、それは精密なる耕作――集約農業をしてゐるからで、從つて支那では想像もつかぬ程多額の耕作賃、肥料代等を支拂はねばならぬ。或る見方からすると、日本の農業は殆んど工業といつてもいゝではあるまいかと思はれる。殊に養蠶の如きは然りである。それはその筈である。日本には天然の力が乏しい。鑛山にしても鐵はなし、石炭も少いし、石油も多くは出ない。そのほか之れといふ鑛物もない。植物にしても、日本人の最も多く使用する綿糸は、朝鮮に少し生産されるだけで他は悉く外國から仰いでゐる始末である。その乏しい天然を、多くの人間が利用しやうために、人力のすべてを盡して天然の力は充分發揮しつくした。もうその上は人の力によつてのみ經濟の基礎を營む外なくなつたからである。從つてその經濟生活は、工業的の經濟法則によつて支配されるやうになるのである。

これは、兩國民の經濟生活の違ふ最も根基となる點である。從つてそれから生ずる國民性にもその相違が現はれてきて、支那の國民は、運命觀的な人生觀をもつてゐる。政治といふやうな、人爲的な方法には、あまり賴つてゐない。寧ろ冷淡でさへもある。――といふ理由も之れによつて肯けるであらうと思ふ。支那の昔の歌に

帝力我れに於いて何かあらんや

といふのがある。支那といふ國はさういふ國である。

日本の國民性は全く之れと反對である。――と私は觀る。天然によつて足り得ないために人爲的である。從つて進取的である。征略的である。自我的である。運命を自分の力で支配してゆかうといふところがある。

これを通俗的に云ふと、支那人はのんきであり、日本人はせつかちである。

二、訓練されたる思想的經歷

前に述べたやうに、經濟生活は、大部思想に影響するものであるが、その國の自然の姿――山川の形勢もまた大いに關係してゐると思ふ。

支那は大陸であるから、そこに住む人間はぼうつとした大きなところがある。ゆつたりしてゐる。日本は之れに反して細緻である。

しかし、その支那の思想でも、大體二つに分けることが出來る。それは、北方の思想と、南方の思想とで、北方の思想は、儒敎が髓をなしてゐる、孔子、孟子の思想が流れてをり、南方には、道敎――老子や、莊子の思想が流れてゐると謂へる。これも畢竟するところ南北の經濟狀態から來た差異と觀られるのである。支那のうちでは、北の方は比較的土地が瘠せてゐて、天然が豐かでない。そこの住民は剛直、質朴の風があつて、實際を重んじる傾きがある。そこに佛敎のやうな超世間的な理想を說かない儒敎が浸入するのは當然の事である。儒敎はその說くところ全然現世的であつて政治、道德、敎育、悉くそれは、如何に現世に處してゆくかといふ事であつて、儒敎の說いてゐる禮樂は、全く現世に適應する人間を仕込むといふ事を主義としてゐる。

南方は、天然の豐かな地方であつて、昔から經濟的には富裕であつて、生活が困難でない。現世的には滿足し易い地方である。そこに流れ込んだ老莊の敎へは從つて、虛無、恬淡を說く。儒敎の現世主義であるのに對して著しく理想主義である。だから、その精神は美術的方面へ發達し、世に處する態度は禮敎などに拘束されない、むしろ放埒でさへもある位である。所謂名士肌の人が多く出でるのもその故で、小節に拘泥せず、非常に高遠な理想を唱へるといつた風である。

この二つの思想は、支那の昔からの大きな流派であるが、現在では、これが混同して、支那の國民の全體に流れてゐるといつてよい。よく日本の人が支那は元來儒敎國であるの

に、論語にある敎へを守つてゐないと批難することがあるが、その筈である。純粹の儒敎ばかりでなく、そこには、老莊の思想が深く喰ひ入つてゐる。從つて支那國民の思想は或る程度迄非常に自由である。今日西洋から所謂新思想が浸入して來るといはれるが、それらは、昔から支那には殆んど大抵ある。社會主義的思想にしても、共産主義的思想にしても、無政府主義的思想にしても、支那の昔の本を見れば、それは皆ある。だから、西洋から新らしいいろ〳〵の思想を傳へて來ても、支那の國民は少しも不思議にも思はないし、珍らしがりもしない。これは日本と大變違ふ點であらう。日本の或時代の當局者は、社會主義と、社會政策との區別さへつけなかつたことさへある。何んでも「社會」といふ字がつけば危險なものとしてゐた時代もあつた位である。日本の或る人々は、ロシアの過激派を非常に恐れるけれども、支那では、國民が種々の思想に馴れてゐるからちつとも驚かない。宣傳をしても政府は大して取締りもしなければ、國民も直ちにそれにかぶれて新らしがるやうなこともない。

もう一つ支那の思想は、非常に複雜だといふ事である。唐以後五胡十六國といつたやうな時代があり、その後、元あり、滿洲人の淸あり、といふやうに種々の異民族の侵入があつたために、思想にも從つていろ〳〵の流れが混合してゐるわけである。

それを日本に傳つてゐる儒敎などは、その中の宋學派―陽明派が日本に傳つたもので、それを日本はそのまゝ大切に守つて來たのであるから極めて單純なものである殊に日本は歷史あつて以來外國の侵略を受けたことがないので、思想混亂による訓練は極めて淺く思想的經歷は甚だ單純であるといへる。だから新しい思想を、そのまゝ受とるといふ結果になり、摸倣的の精神を現はす。態度に於いては買ひ被りとなるのである。――といつても私の詭辯ではあるまいと思ふ。

三、支那藝術の調和と整正

私が始めて日本の紋付きを見たときには、黑い地にたゞ白い丸が見えたばかりであつた。所がどうであらう。尚よく見ると、その小さい白い丸の中には、實に細緻を極めた模樣があるではないか。更に他の人の紋と比べるに當つて、そこには、千差萬別の模樣があの小さい白い丸のなかに施してあるのに驚いた。婦人の服裝――殊に儀式用のあの裾模樣を見たときは、たゞ黑いきものだと見えた。どうして、よく見るとそれは一人々々によつて、實に纖細な模樣が、別々に畫か

れてあつた。

之れは支那人にとつては實に驚くべきことである。日本人といふ國民は微細なところに藝術表現をする國民である。もつと細かく研究すると、織物などは、縦から精選して、撚り方、織り方、染め方、いろ〳〵の細い點に苦心してゐる。私が始めて日本に來た時には、黒い木綿の紋付を見ても、斜子の羽織を見ても羽二重を見ても、少しも見別けがつかなかつた。木綿の絣を見ても、大島の絣を見てもその優劣は、いくらかこつちの方が好いのだらう位にしか分らなかつた。一方は何圓で、一方は百何十圓だときいて始めてまた反物を見直した。下宿屋の疊を見ても、大きなお邸の疊を見ても、大きさも、色も同じだから、どつちが好いといふ事は分らなかつた。下駄一足の見分けにも非常な苦心を要した。日本人の趣味は非常に細いところにあると氣がついた。

ところが支那は さうぢやない。北京の皇帝の宮殿にいつて、柱の塗りを見ても大したものではない。細工を見ても粗削りである。一寸した金もちのと大した相違はない。たゞ使つてある材木が楠だとか沈香だとかいふ非常に高價なものであるばかりである。

然しその代り見逃すことのできない事は、建物の構造の全體の釣り合ひ、大きな調和といふことである。それは實によく整つてゐることに氣づくであらう。

日光の陽明門は日本建築美の極致なものであるといふ。成る程金がかゝつてゐて、細工は細かく實に綺麗である。が、そこに全體としての調和は見られない。芝の增上寺にゆくと、水鉢の上に屋根があにて、その部分を見るとその銅の瓦の一枚々々にも極めて細かい注意が注がれてあつて、殆んど一分一厘の隙もないやうに出來てゐる。が之れもよく見ると、全體としての調和は整ふてゐるとは見えない。

支那での服裝などは、金持ちでも、貧乏人でも、絹とか木綿とかの相違はあるが、價の上でさう大した相違はない。だから支那の上流婦人は、寶石で飾ることになるのである。

繪畫でも双方を比べるとそこに一種の感じの差違を見ることが出來る。日本の繪は細いところをよく描く、そして表面を描寫することに傾く。我々から見ると何となく深味に乏しい感じがする。大きな感じも受とれない。支那の繪はどうも深味があるやうに思はれる。

四、政治に頼らざる國民性

政治といふものは人類にとつては手段である。目的ではな

い。寧ろ經濟生活こそ人類密接の生活であつて、政治はそれに對する一つの手段にすぎない。經濟生活に於いて滿ち足れるものは、政治に對して餘り多くを希求しないのは當然である。支那は、先きにも述べたやうに天然の惠みの多いことからして、經濟的には非常に餘裕がある。從つてその國民は政治に對して冷淡である。政治家も、だから形式よりも內容實質に注意してゐる。

　支那の政治家は、昔からどう考へてゐたかといふと、國計民生といひ、經國濟民といつてゐた。國計若しくは經國とは、財政、行政のことであり、民生または濟民とは人民の經濟生活のことである。云ひ換へれば人民直接の生活の福利を主とするのであつて、その政治形式は從なのである。

　昔から支那の有名な政治家は、先づ第一に治水を行つた。何となれば、水災と、旱害とは人民によつて最も恐るべき生活上の脅威であつたからである。次には租税の負擔を輕るくする事に腐心した。つまり支那の政治家の考へてゐたことは、政治は國民の自由發達をたゞ傍から助けるだけのものであつて、なるべく自由に放任するといふ事を主眼としてゐたのである。之れも日本と大いに違ふ點であつて、日本では、殊に德川時代などには、極端なる干涉主義をとつてゐたのに反して支那では徹底的の放任主義をとつて來たのである。だから政府と人民とはたゞ消極的な關係を保つて來たにすぎない。人民にとつては、租税を輕るくする政府がよい政府であつた。政府は盜賊などの取締りをしてゐればよかつたのであつた。敎育すらも人民に任せて來た。それだけに大規模な、統一的な事は出來なかつたのであるが、その代り人民は自分の力を自分で養成することに昔から訓練されて來た。

　日本では古くから保護、干涉主義をとつてきたので、國民は政府の力による傾向が强いやうである。

　例へば、支那には、シャムに三百萬、南洋米國其他全世界に日本の何倍かの移民があるがそれらは一つも政府の力に依つたものではない。しかも彼等移民は自ら環境に適應するやうに生活をしてゐる。ところが日本の移民はどうだらう。移住する時も政府の力により、移住した後も尙且つ政府の保護によつて生活してゐる。だから領事が引上げると、そこの移民も同時に引揚げることは、すでに嘗ての浦鹽や、チタに於ける例が實證してゐる。この點に於いては支那の國民は自治的精神が發達してゐると云へると思ふ。

　その代り日本では、全體の組織は極めて嚴然と整つてゐる。しかしそれはそれだけでは果して人民の幸福であらうか。

疑ひなきを得ない。政黨內閣だとか、普通選擧だとか、日本の政治家は政治の方法形式にばかり力を入れてゐるがその以前に、もつと國民の生活を安定する事に努力すべきではなからうか。

現在の支那は混亂してゐる。從つて無論國民の生活は安定してゐるとは云ひ切れないが、昔から政治的混亂には馴れてもゐ、先きに述べたやうに第一餘り人民はそんな事に拘泥しなくとも生活してゆけるので、彼れらは、部分的に自治的に治つてゐるから、外からは非常に混沌として見える割合に、國民自身の生活はさう不安定ではないのである。無論影響のないことはない。が日本の人たちが外から眺めて、よくあんな處に一日でも安閑と生きてゐられると驚く程それほど實は支那の國民自身は驚いてはゐないのである。丁度日本の政黨爭ひ——護憲三派だとか、政友本黨だとかいつて、政治的には可なり混亂し、またその渦中にゐる政治家たちは國家の一大事のやうに血眼をして騷いでゐるにも係らず國民は一向平氣で日常の生活を營んでゐられると同じ事である。戰場にされる地方は直接影響を受ける事は勿論であるが。それすら先きに述べた飢饉の時の事を考へれば何んでもない。その他の大部分の人民などは一向平氣でゐられるのである。

五、現時の動亂と將來の支那

御承知の通り支那は今大きな動亂の渦中にある。そしてそれは今始まつたことではなく從來も何度となくさういふ混亂が起きて常に政治的不安が漂ふてゐる。これでは何日迄經つても支那は國內が安定しさうにも見えないと思はれてゐる。何故さう支那はごた／＼ばかり起き續いてゐるであらうか？

これには種々の說明が要るが、しかし約めて云へば至極簡單に說明出來ない事はない。それは二つの政治的主張の衝突であるといふことである。

支那は、已に說明したやうに第一その思想が複雜であり且つ地方々々によつてもその差は多い。加ふるにあの廣大な土地である。どんなに整備した組織によつたところで、到底現在の日本のやうに政治の中心を中央に置いて、統一的に全國に號令するといふことは不可能なことである。故に以前から支那統一といふ言葉は用ひられたけれども、それは單に形式だけであつて、矢張實際は、各地方別々に自治を行つて來たのである。故に、支那全體の政治の形態を確立しやうとならば、各省——各省といつても一省の大きなものは日本全體位あるし、小さいものでも日本の半分位はある——に地方分權

主義に據つて自治を許るし、各省は自ら憲法を樹つて、それによつて省内の政治を行ふ。而して支那全體としては、各省を聯合して、玆に聯邦式の政府を樹立する。といふのが一つの主張である。これを名づけて聯省自治主義といふ。

これに對する他の一方の主張は所謂武力統一である。これは大して說明するまでもない一黨一派の武力に依つて支那全體を治めやうとする、前者の地方分權主義に對して中央集權主義である。つまり今日の支那の動亂はこの二つの主義の爭ひに過ぎないのである。

この二つの主義の爭ひは何も今日に始つたものではない。革命以來十數年の問題である。曾つては袁世凱が自ら皇帝となつて支那を統一しやうとして失敗し、次ぎには段祺瑞が同じく武力統一を企ててそれも失敗した。今日は所謂直隷派の吳佩孚氏が三度目の武力統一を試みやうとしてゐるのである。然らばこの動亂はいづれが勝利に歸するであらうかといふ事は無論にはかに速斷することは出來ないが今迄の經驗上、縱令一時の勝利は博しても、結局輿論に逆ふものは沒落の運命に陷るといふことは明らかである。では支那民衆の輿論は如何か？　無論、聯省自治主義に贊成してゐる。武力統一などは、今の若き支那の民衆は、一場の迷夢としか考へてゐない。だから今日の動亂の勝敗の數は自ら明らかであると私は信じてゐるのである。

一般の支那國民は素より戰爭を好まうはづはない。それは避けたい。けれどもこれが解決しないうちは、いつまでも支那の內政は不安である故に、寧ろ激烈な戰爭をしてでも、一日も早く解決をした方がいゝと考へてゐるその意味に於いて支那の民衆は、今日の動亂を、和平に到る當然の過程として、好みこそしなけれ、決して阻止しやうと迄は思つてゐない。

日本のやうに政治組織の確立安定してゐる國の人々から見れば、十何年もごた〳〵を續けてゐて尚安定しないのを見れば、將來何十年經つても支那が平和に赴く時はないだらうと思はれるかも知れないが、支那は何しろあの通り廣大な國である。思想も複雜である。その全體に關する大問題がさう簡單に、短時日に片づきやう筈はない。それは日本に省みてもすぐ分ることである。明治維新の當時さへ全く安定する迄には十何年もかゝつてゐる。國も狹く思想も單純である日本に於いてさへさうであつた。今日の支那のそれは、量に於いても、質に於いても到底日本のそれとは較ぶべくもない大きさと深さとをもつてゐるのであるから、さう短かい年月で落着しやう筈のないのは當然ではないか。

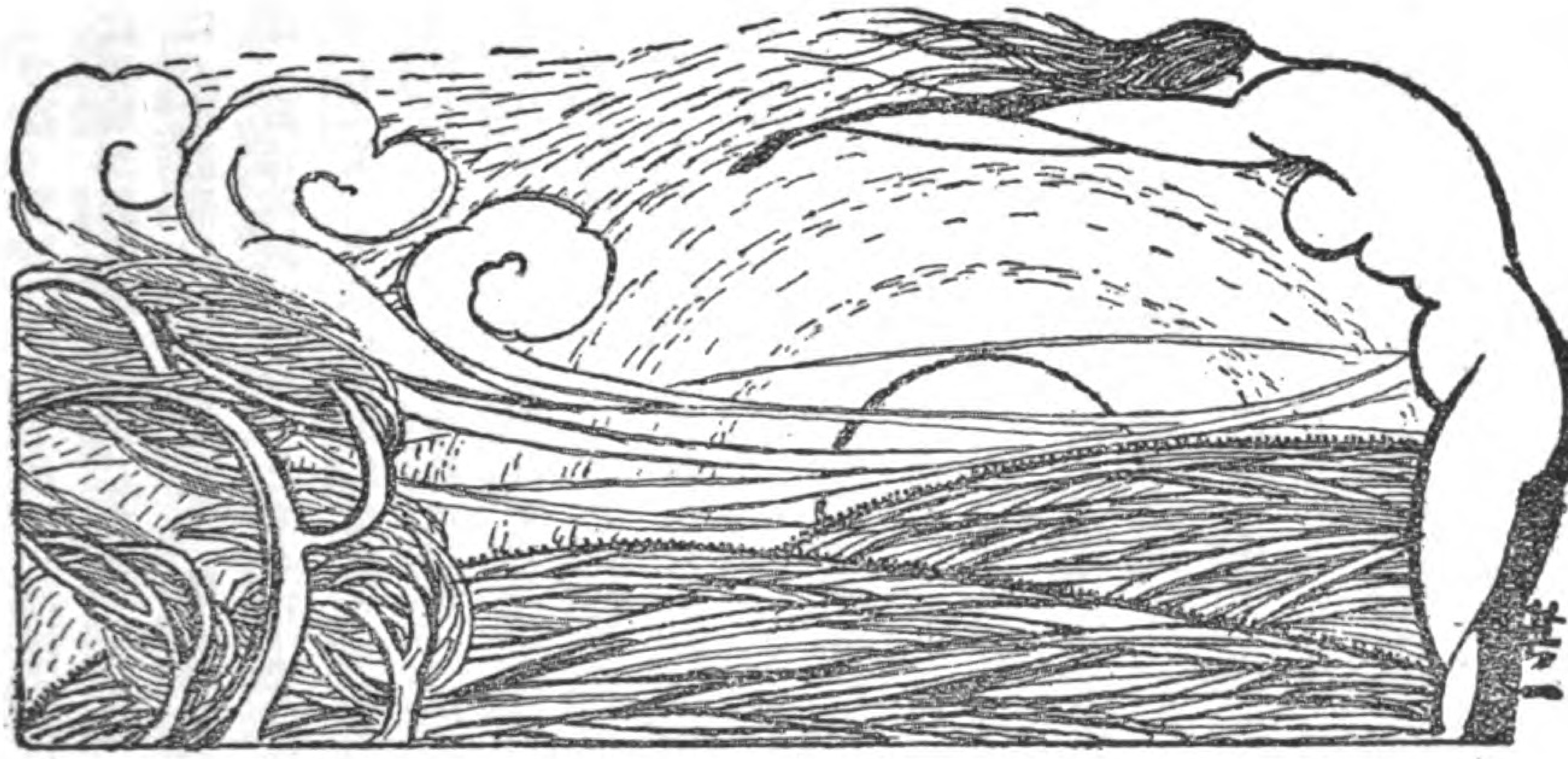
では、支那はどうすれば、何時安定するだらうか？ それは輿論が勝を確實に博した時である。丁度日本が今、政治的に不安動搖の時であるが、普通選擧が行はれるやうになれば、政治的波瀾は少くとも今日よりは減少し若し波瀾があるとしても、それは原則的に動くであらう事を想見せられるのと同じである。たゞ支那に於いては、その過程としての手段が戰爭といふ兇暴な形式を以つて行はれてゐることは、非常に不幸な事であるが、然し兵權を握つてゐる人達が政權の爭奪をしてゐる時代であるから之れは止むを得ないことゝ諦めねばならぬ。

斯の如く、支那現時の問題は實に彼れ自らの問題である。決して對外的の動亂ではない。故に、若し外國にしてこの問題に干渉する國ありとせば、それは以つての外の越權であつてたゞに無益であるばかりでなく、却て自然の推移を不自然に導き、從つて問題の解決を長引かせ、ます／＼困難に陷らしめるばかりである。之れは單に支那自身の不利益のみではないのである。

幸に日本政府は、この問題に對して不干渉主義を聲明した。當然の事ではあるが、從來の日本政府の態度に照し見て、私共は衷心より滿足の意を表するものである。この上はこれがたゞ一場の聲明のみに終らずして徹底的に不干渉の主義の態度を持してもらいたい事を希望する。日本の或る一部の人々の中には、滿洲の利益保護云々のために不干渉主義に反對してゐるものもあるやうであるが、それは一種の杞憂に過ぎない。何となれば、正しき權利の主張は、滿洲が誰れの支配下に入らうとも當然主張し得るものであるからである。故に今日日本の人々が滿洲の利權侵害を口實として不干渉主義に反對するならば、却つてそれ以上の野心あるものとの疑ひを受ける虞れがあつて、兩國民のために是れ以上の不幸はないと思ふのである。

繰り返して云ふ。現時の支那は、彼れ自らの問題のために、彼れ自らが解決に急いでゐるのである。何れの國からも干渉されないことによつてのみ第二の新しき支那は產れるのだ。

若き日本の諸姉よ！ 實に支那は自ら新しき生命の產みの呻きを呻いてゐるのである。產室は靜かであらねばならぬ。もしこの神聖なる產室を侵すものがあらば、貴女方はその溫かき慈愛にみてるみ手をもつて。それを制めて下さい。



都會の女性に見る地方色

北國の女性

室生犀星

冬、雪のあるときに旅行して來た知人がこんなことを言つた。

「そとを歩いてゐても女の人があまり歩いてゐないやうだね。ことに娘さんなどはまるでゐないやうぢやないか。」

「さう見えるかね。」

わたしはべつにそのわけを話さうともしなかつた。

「中年くらゐの女ばかりだ、それでなければお婆さんだね。」

夏、この友人が來て、夜の町なみを歩いて驚いたやうな顏をして、浴衣を着た娘さんだちの多いのに目を停めた。

「こんなに娘さんがゐたのかね。」

かれは涼みながら出歩いてゐる娘だちを珍らしさうに眺めた。

内氣な、嫉み深げな、そのくせ子供の時分から何となくませた女が多かつた。人中へ出ても口をきかずに何かといふと、あいそ笑ひをして引込んでしまふ性質の、言はばそれは北國の女かも知れない。冬でも春でも大概うちの中で暮してゐ、そとへはよけい出歩かない、おもに雨や雪の多いせいと、遊ぶところが少數いためであらう。

顔は古風で、おも長で、色は白い方で、眼はこれも古風な切れのながい方である。悧巧げだが、眼から鼻へぬけるやうな一瞥すぐに對手を見ぬく東京の女だちと違つた、別種の、自分の考へを加へた悧巧さであつた。女學校で愉快にすごした人も、家庭へはいればじめじめした、はきはきしない、哀しさうな女になる。――べつに家庭に悲哀がなくともそんな風になるのは、古い言草だが雨や雪や曇天の多いためであらう。樹立の深い家にそだつた娘らは團羽や扇のかげで、世の中をぬすみ見てこころがませて行くと言つてもハイカラな言葉ではないのである。終日、お針でくらしてゐる女だちに世間がわかるものでないと言へばそれまでだが、女は女といふものを考へるのもそんな時である。予はそとを歩きながら七歳の女童にして既に二十くらゐのませたおもかげを見ることがあつた。東京でも見ないではないが、家並みの古ぼけたところに遊んでゐる女童には、東京の子どものやうな、明るいお人形さんのやうなのはゐなかつた。何か田舎の荒涼な風色が染み込んでゐて、それが生涯剝げない女童を予はしばしば悲哀の感情をもつてながめた。予のこの感情は色の白い女よりもよけいに淺ぐろい女にあつたのである。

くはしく言へばませた子は、どこまでもませてゐると言つていい、ませない子は、いつまでもぼんやりさんで、そしてぽかんとしてゐる子が多かつた。そんなぼんやりした子は當地では音樂の教師なぞに一生をあやめられたりすることを予は耳にした。予はこのぼんやりさんが得も言はれず美しいと思つた。古風な城下町らしい女性だと思ふのだが、れいの、悧巧げな、いんじゆんな中にきかぬ氣質を仄見せてゐるのは何と言つても、大昔から城下町の女らの氣質であつたらうと思へた。女俳人の千代などもやはり哀れを知る女性ではあつたが、悧巧すぎるくらゐであつた。己れの容色のよくないことを知つてゐて、それをしばしば夫へ氣兼ねしてゐたことなども、嫉み深い氣質の一端を示してゐるやうであつた。とんぼ釣りけふはどこまで行つたやらといふ句なども、子供をもつた人にはいつでも新らしい感じをさせるのも、北國人の氣

質の考へ深いところを表はしてゐる。

予が十數年間の東京暮しのなかで會つた郷里の女の人、おもに人の奥さまで家庭的用件で來訪される方ではあるが、これらは身を東京に置いてことごとく田舍ものであつた。言葉の端々に或るそぞろな田舍の風色を含んでゐる人々であつた。東京で田舍めいた人をみるといふことは、わけて郷里を同じくしてゐる人は何と言つても例のそぞろな微笑みをかんじるものであつた。くつろいだ氣もちである。そしてさういふ田舍の風色は決して剝げるものではない、雪やみぞれや草木の匂ひ、ませた重い髪のけはひ、そんなものさへ感じられると言つたら又ハイカラになるが、眼をこらして見れば實際それが感じられてならぬ。東京人には微妙な教養があつて田舍ものには習はれぬ。古い大むかしからある教養であるらしい。田舍には教養はないが風色はある。とうてい東京のまんなかにゐてもその風色外にあることはできないやうである。

しかも今の東京といふところは、さまざまな田舍ものの集合地のやうである。風色はつねに彼の女らの上に吹き和んでゐる。どういふ叮嚀なおつくりの中にも儼然たる田舍ものの風色が漂よふてゐるではないか——。

萩原朔太郎君が、金澤へ來たときに、こんなことを言つて想像の的中したことを面白がつた。

「やはりこんな暗い間取りの家で、お針か何かやつてゐる女のひとが多いと思つたんだ。」

予は萩原君とは代表的な北國の或る町家のひと間に、客となつてその家の娘さんと對座したことがあつた。天井の土間に明り取りがある茶の間の、ほのぐらい長火鉢の前で、予は萩原君とこの古い町家のことを話した。娘さんは予のしんせきのものである。娘さんはませた、長い手を火に遠く置いて扠て、予らの對座を恥かしさうにしてゐたことは勿論であつた。

「全く想像どほりだよ、しかしまるで日のあたる間なんて無いやうだね。どこの家でもみんな左うかい。」

萩原君は間取りのわるいあたりを見廻して言つた。

「つまり冬のことばかり考へて建てた家が多いんだよ、寒さに恐がる人ばかりなんだから。」

夏がすぎると北國ではもう冬の話が出るのである。寒だと

か、薪だとか、冬の食物だとか、さうしてみんなは冬を恐がるより外に何も知らない。おどおどした半ば哀しさうなおかみさんなどの顔色も、しぜんさうあらうと思はれるでないか?——

東京化せる女

近松秋江

今日東京に於て見るところの女性は、その七分までは、多く地方出の婦人である。今日では最早生粋の江戸つ兒といふべき女は、あまりゐないのである。

勿論下町の商家の婦人乃至花柳界などには江戸つ兒の女性が可なり多いのであるが、其等とても、一種の意氣を尊び、氣風を磨くといつたやうな境涯に住んでゐる女——即ちさういふことを一つの人間生活の必要なること、或は趣味として意識して、所謂江戸氣風の保續を志ざしてゐるやうな肌合の婦人ならば、知らぬこと、今日では江戸——東京生まれの婦人とても、多くは江戸つ兒といふものではなくなり、新東京の婦人と化成してゐる者が多いのである。又さうであるが當然でもあり、さうなくてはならぬところである。

古い江戸つ兒趣味には無論好い所はあるが、しかし、それを今日は發揮されると、恰も泉鏡花氏の小説を讀むやうになり、むしろ滑稽と見ていゝくらゐに時代錯誤の感を成すのである。

假りに私の知人についていへば、三宅雪嶺氏夫人の三宅花圃女史などは、系統から申して立派な江戸つ兒育ちの女性であらうと思ふ。女史はたしか、故田邊蓮舟といつた舊幕臣の女である。そこで修養からいつても、はたその夫たる雪嶺博士との好配偶からいつても、代表的な江戸つ兒夫人の一人である。その境遇が所謂上の手の智識階級であるところから、

下町趣味の粋を磨くとか、意氣を衒ふとかいつたやうな、どちらかといふと、下品な方の江戸つ兒を代表してゐる側ではないが、私は、夫人に親しく接近したことがないから、よくは知らぬが、若し江戸つ兒系統の女性として、その修養や境地からいつて、何人が、その標本であるかといへば、差づめ三宅花圃夫人などは申分のない東京婦人である上に、尚ほその源に溯つても、江戸つ兒女子であるから、たしかに、さういふ氣風が、女史の何處かに表はれてゐるにちがひないと想像してゐる。それが、假ひ、下町式の粋を貴び意氣を衒ふことを露骨に表はしてゐる花柳界、藝人社會のものでないにしても。

次に、これは一層未知の婦人ではあるが、田邊蓮舟から聯想するところの勝海舟伯の娘で、目賀田種太郎男の夫人は、これ亦江戸つ兒氣質を上の手式に繼承してゐる女性の一人であらうと思つてゐる。

私のよく知つてゐる範圍では、長谷川時雨女史なども江戸つ兒型の女である。女史には、三宅花圃女史などよりも、はつきりと所謂江戸つ兒型の氣風が露はれてゐることゝ思ふ。その善惡可否は別として。

それで地方の女が東京に來て、どういふ風に都會化してゐるかといふことは、これを一概にいふことは甚だ困難である。何より第一に、私は婦人と交際が乏しいので、そんな婦人を手近なところに思ひ出せない。尤も今日の東京の上流又は智識階級の婦人の中には、兩親が東京に定住して、東京生れの女子が可なり多い。是等の系統をいふと、前にいつた三宅花圃女史とか、長谷川時雨女史といつたやうな生粋な江戸つ兒とは申されないが、併し、今日の東京婦人といへばまづ此の階級の婦人を以て中心とせねばなるまい。何代も連綿としてゐる江戸つ兒の女は今日では少いし、そんなのは、往々にして新時代の東京生活に適合してゆくに勝手の違つた點がないでもない。兩親が地方の産であつて、明治政府治下の東京に永住し、その兩親等の集合によつて發達した東京に生れて東京に育ち、帝國の首都を誇る東京の學校に、はた猶ほ學校以外から教育を受け、生まれながら東京生活に馴染んだ女子が今日の東京生粋の婦人である。

私は、その階級の婦人の中に、やゝ理想的な婦人を見出すことがあるやうに思はれる。けれども、地方に生れて、中年で東京に來た。女には言葉から何から、どうも、しつくりと落着いた東京婦人をそこに發見することが出來ない。勿論その範圍の女性の中に女傑が居らないといふのではない。むし

ろ女傑は、地方出の婦人に多い。それは地方に在つて、主として舊藩の氣風、教育を承繼してゐる士族又は郷士階級の家庭に人となつた婦人がさうであるやうに思ふ。

私は單に趣味としていへば、東京辯を最も好む。東京辯くらゐ氣持のいゝ言葉は、日本中他にないのであるが、(男性でもだが)ある女性の中には、平然としてお國訛りを殘してゐて、それで押し廻してゐる婦人がある。さういふ女性の中には往々傑物がある。

若い女性で、地方から出て來て、俄に東京風を習はうとして、妙に感違ひをした風俗などをしたり、言葉のまだ十分熟してゐないなども堪え難い。併し前申したやうに、地方出の女性に(男性もさうであるが)奮闘性に富んだ婦人を見出す場合が多い。そんなのは、地方色も何も超越して、たゞ勇氣や意思の力を賞讃するに値する。

都會化せる地方の女性だなんて、たゞ浮薄に言葉訛りが取れたり、身裝風俗ばかりが東京風になつたところで、東京にゐれば、たゞ何か好いことがあるであらうとか、東京に住んでゐることを誇りと心得えてゐるやうな淺薄な女は唾棄するに値する。

一概にいへぬが、意思の力に富み、奮闘性の盛な女は、やつぱり男性と同じく東北の方とか北越とか九州、四國、或は兩毛地方に多いやうである。けれども京都あたりの女は賢こくつて愼ましく、教育があり、善良な家庭に育つた女性であるならば、落着いた、餘裕のある家庭の婦人たるに最も適してゐると思ふ。ところが今日の新しい學校教育を受けた女はさうでもないが、どうかすると、京都あたりにはまだ〳〵落語家の話題になるやうな三十一文字で臺所のことを形付けようとするやうな婦人に出會はさないこともない。

いふことが甚だ要領を得てゐないが主題からして要領を得てゐないのであるから爲方もない。之を要するに、東京で生まれ、東京の家庭で育つた新時代の東京婦人が、所謂東京の女性の中樞勢力であつて、もし地方出の女性で何か仕事をしてゐる者がありとすれば、それは、所謂都會化をしない、獨自の才識を發揮してゐるのだと思ふ。(九月十八日)

大阪出身の女性

上司小劍

男も女もから田舍くさくなつて來ては、首府に見る女性の地方色といふやうなものが、ハッキリわからう筈はないと思ひます。今の都會といふものは、すべて多くの人間の偶然の集合でありまして、一つに纏まつて活きた生命といふものが見られません。殊に人口三百萬餘（接續町村を併せて）の東京に於いてさうであります。たとへばこゝに一つの東京風といふものを見出さうとしても、下町は下町、山の手は山の手と、趣味も高尚もスッカリ異つてゐて、どれが東京風やらわかりません。昔しの江戸風といふやうなものを探したら、或はまだ生き殘つてゐる少數の人や、傳統的又は感情的にそれを慕ふ人々の上に、多少其のにほひを嗅ぐことが出來るかも知れませんけれど、新らしく統一され渾成された東京風といふものは見當りません。いや見當らないといふよりも、これが東京を代表する一つの風俗だとして指定することが出來ないのです。東京人はさすが日本の他の多くの都會人よりも半世紀ぐらゐは、思想なり文化なりに於いて進歩してゐると言つても、それは知識階級だけの話で、下町の商人なぞに就いて見れば、大阪あたりの町人と格別の相違もなく、たゞ言葉や態度に氣が利いた點が見えるといふに過ぎないのでありませう。しかし田舍に三年もゐれば、いゝ加減馬鹿になるといふのも、畢竟東京は文化の中心で、何んと言つても知識階級に屬する人が多いからでありませう。有名な大雜誌や有名な著書は皆東京から發行されますし、よしや他の都會から發行しても、雜誌ならば本社同樣の編輯所を東京に置かなければならぬ。去年の震災直後に於てさへ、全國の活版印刷所の印刷力を合はせても、東京の燒け殘つた活版所の印刷力の半分

に足らぬといふことでありましたから、この一事を以つてするも、東京が文化の中心、知識階級の本據といふ地位は動きません。また其の富力を以つてすれば、震災前に於いて八十五億餘圓を算し、大阪の富力四十七億餘圓に比し、殆ど倍でありました。震災後は三十四億餘圓に減じましたけれど、復興計畫の進むとゝもに著しい回復を示し、震災後の去る一月から七月までの手形交換高が百六十六億圓で、大阪の百五十二億圓に比べると既に十四億圓を拔いてゐます。(震災前の同期間では大阪よりも殆んど九十億圓を拔いてゐました)即ち東京の富力は數年ならずして、震災前のとほり日本の各都市の上に高く嶄然として聳ゆることであらうと思はれます。

まるで縁のない話をもち込んで來たやうでありますが、流行の中心となり風俗の源泉となる根柢の力は、やはり文化の力、經濟の力で、どうしても東京が日本を代表して、パリと言へばフランスといふのと同様、ロンドンと言へば英國といふのと同様、東京と言へば日本といふ意味に世界へ響いてゐますから、東京風俗即ち日本風俗、東京語即ち日本の標準語で、『おまへんさかい』では日本を代表することにならないのであります。殊に東京といふところは不思議に人口の殖える都會で、全國各都市の平均増加率の四倍に當つてゐると、或る統計家は報告してゐます。

そこで、地方の婦人が東京へ移住したとしますと、成るたけ早く其の地方色を消さうとして、言葉も氣を付けるし、着物も東京風に仕立てかへ、(たとへば大阪の女が其の短かい袖を東京へ來て長くするの類)一生懸命に、生え拔きの東京人に見せかけやうとする中にはわざと田舍言葉を使つたり、また田舍言葉を拔からうともしないで、平氣でやつてゐる人がないでもありませんが、先づ十中の七八は、前に言つたやうに、田舍者のくせにして、東京人がりたがる。これに反し東京の人が大阪なり京都なり、また其の他の地方へ行くとすると、自分は東京人だぞ、といふことを誇りにして、風俗も言葉も東京に居た時よりは、一そう東京式に見えるやうに注意するといふ風ですから、地方へ行つて東京から來てゐる女の東京色を發見するのはやさしいが、東京の女の中に地方色を探らうとするのは、たか〳〵むづかしいのであります。

そこで先づ、大阪から來てゐる女性を東京人の間に求めるならば、純大阪式でまだ東京の色に染まぬ人は別とし、いかにも東京人らしくなかつた人に就いて見ると、ほかはとにかく、其の履物の粗末といふことが、外形に見える一つの特色で、いくら東京風に裝ふてみたとて、履物へ思ひ切つた金を

かけるといふことは、大抵の大阪人の決してしないことである。もちろん東京人の中にさへ、浴衣を着て足袋を穿くやうなものゝある世の中でありますから、東京人にも安下駄を穿く人はあるでせうが、大體に於て、服裝に釣り合はぬ粗末な下駄を穿いてゐる女があつたとしたら、大阪地方の女性と見て大差はない。それから服裝の何んとなくこツてりして、縞でも模樣でも複雜を喜ぶこと、これも大阪式女性の特色で、ちよツと例を引けば、九條武子といふやうな人の服裝、或は樣子に、京阪の特色を見ることが出來ます。それから精神的、內面的に言ふならば、一體に經濟的觀念の緻密なこと、世帶もちの上手なこと、着物を大事にすること、どことなく深刻に、外柔內剛であることなどが、大阪の女性の特性で東京へ來て東京人になり切つてゐても、大阪生れの人にはこの傾向があります。東京の女性は、假令雨に遭つても、瘦せ我慢に着物の濡れぬのを厭はぬ風を裝ひ、助六の芝居に見る揚卷の如く、萬金を費した裲襠の袂を天水桶へぢやぶツと浸して、みえを張るといふやうなところがありますけれど、大阪ではそんなのを阿呆とし、俄雨に遭へば、先づ風呂敷なり手拭なりで帶の結んだところを覆ふといふほどの心掛けのある娘でなければ、緣談の口も遠い。東京へ來てゐても、大阪の女性には先づざツとかうした色が見えます。

AとBとの對話

――地方色の渦巻く東京の女性――

南部修太郎

A　今、課題は「都會の女性に見る地方色」つて云ふんだがね。

B　さうか。然し「都會の」つて云ふだけぢや少し漠然とし過ぎる。「東京に住んでゐる」と云ふ風に限つちやいけないかな?

A　別に差支ないサ。

B　だが、それにしてもこりやちつと難題だよ。なぜつて、今の東京には統一された、まとまりのある都會らしい色合、氣分、雰圍氣なんか殆どないからね。云ひ換へれば、東京は錯雜多樣な地方色が集り、離れ合つてゐる、感じの實にプロゼイツクな都會だ。つまり都會らしい都會色もないと同時に、その散漫な、落ち着きのない環境に感化され、融合して、はいつて來た地方らしい地方色も純粹さ、特異さを喪つてしまふ。だから、都會としてのまとまつた感じを掴み出す事が出來ない一面には、またはつきりした地方色を識別する事も不可能なんだ。

A　なるほど、そりや同感だ。然し、さう云ふ傾向は敢へて東京ばかりとは限るまい。資本主義の片輪な發達と、交通機關の都會集中から、地方人は爭つてそれぞれの都會眼がけて集まつてくる。自然、都會の中に種々樣々な地方色が持ちこまれる。そして、固有の都會色と、新來の地方色とがこんがらかつて、一向都會らしくない、變に散漫な色合、氣分、雰圍氣が出來上る。つまり都會の一種の地方化は所謂誤まれる近代文明の產物かな?

B　處がね、同じ大都會でも大阪や京都にはまだまだ統一されたまとまりのある都會色があるが、東京は甚しくさうぢやない。おまけに去年の震火災が東京の都會らしい都會色の本場だつた下町を跡方もなく燒き壞してしまつたので、今ではそれが一そう露骨になつたやうに思へるよ。

A　そりや確にさうだね。

B　さあ、そこでその結果はさ。自然、東京に住んでゐる女性の上にも現れて來た。云はば、僕等が好み、且つ懷しんでゐた嘗ての東京風の女性、つまり詞附きや服裝や容姿ばかりではなく、性格や氣質の內にまで持つてゐた、意氣、澁味、粹、濶達、淸楚、恬淡など云ふ特色は殆ど喪はれてしまつたのだ。無論そこには西洋文化の影響もあるが、根本的には非常な勢で入りこんで來た種々樣々な地方色がそれ等を奪ひ、或はかき濁してしまつたに違ひないのだ。そして、更にをかしい事は、今、東京に住んでゐる女性でその西洋文化にひたすらに心醉して、怪しげな洋裝を試みたり、詞に外國語を挾んだり、西洋まがひの生活を營んだりしてゐるのは、僕の觀察によれば、東京に生れ、東

京に育つた女性では決してなく、いづれも變に東京かぶれのした地方に生れ、地方に育つた女性である事だ。

A　はははは、そりやうがち得てゐる。

B　處で、試みにたつた五分でも好いから、銀座通の一角に立つて、眼の前を往き來する女性を觀察して見給へ　服裝、容姿、詞附などの外面だけの觀察でも結構だが、注意して見れば見るほど、その無統一、まとまりなさ、得手勝手さ、新式舊式、奇拔平凡、その錯雜多樣に至つてはまるで百鬼夜行の觀がある。

A　過渡期の亂脈かな？

B　いや、それ以上だ。過渡期と云へば新舊の對立する中間の混亂を意味するのだが、新舊の對立などと云ふはつきりしたものはまるでない。すべてが亂脈以上の亂脈さぢやないか。つまりその原因は新でもなく舊でもない錯雜多樣な地方色の齎す攪亂にあると思ふね。

A　なるほど。それで……。

B　まあ待ち給へ。とにかくそんな譯だから、地方からたつた今上野なり東京驛なりへ着いたと云ふ女性なら、そこに割合純粹な、特異な地方色を發揮してゐるかも知れないんだ。例へば、東北の女性ならズウズウ辯だとか、關西なら服裝の趣味が妙に派手だとか、秋田なら肌が白く綺麗で長崎なら皮膚がブルウネツトだとか、伊豆なら情熱的で、名兒屋なら冷靜だとか、岡山なら狡猾なくらいに利口で、鹿兒島なら魯鈍なくらゐに正直だとか、信州なら見榮坊で、雲州なら義理堅いとか、まあさう云つた風であるに違ひない。處が、さう云ふ女性が家庭の婦人となり、女學生となり、或は職業婦人となつて暫く東京に住み續ける。すると、もともと女性は環境に感化され易く、周圍の模倣に巧みだ。だから、日に日に今まで持つてゐた地方色の特異さ、純粹さを濁らされ、或は馴はされて、いつとなく生粹な東京でもない東京色に混合、いや化合してしまふんだ。

A　なるほど。然し、逆に東京の女性が地方へ住んでも、そりや……。

B　おんなじだと云ふのかい？

A　さうだ。

B　處がね。非難する人は東京の人間には執着力がないとか、輕佻だとか云ふけれど、さう云ふ色合とか。氣分だとか云ふ點ぢや。東京の人間は割に執着的で、潔癖で、且つ自己の上に東京の人間だと云ふ矜持を備へてゐる。で、地方に感化されるよりも、寧ろ地方を感化する。つまり東京に生

れ、東京に育つた女性が、地方に生れ、地方に育つた女性のやうに生半可な西洋文化に心醉して、いかものゝ文化風などに陷らない根本の理由は、そこにあると思ふ。それが好いか惡いかは別問題にして、無格好な洋裝姿で路上を行く女性、赤瓦の安直な所謂文化住宅に住む女性、或は耳隱しに口紅毒々しく、厚化粧の高い頰骨を桃色に染め、こつちが氣恥しくなるやうな、色彩の刺戟的な、派手以上の身なりをしてゐる女性或は所謂新思想家なる、所謂婦人運動の首唱者なる女性、それ等は疑ひもなく一種の地方色の誤り現れた地方に生れ、地方に育つた女性に違ひないんだ。

A　だが、さうだとすると、生えぬきの東京の女性は……。

B　さうだ。存外、さう云ふ點ぢや保守的だよ。然し、不幸にして時勢は非理なり、贏ち難しさ、さう云ふ女性が廢い東京のあの百餘萬の女性の中に、さて幾人ゐるだらうな？

A　さあ、銀座通に三十分も立つてゐて二人か三人見つけられゝば、運の好い方かも知れないな。

B　その通りだ。云はゞ、今の東京の女性では都會色の中に地方色を見ようとするよりも、地方色の中に都會色を見ようとする方がよつぽど骨が折れる。而も、その特異さ、その純粹さを喪ひ、或は濁らされてゐる處の、錯雜多樣な、得體の知れない地方色が東京に住んでゐる女性の上に渦卷いてゐるのさ。

AとB　相顧みて詞もなく微笑を洩らし合ふ。

──一三・九・二九──

信濃の女

窪田空穂

文藝協會の第一回の試演が大久保の試演場にあつた時でした。私は脚本が「人形の家」だといふことを、俳優には東儀、土居といふやうな人がゐるといふことを知つてゐる程度の智識だけで、さういふところへ行くとしてな甚だ申譯のな

い準備をもつて入つたのでした。

幕があがると、一人の若い女性が、いふまでもなくノラですが、つかくと舞臺の上へあらはれて來ました。それを見た瞬間です、そのノラに扮した女性が、まだ臺詞の一言もいはないうちに、「信州女のやうだ」といふ感じが閃くやうに私の胸へ起りました。

何故と問はれたら私は答へるに困つたでせう。しかしまるきり答へる言葉のなかつた譯ではありません。その厚ぼつたい體の恰好、押の强さうな表情、圖々しいといつてはちがひます、所信に向つて眼をすゑて詰め寄せてゆく、いはば戀する處女の持つ押しの强さといつたやうな表情とが、私にさうした感じを起させたのだと云へば云へます。

ノラに扮したその女性が、松井須磨子といつて信州の松代の人だといふことを私は後になつて聞きました。その時私は、自分の直覺のまちがはなかつたことを誇るよりも、「さうだらう、信州女でないとあゝした感じを與へる女はない」と今一度思つたのでした。

信濃で生まれた私は、近親のうちにも大勢の女性があつて、見るともなく見てゐるうちに、いつか一つの型を見出してゐました。松井須磨子の第一印象は、その型に極めて近かつたのです。

松井須磨子の自殺をした時には、その原因について雜多なことが新聞雜誌で報道された。しかし私は注意してはその一つをも讀まうとしなかつた。それは須磨子をよく知つてゐた人から簡單な話で、私はもう滿足してゐたからでした。それは須磨子は、その職業柄にも似ず、節儉といふよりも吝の方で、十錢銀貨一つでも大事にしてゐた。しかし死ぬ時には、かなり纏まつた遺産について、一行の遺言書も書いてはなかつたといふことです。その話に何の程度の確實があるのかは知らないが、私は確實なことだらうと思つた。そしていかにも信州女らしいと思ひました。私のさう思つたうちには、須磨子は死ななくつてはならないやうな困つた事情はなかつたといふこと、何もかもいやになつてしまつたこと、いやになつたと云つて投げ出す時には、命も一しよに投げ出さなくては氣が濟まないこと、この三つが含まつてゐるのでした。その人の話は私を直ぐにかうした結論に導きました。須磨子の場合は異常ですが、私の觀てゐる信州の女には、さうしたところがかなり濃厚にあるからです。

松本の女子師範で學んだ若い女性が、寄宿舍のなかの空氣を話して聞かせました。

何んな雜誌を讀むかといふ問ひに對して、その人は言下に答へました。寄宿舍にはあらゆる種類の雜誌が入るが、謂はゆる婦人雜誌は一種も見かけないといふのです。女子師範の學生の興味をもつて讀むのは、一に思想問題なのです。

その人は續けて話しました。松本へは多くの講演者が來る。その度び每に女子師範の學生は、敎師に引率されて聽きにゆく。そしてその翌日は、敎師に昨日の講演の批評をもとめる。時には敎師の批評に對して生徒の批評があつて、一種の討論會のやうになつてしまふことがあるとのことです。

その話を聞いた時、私は自分の知つてゐる信州の女が、今何ういふ方に向つて進みつゝゐるかを敎へられたやうな氣がしました。

私は自分の近親のあひだの信州の女について、一つ二つの小さな見聞を云つてこの小感を結びませう。

これは私に最も關係の深かつた若い母親の上に見たことです。その人は初めて母親になると共に極度の貧血症に罹りました。醫師は、この體で子供に乳をやるといふことは危險極まることだ、絕對にやめなくてはいけないと命じました。しかし子供を愛してゐるその母親は、醫師のいふことを聞かうとしなかつた。子供には母親の乳が一等いゝはずだ、見す見す出る乳をやらないたんて、そんな事が出來るものですかと、靜かに云ひました。

最近に私は後妻として結婚した若い女性のことを聞きました。夫の人は六人の子供を持つてゐます、異母弟妹も持つてゐます。血の關係のない祖母を持つてゐます。無論みんな一しよにゐるのです。東京に住んでゐる私は、後妻はゐるまいと云つてゐました。もとめると直ぐにあつたのです。何んな人かと見て來た人に聞くと、綺麗な、健康さうな、よささうな人だと聞せました。

信州の女は、他國の人が戀人とするには不適當かも知れない、一しよに面白く遊ぶといふことは知らないやうだから。しかし妻には適してゐる、信じて一家を托すに足りるから。妻として小さな意味に於ける非難があつたとしても、もし夫が世に居なくなるやうなことが起つた場合には、多分、必ず非難のない生活をするらしく思はれます。

信州の男は廣い世間に出て、その本來持つてゐた美質を磨り減らされてゐるかも知れないが、女の方は、本來のものをそのまゝに持ち傳へてゐるのではないかと私には思はれます。

國風

宇野浩二

今更、ローカル・カラアなんて古い題目だね。何故といつたつて、ローカル・カラアなんて、世の中が進むと共に、次第に影を薄くして行くものぢやないか。たとへば、君のいふ、都市の婦人に見られるローカル・カラアなどといつても、早い話が、婦人の髪だ、今日はもう東京はおろか、三百里離れた下の關へ行つても、反對に又三百里離れた北海道の都市へ行つても、若い女の髪といへば、所謂七三とか、耳隱しとか、その他西洋流の髪に定つてゐる。その流行が明日別のものに變れば、一ケ月か、半月かもしれないうちに、忽ち北海道から長崎まで普遍されてしまふ、といつたやうな譯ぢやないか。

つまり、國風といつたやうなものはだんだんなくなつて行くよ。昔は、どこの國へ行くと、山の女が頭の上にいろんな山の産物を載せて、町へ賣りに來るとか、どこの國へ行くと、女といふ女はみんなかたんことんと機を織つてゐるとか、どこそこへ行くと男がみんな女の仕事をして、女がみんな男の仕事をしてゐるとか、いつて珍しがつたものだが、今日のやうに交通が開けたり、教育が普及したり、さては君等のやつてゐるやうな雜誌が繁昌したりする結果、どの國の女もこの國の女も大抵一樣になつてしまふ、やれ毛糸の編物だとか、やれ佛蘭西刺繡だとか、さては婦人洋服だとか、……。この流儀で進むと、八瀬大原の女も、宇治の茶摘の女も、早晩辛うじて繪だけに姿を止めるやうなことになるだらう。

中學の終りの頃に、僕は脚氣をわづらつて、奈良驛にあつた親戚の家に二三ケ月養生に行つたことがあるが、そこで散歩に村から村を歩いてゐると、どんな家からも例のかたんことんといふ機織の音のしない家がない位だつた。まつたく、どこの村でも「かたんことん、かたんことん」と、まるで申し合はして合奏でもやつて居るやうだつた。時々、往來から

近いところでやつてゐるのを覗いて見ると、中には七八歳位の女の子がやつてゐるのもあるし、五十六十位の老人がやつてゐるのもあるし、――もつとも八分通りは若い娘の仕事のやうであつたが、無論、それ等の大部分は無言の代りに、それ〲唄をうたつてゐた。中々鄙びた景色であつた。が聞いて見ると、最近は大和中を探してももうそんな家は一軒もないさうである、それはいふ迄もなく、機械工業が發達したために、そんな悠暢な仕事は入らなくなつたからでうあら。無論、これは獨り大和の國だけの話でなく、方々の織物の出る國での同じ經驗に違ひない。今は娘たちはみな工場へ行くのだらう。

だから君、今は婦人を國で別けたりなんかするより、職業とか、階級とかで別けた方が便利でもあり、當世でもあるだらう。ローカル、カラーなんて、ひどく「女性改造」らしくないぢやないか。

もつとも、それより一層古い見方かも知れないが、そんな風俗とか、習慣とかで特色づけないで、もつとも、これもローカル・カラーの一つには違ひないが、國に依つて、性質とか、容貌とかで分ける方法はちよつと面白いと思ふ。つまりよくいふ、どこそこの國は美人系だとか、どこそこの人間は意地が惡いとかいふ類の話であるが、それを美人とか、意地惡とかいふより、もう少く細かく觀察したものが面白いと思ふ。それに、もし顏とか、性質とかゞ、風俗とか習慣などと同じやうに、それ〲の國に依つて特色をなしてゐるとしたら、この方は世の中の進歩につれて、風俗や習慣が變化するよりも、ずつと足が遲いだらう。

そして、この事實は多少あるやうである。僕は子供の頃大阪で育つたが、よく祖母などが人の顏を見て、あの人は大和顏だとか、なる程河内顏だとかいふのを聞いた。今はこんな事を人がいふのを聞かなくなつたがそんな愚かしいことをいふ人間がゐなくなつたのか、それとも、これも交通などが開けたお蔭で大和も河内も、今迄のやうに、同じ國同志のものが結婚することが少くなつて、大いに他國の人たちと緣組するやうになつたので、人は皆合の子になつたのであらうか。

同じやうな見方で、一二年前僕は「信濃の國の顏」といふ隨筆を書いたことがある。あゝ、君は讀みましたか、あの復習をこゝですることを許してもらはう。といふのは、四五年前、信州で僕が知つた或女がある、その後信州へ旅して行く毎に、方々でその女によく似た女を見出す、それは僕がその最初の女に戀してゐたからといふためばかりでなく、ま

つたくよく似てゐると思へてならないのである、戀してゐるために似てゐると思ふのなら、その似てゐる女たちに美を見出す筈だが、殘念ながら、信州は美人國ではないから、彼女に似た女といつても、いつも不美人ばかりだつた。ところで、それが信州ばかりでなく、東京の町の中でゞも、或は味噌屋といふ看板の出てゐる味噌屋のお上さんとか、或は博覽會の長野縣の賣店の店番をしてゐた女とかに、矢張同じ顔型の顔を見出した、とかういふ話である。

もつと外の國の女を知らないかつて？　僕はそんなに方々の國を知らない、至つて見聞は淺い方だから。これで、旅行なぞ、してゐるやうで、あんまりしてゐない方だ。三保？――三保は知つてゐるが、特に三保の女なんてものは知らない。もつともあそこの名は多少の特徴がないではない。といふのは、いつかも話したが、あそこでは、村の中の男子の半分以上、殆ど三分の二まで亞米利加へ出稼ぎに出つてゐるものだから、主に女が田畑の仕事をしてゐる、無論、男の數より女の數の方がずつと多い。女の働く國――例へば、前にいつた大和とか、或は上州とか、信州とかでは、得てして女が威張つてゐる傾きがある、といふのはどんなによく働く男の百姓よりも、機織りとか養蠶とかの仕事をする女の方が遙かに收入が多い、自然どこの家でも女の子の方が喜ばれる、そして出來るだけ長く家に置いて、嫁に出さない、といつた風がある。が、三保の場合ではいくら女が働いても、海外へ出稼ぎに行つてゐる男にはかなはないし、それに、外國に行つてゐる男と、國に殘つてゐる娘たちとが、寫眞でどん／＼結婚して、夫の顔も知らないうちに、留守の夫の家へ嫁入つて行くといふやうな習慣がある、中に夫を慕つて自分も渡米するものもあるが、大體は國に殘つてゐるやうであるが、當然、彼女等は男を尊敬してゐるやうである。が、これも日本人が排斥されてゐる今日では、昔話になつてしまつたことだらう。と、こんな話ではあんまりローカル・カラーも出來ないな。もう止めようか。

短篇小說懸賞募集

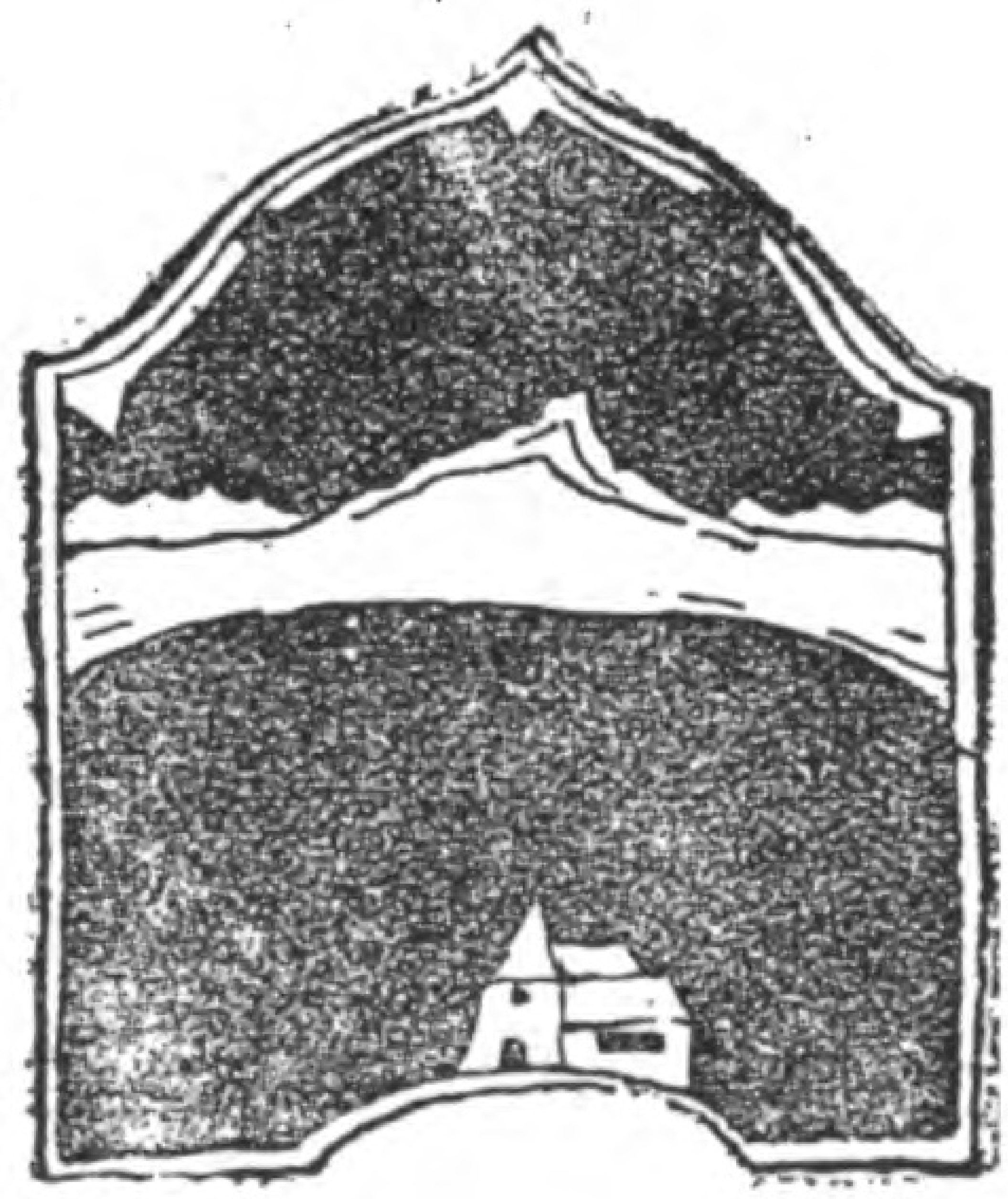
本誌は現文壇の重鎭島崎藤村氏に選評をお願ひして、毎號左の規定に依り短篇小說を募集してゐますから、皆樣は奮つて自由な眞劍な作品を御投稿下さい。

規定

一、一篇の長さは四百字詰原稿用紙三十枚以内に限ります。
一、毎月末日を以てメ切日と定めます。（今回のメ切は十月末日で、發表は十二月號の誌上でいたします。）
一、入選作に對しては參拾圓以上百圓迄の稿料をお贈りします。
一、作所姓名を明記して下さい。（但し應募者は女性に限ります。）
一、應募原稿は一切返却いたしません。

宛名は　東京市芝區愛宕下町一ノ一　改造社

女性改造編輯部



春香傳（續）

―廣寒樓記―

呂圭亭作
中西伊之助譯述

（五）梅花滿枝空斷腸

一

李鈴は、黄蝶のやうな蓮翹の咲いた庭を前にして、思ふともなくもの思ひに耽つてゐた。

春香と、あの廣寒樓の月の夕べに別れてから　もう三年は過ぎ去つた。そして彼女よりの、血に滲んだやうな切ない思ひを書きつらねた手紙は、彼の書を讀む窓に、雨のやうに音づれた。彼は、彼女を思ふことが深ければ深いだけ、彼の學文にたいする熱心も深かつた。彼は、彼女を愛すれば愛するだけ、それだけ學文を愛した。彼は、二人の戀を遂げる途は、自分の學文を大成させることであると考へた。

彼は、今年の科學に應じて、優秀の成績で及第した。春香を思ふ彼の心が、彼にさうした結果を生ましめたのである。

彼は、吏胥（主管の官廳）から、その通知を受けると、欣然として、父の翰林の前に出た。

『お父さま、いよいよ文科に及第いたしました。』

『うむ、それは目出度いことぢや。そのうちに、陛下より御任官になることぢやらうから、愼んで待つてゐるがいゝ』

翰林は、秀才をわが子に持つた幸福に、誇やかしくほゝ笑んだ。が、鈴は、その父の微笑よりも、この報らせを受けた、春香の歡びを想像すると、息窒るやうに胸を躍らせた。彼は、

自分の房へかへると、春香へ送るために、書箋を展べて細々と、及第の模樣を認めた。

いづれ近いうちに、國王陛下より御任官があるだらうから、それをたのしみに待つてゐよと云ふ、父の言葉さへ、手紙の中に書き入れた。

その手紙を、南原に送つてから、もう月餘にもなつたが、春香からは、なんの返事もなかつた。………

李鈴は、その間に、國王陛下より、副修撰に任命された。しかし、鈴の若い血は、躍らなかつた。彼は、春香なくしては、王侯の位も望ましくはなかつたのである。

彼は思つた。春香は、たとひ處女であるにしても、その母は、妓生である。彼女には、妓生の血が通つてゐるのだ。去るものは日々に疎しと云ふ譬の通り、いつしか彼女は自分を忘れてしまつて、他の男に心を寄せたのであらう。意外の三更、細雨は冷たい涙となつて、たのじかつた往時を偲ぶのであつた。………

二

青春の感激を忘れてしまつた李鈴は、今日も自分の書齋に、憂鬱な顏をして閉ぢこもつてゐた。とそこへ、彼にたいして、宮中から御召の使が來た。

彼は、心ならずも、勅令ときいて、衣服をあらためて、參内した。新しい副修撰の朝服は、いかに若い李鈴にはふさはしい姿であつたか。然し彼れのそのきらびやかな姿も胸に春香なくしては、あまりに佗しかつた。

陛下は、鈴を近く召された。

李鈴にたいする優諚はかうであつた。

宮闕は雲深くして、四海の事、漠然たる憾みがある。朕は、深く人民の疾苦を憂慮するあまり、ここに暗行御史を任命して、各道へ差遣することゝした。汝は年少氣鋭未だ世俗の汚濁に染まない。朕は汝に命じて全羅道の暗行御史に任ずる。是より速かに朕の命を奉じ、全羅道を限なく巡視せよ、そして守令方伯の治績を探り、百姓の寃を聽き、孝子節婦を發見し、朕が破邪顯正の大政を行ふ道を開けよ。

李鈴は、この優渥なる大命に感憤した。今はもう一婦女子のために心事を勞してゐる秋ではないと覺つた。彼はかしこみて御前を辭して邸に歸つた。

父の翰林は、國王殿下が、あまりの大任を、わが子に下し給ふたのに驚いた。翰林は熱誠をもつて王命に答へ奉る道を、鈴に說いた。

名譽ある馬牌を奉持して、多數の驛吏驛卒を引き具して、

李鈴は邸を出た。彼はもう春香のことを、すつかり忘れてしまひたかつた。彼女については何事も考へたくはなかつた。それを考へることは、彼の悩みでもあり、呪でもあつた。が、彼が彼女を忘れようとすればするほど、彼女の面影が、彼を苦しませた。

廣寒樓は、云ふまでもなく全羅道南原郡にあつた。彼の馬首は、知らず識らずに、その方へ向つて行つた。彼の一行が恩津郡に到つた時、李鈴は部下のものを集めて云つた。

『予は今汝等に申し聴かせる。吾々の行列はこゝで解いて、これより各自の任務に就かねばならない。予はこゝより全州任實、淳昌、潭陽、雲峰の各部を、暗行して、南原郡に入ることゝする。汝等は夫々命ぜられた各郡を詳かに檢察しなければならない』

若い臉を輝かした李御史は、朗らかな聲で命令した。

『そこで、予はその檢察について、汝等に一場の訓示を與へる。汝等のよく心得ねばならないことは、決して流言蜚語のために事を斷じてはならないといふことである。いかなる人間から、いかなることを聴いても、汝等が實地に確かめない限りは、斷じてその事を信じてはならぬといふことである。暗行御史の任務を正しく遂行するのには、この一事を飽くまで忘れてはならぬ……』

鈴は、父の翰林から、家を出る時に說きかされた言葉を部下のものへくりかへした。

『その一事をしつかりと腹に藏めて置いて、それから汝等が檢察すべき事柄は、貪官虐民の如き不法をなすもの、苛斂誅求の悪政を行ふもの、不忠不孝の行ひあるもの、他人を中傷誹謗するもの、老長を凌辱するもの、人を傷け又は之れを殺し秘するもの、國穀を横領するもの、人の妻を姦するもの、人の墳墓を掘るもの、一定の職業なきもの等、恐く調べ出せ。また、之れ等條々に反したる善政、善行あるものを悉く發見して、決して遺洩のないやうにせよ。予は本月十五日正午、廣寒樓に待つてゐるから、それまでに同所へ來い……』

鈴は、これだけのことを申渡すと、自分は輿から降りて、汚い乞食の姿に變裝した。そしてぶらりと行つてしまつた。白雲悠々、彼の姿は、もうどこにも見えなかつた。

三

暗行御史の任命があつたことは全國に知れわたつた。全羅道の府使たちは、俄かに色を失つて、庶政の改善に力をつくした。收穫收米等の制度方法を、一夜のうちに改廢したりした。

鈴は、浮浪者のやうに、各部をめぐり歩いた。そして與さ

に民情を探索した。彼は、いよいよこれから、思ひ出の多い南原郡に入らうとして、ある松原にさしかゝつた。と、向ふから、一人の若者が、歌を歌ひながらやつて來た。その歌の詞が、鈴に耳に聽えると、彼は、凝つと、その若者を見た。歌の意味は、府使の暴虐を罵つて、節操を死守してゐる美人の貞烈を褒めたものであつた。鈴が相手に近づいて行くと、相手は歌をやめた。そして乞食が自分に近寄つて來るのを氣味惡さうにして、ぺつと一つ唾を吐いた。

『え？汚ねえ、なんだつてそんなに俺に近寄るんだい、俺は急しい用事があるんだ。それにお錢なんか出ねえぞ。』

『いえ、わたしはお錢を貰ふといふのぢやありません。ちよつとあなたにおたづねしたいことがあるんですが……』

『なんだ、乞食の癖におたづねしたいことがある？　生意氣を云ふな』

『あの只今あなたがお歌ひになつてゐた歌は、あれはどこから流行つて來たものでございますか、それをおきゝしたいので……』

『どこから流行つて來てもいゝぢやないか、乞食なんぞがそんなことをきいてどうするのだ』

『ところがわしにはそれが非常に必要なんです。ぜひ一つ聽かせて下さい』

『お前はへんな乞食だね。お錢にはいらねえが歌をきゝてえつてのは、少し變つてゐるな』

『えゝ、わしは歌さへきいてゐれば飯は食はなくても生きて行かれる人間なんです。時に今の歌ですが……』

『今の歌は南原郡で流行つてゐるのだ。』

『へえ、南原郡で流行つてゐる？　それはちよつと耳寄りな話ですが、どう云ふわけでそんな歌が流行つてゐるんでせうね……』

『五月蠅え乞食だな、俺はこれから京城まで行かなければならんのだ、京城まではまだ十里もあるんだ。さあどいた、どいた。』

『それではわしもこれから京城の方へ一緒にまゐりませう、あなたは京城のどこへ行かれるのですか』

『やあ、こいついよ〳〵五月蠅え乞食だ。しかし行く先だけは云つてやらう、びつくりして尻餅をつくな。俺は京城三清洞の李翰林さまのお邸へ手紙を持つて行くのだ』

『へえ、そいつあ面白い……』

『なにが面白い。この乞食は狂人だな』

『いや、氣だけは確かです。そこでその手紙をちよつと見せ

てくれませんか』
『やい、やい、この狂人乞食め、何をぬかすのだ。李翰林さまは同副承旨と云ふたいしたお身分の方だ。その方へ差上げるたいせつのお手紙だ。手前たちにそのお手紙を見せられるものかい、この罰あたりめが』
『兄貴、さうまあ偉さうなことを云ふな、いくら李翰林さまでも神さまぢやあるまい、やつぱり人間だらう、人間の手紙を人間が見たつて罰の當る筈はないよ』
『この乞食はよく理屈を云ふね、お前がどんなことを云つても、この手紙は見せられねえ』
『ふん、ぢや仕方がない、わしはその手紙を見ないことにする。しかしね兄貴、わしはその手紙が、だれから出たものだか當てて見ようか』
『なにだれから出たものか當てて見る……』
『さうぢや』
『手前は妙なことを云ふ乞食ぢやな、面白い、ぢや當てて見ろ』
『兄貴は南原郡から來たのだね』
『さうよ、それは今云つた通りだ』
『それではその手紙はね』
『うむ、たれからぢや』
『南原郡の春香からだらう……』
『おや こいつあ當つたぞ、――しかし、少し違ふ』
『どう違ふ』
『春香の家からは出たものぢやが、――この手紙は、母の月梅から出たものぢや』
『うむ、では春香はどうしたのか、病氣にかゝつて死んだのか、それとも嫁入つたのか、嫁入つたのなら、俺に手紙を送る筈はないが。……』
李鈴は、激つと唇を咬んで、眉をひそめた。そのどことなく威厳の溢れた颯爽たる姿は、乞食のやうではなかつた。使の若者は、怪訝な顔をして鈴の顔を見いつてゐたが、まだ腑に落ちないといふ容子を見せながら、それでも、恐る恐るきいた。
『あのお乞食さま、あなたは若しや、李鈴さまではござりませんか……』
『あゝ何を云ふのだ朴泰成』李鈴は、氣づかはしげにあたりを見廻した。

四

月梅から、李鈴へ當てた手紙は房子の朴泰成から渡された。彼は慄える手で、その手紙の封を切つた。中には、春香の近状が、詳かに書いて、新府使の、恐ろしい暴虐が、血のやうな文字で綴られてあつた。鈴は、その手紙を讀み終ると、きりきりと眦を裂いて、南原の空を殺つと睨んだ。

『憎むべき奴だ、きつと成敗してやるぞ』
鈴の全身の血は、焔のやうに燃えた。
彼は、今はつきりと、春香が解つた。彼女が、彼の胸にはつきりと映つた。彼が彼女に自分の科學に及第した悦びを傳へてやつた時には、彼女はもうある暴戻な卞府使の手に下つて、牢獄の慘苦を嘗めてゐたのだ！
鈴は、この月餘の間の、春香にたいする激しい惱みは、慱して、卞府使にたいする憎惡と變つた。人倫を壞亂して、飽くまでも獸慾を遂げようとする卞府使は、政道を紊る最大の罪人であると彼は思つた。
『若さま、あの卞府使が南原郡に來られてからは、人民は塗炭の苦しみでございます。そして前の李翰林さまのお慈悲深いお政治を今更らながらなつかしく思ひまして、一日だつてみんなの口にのぼらない日はないのでございます。』
朴は、かう云つて眼に涙さへ浮べてゐた。
『若さま、早くどうか南原郡においで下さいまして、あの可哀想な春香さまを助けてあげて下さい』
朴はかう云つて、またつくづくと鈴の姿をながめながら云つた。
『若さま、あなたは、この頃噂の高い暗行御史におなり遊ばしたのではございませんか……』
『は、は、は、お前は何を云つてゐるのだ、お前はなにか思ひ違ひをしてゐるな、俺が暗行御史のやうな偉いものに出世をしてゐたらどうしてこんなに心配するものかい――』
鈴は困つたと思つた。
『いゝえ若さま、そんなにおかくしなすつても、私にはちやんと判つてゐます。私はもうこれで十年以上も郡衙に勤めてゐるのですもの、……』
朴は、なかなか胡魔化されないと云ふやうな顔をした。
『若さま、どうも結構なことです。さうしてあなたが御史さまに出世遊ばして、南原郡にお乘り込みになれば、あの憎い卞府使は、きつとひどい目に會ひませうね……』
朴は、ひとりで悅に入つた。鈴は、これには手がつけられなかつた。そこで、彼は一策を案じて、手紙を書いた。
『朴、この手紙を雲峰郡の府使の邸へ屆けてくれないか』
『はい、はい、若さまの御用ならば、何事でもいたします』
朴は、その手紙が春香を救ひ出すためだと思つて、鈴と別れて、急いで雲峰郡にかけつけた。府使はそれを見ると、使令を呼んだ。
『この房子をすぐ牢へ入れろ――しかし、別に惡事を働いたと云ふ譯でないのだから、あんまりひどい目に會はすなよ食事などは旨いものを食はせてやるがいゝぞ』
朴は、府使の言葉をきいておやおやと驚いた。が、それで李鈴が、全く暗行御史であつたことに氣がつくと却つて喜んだ。

老人から若者へ

千家元麿

老人から若者へ

昨日はあんなに元氣だつた若者が
今日はすつかり元氣が無い
何か理由があるに違ひない
愛人に反かれたのか
親の遺産を受けたくなつたのか
氣にかゝる面の憂ひ
可哀相な若者よ
もう苦勞がおまへの若さを曇らし初めたのか
元氣なれ、若者よ
氣を滅入らせて惡い量見にとりつかれるな

俺だつて若い盛りには
もう此の世に身の置き場がないと思ひ詰めたものだが
今ではこの通り元氣で丈夫で
子供の四五人もある快活なおやぢだ。
辛抱せよ、若者よ
廣い世界に女は他にいくらだつてある
こんなおやぢの忠告も
今は腹が立つ程不誠實にきこえるだらうが
それも一時だ。
辛抱だ。辛抱だ
樂しみもあり苦るしみもあり
それで人生が強い人にとつては
一番生き甲斐のあるところとなるのだ。

（九、一六）

小景

赤い月が昇つてゐる

嵐のあとの地上を照らして
出水に浸つた畠や村の上に
缺けたところが恐ろしく黑く
月を鏡にして惡魔が姿を映してゐるやう
だん〱月の半面が昏く蝕ばんでゆく

星

退屈さうに
星が出てゐる

新月に

月よ
汝、天上の放浪者！
今汝が遠い旅より歸り來つて
遙かに勇しく
我等の視界に一すじの光りとなつて入り來るのを迎へる。

をう新月よ
汝はいかに遠く夜もすがら歩み來りし
幾月も幾月も人寰を離れたところに
神秘は汝ををくりたまへる
いかに物凄い海を渡り
悲しき海の咆吼する獸を慰め
いかに淋しき砂漠をさまよひて
獅子の兒の生み落つるのを見守り
いかに久しく苦行して來たりし
汝の身の細りて窶れし姿は
昔の地上の聖者にも似て
痛ましく、汝の旅路の辛苦を語りて
汝の氣高く優しい光は勿體なく拜れる
をう月よ、
暫しこの地にとまりて圓らかに肥へて結ばれ

哲學講座

（第五講）

自然

紀平正美

余の講義を聽いた一人が、哲學者は實に餘計な議論をするものである、分りきつた事を、わざと六ケ敷く論ずるものであると感じたと言うたので、余は如何にもそう感ぜられるであらう、然しそう言ふ樣な事が必要となつた時には、矢張考へて置かなかつた事を悔いなくてはなるまいと答へたので、其の人は了解せられたやうであつた。今茲に講ぜんとする「自然」の意義に就ても、恐らく同樣の感じがするであらう、何となれば、何人も自然界の存在に就て疑はず、而て其の自然は、斯くあるが如くに、始めから既定的に存在するものと信じ、別に六ケ敷くは考へて居ないからである。それで若し余が、今日多くの人々が既定的に存在すると考へて居る自然界なるものは、實は自然科學者の創造し出したものであると言ふとすれば、通常人には恐らく奇異の感じを起し、寧ろ余を亂心者とも思ふかも知れぬ。然し余は其の然る所以を說明しなくてはならぬ、而てその事乃至そういふ考へ方をすることは實際重要なる事なのである。

我等が「自然」或は「天然」の語をそれに當嵌めて居る所の、希臘語のフユザイ、羅甸語のナチユラ（英、佛、獨語は皆な此の語から出て居る）、共に生物が子を産むといふ意味から考へ出された、「生産せられたるもの」「創造せられたるもの」といふ意味である。即ち宇宙の森羅萬象を生産創造せられたものと考へた場合、其の森羅萬象を一纏めに名づけて「自然」或は「天然」といふのである。そこで問題となるのは、その生産創造の主體は何ものかといふ事である。多くの原始的人間がそう云ふ考を起した時に、先づ取敢へず神を以つてそれとする。（其の神は一神であるか、多神であるか

は、今問題ではない。)「天然」といふ語は當に漠然と創造主を考へて、それを天と名づけ、其の「天が然らしめたもの」と云ふ意味である、「自然」――「自ら然り、然らしむる」といふ意味とは、少し違つて來る、即ち後に明かになる樣に「自然」といふ語が、一層哲學的の用語となる。

さて造物主即ち神があつて、此の自然界を造つたと見て居る限り、甚だ簡單ではあるが、哲學的の思考には不適合である、何故ならば、創造主即ち神と、被造物即ち、自然とが、根本的對立の形ちに殘るからである。宗教的に神を考へる場合にでも、神と被造物との關係に就て更に考へなくてはなるまい、而て其の關係を考へる以上、單なる對立として其儘に置くことは出來ないのである。それで基督教の末期に於ての哲學者は、既に自然を全一的に考へ、神を能產的自然(Natura naturans)と考へた。次で近世初期に至つて、スピノーザは、能產的自然は同時に所產的自然(Natura naturata)であり、それが神であると定むるに到つた。即ち自然が自然を生ずるといふ事になつて、造物主なるものが捨てられた、今日の自然科學に於ても、亦實際そう考へつゝあるのである。そこでかう云ふ事が出來る、自然物即ち被造的のものと考へた場合は、森羅萬象を特殊的個別的に觀た場合であつて、それを總態として見、全一として考へた場合には、自然そのものが創造する働きを有することゝなる。而でもう此點までくれば、所謂自然界とは自然科學者が科學的の方法(其の評論は又更に後の事とする)に從うて考へ出したものであるといふ考に到達するには、只一歩であらう、何となれば、科學者は個々の自然物を取つて研究をしては居るが、其の目標とする所は、自然界に存在する理法である、而て其の理法とは、自然科學の方法に從うて組織せられたものに外ならないからである。それで若し此事が許されるならば、通俗的の考へは更に一轉しなくてはならぬ、即ち所謂「自然」として組織せられたものは、既に既成的に我等に與へらるゝものでなくして、「我」といふ組織者(此の組織者を個人的なる可見的なる主觀を見ることの出來ない事は、勿論宗教の場合と同じである、即ち其故に宗教ではそれを神と觀たのである)が其の内に入つて居るものであると考へなくてはならぬ。從て自然科學者の言ふ所の自然のみが、自然ではない、自然は其を受入れる主觀によつて、皆な相違して居る、同時に時代によつて、自然なるものゝ意義が亦相違して居ることをも亦承認しなくてはならぬ。

斯く考へることによつて、我等が常に漠然と使つて居る所

の「これは自然的だ」といふ樣な場合の「自然的」と言ふ語の意味を定め、同時に所謂自然主義といふ事の、正當なる意義をも定めることが出來るのである。それで、例へば老子や莊子を自然主義と呼ぶ事や、希臘のものを自然主義なりと云ふ事、又は親鸞の和讃の內に「信は願より生ずれば、念佛、成佛自然なり」というた事の意義も、亦斯く哲學的に考へてのみ、始めて正當に理解することが出來る。

人間を以て被造物卽ち自然の一物と考へる以上、人の力を以ては此の自然をどうすることも出來ぬ、ストイツク學派の言ふ樣に「自然に從へ」或は中庸に言ふ樣に「天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道に率ふ之を敎といふ」如くに、我等は只管自然に從うより外に致し方のない事になるが、更に其の自然とは何ぞやとの思考によつて、其等の意義は畢竟我が我に從う事に外ならぬこととなるのである。然し其の事は先づ差し置いて、人間を被造物として見れば「自然的」といふ語は、全く「人爲的」といふ事と對立する槪念となる。然し若し其の對立を其儘にして置けば、抽象的の見方である、哲學的のものではない、卽ち哲學的には、此の對立より更に一層高い所に立つて「人爲的」を包括する所の「自然的」を考へなくてはならぬ。さればそれはどう考へるべきであらうか。

先づ之を我等がなす藝術鑑賞の上に就て考へて見よう。所謂自然的のものと、人爲的藝術品との關係に就て、例のカントが特に明了にしてくれた、──而てそれは我等が常に氣付かずに云うて居る所のもの──立派なる藝術品を見た場合には、我等は之を如何にも本當にありそうであると賞め、逆に自然美に對しては、如何にも人が有意的に作つたものであるかのやうであると賞めるといふ事實である。この事は、抑も何を意味するであらうか。例へば奇岩怪石の屹立する山水美を眺めたにした所で、肥料を重く肩に擔ひつゝある人に對して、それが何の美と感ぜられよう、少くとも直接の生活から解放せられて、屹立たる身體的の姿勢を執つて之を眺めてこそ、始めて美と感ぜられるのである。(こう云ふ場合を、リツプスは「感情移入」と名づけた、古代素朴人が、土地に關する種々の神話的傳說を產み出したのも、卽ち此の氣分からである。)卽ち自分の身體的調子、並に心的氣分が、所謂自然物に融け込んだ所に、其の自然物が始めて意識を生じ、生きて來るのである、而て其の生かされた自然が、卽ち具體的の自然に外ならぬ。──從て單に與へられたる自然とは、抽象的のものであると考へなくてはならぬ。然し同時に、自然科

學者の自然も、亦自然科學的態度に對しては、素朴的なる人に、其の自然が活きたものであつたと同樣に、活きて居る、卽ち自然科學的の態度が、其の內に融け込んで居るものと考へなくてはならぬ。只批評的の立場に立つて考へた時に、自然科學的の態度其れ自らが、抽象的のものであり、(此の事は更に後に明かとなるであらう) 從て其の對象たる自然のみが、唯一の自然でないと云ふだけの事である。――卽ちこれが自然美を鑑賞する場合に、それを人(或は神話的には神或は巨人)が作つた樣であるとして賞めるといふ事の意味である。

同時に其の逆が又云へよう、卽ち人の作つたものを美と鑑賞する場合には、如何にもそれが自然にあるらしく、人が故意に作つたものでないと見る事が、大切なる要件となる。(此の場合の「自然的」卽ち人爲的でないといふ事を、論理乃至哲學の上では、普遍性と必然性とを有つと云ふのである)。此に於て藝術(廣義に云へば、人間が作つたものは、何んでも皆な藝術といふ事が出來よう)は、單なる與へられたるものの模倣ではない、若し單に一面的に「人爲的」といふ事を否定し去る所に美があるとするならば、「自然に忠實なる」といふ事は、單なる模倣といふ事、或は寫實主義が、藝術の上乘であるとも考へられるであらう、又實際斯る主義が主張せられた事もあるが、それは人爲的の方面が、如何にも形式化して、其の活力を失うた場合に起つた反動的の考へ方である。卽ち「我」が其の內に融け込んで居てこそ、始めてそれが美となるのであるから、一の藝術たるには何等か創意が加はつて居なくてはならぬ、然も其の創意が、如何にも故意的でない所に、自然的といふ事が始めて成立するのである。――現代の藝術に對して、此の原理が如何樣に當嵌まるかといふ事は、更に論ぜなくてはならぬ點があるが、それは後の事として置いて、簡單に云へば古き藝術に不滿を感ずる樣になつたのは、「我」の變化を意味する、而て其の變化に又どう云ふ理法があるかは、卽ち又哲學の對象である。

斯くて、例へば菊づくりの名人が仕立上げた鉢植の菊でも、菊の自然を出したものであり、他の雜草に交はり、よぼよぼの姿で咲き出て居る菊でも、菊の自然である、其等は皆な見方の相違である、後の場合の菊を觀た時にのみ、菊の自然を鑑賞すると云ふ事にはたらない。從て茶の湯の式でも、かの面倒臭い裝禮のみを考へたならば、如何にも人爲的の甚だしいもの、不自然極まるものとも考へられるであらう。されぱとて、儀式も何もかも拔きにして、我儘勝手な立て方

で、果して茶の眞の味を味ふ事が出來るか、水道の水をアルミニウムの湯沸で瓦斯の熱を用ゐて沸した湯では、茶の味は出ないのである。それで眞に茶の味を味はんとすれば、それだけの方法が必要になつて來る、而て其の方法の上から云へば、茶杓の持ち方一つが間違つてもならぬ事となる。即ち其處に茶湯の儀式其のものに、自ら亦自然的なるものがあるわけである。即ち單に外的なる儀式にのみこだはつて、如何にも不自由千萬に思はれる時には、それは如何にも人爲的である、笑止千萬である、即ち醜である。然るに之に反して一切の處置が何の苦もなくなされ然もそれが必然的のものと觀られる時には、其は「自然的」である美であるのである。

斯く說明し來れば、自然的人爲的といふ事を抽象的に考へて、之を對立的のものとすることの出來ない事は、既に明瞭になつたであらう。今は簡單の爲めに、只調和といふ語を用ひて置く、即ち自然的人爲的といふ樣な兩對立要素が、互に融合し合つて、其處に一の調和が保たれた場合に、我等はそれを「自然的」といふ、即ち美的といふ事が成立する。我等は斯くして、絕えず一調和の世界を作りつゝある。これが表象の世界に表明せられて、狹義の藝術となり、思考の上に表明せられて、人生觀世界觀即ち哲學が出來、之れが人と人との結合として表はれては、各種の社會組織となる。而て斯る組織の內にあつて、我等は始めて安住するのである。然し玆に於て我等が同時に考へて置かねばならぬ事は、――

(一)。先づ第一には、此の一世界の內に集められたる材料は、決して何でも來いといふわけには往かぬ、或る要素は捨てられ、或る要素のみが選び出されて居るといふ事である。即ち「我」に都合のよいものが取られて居る、親鸞が之を宗教的の態度で「選擇の願悔」と呼んだ所以のものが即ちそれである。各種の藝術は、最もよく是を表明して居る、即ち其の內に採られたる材料は、表はさんとする具體的の槪念を表はすに都合のよいもののみであつて、他は捨てられて居る、即ち狹義の藝術の世界は、現實の世界とは全く相違した、框或は臺或は舞臺によつて限られた世界である。

(二)。從て此の世界の內には、異分子の入ることが許されない、異分子が入れば、其の世界は幻滅する。我國の舞踊の術語に「南蠻」といふ語がある、余はその出所を知らぬが、恐らく異國氣分といふ事であらう、即ち舞踊に南蠻が出てはならぬといふ事は、不自然な要素が入つてはならぬといふ事に外ならない。然らば何が不自然であるかといふ事は、上記の如く、寧ろ六ケ敷い事であるが、ともかく不自然なものが

入つては其の調和ある世界の打ち破しになるのである。從つて社會組織に於ても、異國的氣分は之を入れることは出來ない。然るに此れが最初は止むを得ずして入り來り、遂に其れが當然といふ樣になれば、其の社會組織はまた當然變化しなくてはならぬ、此れが卽ち社會の變化である。

(三)。卽ち此の變化を餘儀なくせらるゝ樣になつた場合は、卽ち「我」が旣に變化した事を考へなくてはならぬ。上述の如く、自然的といふ内には、我と與へられたるものとが調和して居なくてはならぬ、卽ち其の内には、「我」を通じたもの、「我」の創意になれるものが無くてはならぬ。然るに前講に於ても說明して置いた如くに、其れが形式化してしまつて、單に與へられたものと化し、「我」が其の内に入り込んで居なくなれば、其の世界の内に、我は最早安住することが出來ぬ。其處に漠然ながらも、不滿が感ぜられる、卽ちそれだけ調和が破られて居るのである。そこで我等は又新しき調和を創造しなくてはならぬ、此の際單に古き形式でそれを壓しつけて置かうと思ふた所で、其は愚の到りと云はねばならぬ。然し同時に、其の「新しい」といふ事は、單に外面的抽象的のものであつてはならぬ、——正に現代の所謂「新しがりや」の樣に。——一調和の世界を創造してこそ、眞の意味での「新」といふ事がある、——例へば地震と火事で困難せしめられた時に、日本婦人の服が不便であると知つたからとて、直ちにそれを亞米利加婦人の服裝に更へたとて、(新聞紙が云ふ樣に)復興の服裝ではあるまい、何故ならば、其れがまだ我が生活の他の要素と調和しないから。——

茶の湯に就て說明した如くに、自然的といふ事を、單なる一面からのみ、例へば自分の便利不便利といふ樣な事からのみ考へてはならぬ、同時に又之を單に外面からのみながめて居てはならぬ、よく其の内面に入つて、其の意義を考へて往かねばならぬ。茶の湯を學ばずして、茶の湯の自然は判らぬ、同樣に自己の社會組織が氣に入らぬとて、其の組織に入つて努力することなしに、其れを改良し改造しようとした所で、蓋し無駄であらう。之を安逸者の空想と呼ぶ。徒に其の儀式を墨守し、其の社會組織を完全なりとして安住し得る樣な人は、又同時に活きた人間ではなく、云はゞ機械化された人間である。我等は其の生活の内に入り、其處に我を編み込んで、調和の一世界を創造してこそ、眞の意味での「人」——である。人の下等動物と相違する所は、廣義の藝術卽ち文化を有することであり、此の文化が、卽ち人の自由性の表現である。一切の形式を脫した所に自由あり、新らしき所ありな

ど考へるのは、蓋し我儘に外ならぬ、我儘と自由とは亦正反對である。自由の眞態は、其故に調和である、美である、即ち自然的なるにある。

上に一寸觸れて置いた如くに、西洋に於ては宗教的の考へ方及び社會の組織が形式化して、不滿を起し、而て其の不滿足より起された各種の活動が遂に宗教時代の根本となつてゐた神と我との對立を變化して、我と自然界との對立とした場合に、純粹に考へるといふ事が、遂に自然に忠實なれといふ事となつて、自然といふ事が非常に意義を有つて來た（詳細の事は又後の議論としなくてはならぬ）。其處で自然主義が一般に流行し出したのである。然し其の自然というたのは、自然科學の態度で組織せられた世界であつて、未だ一切の自然ではなかつた。然しそんな批評的な考へは無くして、總てに此の主義が取られ、抽象的なるものを以て自然と考へ、例へば本能滿足主義が自然に叶ふものである、惚れた、好ましく思ふといふ樣なものが直ちに愛なりと考へられて、それの至上主義などが考へられた、而て今日でも猶ほそんな考へ方をするものがあるが、それは批評的哲學的精神の缺けたものと見るべきである。我等の眞に尙ぶ所のものは「自然的なるもの」である、抽象的なるもの、即ち人爲的なるものは、調和ではない、即ち不自然なるものである。

斯くて、希臘主義を自然主義と呼ぶのは、藝術的大調和を本とし、其れに據ることを以てするので、それが正當の意味での自然主義である。近世の自然主義は、自然科學的の自然を本とする限り、自然主義には相違ないが、其の自然が既に抽象的なものである限り、語の轉用である、正當には自然主義ではない。從て近世人が自然主義を唱ふる限り皆な抽象的のものである我儘の要素が入つて居る、實は不自然なものである。老莊の自然主義は、形式化された當時の道德に反抗し否定を本とした思考の必然を說いたものであるが、其處には勿論藝術的の調子の多く加味せられたものであると觀るべきである。親鸞の「念佛成佛自然なり」の意は更に宗教の說明をしてからでなくてはならぬが、論理的に云へば法藏菩薩の大誓願に從うた必然性を示すものである。親鸞がよく云ふ「自然法爾」——自然に法の如く然り——といふ語は我等が眞に味ふべき所のものであつて、哲學の立場はどこまでも知的論理的でなくてはならぬが、目指す所は又此の「自然法爾」である。（一三、九、二三、）

兒童の特殊教育

兒童劇に關する言葉

秋田雨雀

○

女性の世界と兒童の世界とは近代社會の二つの新しい芽だと私は言つたことがあつた。この二つの世界から新しい光が射し込んで來て、私達のこの歪んだ世界と生活とを匡して呉れゝばいゝと思ふ。

○

「女性改造」が兒童劇に關する意見を求めに來たのを機會に、私は兒童藝術に關する短い感想を記すことの出來るのを愉快に思ふ。本誌がこの問題を提供した理由は、近來日本の社會に兒童劇といふものが表はれて來、また色々な學校で學校劇といふものが行はれてゐるのに對して、最近地方官會議で、岡田文相の學校劇に關する訓示があり、これが一部の問題になつたりした爲めではないかと思ふ。

○

一體文部大臣なぞが「學生が脂粉を施して」演劇するとか、しないとかいつたやうな事に、一々頭を惱まさなくとも、もつと根本的な問題が幾らでもありさうなものだと私は考へる。檢閲官程度のこせ〳〵した根生が大臣になつてもやつぱり拔け切れないものだと些か心細くなる。然し私はこの短い感想をそんなことの爲めに發さうとは思はない。ただ餘裕があつたら、この事に關しても一言して見るつもりである。

○

大人に大人の藝術のあるやうに、兒童には兒童の藝術がなければならない。兒童藝術が新しく人類の問題にされる時には、兒童それ自身の持つてゐる特質が人類の上に新しい寄與を約束してゐることを證明するものであらう。檢閱や指導の心理だけでこれに臨むべきものではない。

○

兒童劇の生れるのは、演劇本能のあることを示すもので、この本能を立派に育て上げて行くことは、兒童自身にとつても、大人にとつても必要な事である。然し兒童劇に注意しなければならないことは、大人が大人に求むるやうなものを兒童に求むべきものでないといふことである。兒童劇、學校劇なぞで時々不快な印象を得ることは、指導者が兒童に大人の物眞似をさせやうとしてゐる點にある。學生劇に關して教育者の憂ふるべきは「脂粉を施す」ことなぞではなくて、むしろ大人が兒童の自然を傷けてゐる點であらう。

○

兒童藝術に關して甞つて私達は議論をしたことがあつた。それは兒童藝術とは何んぞやといふことであつた。ある人は兒童藝術とは兒童自身によつて創造されたものであつて、大人が兒童のために創造されたものであつてはならないといふのであつた。この種の論者は、一部の文學者なぞに多いやうだ。この說は兒童藝術の「兒童」といふ言葉に捕はれすぎた、一見本質的に思はれながら、その實可なり非現實な議論で、これは「兒童」の獨立した世界を認めやうとしてゐる點で、ある種の軌範的教育家に一種の反省を與へてゐるが、「兒童」を廣い意味の人類の世界から孤立させやうとする危險さを持つてゐる。

○

兒童藝術の一種としての、童話の最も勝れた作者、例へばイソツプ、グリム、アンデルゼン、ラフオンテン、フエネロン、トルストイ、メエテルリンクのやうな人々が子供でないといふ理由で、私達は彼等の作物を兒童藝術でないといふことが出來るであらうか？自由畫の如き兒童自身の唯一の藝術といつてゐるものでさへ、大人によつて認められ大人によつて奬勵されて來てゐるではないか？これ等の事實を極端な「自身」論者は何う說明するつもりであらう？

○

兒童藝術の「兒童」とは人類の生活に根差した一種の特質——即ち「兒童性」を指示するもので、その特性から生れ、その特性を對稱とするところの藝術は、すべて兒童藝術と言

ふことが出來るのだと私は考へる。兒童藝術の價値は寧ろ、大人の世界と兒童の世界との接觸點にあるのだと思ふ。大人が兒童の持つ「自由さ」「無邪氣さ」に刺擊され、自分自身の失ひかけてゐるものを兒童の世界に見やうとすることもその一つであり、また次ぎの時代に對する希望が教訓の形を採つたり、或る時は單純に兒童を喜ばせやうとする娛樂本位の樣式を採つたりすることもあるであらうし、兒童自身が兒童自身の藝術を自發的に生み出すこともあるであらう。然し是等のものは、すべて人類の「兒童性」から生れて來てゐる點で兒童藝術と言つていゝと思ふ。この大人と兒童との接觸點を考へずには兒童藝術が理解されないばかりでなく、勝れた童話などの持つてゐる思想的要素――時としてはその思想は今日では有害だと思はれるものもないではないが――も說明しにくゝなる。

○

多くの兒童藝術の內で、演劇に關するものは、一番復雜で、一番弊害を生じ易いものである。時としては兒童に過大な勞苦を强ひてゐる場合もある、なぜならば演劇は例へ何ん簡單なものでも「一つの世界を創造する」ことだからである。前にも言つたように兒童劇を見て私達は何んとも言へない不快さを感ずることがある。その不快さは、兒童が自童自身の性質を失つて、他の性質を模擬しやうとする點にあるやうだ。

○

私は自分の經驗からいへば、兒童劇を見て愉快な感じを得たことが滅多にない。たゞ坪內博士の書かれた假面劇の一つと、ある西洋婦人の指導してゐた音樂劇風のものに深く動かされたことがある。概して大まかな物、無邪氣な物、音樂的要素の多い物は成功してゐたやうだ。

兒童劇を見て不快を思ふもう一つの理由は、それらの劇の持つてゐる思想の陳腐さである。今日多くの兒童劇の持つ思想は大部分は國定教科書の持つ程度の倫理觀か、でなければグリム、アンデルセンの寓意に過ぎない。苟も藝術といはれるものならば、國定教科書から人間を解放するほどの心意氣がなければならない、また腐れた林檎は兒童に與へてはない筈だ。

○

最後に、文部大臣の學生劇に關する訓示であるが、あの訓示は、二三官吏の報告を土臺にしてなされたものであるとは誰にでも感ぜられるとである。一體に官吏の藝術に關する檢

聞や報告位ゐ當にならないものはない。恐らく九頭龍女學校の演劇差止のやうな例がその報告の主なものではなからうか。九頭龍女學校の事件などに關しても甚だ誇張した宣傳が行はれてゐたやうだ。假りに二三の弊害が事實あつたとしたとしても、それによつて一般學生の藝術本能を阻止するやうな訓示を發する必要が何處にあらう。「學生」の中には演劇を專問とするやうな種類の學生もある、「脂粉を施す」といふことを無暗に不道德呼はりする時代はもう過ぎ去つてゐる筈だ。歐米の學校では立派な舞臺を有する學校さへ有ではないか。「學校の劇場化」「敎會の劇場化」「工場の劇場化」が唱へられてゐる時代に、時代錯誤の文部大臣もあつたものだ!

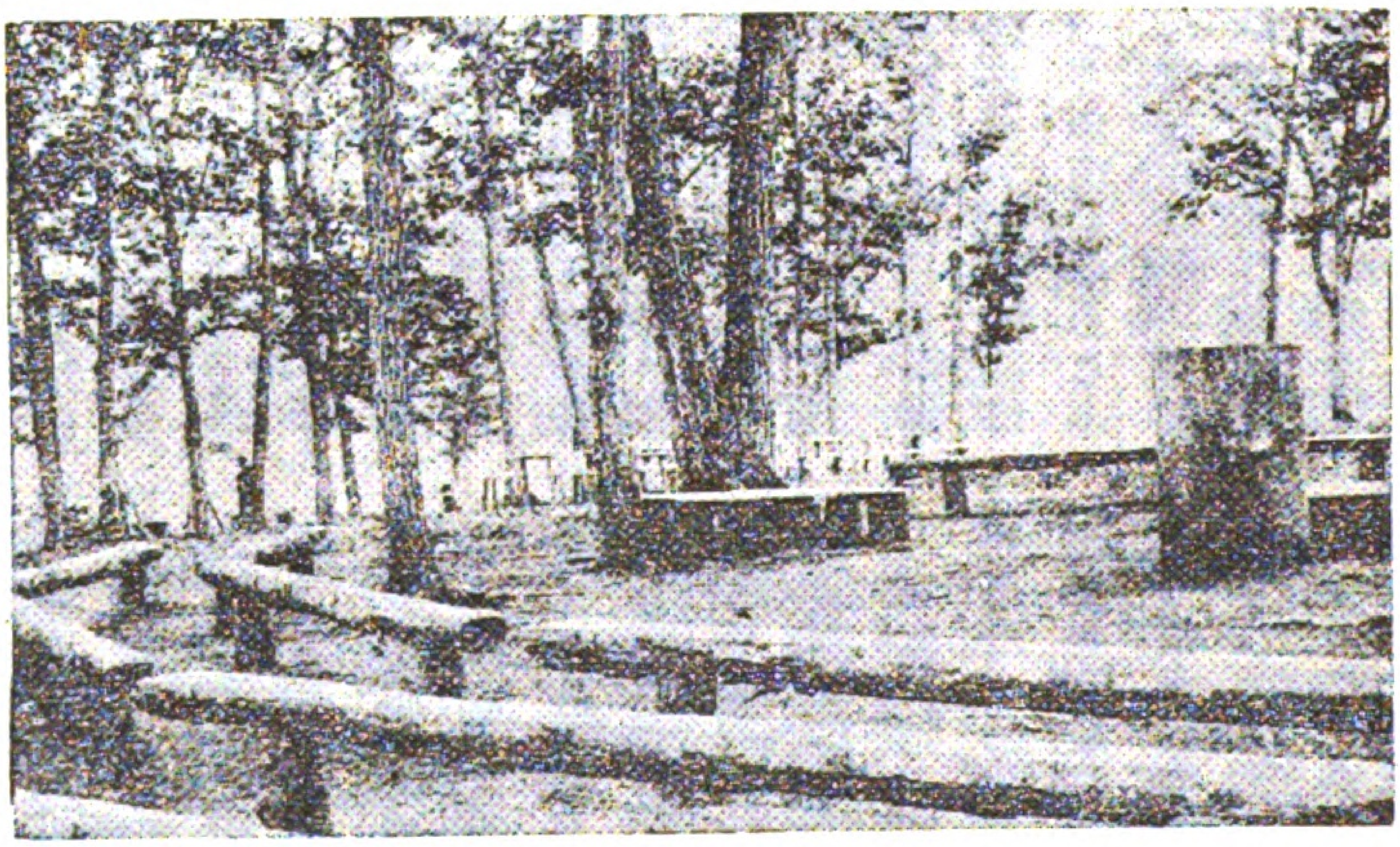
（一九二四、九、四）

感化十年

北見國サナプチ家庭學校　品川義介

農場は大正三年に創設されたから今年は滿十週年になる。隨分廣大な原始林で第一農場丈けでも七百五十町歩ある。さつと東西二里、南北一里で、それに北見と石狩の境にある白瀧第二農場を加へると實に一千五十町歩となる、何分敎育家がかうした茫漠な地面を買つたのだから初めの内は隨分手古摺つた。僕等もこの農場の誕生を喜んだと云ふものゝその成長を疑つた位である。實を申すとその初めは生死の程も案ぜられた。然し難有い事には神樣の御加護と深い〳〵同志の同情があつて漸く今日まで生き永らへ、そして幸な事にはこの農場も多少有意義に發達すると云ふ見込がついた、吾等は創業以來自ら二大目的の爲めに奮鬪して居る。一つはこの一千五十町歩の千古不伐の原始林を開拓して百五十戸の小作人を入れ一戸平均五人として七百五十名の新農村を造る事にある。然し決して所謂武者小路一派の新らしい村ではない强いて云へ

ばキリスト味を帶びた鍬の古い村を造るにある、二つには一千五十町歩の内五十町歩を教育地と大定め、この天然を利用して將來は一期定員一百五十名の青少年を教育しよふと考へて居る、であるから、吾等は一面に於ては農業的感化事業に着手して居ると共に他面には健實なる理想農村を建設するに在る、この遣り口は極めて獨創的ではあるが云はゞ二兎を逐ふ獵師の樣なものであつたから非常に苦辛が多かつた、この度は僕の立場として教育の方面の事を記して諸賢の參考に供したいと思ふ。僕も足掛け十年程この山で教育に從事して居るが元來余は教育等を口にするの器ではなかつた、全くの門外漢であつた、余の頭は宗教教育について白紙であつた。全くの白紙で變てこな宗教や教育の樂書がなかつた頭で日本で一番むづかしいこの教育に從ふた事は余にとつて非常な祝福であつた。であるから余の教育は失敗の揚句工面工夫でかたまつたもの全くの我流である。曾て高橋是清氏が内閣を作られた時直接余に話された中に「我輩が内閣を作つた時に東京中で注意人物として警視廳の名簿にあげられた者が約一萬人位居つたその内特別の注意を要するものが八千人あつたこの中の二割や三割は恐らく君等の厄介になる人間であらう」實に凄じい勢である之を概算的に云へば不良少年と名づく者が日本中に十萬を越えて居る――二十五萬説もある――東京丈でも一萬數千居るらしいこの手の青少年は時と共に增加する一方で決して減ずる見込はない現代の生活は益々不安になると共に思想は愈々惡化されて居る、然も此の物質的文明はいがみなり間違ひなりにどん／＼進んで行く、かうした激甚な生存競爭の後には必然かすがたまる即、精神的落伍者や物質的失敗者が出來る此等の弱者も自



家庭學校禮拜場

己の存立を續けなければならぬ、かうなれば彼等の生活には勢無理が出來て遂には法を犯し刑に觸れる事になる、此のかすの大粒なものが刑務所にあらはれ出でては免囚として保護せられその小粒なるものが感化院に頭を出し不良少年として教育を受ける事になる。

元來不良少年は犯罪人の卵であるからそのまゝ放つて置けば必ず孵化して落ちつく先は監獄にきまつて居る云はゞ實に危險な道を歩んで居る可憐兒である感化教育とはこの恐るべき一筋道を知らずに進んで居る少年を捕へて來て今一つの新らしき且正しき道を作つてやり今日までお前が歩んで來た道は間違つて居るからこの道を行けと敎へてやる卽ち迷路から正道へ方向轉換させてやる仕事であると思ふ、大戰以後改造機運が盛大になつた今日將來の祖國を双肩に擔ふ第二の小國民である少年の改造は現代生活の第一義である、話は餘談になるが余は不良少年と云ふ言葉が既に虫がすかぬ否寧ろこんな呼び方ではとても敎育にならぬと思ふ。言葉位は形式だどうでもよいと云ふものがあるがさうはいかぬ名は實の賓だ決して油斷は出來ぬ名實共に正しからねばならぬ。余の幼い時には餓鬼大將腕白小僧と云ひ少し年のとつた者を惡少年毒少年と呼んだ其れを今日では不良少年と云つて居る。『神は田舍を作り惡魔は都會を作る』で元來不良少年は多く都會の產物だ無論田舍にも居ないではないが極めて少なく又田舍の不良少年と都會のそれとを比較すると大分段が違ふ所謂淺草六區などの本場を踏んだ者は實に恐い者である。要するに不良少年は都會少年であつて所謂文明少年であつて文化少年である少し皮肉に聞えるが余は不良少年の事を文化少年と呼んで居る。刑務所等でも始めは地下獄と云ひ山獄と云ひ牢獄と變遷して監獄となり今日に到つたのである。あの不良少年を感化院に入れた等と云はれると折角御世話になつても當人は決してよい氣持はせぬこの意味から云つて家庭學校などは頗るよい名で先づ理想に近いだから內の少年等は町へ使ひに行つても家庭學校生徒なることを一種の誇りとして居る位である。

不良少年とは一體何者か？　色々定義もあらうが余は家庭と學校との間をうろついてる無籍者と思つて居る世には家庭があり又學校もある然し二者の間に調和がない家庭の躾は學校で破られ學校の敎育は家庭で崩されて居る。子供こそ迷惑なものだ丸で賽の河原で石を積む子供の樣なもので積んでは崩され積んでは崩されて居る誠に氣の毒な次第である。余の處へ來る少青年の內にも自ら二大潮流がある一つは國家社會が認めた青少年で一つは一家の認めた青少年である。前者は

貧民下流階級を意味し後者は富豪上流階級を意味して居るどちらにしても不良少年は全く家庭と學校と社會に虐げられた者で實に不幸少年で云はゞ惡境遇の犧牲者である特に惡家庭の産物である。兎に角今日の現實が生んだ少年をどうするかこれが大切な問題で又むづかしい問題である感化教育はこのむづかしい者を扱ふ教育である。

兒童問題の絶叫されて居の今日世は遠慮なく不良少年の時代に進みつゝある不良少年は實に祖國を根本的に覆へす白蟻で獅子身中の蟲である。とにかく不良少年は天下の强敵であるから此强敵に對する日本の感化教育は丸つきりなつてない恰も腕のきかぬ人間が鈍馬に乘つてなまくら鉋刀を振り上げて居る有樣だ。不良少年は或る意味に於て文部省教育の疵で近代教育の影である。文部省が最全の力を灌いで匙を投げた少年の惡い者丈けを一ケ所に集めて同じく小學教育や中等教育をして居つたのが所謂感化教育である。之れではよくならぬ生余は感化教育を天命教育と云つて居る何となれば「人事を盡して天命を俟つ」教育であるからである。親として子の可愛くないものはない殊に惡い方へ走らうとする子供を見ては親の心配は非常なものである。出來得ることならば色々と工面工夫を凝らす——あの學校よりこの學校にうつし、あの先生にあづけこの先にあづけて此本を讀ませあの本を讀ます——親としては有りとあらゆる手段を盡したものでその揚句出來上つたのが不良少年である。敢て人事を盡して惡くなつた者を又人間の力で善くする事はむつかしい話で又やり方としても愚策であり拙策である。だからこの種の人間の教育は天命を俟つに限る　即ち天然自然の中にほつたらかして置く意である、余の經驗に基く感化教育は極く簡單なものである、しかもこの手に掛けたら十六七位の子供までは大抵なほる傾向を持つて居る余の感化否天命教育はかうである。即ち大天然を整理し人間の棲みよい環境をつくりその中へ比較的家庭的宗教的教育的の雰圍氣を造り比較的うまい物を喰はせてうんと働かせる事である。家庭學校の十年前は全く極北不毛の熊の巣であつたそれが今日では豐廣原も瑞穗の國となり北海の精神的一大名所となつた。斯くの如く人は土に化し土は人間に化して、今日までもう八十有餘名の青少年を送迎した皆成績よく日本各地に働いて居る。感化教育は何と云つても先づ第一地の利を得る事が必要である。山水を以て子供を攻めることが教育の大乘である。天然抜きの教育は兒童にとつて逆境だ。この意味に於て北海道は最後に殘されたる教育場である。あの大いなる山の姿と茫漠たる高原と曠野到る處

にある原始林と處女林……これは皆やりそこなつた人の子を改造する好箇の靈場である。德富蘇峰氏に文章經國といふ言葉があるとするならば我輩には「山水整理」「流汗悟道」の旗印がある。

余は腹をかうきめて居る一生を賭して與へられたる北海の天然山水を幾分にても整理して見よう。これが余の本願である。其間に人の子一匹でもよくなつたら全く儲け物である。元來造られたる人間が人間の力で人の子を敎育しやうなんて片腹いたき沙汰である。ほんとうの敎育は天然の力を七分通り藉らなければならぬ大半は神樣におまかせして人間は一分か二分通り御手傳ひすればよいのである。かうした處に眞敎育の脈絡がある。昔は初め敎育とは耕作する意で宗敎とは山を開く事であつた。開祖とか本山とか開山とか云ふ言葉を尋ねて見てもわかる。田を耕やす事が敎育であり山を開く事が宗敎であるを忘れたのが所謂近代敎育である人間が惡くなるのがあたり前だ。

曾て大町桂月翁が余をウナプチの草廬に訪ねられた時の事である。余は敎育の本義を余の一家言なる「流汗悟道」の四字を以てした。流石は文豪の雄なるものだすぐとその意を了解されて興感一番立ち處に次の詩が出來た。

何須長廣舌　天地自開才
流出滿身汗　孰知大道來

實際今日の敎育は長廣舌敎育だ。先生がしやべる生徒が之を默々として筆記する其間に何等の心的交渉がない實に無味乾燥である。天地自才開とは余の山水整理を裏書して餘蘊がない。先生と共に働く處必ず淸き汗が流れるこゝに敎育の本領があり宗敎の眞骨頭があり過去八年間この天自然の中に於ける余の遣り口は學生を朝早く起こす事と先第一にシャツを着ぬ流儀であるいかなる寒い朝でも眞赤裸にして外へ出して下の泉へ抛り込んで居る勿論余が第一番に水をかぶる。初めはつらいがなれるに從つて非常に爽快を覺えて來る極北の地に於ける朝の水浴は誠に壯絕快絕な場面であつた。一日の計は晨にありで寢ぼけ面で一日の業務に服すると同日の論ではない感化敎育は肉彈敎育であらねばならぬ背水の陣を布いてかゝらぬと人の子はよくならぬ。冬籠りの時には午前中は學課を授けて冬期學校と呼んで居るが午後は必ず勞働に服して居る。普通の學校では學課を敎育の主眼として居るが我黨は勞働に重きを置いて居る勞働の時間は成る丈け長く大自然の中へ全心全靈を打ち込んで心行までに汗を流して居る千古不伐の處女林中の勞働は神樣と角力を取る事である冬の伐木は

誠に痛快な荒仕事で子供も非常に喜んでやつて居るあの千年の巨木が大きな音を立てながら雪を排して倒れる壯觀を見てはいかなる不平漢でも思はず快哉を叫ばざるを得ぬ。この流汗悟道大自然中にあつての有意義なる勞働……之れは人格改造の大妙藥で亦大自然である。神聖なる勞働を極度まで適用出來るのが感化教育である。

第一に勞働すると飯がうまい都會の人はうまい飯をまづく食ふて居るが我等はまづい飯をうまく喰ふて居る一年三百六十五日飯をうまく食ふ人間はい豪人間である之は余の食道樂の奥許しで元來食物を砂糖や醤油でうまくするなんて頭が古い寧ろ胃袋の改造を計るにあると思ふ勞働すると腹がすく腹がへると何でも甘いこれを我輩は腹料理と呼んで居る。

第二に働くと體がよくなる教育の出發點は確に體格にある文化少年は一般に體が惡い健全なる體を造る事は教育の第一義であるこの意味で余は獸體人心論をとつて居る先づライオンや熊の如き肉體を作り然る後にひまでもあつたら人間の靈を打ち込めとは余の主張である、時々青瓢箪の様な新入生が宗教や哲學を問ひに來る余は言下に云つてやる――まあ默つて一年程働いて來い體が出來上つてからの相談にしよふ出直せ……主に邪惡は弱きより起こる然り殊に肉體の弱い事がその大なる原因である。

第三に汗を流すと精神がよくなるこれも十年間の經驗に照すと理想以上であるあの子は此頃大分よくなつたと云ふ程度の問題ではない種類が變つて來る、一二年原始林中で訓練すると一種の人生觀が出來るこれは只眼や耳から這つて感情の一部を動かした所謂悔改めではない肉を透して靈に觸れたものである中々崩れぬ確なものである惡い奴は成る丈早く十五六の――ちんぽに毛のはえぬ――中に「深く傷つけ全く癒やす」底の荒療治をせねばならぬ。

余は勞働の頌德表はこの邊で切り上げる重ねて云ふ生存競爭は激しくなる物質は窮迫する思想は益々惡化する犯罪人は殖える文化少年は激增する祖國七千萬の同胞を乘せた日本といふ大船は精神的にいつて暗礁に乘り上げてしかも尻から水が這つて居る狀態である、この時にあたつてはいかなる立派な思想を振舞はしてももう駄目だ言論は更に効がない東京の如き塵の都ではもう人間の救濟は出來ぬ全く人力は盡きた場合である餘す處は天力と地力に俟つ外はない、北海の天地は傷づけられた同胞に對する大なる安全地帶である眞實の意味に於て自然に歸らなければこのすさみきつた人格の改造は出來ぬ家庭學校が約十年前に於て北門石毛の地を撰び世人の笑

ひを買ひつゝ今日まで隱忍持久したるもこの邊に考へを及ぼした爲めである（完）

天分教育

小原國芳

特に「天分教育」といひたい。「天才教育」でなくて。教育の仕事は、必ずしも所謂天才卽ち優良なるもののみを教育することでないから。貴賤貧富如何、賢愚の如何、天稟の多少に拘らず、萬人が等しく享くべきものであるから。卽ち天から授かつた各自の性能を出來るだけ伸ばしてやることが教育の仕事であると思ふ。

だから天分教育と、所謂優等兒だけを教育する意味の天分教育とは意味がちがふと思ふ。天分教育の中には、天才教育も劣等兒の教育も普通兒の教育も一切が含まれてゐるのである。無論、天分の豐かなものと、さうでないものとの教育の方法が多少異ることがあることは明瞭であるが、しかも、すべてに通じて、共通の大事なことがあると思ふ。私は、むしろ、その共通論を述べてみたい。特に天才の教育といふ注文でありましたけれども。

私共の經營して居る學校も、實は秀才教育のみをやつてる學校のやうに誤解されて居るが、實はさうでなくて、秀才兒も、さうでない兒も、等しく預つて居る。そして、すべての子供が、各自、各自の道を各自の速度を進み、各自の天分に應じて、その力を伸ばしてゆくやうにしたいことを念願として努力して居るのである。

▲生れぬ前の教育

「親を選ぶ子供の權利」。私もエレン・ケイと等しく、このことを高調いたしたい。遺傳の力が如何に重大たるものであるか

は言ふだけ愚かも知れない。餘りにお互は、不用意に親になりはせないか。不注意に子供を生みはせないか。身體の薄弱頭腦の秀れざる、道徳的缺陷のある不信仰の親の子が、如何に不幸であり、從つて如何に學校教師が苦しみ、如何に社會が惱せられるかは、分り切つた程明瞭なことである。かくしても餘りに不用意に親となる人の多いのに驚かざるを得ない。如何に教育の力が偉大だとはいつても、「瓜のツルに茄子はならぬ。」子を叱り、學校に不足をいふ前に、親自身が果して親たる資格があるかないかを省みる處がなければならぬと思ふ。

親たるさま〴〵の用意、資格はもとよりであるが、更に、結婚の時期なぞといふ大きな問題もある。姙娠や出產の時期すら大きな問題である。私共が全國十幾萬の子供について調査した結果であるが、優等兒の多くは四五六七月頃生れである。劣等兒の多くは十一二一二三月生れである。

しかも、日本に於ては、出產率は、劣等兒の多い冬期が、優等兒の多い春暖期に比すれば約二倍である。これは實に國家的大問題でもある。このことは、先天的にも多少の理由がないでもないが、後天的にも大きな理由がある。つまり四月が入學期であるといふとである。つまり四五六七月頃に生れた子供は、尋常一年入學當時に最年長者であるからである。殊に一學期五六十人の多くを入れて一齊教授をやる日本の學校に於ては一生を支配する大きな問題である。私共が、春と秋と二回、入學せしむるのは、二重學年制をとるのはその爲である。要するに出產前に、かなり大きな問題が伏在して居る。或る子供は確かに生れない方が幸福であるかも知れない。その意味に於て私は或る產兒制限を人類幸福增進の上からも贊成したい。

▲入學前の教育

胎内の教育が如何に、大事なことであるかもいふまでもない。子供にとりて、最初の學校は母の胎内である。最初の教師、否一生を通じての大事な教師は特に母である。無論父にも貴い責任があるし、殊に經濟的條件が父親にあることを覺悟して欲しい。進み行く御代に教育を子供に受けさせるとの出來ないなぞ、大きな子不孝である。世には親不孝の子も多いがまた子不孝の親の何と多いことよ。

生れてから小學校には入るまでと、入學後大學卒業までの知識の分量を比較するに、滿六才小學校には入るまでの方が多いといふ。教育程度の低い日本の母親に育てられた子供は

さうでない子供が多いだらうが、それにても私共の同僚達の調査された結果によると、入學當時既に子供は五六千からの語彙を持つて居る。實に驚くべきことである。

この一例を以つてみても如何に入學前の教育が貴いものかゞ分る。道徳的にも藝術的にも、宗教的にも同樣であらう。私の子供が蓄音機にかけたレコードを喜び出したるは生後四十日目であつた。特に耳の發育は他の機管に比べて早い。六才以後に音樂教育を始めては到底大音樂家にはなれないと西洋ではいふ。

あの醒めて居る間は瞬間もじつとして居ない生活を、出來るだけ充實せしめたい。決してこれはイタヅラでも茶目でもない。子供にとつては實に貴い學問を自らやつて居るのである。障子を破ることすら貴い學問である。障子をつかんで破つてみて、その向ふに別の世界があるといふことが分つたらアインスタインの相對性原理の發見と同樣の、大發見であるかも知れない。いろんなものをいぢつてはこわし、こはしては組み立てようとする。砂場遊び、積木細工、石ころけり、木登り、凧揚げ、犬追ひ、バッタ捕へ、水いぢり、さぼん玉、まゝごと、すべてが貴い教育なのである。ケンカすらも。ケンカしたことのない、ヤンチヤしたことのない、所謂大人から見てイタヅラをしない子供に優等生があらう筈はない。

どうか、家庭の中に、子供の王國をどこか作しらへて頂きたい。玩具、紙、繪本、クレオン、鉛筆、石ころ、木切れ、砂場、箱切れ、いろんなものを供給して欲しい。出來ることならば顯微鏡の一つ、望遠鏡の一つが與へられたら！分らずともお父さまのいろんな古い挿繪の入つた本も、オルガンの一つも、蓄音機の一つも。器械類のこわれも。バケツも……一切が彼等にとつて教育の貴い材料である。世界の名畫の二つや三つも欲しい。出來得べくんば時々繪をとりかへて頂きたい。

どうか玄關口の隅つこ位に、大事な第二世を押し込めないで、必ずよしや狹くとも子供の世界を、彼等自身の何人にも犯されざる領土を、與へて欲しい。そしてそこは小博物館でありたい。兎も、カメも飼つて下さればなほ結構。庭や畑も自由にいぢらして欲しい。

自ら蒔いた豆粒から芽が——フシギな芽が出た時の驚異。それが花を咲き實を結んだ時のうれしさ！ それが彼等を偉大にして行くのである。

しかも、一切を忘れ、何等の打算もなく、無我夢中の沒頭は、何と貴いことよ。子供は一切を捧げて遊んで居る。否、

學問をしてる。遊ぶことは子供にとつては實に貴い學問なのである。それにしても、もつと親に、大人に辛抱して貰ひたい。イタヅラだの、茶目だの、遊びだのと、決していつてはならない。

辛抱强い、しかも賢明なる親を要求する。そこには細心なる注意も入るから。干渉は望ましくない。

やがて長じては、子供は歌を要求する。お話を要求する。歌ひたい時に歌のないほど人生を虚僞と罪惡に導くものはあるまい。しかして、書けずとも讀め、讀めずとも聞ける。聞くといふことは四つ五つから盛にはじまる。或は一生の中、最も聽きたい欲求の强い時かも知れない。寢物語に祖母さんやお母さんが、種子が切れて苦しむのはその時である。大人からは、バカ〳〵しいやうな話も、しかも幾度聞いても喜ぶ。

その時である。もし、精選した話が、適當な分量に、適當な方法で與へられたら！　どうだらう。私共の學校で、尋常一二年頃に、聽方科といふものを特設して間東都の有名なお伽噺を盛に與へるのはその爲である。内容が豐富になり、想像力が豐かになり、讀書慾がそゝられ、或る意味の道德敎育ともなり、綴方科の進歩も促進される。

ゼヒ、日本のお母さま方に、世界の有名なお伽噺の研究をお勸めする。先づイソツプ、グリム、アンダーセン、ドンキホーテ、ガリバー旅行記、ロビンソンクルーソー、西遊記、弓張月、八犬傳、トルストイ物語、スチヴンソン物語、ギリシヤ英雄傳、太平記や源平盛衰記、義經傳、さてはミゼラブル、どこへ行く、愛の學校、更に進んで、世界の大文豪の作物の十や二十はゼヒ讀んで置いて頂きたい。子供達が讀まねばならぬ、世界の兒童文學は一通り目を通して欲しい。家事や裁縫は女中にでも任されるが、これだけはお母樣たちの大事な仕事の一つである。この意味に於ても、日本の女學校に大きな抗議を申し込みたい！

▲敎育行政官へのお願

敎科書の杜撰、法令のないこと、制度の不備窮屈、内閣の更迭每に敎育方針の變ること、文部省の無方針、固陋なる監督官、警察出の郡長、法科出身の敎育科長や知事、時代おくれの視學、黨派の利益ばかり考へる政黨屋、實に困つたものである。殊に國字問題の如き大問題が今に手がつけられない。甲府を「かふふ」、今日を「けふ」、王樣を「わうさま」と一々く讀まねばならぬ苦勞。子供も先生も大問題である。殊に幾萬

殺千といふ漢字。

教育院の設立を切に望む。內閣と對立して天皇直屬として、大審院や參謀本部と同列に、そしてその道の第一人者をおいて、國家百年の大計が樹てられて欲しい。

▲學校教師へのお願

「教育の秘訣は教育せざるにあり」とルツソオはいつた。その言や極端かも知れぬが、しかも吾々が大きに考へねばならぬものが暗示される。自ら進み行く偉大な力のあるものを、自ら自轉し得る貴い力のあるものを、餘りに教師の干渉が多い。教課書、進歩表、教案、細目、何れもが餘りに子供の實際から遠ざかつて居る。注文、詰込、劃一試驗、點數、成績表、卒業證書……すべて外的の機械的なもので無い創造的自動的存在物が機械化され、去勢され、硬化される。

その自ら動き得る自學の力を尊重して、それに方向を示し、それに參與し、それに備へてやることでありたい。

一體世の親も教師も、材料を多く覺える暗記教育を大事にする。暗記教育は、むしろ最も劣等な教育である。暗記の分量が決して教育のよしあしを決めることではない。材料や分量よりは、物を把捉し、研究し、探究する能力と研究法とが貴いのである。趣味が貴いのである。カントは常に學生を督勵して、「汝等は吾より哲學を遊ぶべきにあらず、哲學することを學ぶべきなり」といつた。エマーソンは「教育とは、學校で教はつたことを全部忘れて而して後に殘る處のものなり」といつた。材料も貴いが、その後に殘る、ツルバシ、能力、研究法が貴いのである。

だから、自ら試みさせ、行はせ、作らせ、發見させ、工夫させる過程が大事なのである、ドイツ青年教師等は「試行學校」Versuchsschule といつて盛んに自學自習自動の教育を尊重してるといふ。

事實、子供の力は偉大である。私はその前に跪かざるを得ない。尋常五年から中學へ入學した子供が最初の一ケ年間で中學校五ケ年分の代數を自修してしまつた。しかも他の教科も級中優等の出來榮えで。ラヂオ大流行の昨今とはいひながら子供達の手製の器械が三百哩もきける。汽車通、飛行機通、軍艦通、讀書力に、音樂に、實に驚くべきものである。どうして呑氣なミミズの歩みのやうな劃一教育が施して居れやう。吾々の教育主張に反對する人々は決局は、子供の偉大さを人間の偉大さを發見し能はざる愚人にすらならない。子供そのものを知らざる監督達や大人達が彼是と教育に干渉す

るほど危險なことはない。

個性の差を尊重して欲しい。力の差、速度の差、趣味の差、量の差。千變萬化である。尋常一年生にしても、入學の時、年齡の差すら十二ヶ月である。能力の差に致りては四年と八ヶ月もあつたといふ。(大阪船場小學校の調査)

これが小學六ヶ年間、中學五年間……一齊に、猫も杓子を取り扱はれるに至りては、何と殘酷も甚しからう。

事實優等生は一時間中五分間も習ふまい。時に少しも習ふまい。一生の中、非常な時間の浪費である。自然、傍觀をする。いたずらをする。不注意養成になる。優等兒の中から不良兒が往々出るのは其爲である。

私等が今迄の實際によれば、小學六ヶ年分の仕事を四ヶ年間位でやる子供が少くとも一割はある。しかも中學に進んでも、最優等生の多くは其子供達である。

試みに事實に際してみるがよい。尋常一年生に於て普通の小學校で片假名五十、漢字三四十を與へるに過ぎないに、私等の學校では、一年生に、片假名、平假名共に與へ、漢字の二千から提出する、優等生は千から收得する。劣等生すら三百から。讀書分量に致りては、普通の小學校で、あの薄つぺらな教科書を二册しか與へざるに、私共は、少くとも一ヶ年間百册を提供せされば國語教育が出來ない。本のない學校は眼玉のない學校ほどつまらぬ學校であると思ふ。

とにかく非常な力があり、非常な差があるものである。その差を尊重して欲しい。無論一方には非常に遲いものもある。それはそれでよい。飛行機は一時間に二百哩飛ばう。自動車は百哩も飛ばう自轉車は十哩も走らう、兵隊さんは五六哩は驅けやう。子供は一哩は走らう。ミミズは一時間に五間位しか匍ふまい。それでよい。各自が各自の速度を行けばよいのである。飛行將校に、ミミズの速度で飛べといふなら不可能のことである。ミミズにツバメほど飛べといつても不可能である。つまり今日の教育はミミズと蝸牛とツバメと汽車とに一緒に歩調をそろへろといふ教育である。それ位不自然な非教育的なことはない。

趣味の問題も同樣である。これはまた事實に貴ぶべきことの一つである。いふ意味は偏頗な氣隨教育を唱へるのではない。一方には全人教育を主張する程である調和的人格一般的陶冶がなければ偉大なる專門家は出來ない。全人的人格の中に、竹は竹、松は松、ダリヤはダリヤとしての完全境があるワケである。そこを目ざしたい。個性を沒却しては物は無である。死である。

その意味からいつても、自學自習の教育、個性尊重の教育、個別的取扱、萬人をして萬人にその處を得せしめたい教育が何といつても必要である。一切の進度表も、教課も、教材も、教案も、學級編成もみな子供を中心として考へねばならない。吾々の兒童中心を高調するのはその爲である。

▲感化、無意識の教育、よき環境

オストワルドはその著グローセメンナーの結論に曰はく「秀才教育に必然缺くべからざるものは本と暗示である。」と。本の必要は前にも說いたが、暗示は、實に必要である。秀才といふ秀才は、親か兄弟か、教師か、誰かな或る暗示を人格的感化を與へたものだといつて居る。

私達の家庭と、私達の學校と、私達の社會とが、學問的空氣、藝術的空氣、道德的空氣、宗教的空氣に滿たされたならば、もう、それで教育は半分出來上つたといつてもよい。教師や親の人格から迸り出る匂ひ、火花、それが實に子供を引き付けて行く。ノールソンに「獨創性」といふ本がある。同氏の所說に。どんな遲鈍な人間にでも必ず獨創性といふものがある。教育とは、その獨創性を刺戟してそれを啓培させることだと。

概念や論理ばかりでも行かぬ。直覺とか、神秘とか、感化とか、といつたやうなフシギな働のあることを知りたい。

この點に於て、親も教師も、常に進みつゝある人でありたい。ヂステルウエツヒのいへる如く「進みつゝある教師のみ人を教へる權利がある」のである。自ら自己の徳の足らず學の足らざるを嘆じて朝に夕に修養をいそしみつゝある人の下からでないと秀才は生れない。老成せる大家の下からでなくて、若き進みつゝある人の下から偉人が多く出たのは深い意味がある。

私の一友人、大毎記者の赤坂君が、香川師範の先生を止め帝大に入り、中途にして大毎の海外留學生の試驗に應じ、選ばれて渡歐する時、若きサヌキの青年學生に送つた手紙は、

教壇を下つて角帽をかぶり、今度は洋行する。君等もシツカリやれ。

と。この簡單なる手紙が、如何に若き人々をインスパイヤしたことか。果せるかな萎靡振はざる師範生の中から多數の高級學校へ進んだものが出た。

この意味に於て私は教育の力の偉大なることをも認むるものである。マーデンの著の卷頭であつた？次ぎの如き話がある。

獅子の子が路を失ひ、遂に迷ひ兒となり、羊の群に入つてしまつた。親羊に養はれて一緒に草喰べる中に、全く羊のやうになつて仕舞つた。獅子の氣性は見るべくもなかつた。

然るに或る日のこと、牧場で一緒に子羊達と草を喰べると岡の上の岩角から親獅子が大聲をあげてうなり出した。すると今迄羊かと思はれてゐた子獅子はツト頭を上げやには岡目がけて一目散に飛んで行つた。

といふ話がある。そこである。何か天來の響を聞く時に、萬人がかく奮ひ立つサムシングを持つてるのではなからうか。そして、その親獅子の吼號に相當する大なる暗示、刺戟が必要なのではなからうか。

▲敬

愛が教育作業に於て大事なものであることはいふまでもないことだが、敬の必要なことを世間の親と教師に認めて貰ひたい。「教師の秘訣は子供を尊敬するにあり」とはエユマースンの言である。子供の力量を尊敬承認せない處に、生長と發達があらう筈がない。

九州のさる評判の學校を見た友人の話に。教師が、劣等生二人を壇上に立たせ、作業を命じて他の衆生に向つて曰はく「皆さん見ておれ、どちらが出來ないかを」と。見た友人はあきれて參觀することを止めて返つたといふ。

何といふ殘酷なる仕業だらう。教育だか人殺しだか分らない。よく日本の親はお客の前なぞにて、「二男はいいんですが、どうもこの總領はダメです」なぞと本人を眼の前にしていふことがある。肝心な親がダメだといふんだから、これ位たしかな話はない。惡くならざるを得ない。私共が、試驗もせず、評點もつけず、席次もきめない理由の一つはそれである一體、「劣等生」なぞといふ言葉の存在することがいけない。

私は此の冬宮崎に行つて、エライ老女教師の一人に會した。曰はく

「尋常一年に入學した時に、五つか六つまでしか數へられなかつた子供が三ケ年間教育しました結果十五六まで數へられるやうになりました。「嬉しうございます」と。普通の教師ならば、劣等兒や低能兒と呼んで厄介視するのである。しかるを「よく進歩した」と喜ばれるその女教師に私は全く教へられた。聞く氏は石井十次先生の茶臼原の孤兒院で永く孤兒達を教育した人だと。ミミズの進歩を、醜中に美を、惡の中にも

善を、認め得る人でありたい。

殊に賞讃とか、或は人生盛意氣とかいつたフシギな精神の轉換作用、感化作用のあることを忘れてはならない。

▲いろ〱

述べたい細かいことが多い。本人の自覺とか、努力とか、學科の時期とか、いろ〱あるが、忙しい私はこれで筆を擱かして頂きます。世の敎師と親、特に母親の覺醒を望んで止まない

近い中に「母の爲の敎育學」を世に公にしたい。この國に立派な子供が一人でも生れて貰いたい念願からである。ストーナー夫人の「子供はどうして育てるか」、木村久一氏の「早敎育と天才」、ルツソオの「エミール」、フレーベルの「人の敎育」、ペスタロツチの「ゲルトルードは如何にして敎へしか」等の數冊がぜひ日本の臺所に並ぶ時代のあることを、「兒童の世紀」の爲に、日本の爲に、願つてやまない。

貧民少年の敎育に就いて

吉田圭

木賃宿から通學する「剃刀磨ぎ」の悴は、「何が恥かしいか」と尋ねられた時、

「惡い事をして、牢に入れられ、期滿ちて、いよ〱出獄する時、シヤバの人に顏を見られること」

と答へた。この兒は尋常二年生だ。勿論コレハ此子供の體驗ではなかつた。

ドローといふ子が居つた。上中流子弟の通學を途に待伏せ、學用品及金錢を强奪するを商買として居つたが、嘗て同宿のものの財布をカツパライ、橋梁の下にかくしたが、遂に發見せられて、刑事の手に渡され、隱したる現場へ刑事を案

内して「アソコデス」と、下の方を指さしつゝ、刑事の身體を下へ延ばすを見て後より川中へ、つき落した。このドロ一君は低能で、學校でも隨分テコヅツタものだ。

知己なる酒屋の小番頭より「コノ酒升ニハ蠅が這入つた、おまへにやらう」と言はれて、欣然として、兜のみをして、校庭に醉ばらつて女生にからかひつゝ、よろけ歩いた藤次郎君。强壯なる身體と、特に目立つて居る腕力を有し、算術は大好きだが、物を見れば、何でも盗みたい清一君、この子には兩親も……貰ひ子であるが、あきれはてゝ足尾の銅山へ親子緣切りでやつてしまうとまで泣いて學校へ訴へてきた。

お葬式があれば附近の寺々へ行つてお菓子をもらひ、爲めに學校を缺席する子供、——先生からきかれて「學校へ行くよりお寺へ手傳に行く方が得だ」と答へた子供。喧嘩をすれば野獸の如く齒牙を用ひて人にかみ付く子供。廊下に出て、時々頭が痛いと大聲にわめく子供——これは父親は大酒飲みだ。少し叱ると「先生の野郎」と、どなつて下駄を手にもつて、家に走り歸る子供。校長の合同訓話の席でも、委細構はず、組み合つて喧嘩する子供。學校から歸ると、カツパライの手先に使はれて、雜誌、蠟燭、蟇口などを盗んでくる子供。卒業後の希望と聞かれて藝者になると答へる女生。其他まだ色々と擧ぐれば數限りがない。

貧民の子弟は必ずしも十人が十人迄、皆斯くの如きもの許りではない。しかし兩親の大酒、遺傳黴毒其他の爲め、生れながらにして、既に怠惰、不節制、低格、低能及犯罪に傾けると思はるゝものの數は實に少くない。斯う云ふ少年を相手にして敎育をなさんとするの困難なるは、亦言ふを待たぬのである。

是等貧家の少年をかこむ環境及父兄の狀況は、少からず吾人を寒心せしめる。子供が盗んで來た蠟燭を、默つて自個の提灯に使用する人力車夫の父親、少し氣に入らぬと「先生の野郎」と許り、職員室に、どなり込む土方の父親、保護者會を開催すると、腹掛をかけて男の樣にアグラをかいて居るヨイトコマケの女親、隻脚で乞食を營業とする父親——それでも、廉恥心はあるので、往來で私達に逢ふと、横を向いてしまふ。酒に醉つては、近所の子供達に生殖の講義をする男。殊に木賃宿に到つては最も恐ろしい。私達は生徒が木賃宿から通學する關係上、關係木賃宿へ、よく「家庭訪問」に出かけるが、時とすると、「今晩は」と挨拶して這入る白首を目擊する。木賃宿から通學してくる子供は、其容貌で魂情でも、遊び振、言葉の使ひ方でも皆劣つて居る。いくら貧乏でも、まだく

一軒持つて居る勞働者の子供は幸福な方だ。尤も木賃宿生活のもの凡てが惡いと云ふ事はない。時には極めてシンプルな、眞摯な場面をみせてくれる事もないではない。或る年の秋雨の日、私の前任校で、一年生の生徒の父親が來觀したいと來校した事がある。此父親は今は親子二人の其日暮しで、木賃に泊つて居るもので、自分の悴が眼がわるいからして、敎室の席次を前の方へ變更して欲しいと豫め注文して來たものだが、今日は丁度仕事にもアブレたから、此頃開校した貧乏學校を一つ見物してやらう。且つは自分の悴が如何に取扱はれて居るかを見てやらうとやつて來た。此學校のモツトーの一つは「誰れでも同じ樣に」といふのであるので、校門をくゞつたものは、ボロ〳〵の印絆纒の勞働者でも、フロツク姿の視學殿でも、同じ椅子で、同樣にお茶の接待をする習慣なので、此日來校した父親も、應接室へ通され、例の如く私がお話相手になつて、色々と此種の學校の少しも普通の小學校に劣つて居ない事其他につき說明をした後、學校全體の施設並びに敎室を案内した。父親は敎室にて、自分の子供が一番前の机を占め、先生から色々と深切な取扱やら注意やらを與へられて居るのを見て、敎室を出てから、如何にも眞摯溢るゝ容貌を以て斯う云ふた、

「先生、私らの子供が、こんなに叮嚀に敎へて貰うなんて、誠に夢の樣です。親子二人で、食ふや食はずに、木賃泊りして居ると、つい自暴自棄になつて、グイ〳〵呷りたくなりますが、シラフの時は考へます、自分はもう餘命はない、出世は出來ないが、せめて、此の野郎丈は、人並みに讀み書きをさせいものだと。しかしそんな事は及びもつかぬ事だとあきらめてゐました。所が今日來て見せて貰つて、内の野郎も、チヤント人並に敎育して下さるのを見て、コレデ私も毎日働く甲斐が出來ました。もう自分は自暴自棄を起しません。此子の爲めにドンナ苦勞もしてやる積りです」

と。雨の日に來觀をしようとするものは極少い。雨でも降れば大抵木賃にゴロ〳〵して居るのだ。

又或る勞働者は、學校へ來て、自分の子供は年齡は十歲たが、戸籍面はまだ五歲しかならない。ドコノ學校へ頼んでも、入學させて吳れない。今度「お助け學校」が出來たと聞いて來りましたが、如何でせうと、床に土下座して頼み込むのだ。之れに對して、

「區役所でも、他の學校でも、構はない。そう云ふ子供こそ、此學校で御預りします。よろしう御座います。直ぐお

連れなさい。」

と云ふと、

「有難う御座います、先生、有難う御座います」と、眼から、ボロ／＼大粒の涙を出して、土下座したまゝ拝むのだ。細民はラッフだ。自分の子供に對して取扱が不公平だと云ふと、學校へ押し掛けてくる。酒をのんで暴れ込む。或る博徒の如きは自分の子供の指に負傷させたといふて其受持教員の指を一本折つてしまふと、血相かへて、學校へ飛び込んで來た。如何にもラッフだ。しかし有難いとなると、生一本の眞面目で、ボロ／＼涙を出して手離しで泣くのだ。こんな時は何か崇高の或者を認めざるを得ぬ。僞善な御上品を言ふてホントーの腹を見せてくれぬ上流紳士よりも餘程よい、しかし此等の幕は瞬間的だ。次の瞬間には極めて、分らずやの、エゴイスチックの場面が現はるゝ事も多いのだ。大抵は「此子供が悪いのは、やはり、親の身持ちや心掛けが、丸でなつて居ないからだ」と失望落膽する事が非常に多い。

斯ういふ親の子供でも、一年から四年まで四ケ年も、一所に手掛けると、離れがたい愛が感ずる。それが五年になつて夜學になると――東京市の細民小學校の制度によると尋常五年より夜學制が始まる、貧窮兒童をして晝間は丁場に勞働せしめ以て家計を助け、夜間學校へ通學し得る組織で――從つて十二三才になると、二三ケ月逢はないで居ると、見違へる程身長が延びる――丁度延びる時期であらうが――次にメッキリ容貌が變り、疲勞した樣な苦しい樣な人相となる。丁場の年長男丁のイタヅラやら、カラカイなどから、女生徒も、ずつと悪智惠がつく。容貌麗美な少女が、丁場内の便所から歸る途中、男丁よりキッスを受た事などあるといふ。身長も體重もメッキリ減少する。但し胸圍は割合に減少せぬ。或る年の統計では、同年齡の普通小學校の兒童に比し胸圍は太かつた事すらある、年長と體重が減じて、胸圍のみ增して居る、ツマリ不自然の發達をなして居るのだ。四年間も共同生活をして來た我等は夜學になつた生徒の日一日と悪くなつて行くのを見ると、何とも云へぬ感慨に打たれる。

貧民少年の教育は單なる教育ではいけない、職業的でなくてはならぬと言ふ。職業的といふ意味は、第一は學校が丁場を兼ねて日々學業と共に何程かの經濟上の實益をも收めしむるとを得べきものと云ふ謂で、第二には將來立つべき熟練職丁としての基礎的知識を授け、之に相應する人格教育をなすべき事の謂ひである。私は嘗て木賃宿より通學する、食ふや

食はずの生徒につきて感じた事がある。此生徒は極めてダラシナイ、盗癖のある低能兒であつた。此級の學用品がよくなくなると受持訓導の話をきいた。「いつでもあの子が盗るのです」と。私も呼んで叱つては見たが、どうも効果がなかつた所が、其父はいよ〱極貧に達したと見え晝間學校を退學せしめて、工場へ出し、夜學生として通學せしむる樣に餘儀なくせられた。丁度十四日の勘定日の翌日の事であつた。校庭の櫻の木の下に、一人の丁稚姿の子が笑つて立つて居る。私は卒業生が來訪したのかと思つて行つて見ると、そうでない、例の木偏のドロ棒の子なのだ。今日は生れて始めての半月分の日給を貰ひ得て、下駄、帶、鳥打帽を新調し、衣物も常とは異つてキリツと着て、大層ユツタリとニコツイて居るのだ。如何にも、うれしさうだ。聞くと、懐には、まだ五六十錢殘つて居る。樣子がすつかり變つてしまつた。あゝ百日の訓話よりも、半月の工場通ひの方が實益があつたのだ。私は今でもこんなにかわつた容貌を見た事は少ない。

この點について私は貧兒教育に於て職業教育は最も重要なる部分の一である事を確信する。しかしながら、今の日本では職業教育は往々にして職人教育となる。そは根柢に於て、あくまでも人格教育でなくてはならないのだ。ケレシエンシユタイナーの如く、人格尊重の職業指導教育でなければならない。貧兒と雖も「人」である、器械ではない。單なる職人と教へ込むのは、之れ大なる罪惡である。技能を授くると共に、不用意の間に無意識の間に人格の教育に薫ぜしめよ。抑も貧兒教育の要諦は、勞働によつて「立つ」事を自得せしめ、更に進んでは眞の「人」たらしむるにあると思ふ。ヒネクレタ、衝動的の、依頼心や迷心の強い子供及其兩親家族に對して、眞に心よりの同情同感がなければ、此事業に携れる事は出來ないのだ。更にトラホームはある、家庭へ行けば南京虫も居る、結核患者も多い――私の教へた子供の家庭で、考へて見ると、此病氣の爲めに、ポツリ〱と死の神へとられて、遂に一家全滅といふ家族も少くない、頭を見ればオデキや白くもで、一寸見た所でも、如何にも汚らしい。この非衞生な、傳染病に圍まれた人々に對して、雄々しく自己の生活を投げ出すのは、中々の事である。子供が先生とすがり付いてくる時、オマヘはトラホームだから手にはさわれないなぞといふ人は、貧民少年の教育は出來ない。教へる方でも、普通の小學校の樣に、一學級の兒童の學力が揃つて居らぬから、中々骨が折れる。「主よ、何處へ行く」と問はれて、我が小羊の爲めに羅馬へと答へたキリストの如くであらされ

ば教育する事は出來ない。地獄行きの人を濟床する事が出來なければ、吾も誓つて正覺を取らじと言はれた彌陀如來の心掛けがなければ教育する事が出來ぬ。斯ふ云ふ心掛けの人―賀川さんの様な方でなければ先生とは言はれないのだ。そう思ふと、日本の教育界は獨り貧兒教育に止まらず、殆んど凡てが皆「建て直し」を要する人々許りだ。私は自分では出來ないが、この滿身愛の人、觸るゝ所皆春風といふ人「光明藏三昧」の人斯く云ふ人こそ誠に貧民少年の先生だ。クリストは確かに此種の人と思ふ。支那の程明道先生もなつかしい人だ。今の世には、「諾」と「否」を常に明瞭に云へる人も欲しい。正義に向つて飽くまでも邁進する人も欲しい。しかしながら教育家、殊に貧兒の教育家としては、之れ等の力をもつと共に、人格の磁石力を眞に持つて居る人、其人と話をして居ると、光の内に包まれてしまふやうな感じを與へる人、即ち眞の全き「人」としての人物を要望して止まない。エマーソンの所謂「心靈の大海」に逍遙して居る人だ。此の全き眞人を目的として教育者は努力せねばならぬ。眞の「人」の教育は、教育者自らが眞の「人」にならねばならない。此意味に於て本邦教育界は正に心的一大革命を要すると思ふ。

私は此の全き「人」を靜坐法の故岡田虎二郎先生に於て見出すことを眞に喜ぶものだ。私は先生に師事して初めて人格の磁石力てふ事を、先生の身體から事實斯ふいふ力の溢れ出る事を感じた。靜坐法は單なる健康法ではないのだ。私は今でも自分のダメナノニ全く悲觀して居るが、先生に就いてから、初めて、今迄の自分が、全くの口頭人格、丁度盥中を往來する蟹の様なものだとつく〴〵思はせられる。エマーソンの言ふ如く、今の人は自分でわざ〳〵四つ足に這ひ廻つて、「牛の如く喰ひつゝ」喜んで居るのだ、眞の「人」としての享樂もなにも全く方向違ひの努力をして居るのだと特に痛感する。私の前に言ふた所は、岡田先生によつて、瞬時、朧げながら見せられたユートピアの實驗談だ。しかしこのユートピアは、いづれはレアルのものとなる時期があるであらうと思はれる。



讀書

窪田空穂

より馴れし机の前に今日かへりわが身愛しむ今更にしも

ひと月を人にまじりて遊びけり身の愛しきは忘れてありけむ

ひとりあれば身の愛しかり愛しきをありがひとして我がひとりゐむ

ひとりゐる我といはむやいにしへの秀でし人たちここに現なるを

學びてはものしることのたのしさに殘る命を我は換へなむ

吹く風のすずしくなりぬ讀みぬべく本をし見れば心のをどる

子の病めるころ

たたふるに足るらむものとわが家に病者なき日は藥師をたのみき

たのまれていやす總しらぬ藥師らは我にまさりてさみしくあるべし

少名神藥師佛とみ名呼びて藥師ある世を人のあこがる

庭前

しめり深き木したに散れる白萩のいささかの花よ今はなしと見しに

咲きいづや否やと見しを紅蜀葵殘るつぼみのくれなゐ含みぬ



演說一手販賣商

—モウリス、デコブラ氏作より—

在巴里　武林文子

この不思議な男は、フォリイ、メリクウル町に住んでゐました。彼は、玩具製造人、刺繡内職の女、產婆、女物の裁縫師、などの巣を喰つてゐる、もう古い虫ばんだ建物の五階の廊下の奥の左に住んでゐると誰かが私にその所在を敎へてくれました。私はまづ彼の名前に注意しました。

「M de Saint-Tibulle」

そして、扉の上に、四個の南京虫で刺した走り書の

『DISCOURS』

といふ表札を私はみました。——註、この南京虫は虫の南京虫ではありません、例の繪などを留める、頭の圓い平ぺつたい針のことです。——その表札のまはりには、鉛筆、ペン、白墨などでイヤもう落書がいつぱいです。『賣節漢！』『强盜！』『出齒龜！』『王黨萬歲！』まだもつと惡いのがありました。どうもこの復讐的の評價によると、私のこれから會はうと思ふ男は、なか／＼多くの敵を持つてゐるとみへます。

さて、私はベルを押しました。イヤ待つて下さい、それは普通のベルを押したのではありません、扉の隅つこに紐で長くぶら下げてある兎のアンヨを引張つたのです。と、なかでは驛馬の古鈴の鳴る音がして、間もなくムシウ、ドサンチビユウルが現はれました。

彼は、私を自分の洞窟へみちびきました。さやう、私は洞窟と云ひました、それはまさに洞窟です。彼の書齋はビジネスマンのオフィスといふよりも、確かに希臘の神秘傳授者の洞窟でした。紙片の盛りちらかつた黒いテエブル一脚、雜誌

の積み重なつた古い小簞笥、壁には（1837—1891）と書きこんだ大統領サヂカルノーの石版畫の肖像、ムシウ、エチヴエリイの筆になつた『瞑眩』、それから蠅の糞が星のやうにまきちらされた野牛狩のコローム繪などが懸げられてあります。マントルピイスの上には、議員年鑑、ピラミツドのやうに積み上げられた古い官報の山、和蘭チイスを思はせる臺のとれた地球儀などが雜然と座を占めてゐます。そして窓の前の椅のなかには一疋の狩犬が丸くなつて、喘息病のやうな調子で苦しさうに喘いでゐました。

ドサンチビユウル君は、肱掛椅子に腰をかけて私をまづぢつとみました。

彼は、蛇男の身體にねじり込んだ、淋巴的の英國術のやうな頭を朗かに擔いでゐました。彼は髭がありませんでした、彼は禿でした、彼の手は骨張つて、彼の大きな足はベルニイの舞踊靴をはいてゐました。

「ムシウ。」私は彼に話しかけました。

「あなたが御門扉におかゝげになつてゐる表札を拜見したところによりますと、演説があなたのおもなる產業で入らつしやいますやうですね？」

「ヘイ、さやう。何分われ〳〵は目下唖時代に生きてゐますので、拙者は演説の草稿で拙者のパンを得て居ります。われわれはこれまで黒い石炭、水力の白炭、そして海水の碧炭を知つてゐました。ところで今日では、われわれは現在唖の無色炭時代に逢着して居ります。その無色炭たるや、六千年以來、おしやべりをする人間の生存してゐるところには必ず存在してゐました。このおしやべりの石炭、もつと、委しく申上げますと、美言家の無煙炭、雄辯家の煉炭、喋舌婦人の炭團、それから能辯政治家の雀の頭（註、云ふまでもなく、これも本物の雀の頭ではありません、石炭の小さなかけらの俗稱です。）に對して二三非を打つ者もありますが、拙者はさういふ無色炭どもを大に祝福し且つ感謝してゐます。何故といつて彼等の凡てが依賴に來るのは私のところなんです。」

「なるほど、そこであなたはそれに對して何か專門がおありで入らつしやいますか？」

「イヤ別に、拙者は御注文次第でなんでも引受けます、たとへば、洗禮の後のテエブル・スピイチ、結婚披露の宴會で花嫁に呈する祝詞、といつた具合にね。そして原稿はいつも間違ひなく二十四時間内に依賴主へ送り屆けます。その効果ですか？それは保險附きです。拙者はその時と場合で巫山戲た調子でもやりますが、大に眞面目にもやります。キユウビイ

は一本の骨で洪水前の化物を造り上げましたが、拙者は内密でなかうどに祝言の席の祝詞も敎へて遣ります、それからほんの一寸の手間で晩餐後の一場の談話も縫ひとつてやります。その他、地租稅に關する演說でも、或はペルシアの藝術でも、或は靈魂の不朽性に就いてゞもね。」

「はゝあ。してみますと、ドンサチピュウルさん、演說があなたの生存理由だとしますと、四年目毎にあなたは稼業が繁昌し過ぎてお困りでせうな？」

「あなたの仰しやるのは總選擧のときの意味ですかな？」

「さうです。」

ドサンチピュウル君は一寸驚いたやうな顏をしました。

「つまり、千九百二十四年の五月十一日前のある期間の如きは、あなたの勞働過度の尤も長い骨頂でなければならなかつたでせうと私は申上げてゐるんです。」

私が重ねてから說明すると、

「どうもあなたの仰しやることはよく解りませんな。なるほど、大勢の候補者に演說を拵らへて遣るには遣りましたが、そのために拙者は少しも閉口はしませんでした。」

「へえ？」

驚いたのはこんどは私でした。

「然しなんでせう、王黨側の極右黨と社會黨側の極左黨との間には、ご承知の通りその間を橋渡してゐる二ダースほどの政黨があります、それらにいろ／＼違つた演說を工夫してお遣りになつたことは尠くとも事實でせう？」

「イヤ、それはあなたのお間違ひです。」

ドサンチピュウル君はあたまから反對しました。

「拙者の協力を乞ひにきた現在の代議士たちは、どれも拙者から同じ演說の原稿を受取つて行きました。

「同じ演說？」

「さうです。その演說は議會の總ての候補者に巧く適當してゐました、但しそれはかういふ條件のもとにです、――彼等は拙者に敎へられた通り、それに對する拙者の注意を嚴格に氣を附けるといふ約束のもとに。まあご覽になれば解ります。」

彼はかう云ひながら、リウマチスとみえて骨節をピシ／＼いはせながら立上つて、押出からタイプライターにした紙片を出して私に渡して、

「さあ、これがお客に渡した演說の見本です、これをご覽になると、この演說がどんな場所で、どんな時に、どんな人間によつてでも述べられ得たといふことがあなたはお解りにな

るでせう。」

と言ひました。

そこで、私の讀んだのはかうでした。

「親愛なる選擧者諸君！（王黨の候補者。）
我が親愛なる市民諸君！（共和黨の候補者。）
同志！」（社會主義の候補者。）

諸君の委員會では、今晚私に演說を要求しました、御安心下さい、私は極めて簡單にやります。諸君！乾燥無味なる議論の時代は過ぎ去りました、諸君は何を欲せられるか？實行！さやう、只實行あるのみです。此際、諸君が若し私に贊成下さるならば、諸君の御希望は間違ひなく實現されるでありませう。

われ〳〵が生存するところのこの(1)卑しむ可き制度はあまりに續きすぎました、もはや諸君はそれに終りを置くべきです、なんとなれば諸君の忍耐はもうこれ以上つゞけられないからであります。そして、その終りに到着する只一つの方法は(2)…………の獨裁に依るのみであります。生活難と稱する虎の眼をもつてゐる畸形兒は、いまや一歩々々デモクラシイの乳房を嘗め盡してしまひます、そしていかにも巧に政府の車をエゴイズムの底無し沼のなかへ導いて行きます。

お氣の毒ながら私は(3)…………の人間には反對しなければなりません。それから私の政見は數語にして盡すことが出來ます、私はそれを諸君にお示することに於て、前以て諸君の贊成及び諸君の大多數の投票を得るといふ確信を懷いて居ります。卽ち(4)…………稅を廢止することは目下第一の急務であります、何んとなれば、此稅は不公平で且つ無益であるからであります(5)所有する人々が、生產する人々の爲に拂ふ可きであるところの原則に依つてであります。(6)消費者が生產者の犧牲であるといふことは、事實に於て完全に不正でありませう。ジュウル、シモン氏は一八八四年にかういふことを云つてゐるではありませんか、曰く、『勞働の生產は、いかなる場合に於ても生產の勞働を越ゆるべからず。』明々白々の句であります、燐光の如き公理であります、それはわれ〳〵が我が社會の短艇を導くところの燈臺であるべきであります。然るに私の政敵の宣言のうちに、私は私の名譽に關する直接の誹謗をみました、彼は(7)…………………と云つて私を叱責して居ります。私は斷々乎として諸君にかう申上るに躊躇致しません、このムシウは噓言を吐いてゐるのであります。私の生活は、諸君のどなたもご覽になることの出來る水晶の花瓶であります、私は敢て高言致します。

いまや私は私の缺點のない過去の誇をもつて、超然としてゐるのであります、そして諸君の躊躇なき御決定を待つて居ります。私は諸君が、この正義と協存と進歩に燃えるが如く熱狂してゐるところの一人の正直なる男子に對して、何等の顧慮なく諸君の信頼を與へられむことを確信してゐるのであります。(終)

注意。各黨派によつて差替へる文句。

(1)「卑しむ可き」この形容詞は彼等の意見がどうであつても、一切の候補者に有効である。

(2)最も敬愛するPritendanの(王黨。)
法律尊重による秩序の(國民黨。)
プロレタリアの(社會黨。)
モスコウの(共産黨。)

(3)卑劣漢(王黨。)
反動政治の陣笠ども(共和黨。)
賣節漢である破廉恥なる資本主義者(社會主義黨。)
最も下等なる不潔漢(共産黨。)

(4)所得(王黨。)
地租(自由黨。)
營業(商工黨。)
俸給(社會主義黨。)

(5)所有者と生産者の位置をとりかへること。(各黨派の主張によつて。)

(6)の場合、農業地方ではこの反對即ち「生産者が消費者の……」とする。

(7)カソリツクの支配を待つ(王黨。)
トロツキイの家來である。(共産黨。)
コメデイ・フランセイズの一女優の肩入れである(國民黨。)
食事の間に坊主を喰ふ(急進社會黨。)

以上

ドサンチピュウル氏が、私の手から彼の原稿を受取つたとき、私はかう云つて彼を祝福しました。

「ムシウ、あなたは確かに雄辯の『Ford』自動車と異名を差上るだけの價値があります、何故ならば、あなたはかういふ奇蹟を實現なすつたからです、それは、内部で自由に差替へられる部分を持つてゐる演説の行列を製造するに就いての、修辭上の標準をおたてになつたといふことです。」(終)

文藝講座

（第五講）

小說作法講話

森田草平

四）寫實主義と浪漫主義

で、あらゆる眞面目な作家は、前にも云つたやうに、想像されたる事實の系列を藉りて、或人生の眞理を體現することを目的とする點に於ては一致したけれども、なほその目的を達成する上に、各自の執つた態度に從つて、二つの相對立する集團に岐れた。そして、その結果として、又自づから小說家の間に二つの流派を生ずるやうになつた。所謂寫實派と浪漫派とがそれである。

處で、この寫實主義と浪漫主義との區別は可也根本的なもので、深く人間性の本質に根ざすものである。何人と雖も、自ら意識すると否とに係らず、その思想の傾向は必ず浪漫主義か寫實主義かの何れかに岐れてゐる。生れながらにして寫實主義者である處の讀者は、同じやうに小說を讀ませて見ても、スコットよりもエリオット若しくはアウスチンを採るだらうし、浪漫主義者である處の讀者は、フローベールよりもヴイクトル・ユーゴーを選ぶことであらう。併しいづれの趣味がより高尚であるかなぞと云ふことは、俄に斷定されない。たゞこの場合讀者の好尙は生れながらの性癖と思惟の習慣的經路とに基づくものであることは爭はれない。處で、それ程根本的のものであるにも係らず、兩者の區別に關してまだはつきりした斷定的な定義が下されてゐないのは、何の故か。古來いろ／＼な解說を試みたものはある。しかも科學的で、吾々の滿足するに足るやうな解答はまだ下されない。

或者は云ふ、寫實主義者はあるが儘の人生の姿を示さんとし、浪漫主義者はあるべき人生の姿を示さんとするものであ

ると、あるが儘の人生とは所謂Seinの世界（自然）であり、あるべき人生とは所謂Sollenの世界（理想）である。卽ち自然を描くか、理想を描くかに依つて、兩者を區別せんとするものである。が、この區別は決して徹底的なものではない。いくら浪漫主義者でも、自然を離れて理想を說く譯には行かない。あるが儘の人生を度外して、あるべき人生を描くことは出來ない。現に浪漫派の巨匠ヸイクトル・ユーゴーは、その大作「レ・ミゼラブル」の中で、フローベールがその「ボヷリ夫人」の中でしたと同じやうに、あるが儘の人生を如實に描き出さうと努力してゐるではないか。成程、寫實主義者の或者は理想を描くことを極力排斥した。が、そんな事をするのはただ取材の範圍を狹めるに過ぎない。自由奔放であるべき作家が、何時までもそんな窮屈な制限に甘んじてゐられるものでない。レオ・トルストイは人も知る寫實派の老大家である。しかもその殆どあらゆる作品に於て、あるべき人生卽ち理想を說いて已まないではないか。これを以てこれを見れば、寫實主義の手法を以て理想を說くことも出來れば、同じやうに浪漫主義の手法を以て現實の人生を示すことも出來るのだと云はなければならない。つまり寫實主義と浪漫主義との區別は、それ等のものが何を體現するかと云ふ所に、卽ちその材料にあるのではなくして、その材料を體現する手法若しくは作家の態度にあつて存するのである。

或者は又云ふ、浪漫主義者は主として小說中の筋（又は事件、原語では(action)に重きを置き、寫實主義者は性格（character)に重きを置くと。この區別も亦往々にして事實に副はない。例へば、浪漫派の作家の描いた性格ドン・キホーテとか、モンテ・クリストとか、ジヤン・バルジヤンとか云つたやうな人物は皆寫實家の手に成つた偉大なる性格と同じやうに、それぞれ個性を具へて、明瞭に描き分けられてゐるではないか。それと反對に、寫實派の作家の描いた事件、例へばラスコリニコフの婆さん殺しとか、アンナ・カレニナの自殺とか、「戰爭と平和」の中のボロヂノの戰爭とか、モスクヷの大火とか云つたやうなものは、浪漫主義者の作品の中へ出て來る事件と同じやうに、皆張瞬駭目すべき非常の出來事ばかりではないか。それに、この區別に據れば、筋と性格とのいづれにも同等の重きを置いた多くの小說をどつちへも片附けることが出來なくなる。しかもさう云ふ作品は決して少なくない。何となれば、小說作法の上から見て、性格を說明するものは事件であり、事件は性格の外部へあらはれたものに過ぎないから、そのいづれに重きを置くなどと云ふことは、到底

云ふべくして行はれないことであるからである。この見地から見ても、兩者の區別をかう云ふ風に立てると云ふことは、全然意義のない骨折りだと云はなければならない。

或ひは又かう云ふことを云ふ者もある。寫實主義者は自分と同じ時代、同じ場所の風俗を寫すが、浪漫主義者は遙に離れた時代や場所の風俗を描くものであると。が、この區別も殆ど取るに足りない。スチーブンソンの「新アラビヤの夜話」は、あの有名な自殺倶樂部の話でも分るやうに、本質的に浪漫的なものである。しかもそれは作者がそれを書いた時代の倫敦や巴里の風俗をその儘取つて來て背景としたものである。それと反對に、エリオツトの大作「ロモラ」は本質的に寫實主義の作品である。しかもそれは伊太利に於ける中世紀の都會フローレンスとその時代の人物とを取つて題材としたものである。フローベルの「サラムボー」に就いても同樣の事が云はれるのである。

又或學者は寫實主義の定義を消極的に下して云ふ、寫實主義者はあるが儘の人生を如實に描かうとするために、日常平凡の瑣事をも、不快な事象をも寫すことを避けない。これが寫實主義の特徴であると。成程、ゴンクール兄弟の寫實主義はそれを避けない。が、同じ寫實主義者でもジョージ・メレヂスはそれを避ける。要するに作家が不快な事實を避けるか避けないかは、その人の性質に據るものと云はなければならない。同じ寫實主義者でも、エミール・ゾラはそれを避けないが、ジエーン・アウステンは斷乎としてそれを斥ける。しかもアウステンの作は寫實主義の精妙に入つたものである。それと反對に、アラン・ポオの作は浪漫主義の極を行つたものであるが、或種の不快な事實は避けてゐない。少くともアウステンのそれよりは避けてゐない。で、かう云ふ風に幾多の除外例がある上は、この定義も全般に亘つて通用するものとは云はれない。

以上、世に行はれてゐる寫實主義と浪漫主義との區別に關する定義を幾つか檢査して見たが、それ〳〵缺くる所があつて、いづれも完全なものとは云はれない。これを要するに、それ等の解說は皆この兩派の區別を作家の選んだ題材若くは材料に求めようとしてゐる。が、眞の區別は、題材は何うあらうとも、寧ろその題材を取扱ふ作家の心の態度にあるのではあるまいか。實際、これは浪漫的な材料だとか、これは寫實的な材料だとか云ふやうなものが、世の中に存在する筈のものではない。同じ材料が、或作家に依つては浪漫的に、或作家に依つては寫實的に取扱はれるのである。ホオソー

ンに、「サイラス・マアナア」の材料を取扱はせたら、浪漫的に取扱ふだらうし、エリオットに「緋文字」の題材を與へたら、矢つ張り寫實的に取扱ふであらう。フローベールに「レ・ミゼラブル」の題材を與へ、ユーゴーに「ボヷリ夫人」の材料を取扱はせても、同樣の事が云はれやう。從つて兩派の區別を題材の上に立てることは到底出來ない。眞の區別はその題材を表現する作家の態度にあるのである。即ちその區別は表面的でなく、內在的である。作家の心に住する。哲學的研究の題材であつて、文學的研究の事項ではないのである。

で、若し寫實主義と浪漫主義との哲學的區別を作家の心の態度に求めようとすれば、吾人は勢ひ前に說明して置いた創作心理の三つの段階に立戻つて考へて見なければならない。人生の眞理の科學的發見、哲學的理解、藝術的表現は、その寫實主義者なると浪漫主義者なるとを問はず、どんな作家にも共通な創作心理の三階段である。處で、兩者がその哲學的理解の上に一致して、同じ人生の眞理を握つて立つたとするも、寫實主義は寧ろその眞理に到達した科學的發見の經路を振り返り勝ちであり、浪漫主義者は寧ろ前方の藝術的表現の上に眼を注ぐものであるといふことは出來なからうか。例へば、ここに寫實主義者と浪漫主義者と二人の作家があつて、實人生に於ける同一の事件と同一の人物とを研究したとせよ。更に又彼等がその事實の奧にある同一の眞理を摑む點に於ても一致したとせよ。そして、二人ともその一致せる眞理を體現せんとして、共に小說の筆を執り始めたと假定せよ。寫實主義者は、同じくその眞理を體現する上にも、自分がその眞理に到達した經路に重きを置いて、讀者にもその經過を呑み込ませるために、最初自分が觀察を始めた點に立ち還つて、然る後同じやうな想像上の事實の研究を讀者にも通過させた上、讀者をも自分と同じ哲學的理解の上に立つて、同じ眞理を把握させようと力めるものではあるまいか。これに反して浪漫主義者は自己の摑んだ眞理を體現する藝術的經過にのみ重きを置く。從つてその眞理を明白に且つ力強く體現することが出來さへすれば、その目的のために選擇した想像上の事實が、前に自分がその眞理を發見するに到つた實際の事實と符合しようがしまいが、そんな事にはあまり頓着しないのである。

で、以上の區別を約言すれば、自分の摑んだ眞理、即ち作家の人生觀を體現する上に、寫實主義者は表現の歸納的方法を採り、浪漫主義者は演繹的方法を採ると云ふことが云はれよう。

思惟の經路としての歸納法と演繹法との區別は、誰でも知つてることだから取立てゝ說明する程のこともあるまい。簡單に云へば、歸納法とは個々の事實から一般の原理に到達するものであり、演繹法とは逆に一般の原理から個々の事實を說明せんとするものである。この二つの傾向は何人でも持つてゐる。が、その中にも、主として歸納的方法に據る人と、主として演繹的推論に支配されてゐる人との別が自づから存在してゐることは爭はれない。例を擧げれば、近代の倫理學者は大抵歸納的傾向を有つてゐるし、在來の宗敎家は皆演繹的立場に立つて獅子吼するものだとも云はれよう。科學者は主として歸納的に物を考へる。恰度ニウトンが林檎の實が落ちたと云ふ事實からして引力の大原則を發見したやうに、特殊から一般の原則に行く。これに反して、大詩人の多くは演繹的立場に立つ。そして、原則から出發して個々の事實を說明しようとする。詩聖ダンテは天地開闢論の一般的倫理概念から地獄、錬獄、極樂に於ける特殊相を推論した。寫實主義と浪漫主義との相違もこんな風にして說明することは出來ないからうか。卽ち或人生の眞理を體現する上に、前者は歸納的に働き、後者は演繹的に働くと云ふのである。

讀者に對して或人生の眞理を說明するために、寫實主義者は先づ自らその眞理に到達したと同じ實人生の事實、少なくとも出來るだけそれに近似した事實を讀者に示さうとする。かくの如く汗水垂らして實人生の事實を眞似るのは、次の樣に云ひ得んがためである。曰く「吾はこのやうな人生を見た。そして、そこからかく〳〵の眞理に到達した。それを今諸君に語つてゐるのだ」と。彼は一歩々々讀者を特殊から一般に導く。そして、讀者を自分の示さうとしてゐる眞理に連れて行く。で、最後に於ては、讀者は單　それ等の眞理を知るばかりでなく、作者がその眞理を發見　るに到つた經路をも知るやうになる。例へば、トルストイの「イヴン・イリリツチ」を讀んで、吾々は單に作者が語らうとしてゐる人生の眞理を學ぶばかりでなく、作者が何うしてさう云ふ眞理を知るに到つたかと云ふ經路をも敎へられるものである。

處が、浪漫派の作家はこれと反對の方向に出る。卽ち一般から特殊に連れて行く。彼は自分が何うしてさう云ふ一般的概念に到達したかと云ふ經路を示さうなぞとは考へない。ただ自分の有つてゐる一般的概念を明確に、有効に傳へようとして、それに自分の欲するが儘の特殊な例證的體現を與へる。作中に描かれた想像上の事實を出來るだけ實人生の細目に近似せしめようなぞとは考へない。たゞ自分の持つてゐる觀念を適當に、有効に、矛盾する所なく表現することにのみ

腐心するものである。スチーブンソンは人間が二重の性質を有するもので、贅澤に馴れては、漸次惡の性質が善の性質の上に勝利を得て、終に全人格を占領するに到るものだと云ふ眞理を認めた。しかも「ジキール博士とハイド氏」の中では、決して歸納的に表現しようとは企てなかつた。何う云ふ種類の人生の觀察からこの結論に達したか、その次第を讀者に示さうとは少しも努めてゐない。彼はたゞ善惡二樣の性質から代る〲その全人格を支配されると云ふ、所謂二重人格の人物を捻出することに依つて、その思想に體現を與へた。そして、その話を演繹的に組立てた。即ち一般の概念から始まつて、特殊の條件に導いた。この作の中に語られてゐる出來事は、實人生にはあり得ない事柄だけれども、尚且この作は人生の眞實を語つてゐる。寫實派の作品と同じやうに眞實性を有つてゐる。しかも作者は、さうするために、決して自分の研究した實人生の細目を眞似ることを敢てしなかつた。作者はたゞ云ふ、「吾は人生に於てかくの如き眞理を知つた。それを明かにする小説こゝにあり」と。

で、寫實派と浪漫派との作風に關するこの分け方は哲學的である、根本的である。從つてあらゆる場合に當て嵌めることが出來る。その點に於て、前に擧げたさま〲の分類法に優つてゐると云はなければならない。それに歷史的に考へて見ても、文學の發達が人類の思惟の方法の發達に伴つてゐることは明瞭に看取される。古代から中世に到るまで、總ての哲學者は皆演繹的に物を考へてゐた。フランシス・ベーコンに到つて、始めて歸納法が眞理の探究に最も有効な方法として暗示された。そして、その歸納法に基づいて、澎湃たる近世の科學が勃興したのである。勿論、さうなつても、演繹法が思惟の方法として全然影を沒した譯ではない。たゞ在來の唯一無二の方法としての帝位を失つたと云ふに止まる。それと同じやうに、文學の方面でも、希臘羅馬の時代から中世へかけて全く浪漫派の天下であつた。寫實主義は科學の勃興につれて、その影響から生れたもので、嚴密に近代的産物である。勿論、それに依つて、浪漫派の文學が全然影を潛めた譯ではない。たゞ在來の帝位を失つたと云ふに止まる。で、これ等の點から見ても、浪漫主義が演繹法に據り、寫實主義が歸納法に則るものであることは、略想見されようと云ふものである。今は何人もそんな事を信ずる者はあるまいが、一時シエークスピアの傳記が曖昧模糊としてゐる所から、あれはベーコンが假名の下にあんな作をしたのだと云ふやうな浮説の行はれたことがある。併しベーコンが作をしたら、その主張から云つても傾向から云つても、寫實主義者になつた筈で、シエークスピアのやうな、あんな浪漫的なものは書かなかつたらう。これから見ても、その説の取るに足りないことは明白である。

以上說く所に依つて、寫實主義と浪漫主義との區別はほゞ明瞭になつたとする。では、これを我國の作家に當て嵌めて見ては何うか。我國の文學は、兎にも角にも獨自の發達を遂げて來たもので、最近に到るまでは、西洋の浪漫派の影響も受けなければ、自然派の潮流にも屬しなかつたものである。が、若し以上說いて來た兩派の定義が學問的であるならば、それに依つて如何なる作家をも律し得られる筈である。試みに、故人夏目漱石先生を採つて見る。一體、先生の作品は寫實主義に屬するものであるか、それとも浪漫派に屬するものであるか。先生が生前絶えずその當時文壇を支配してゐた我國の自然派に對して挑戰的態度を持してゐられたからと云つて直ちに先生自身の作品を浪漫派に歸してしまふことは許されない。先生の作品には隨分寫實の要素がある、その精妙なるものがある。又先生の作品に醜い、不快な事實が取り入れてないからと云つて、浪漫派の作家にする譯に行かない。さうかと云つて、又先生の作品には先生と同じ時代、同じ場所、甚しいのは直ちにその身邊から材料を取つたもの（例へば「猫」「三四郎」の如き）が多いからと云つて、早速寫實主義にするのも矢つ張り早計だと云はなければならない。がたゞかう云ふ事だけは確實に云はれるやうである。先生は常に先づ何か知ら書きたいことがあつて、然る後その一般的概念にだん〳〵肉を被せて行かれた。その肉となる個々の事實はたとひ先生自身の周圍から取られた實際の事實であつても最初は先づ何か知ら一つの觀念があつて、それからだん〳〵演繹的に進んで行かれたことだけは爭はれない。「草枕」や「虞美人草」はその傾向の最も著しくあらはれたものである。その後の作品、例へば「彼岸過ぎまで」などのやうに、最初にたゞ或形式だけがあつて、たゞ何となく書いて行かれたものもないではないが、大體から云つて先生の創作に對する態度は、常にさう云ふ風であつたと云つて差支ない。この點から見れば、先生は紛れもない浪漫派の作家である。

で、かう云ふ風に、自分の經驗なり觀察なりを成るべく自分の經驗した、若しくは觀察したまゝの形に於て、それに近似したものを描き出さうとする作家と、反對に、最初に先づ一つの觀念があつて、だん〳〵それに骨を與へ肉を着けて行かうとする作家と、二樣の作風のあることは、別に新しい說でも何でもない。從來獨逸の美學者の間に屢々說かれたものである。そして、前者の例にはウオルフガング・ギヨエテを、後者の例にはフヨードル・シラアを持つて來るのが常であつた。たゞこの二樣の作風を寫實主義と浪漫主義とに適用して、そこに兩派の區別を見出さうとした所に、私がこの講話の臺木としてゐるクレートン・ハミルトン氏の手柄がある。そして、この功績は一篇の氏の著書の中でも最も大きなものと信ずるから、二たびその名を擧げて置く次第である。

世界婦人欄

「ラシアの婦人」

千葉龜雄

"Russ a's Wowen"
NINA NIKOLAEVNA SELIVANOVA

この本の著者ニイナ・ニコラエヴナ・セリヴアノヴアは、から云つて居ます、この本の目的は、ラシア女性の物語によつて、ラシアの運命に對する、簡單明瞭な觀念を與へやうとするものであります、と。

また曰く、「ラシアの研究はこれまで多く出てるが、ラシアの婦人に關する研究は未だ出て無い。が、それは一番必要なのです。それは單にラシア人にとつて必要なばかりではなく、ラシア婦人の進出した道筋を知ることはまた他の國民にも必要なのです。それは第一に、ラシア婦人の運命が、國民の運命と取離し得ないほど密接に結び付いて居るから。第二に、凡ての人によつて、ラシアの婦人が、全歴史を通じて、どの國よりも、極めて惡い狀態に置かれたものだと思はれるけれども、さればとて、その狀態の惡いことは、決して他の國の婦人も、ラシアのそれに劣らぬほどひどいものであつた事、第三は、自由と、男性との平等を克ち得やうとする彼等婦人の苦鬪は、彼等が、いかに獨立に對する天性の愛を持つかを示し、それは一時の暴力で抑へつけられても、決して永遠に絕滅し得ないものであることを示して居るからです……と。

それでもわかる通り、この本は、ラシア女性と自由獲得の歴史とでもいふべきものです。そして原始から現代に至るラシアの婦人が、ラシアの政治及び社會狀態の上においてどんな大きな役目を働らき、どんな影響を持つて來たかを明晰に說ひたところに中心があります。そして私はこれを讀んで、ほゞ四つの深い感銘を、このラシア婦人の社會歴史相から享け入れるのであります。

第一は、ラシアの婦人が原始狀態において非常に勇敢なものであり、どこの國でもがそうであるやうに、「原始太陽は女性である」ともいへるほど、彼女等が男性の上に、或は男性と同様な、强い權力を持つて居つたと云ふことであります。卽ち異教徒であつた頃の原始ラシアの叙事詩などを見ると、婦人が戰士として、男子よりも勇悍なものとして考へられた事もあるほど、それほどラシアの婦人は戰爭好きであつたのです。たとへばキエフの婦人射手が、自分よりもすぐれた射手を求めて、それと結婚する爲に高原をさまようたとか。またはシイヤトオスラヴとギリシアの戰爭では、戰死したスラヴ人の間に、澤山の婦人が在つたとか。

從つて結婚においても、婦人の自由が絕對に尊ばれて居て、兩親の意見は何の力にもならない。一切その婦人の思ふ通りに結婚が行はれて居たのであります。たとへばウクライナにおいては、結婚の習慣は、どこの國でも夫が妻を擇ふのが當り前なのに、ここでは夫の方が、將來の妻によつて擇ばれることになつて居ました。その風俗は十七世紀の終期まで殘つて居たが、それは原始ラシアの女人萬能社會の記念なのであります、それで結婚後もやはり夫と同じ權力を持ち、戰爭に出て夫に代つたとか、入牢の夫を救ひに行つて、三

人の男士と相撲をとつて悉く投げつけたとか婦人武勇傳の記事に富んで居ます。

けれども、部落の群が酋長によつて支配され、その各酋長の上に威力ある一酋長が統治するところの、現代國家の元が築かれるやうになり、酋長が、全家族の主權者になると共に、どこの國も婦人の勢力は男性によつて壓迫されて來ます。ラシアもやはりそれです。男性が外へ出て戰爭し、糧食を運んで來る。婦人は子供を養ひ、家事を見て、その持つて來た糧食を食べる。かうして生活の資料を男子に仰ぐやうになると共に、ラシアでは、やはりどこの國でものやうに、婦人がすつかり自由の權利を奪はれて了ひました。たとへば「Терем」と言ふ言葉があります。わが國の王朝時代には「几帳の蔭」から男性をのぞくのが宮廷女性のつゝしみだと言はれましたが、テレムはまあそう云つたやうなものです。「それは家屋の奥、或は屋根部屋のやうなずつと上のところへ、婦人がいつも閉ぢ込められて居る。テレムの鍵を持つて居るのは家主である。テレムの外は、高塀でめぐらされて居る婦人は人に見られぬやうに庭を散歩する。」それは取りも直さずトルコのハレムであり、支那の閨房であり、要するに、遮斷と閉鎖の爲の婦人室であつたのです。詩人歌ふらく、

廿七の錠の奥に彼女が棲む、さうだ、廿七の鍵で錠をかけられた部屋々々の奥に彼女が棲む。風も彼女の顔を涼しくされぬ。日も彼女の顔を焦し得ぬ。またそれは若人が彼女の顔を見られぬために、

これから以後の、ラシア婦人の結婚史は、全たく涙と壓迫と悲慘のそれであります。父兄の壓迫、男性の壓迫、その上に、皇帝アレキセイ十七世頃からは、結婚は政府と皇帝の命令でさへもあり、十九世紀になつてすらも軍人殖民地ではその法令がそのまゝに行はれて居ました。

神様の意志で、ザアの法令で、主人の命令で、社會の裁斷で（シャスコフ）

或はこの頃は、寡婦が結婚するのさへも道徳から許されませんでした。殊に僧侶の寡婦が結婚したならば、彼女は他の罪人のやうに、やはり地獄で苦しむべきだと考られて居ました。一言にしてこの婦人壓迫時代が、私の撲たれた第二感銘です。

然るに婦人を救ふものはやはり女性でした。一七四一年から一七九六年に亘つて、ラシアに二人の女帝の出現した事によつて、さしも壓迫の殼窟にいためつけられたラシア婦人たちの要求の若木が、そこにいさゝかの生長の日光を見出したのです。女帝の一人はペエタア大帝の皇女、エリザベスであり、もう一人はカザリン大女帝であります。當時のラシアの女性がいかに無學であつたかは、ペエタア大帝の皇后カザリン一世が、自分の署名さへも出來ず、またエリザベス女帝が、大英國が島國であることさへ知らなかつたといふのでも分りませう。

そこで兩女帝は、まづ第一に婦人の教育に目をつけたのですが、それでもエリザベスの教育の意味は、たゞダンスとか、行儀作法とか、外國語の知識とか、割合に表面だけの婦人教育を云ふのでしたが、それによつてすらも、なをいくらか、内にとぢ込められた婦人を宮廷外に解放する力にはなりました。それはエリザベスの命令して建てた婦人の學校がたゞ二つの產婆學校であつたのでも解りませう。けれどもラシア婦人の解放を豫約するところの、知識階級の二婦人が、こゝに生れた

事を忘れては可けません、それはカザリン・スマロコヴアと、小說的な歷史を持つたナタリイナであります。

次の女帝のカザリンこそは、あらゆるラシア統治者の中で、藝術、文學、藝術に對する最も熱烈な保護者でありました。フランスの文學が非常に入つて來て、フランス劇場とイタリイ樂劇が起つたのもこの時、藝術院、經濟研究會、科學院が起つたのもこの時、科學院の院長として、ドシコヴア內親王が任命されたのもこの時です。勿論それと共に、女帝は婦　の教育を非常に奬勵しました。チ　デイフキナ夫人が、「娘達は學問がない方が、嘘を多く言はなくて好い」とて、女帝の熱心を冷かしたにも、一般の世態は解りませう。しかしカザリンが逝いてから、この教育熱がまた衰へて、政治的にも、社會的にも、婦人を劣等視する觀念が復歸しました。が一たび婦人の胸にたきつけられた自由の望みの火は、もう、どうしたつて消えつこがありません。却つて壓迫が加はれば加はるほど、なを反抗が强くなります。野上彌生子さんが本誌で傳へた、稀世の知識女人、ソフキヤ・コヴアレヴスカヤがこの時に生れたのも不思議はありません。これが第三の感銘です。

「貴族的な家族に生れた娘達は、一文無しで都市に突進した。家庭の束縛から逃れ、その結果、結婚の束縛から逃れるための、何等かの職業を求めやうとするのだ。彼等は個人の自由を獲た。今や彼等は、その自由を開展しやうとするのである。それも彼等自身の享樂の爲にではない、たゞ、彼等が、彼等自身をそれによつて解放したところのその知識そのものを、一般民衆に押し廣めやうとする爲であつた」。

けれども、その頃のラシアにあつては、社會の自由を求めやうとする者は、どうしても政治に眼を向けねばなりません。そこで娘達が、小學校教師として、產婆として、地方に行き、そこで貧しい民衆の解放を行はうとしたところの、ナロオドニキの運動は、一つの革命として專制政府の反感をそそらずに居ません。しかし、それが革命的青年と婦人を結び付ける機緣になつて、「十二月十四日」の暗殺事件の時の如きは、革命にあづかつた男性達のために、若い女性達が遠いシベリヤの流謫地まで一緖に從ひ、共に苦辛を嘗めたラシア女性の情感の雄々しさは、そして意志の强さは、どんな人にも、感激を强ひずには止まぬでありませう。それから以後一九一七年まで、ラシアの革命に從つた男性犧牲者の影に、どんなに勇敢な、若い知識の女性が多數に居たかは、とてもこゝに述べられぬほどの多彩なロマンスに富んで居るのであります。これが第四の感銘です。

大戰以後の革命に働いた女性についても、なは語りたい事は多いのですか、しかし許された頁は疾に超過しました。が、私のこの本に持ち、語らんとする興味はまだまだ非常に多いのです。たゞ「知識が女性に持つ歷史の力」といふことだけでも、この本は、無數の教訓を私に與へて呉れます。

美女の秘訣

大橋　房子

化粧美

ほころびは醜態の第一歩である。凡ての技

巧ば破綻のへの字もほの見せぬ限りに於いて美と呼はれることが出來る。だから技巧の美的效果を美的效果たらしめる爲には、頭のよさが必要だといふことになる。

女の化粧ほど美たらんとして醜に陷り易いものはない。のりの惡いお白粉、濃淡の目立つ衿、お白粉の下に透いて見える地肌——否それよりも、日本の女は何故額にお白粉・塗る時、塗る手の色を考へることが出來ないのだらう。手ばかりではない、着物の裾にいやでもほの見える脛の色をどう考へてゐるのであらう。

外人が日本の女を評する場合よく Painted といふ字の使はれるのを耳にする。其處には露骨な侮蔑の氣持さへ蓄いてゐる。歐米の女の Powdered Lico 或ひは Powdered nose と日本の Painted Indiaa との間には、一種の人種的優劣さへ暗示せられてゐるやうに思はれる。彼女等が粉白粉を用ひるから Powdered で、我國女は煉白粉を使ふから Painted だといふ解釋はあまり單純すぎる氣がする。とにかく煉白粉化粧法は破綻を生じ易い點に於いても、考へものではないだらうか。

巴里女の化粧

最近巴里の女も塗りすぎる傾向はある。塗りすぎるといつても、日本の煉白粉化粧ほどあくどい感じは與へない。一つには彼女等の用ひる化粧品が化學的に精選せられたものである爲もあるだらうが、化粧に對する彼女等の頭が我々のそれより遙かに科學的であるからでもあるやうに思はれる。

私は佛蘭西の女の肌が日本の女のより大して美しいとは思はない。感觸に於いては殊に所謂肌理が細かいといつた感じを欠いてゐるやうにさへ思はれる。が何といつても生來の人種の色はあらそはれない。じたいが白いのだから、化粧ばえもすることになるのだといふことも出來る。

私は在佛中親しくしてゐたある金持の若夫人の化粧室を思ひ浮べる。三十疊も敷けやうといふ白い浴室である。一つの壁は一面の鏡硝子の棚にはこれもきりこ硝子の壷に盛り分けた七色の白粉が行儀よく置き並べられてある。ファンタスティクな美顏水の壜、香水吹、ブラシ、爪磨のセット……食前、或ひは外出前の彼女は黒繻子の下着一枚でかひがひしく手を洗ひ、顏を拭うて、それから並んで置かれた壷の蓋を、とつかへひつかへ取つてはかぶせる。埃及の血の入つた彼女はどちらかといへば淺黑い方だつたが、彼女は決して純白な粉は用ひなかつた。茶、代赭に近いものを好んで用ひた。眼のふち、殊に鼻に接した一點には褐色に紫をまぜた粉をひいた。彼女せ又多くの女のやうに鼻頭を白く刷く代りに、頬と同じ代赭で鼻筋を生かした。勿論鼻の形が非常に整うてゐるからでもあらうが、その代赭が彼女の美貌を實によく、そして獨創的なものとした。

顏が出來ると彼女は着衣室に飛んで行く。等身大の縦に三つに折れる鏡の前で手早く衣裝をつける。衣裝をつけると仕上に爪を一こすりして、此處にも澤山並んでゐる香水吹の一つを取上げ、胸・耳隱しの髮の中、掌などに振りまく——

いつたい巴里の女は衿にはあんまりお白粉をつけない。それが證據には彼女等の着物の衿はちつとも汚れてゐない。美しいことには彼女らの衿はたいてい顏より白いのである。それでも夜は背中や手を丸出にするから露出

する場所へ日本の水白粉に似たものゝ、煉り白粉とクリームとの間を行くやうなものを塗つたりする。

セクレ・ド・ボン・ファム

佛蘭西の化粧品には種類にも價格にもきりがない。禁酒後の亞米利加も夥しい化粧品を產出してゐるやうであるが、まだまだ佛蘭西には追ひつかない氣がする。日本にも此の頃は佛蘭西化粧品店と銘打つた舖がざらに出來たやうだが、行つてみるといかにも輸出向のものばかりで、巴里生粹のよい品は殆んど見あたらない。尤も、巴里でもいゝものは莫迦に高いのであるから、日本まで來て、その上奢侈稅でもかけられたら、到底我々には購ひ得ぬ價格になるかもしれない。

日本に見當らず、そして是非欲しいものに「美女の秘訣（セクレ・ド・ボン・ファム）」といふクリームがある。これは巴里女が常識ほどに愛用するクリームである。プレット・ファーマスイーあたりに來てゐる亞米利加のポンズ・エクストラクトのヴァニッシング・クリームが稍これに似通うてゐるが、セクレ・ド・ボン・ファムのやうなよい香氣も、淡雪のやうな感觸も持つてはゐない。美女の秘訣はシャンゼリゼーの傾斜の凱旋門近い右側に在るゲレーンといふ店の專賣特許である。ゲレーンは魅惑の强い變つた香料もいろいろある店だが、此の店のものはまだ何にも日本に來てゐないやうである。

コテイの白粉は其處ら中に見える。がウビガンやロズイーンの香水の來てゐないのも寂しい氣がする。單に Made in Paris とあつて店の名のない店は巴里でない何處かで造られたまやかしものであることを附言しておく。巴里といふ名が化粧品に如何なる莫迦らしい權威を與へるかといふことが判つて面白くもある。

女床屋

日本髮を結ぶ婦人が髮結の許に通ふほど、しげしげと巴里の女は髮を洗ひに床屋へ行く。洗ふばかりではない、鏝をかけてもらふ。爪を磨いてもらふ。美顏術を施してもらふ。革命祭其他の祭日前後の床屋の混雜といつたらない。

此の床屋の一つにアントアンといふ店がある。トウイラリーに添うた店續きの通からちよつと入つた所にある。飛び贅澤といふほどでもないが、店主のアントアン氏が彫刻家であるところから、交際社會の婦人が盛んに出入する。彼は美術家仲間の嘲笑を餘所に、日々店に出て貴婦人の頭をおもちやにしてゐる。彼は彫刻家の立場から、顏に合はせて頭を結ぶ……といふよりは斷ることの名人である。

ごく最近まで、斷髮は下層婦人の行ふものとせられてゐたやうであるが、昨秋の季節から若い社交婦人はどしどし頭を斷り初めた。これこそ取返しのつかぬ過ちで、といふ詩が出たくらゐである。いつたい流行の輪廓が簡素になり、小型の帽子をすつぽり被ることがはやり出してから帽子と衿及び肩との線の調和を保つ爲には、髷の存在がどうも邪魔になつてきた。だから晝間の服裝の爲には躊躇なく斷髮することになつたのであらうが、今まだ社交界の問題になつてゐることは、夜間帽子を脫いで劇場の平土間に坐座つた時の後姿如何である。が觀る眼は早くも髷のない頭の恰好に慣れて來たらしい。といつて私は何も自分の身びいきをするわけではないことも、

茲に一言お斷り申しておく。

レーニン夫人の活動

尾瀬　敬止

一

これはレーニンが病み付くすこうし前のことである。その夫人であるクループスカヤは來る一九二七年までに、北アメリカでは大がかりの文盲者退治を始めてキット成功して見せるつもりでゐるといふことを告げた。すると、かれは、

「その時までにわれ〳〵も文盲者を巢滅しなければならぬ。つまり、それが勞農革命（一九一七年の）があつてから丁度十年目に當るからだ」

と答へた。

しかし、これは單にレーニンの自己目的であるばかりではない。かれの形づくつたサウエート・ロシヤの、その文化を高めるための一般的政策であることは言ふまでもない。

二

とかくロシヤ人は無智であると言はれる。これは或る程度までたしかで、それも男子よりは婦人の方に當てはまつた批評であらうと思ふ。

その極端な例を擧げるならば、筆者の友人にSといふ男があつて、かれはモスクワのスーハレスカといふ古い天文臺の下に下宿してゐた。下宿と言つてもちよつと三越位の大きな建物で、この中には何十若しくは何百といふ部屋があつた。かれは一階か二階かに部屋を借りてゐたが、少しでも留守をするとキツト砂糖がなくなつたり紙がなくなつたりする。さうかと思ふと、庭に出してあつた薪が一本々々と減つてゆくので、それを部屋の中へ入れると今度も盗まれたことに氣がついた。そこまではいゝが、ぼんやり窓際にでも立つてゐると、上の方からつる〳〵と下がつて來た緣の端にめうな紙片が結べてある。何氣なく拔いてみると、それはこの下宿屋の娘のラブレタアではなくてある誘惑の手紙だ。かういふ方法で、彼女はいくたりかの若い男を操つたが、その母である主婦までが同じやうな罪惡を犯して少しも耻じなかつた。また

此れは、筆者がかつてシベリヤを旅行した時の話であるが、自分は視察といふ目的だつたために日本の軍用列車に乘ることが出來た。そして、汽車がたしかイルクーツクからクラスノヤルスクの間を走つてゐる時がつたと思ふが、自分の車室にボーイとして雇はれてゐる一ロシヤ人にかゝる面白いシーンを見た。というのは、かれの處へ晝となく夜となく通ひ詰めてゐる女があつたからで、しかも夫れが二つか三つか先きの車室にゐる乘客であつた。ところで、彼女には十一か十二位になる女の子があつて、母の姿が見えないので時々めそ〳〵してゐる。で、それを目にとめた他の者は思ひ〳〵に菓子だの金だのをいたいけな彼女に與へたものだ。かうして汽車は茫々たるシベリヤ大平原の眞中を疾走していつた。

これなどは無論特異な例であるが、兎る角ロシヤ婦人の中にはさういふ女も混つてゐるから、何んとかしなければならなくなつたのが現在の勞農政府である。

三

レーニン夫人は、これらの無智な婦人を教化するとともに、かれらの智識をさらに向上せしめようとする最も熱心な活動家である。

しかし、最近の夫人が一般の婦人にたいしてどういふ考へを有つてゐるかは、去る七月の或る會議の席上で述べた演說で略想像することが出來やう、

レーニン夫人は長い〳〵拍手の響を浴びせかけられた後にかう言つた。

「久しい間空想として見られてゐたソシアリズムもわが眼前で生きた現實として現はれるやうになつた」と。そして、レーニンが「生きたソシアリズムは——民衆の創造である」と說いた言葉を引合にしてから、次ぎのやうに語をつゞけた。

「資本主義的國家においては婦人が自己の家庭とその經濟との捕虜になつてゐた。しかし各婦人が民衆組織にたいしても自由な參加をすることの大切であることを認めしむるために、かれらをして勞働に就かせなければならぬ。何故なら、この參加こそかれら婦人に民衆と仕事をするための必要な鍛練を與へるものだからである」。

さう言つてから、レーニン夫人は——家庭といふ一つの同盟は、その各員が一般的の事業に就く必要を認めるために構成さるべきものである。そして、生れたあたらしい家族は社會生活を共にするお目見付（ヤチエイカ）のやうにならなければいけない。但し、これは勞働婦人がその個人的生活の中においても凡てにたいしてプロレタリアートの利益といふことを考へて對する時行はれるのである——と指摘してゐる。

四

レーニン夫人は、たんに婦人ばかりでなく男子の頭腦をもいかにして向上さすべきかに腐心してゐる。別の言葉でいへば、一般の男女勞働者のために頻りと劃策してゐるのであるが、かれらが等しく文盲者であるとしてもその智識を開發するにはいろ〳〵な方向から努められねばならぬ。それは先づ學校敎育と校外敎育とに分たれやうと見ふが、夫人の選んだ道は後者で、ヨリよくいへば政治敎育を與へることを自己の使命としてゐる。

試みにモスクワはスレチンスキー遊園街にある夫人の事務室を覗いてみよ。そこのガラス窓は壞れてゐるかも知れない。部屋の中は掃除が行き届いてゐないかも知れない。そこで働く人々の着物は汗に染んでゐるかも判らない。けれども、この事務室の柱といはず壁一面に貼りつけたプラカット——無論政治敎育に關する廣告ビラが堆高いやうに、その中の活動はまことに目覺ましいものである。夫人はいつもテーブルに向つて何か書いてゐるか手下の者にいろ〳〵と命令してゐる。でなければ電話口に立つて誰かと仕事の上の打合せをしてゐる。として暇さへあれば訪ねて來た客の相談に乘つてゐる。客といつても、貧しい身なりをした婦人とか赤衞兵とかいふ人々ばかりである。かれらは、この建物の主人公に自分の考へは間違つてゐまいかと尋ねたりいゝ書物や講演者を送つて貰へまいかなどと賴んでゐる。かうして、どこには小圖書館を開くとか、また講演會を催すとか、さらに宣傳網を設けるかと苦心してゐる。さうかと思ふと、自ら敎科書を書いたり演說に行つたりもする。かゝる獻身的な勞働に二六時中沒頭してゐるのは、政治敎育本部の首班であり、文盲者撲滅大會の名譽委員であるレーニン夫人である。

賀川豊彦著

幾多の暗示と光明とを現代に投げつけた本誌は震災によりて總て紙型を燒失し品切中でしたが今回漸く出來ました。賀川氏が震災と共に直ちに本所の尤も被害多き地に飛込んで暑烈と戰ひ、朔風と戰つて、多大の業蹟を擧げたことは萬人の均しく感謝する所だ。

(284版)

死線を越えて

或一部の人々によりて氏を中傷讒誣するものありたるも今氏の業蹟の前には唯しもが頭の下るを覺えないものはあるまい。氏の人道愛を偲ぶものは氏が尤も熱血を濺いだ本書に親しむことによりて解し得る。

四六判上製　定價三圓　送料十九錢

東京市芝愛宕下町　改造社
振替東京八四〇二番

兒孫の爲に蓄財するの可否

財産慾は人生を支配する重大な慾望であります。此慾望の増長は、一歩過れば國家を過り、社會を過り、兒孫を過ることゝなります。ところで、世人は滔々として是れたゞ物慾に走り、兒孫のためと稱して數百萬乃至數千萬圓を蓄財するものさへあります。貴方はこの問題に對して如何なるお考へをお持ちですか御多用中恐入ますが忌憚なき御批判をお願いたします。

――右諸家にお意見を求めましたところ、左の如く御回答を下さいました。玆に御回答下さつた方々に深く感謝いたします。

○

有島生馬

兒孫のために蓄財するといつた所で、兒孫を自分の延長として困らせたくない、安樂にさせたいといふ慾望からでせうから、自分のための場合と別に大差ないと思います。

ルソオは自由人間であるためには今日一定の財産が是非とも必要であると云ひました。尤です。金持は蓄財が正當だと云ひ、貧乏人は金持が富を集注するのを不埒千萬だと云ひます。各自の個人的若しくは社會的立場からそれ〲本氣な所を遠慮なく云つてゐるので、彼等各に取つて正當な理屈だと思ひますが、時によると金持は金のために苦み、貧乏人でも金持になりたいと焦燥る場合がないともない。

金持の野良くら息子達が經營してゐる同人雜誌のことをロメン・ロオランが書いてゐる。その同人達といふのは皆んな過激派で、共産主義者なのです。なぜなら彼等は何一つ持つてゐないものがないからで、結局貧乏人の最後の持物である共産主義まで玩具にしてみねば氣が濟まないのである。

金持が貧乏人を輕蔑し、貧乏人が金持を羨む、といふのは自然で、人間味がある。亦そこに眞劍な爭鬪も理解も起り得る。協調や兩棲動物は結句は何んの足しにもなるものではあるまい。

兒孫に金を殘してやれば、八分までは馬鹿で働かない人間になること受合。然し二分位はそれの爲めに本統の學問などをやる者が出來る。

○

小泉信三

吾々の目から見れば、數百萬數千萬といふ金を子孫に殘すといふことは少しも有益だとは思はれないが、併し金を貯めるといふ事は馬鹿では出來る仕事でないから、遺産を遺す人は何れもそれ〲考へがあつてしてゐるのでせう。吾々に許り質問を寄越さないで少し金持の意見もきいて御覽なさい。

○

小川未明

中學校以上、女學校以上の敎育が、小供等のために、果してできるかと、危ふんでゐます私達は、蓄財などの考へを抱いたことがない。たゞ、小供等が、自活される年頃になるまで、自分が達者でゐて、働くことができればいゝと、それのみを祈つてゐます。私は、私達の生活狀態から考へて、今日、蓄財のできる身分の人間は、どういふ生活をなしつゝあるか、先づ、彼等の生活から吟味しなければならないと思ひます。ごまかしのない、正直な、正當な生活をする者が、今日、蓄財の餘裕があるものでせうか。多くの勞働者の生活を考へてこれを疑ふものです。

○

吉田絃二郎

子供の敎育費だけは出來れば貯へる必要がありませう。それ以上の蓄財をすることになれば自然貪慾に陥り、人を排し、人を僞つても金を作るといふ非人情なことになりませう

○

内田貢

子孫の爲めの蓄財といふは豪族生活の遺風今日では却て子孫の利益とならず子孫によつては父祖の遺產を繼承するを屑しとしないものもありませう。夫故今日では子孫には資產の十分一乃至何十分一かを殘して、他を公共其他に分散するが米國あたりのミリオネヤの一般習慣となつてゐます。カアネギーは如何にして我が財產の全部を費消すべきかといふ方法を懸賞で募りましたが、日本では如何にして資產を完全に子孫に保持せしむべきかといふ方法を講ずるのが富豪一般の心事となつてゐます。夫だけ日本は米國よりもより以上の貪慾國、金の番人理想國です。

○

與謝野晶子

私には「財產」と云ふものの學問的基礎がよく分かりません。とにかく私の今の心持では、不正な所得でなければ財產は出來ないものかと考へられます。惡を子孫に遺すことの可否は論ずるまでもありません。私は財產に依頼して生きる人間の絶滅を空想します。眞劒に働けば自然に衣食が供給されると云ふ時代はユウトピヤでせうか。

○

堺利彦

否と云つても出來る奴は蓄財をやめはしない。可と云つても大多數の人には出來ない。可否を論ずるは愚なり。只一つ面白いのは、少數者の折角の蓄財が、「兒孫」の代には首尾よく社會に沒收される事だ。

○

高島米峰

素ツ裸で產れ無一文で生長した私は子孫のために美田を買はうとは致しませぬ併そうした必要を認めませぬ、又縱令そんな野心を起しても到底不可能であります、せめて兒孫に借金を遺さないやうにと念願して居ます。しかしそれも今のところ一寸六ケしさうです。

○

神近市子

可否についてはこゝでは云ひ切れません。私一個の覺悟としては、子孫を安樂に過させ

る爲めに蓄財はしません。子供にはたゞ金に對する眼をあけてやり、自分の性向と能力とについてある自覺を與へてやりさへすれば、子供は子供の努力と勤勉とによつて人生を渡るだらう、それ以上を親は計つてやることは必要でないと思つてゐます。

○

近松秋江

財產を蓄積するは、單に俗慾であるのみならず、人間の意思の力に待つこと大なり。故安田善次郎氏が、無慮六億の巨富を擁して尙ほ且つ僅に三百圓の畫幅にすら無用の金を投ずるもの ゝ如く考へて容易に決せざりし如きは、一個の茶器に拾萬圓を靜ひ投ずる馬鹿金持ちと同日の談にあらず。平常、富を散逸する者は、一朝國家有事の用を爲すに足らず。安田の如きは然らず、安田の富は私有なれども、國民の一人に六億の富を擁する者あるは同時に國家の富なり。

○

三宅やす子

我子の爲に相當の財を殘すことは親の義務だと思ひます。何故ならば現今では、子女が獨立して職業についても、それで家庭を營むほどの收入を得られないのが普通ですから多少の物質的背景を持たせないと、失職した時にどうすることも出來ますまい。

不幸にして親が子供の獨立前に死ぬような事もありますから其時は、せめて財產が多少あるようにする必要があります。然しそれは多きに過ぎても弊害は勿論ありませう。まづ大多數の人が多くは致し得ないのです。

○

高畠素之

蓄財がいいの惡いのと云つたところで、出來るものはするでせうし、出來ないものはしたくても出來ない。蓄財にも程度の差があつて、程度の差が質の差となるのであるが、せめて妻子を路頭に迷はせないだけのことはして置きたいが、いまの調子ではそれすら出來さうもないので、ついいら／＼する。數百萬數千萬圓といふやうな話では、駄洒落にもならない。

○

市川房枝

親としては、その子供に自活し得るだけの手段方法——學校敎育なり或は技術の收得なりによつて——を與へておく義務があると信じて居ります。これさへあれば、子孫のために財を蓄ふる必要はありません。否必要がないばかりでなく、彼等のための蓄財はむしろ彼等をあやまらしめる事が多くはないかと思ひます。

○

安部磯雄

子孫のため蓄財するのはつまらないと思ひますけれども、現社會の如く何事も自由競爭を原則として居る場合これを非難する譯には參りますまい、人には優越慾がある以上財產の多きを誇りたいといふのは無理もありません、況して財產は優越慾と物質慾(衣食住)とを滿足させるのですからこれを抑ゆるのは無理です。人がこんなことを考へないようにするには社會主義の社會を實現する外ありません、これが唯一の救濟法です。

○

上司小劍

現在の社會組織が、假りに今暫らくつゞくものとして、それが社會の上にどういふ結果をもたらすかは別とし、小生の主義としては自分の作つた富を自分一代に放散しつくして子供には一物をも遺さないのがよいと思つてゐます。世に遺產爭ひほど見苦しいものはありません。もちろん、小生自身は死ぬまで無財產でそんな心配はいりませんけれど。

○

帆足理一郎

子孫のため蓄財することは全く無用と存じます。子女を充分敎育してやればそれで澤山です。私共は近い內に住宅を新築する積りですが、それさへも子女には讓らないで私共の死後何か公共の用に供されるやうに建築したいと色々考案の結果、現在ではそれを將來宗敎書類の圖書館となすことができるやうに鐵筋コンクリイトで永續的な建築にして殘したいと計畫中であります。書籍が充分集つた時には部分的に公開して、段々全部を圖書館化する考へでゐます、成人した子女が親から讓產を讓り受けることは好ましからぬと思ふからです。

○

原田實

子孫の爲めにとて數百萬圓數千萬圓を蓄財するなどは、尊くないことであるばかりでなく愚かなことです。たゞ、現在のやうな社會狀態では、子供が敎育の施設や機關の效果を自由に享受し得るに足るだけの資材を貯蓄してやることは必要でせう。

○

藤森成吉

兎や角云ふまでもなく、誤りです。すでに西鄕でさへ云つてゐます、矧んや、私有財產否定を基論とする我等新時代に於ておや。

○

辻潤

モラル―蓄財は借金よりも遙かに下劣にして恥づべき行爲なり。人間が蓄財することを考へずにすむやうな世の中に早くなればいいと考へてゐます――子供は何人の子供に限らず個性に從つて平等に敎育され、老人や病人は云はずとも保護されなければなりません――それが出來ないやうな國家なり社會なりは存在の理由がありません――自分の子供だけが敎育され他人の子供はどうでもいいなどと云ふ馬鹿がゐる間はどうも困りますね――なんしろ金錢萬能の迷信を一度恐ろしく破壞しない限り蓄財は現在の世相から云へばあんまり當り前すぎる常識なのかも知れません――僕は蓄財より借金を出來るだけしたいものだと考へてゐます。

○

宇野千代

可否の問題ではありますまい。金があればひとりでに蓄るでせうし、なければ蓄めようにも出來ますまい。そういふことはすべて自然に任したいと思ひます。資本制度の儼存する今日一個人が財產慾から解放されようとされまいと問題ではありますまい。蓄財のために誤られる子孫もあれば蓄財なきために誤られる子孫もありませう。

岡本一平

心身共に獨立の見込みある健康の息子には遺産の必要は無いと思ひます。但、現今洋畫家等の實狀は帝展の入賞畫家あたりでも畫では生活出來ない狀態です。故に生活の見込なき職業を選ばす事となるなら應分の生活費を遺してやる必要はありましよう。

○

千葉龜雄

私有財產廢止とか云ふ事は別にしても、私は平生この事について、社會にとつて、また一家にとつて、これほど禍な事はないと思つてるものです。たゞ子供を文字通り完全に敎育してやる。とにかく、その日その日の生活を子供達がなし得るやうに敎養するまでの事を完全にしたならば、家長の義務はそれだけでよいのです、その上の事なら、家屋ぐらゐと隨時、もしくは不時の用意にそなへる程度の財產を與へるところで、上々、それ以上の財產を、子孫の爲に殘すのは、子孫をならず者にするだけの役目を働くしきやないのです。また社會の爲にも、不勞の怠惰者を一人餘計にするだけで、結局一つの害毒を加へることになります。絕對に否定します。

○

生方敏郎

自分が今不意にポツコリ死んだら嘸かし子供たちは困るだらうと云ふ考へが此頃急に私を怕れさせ初めた。主人公が死んだ後で一文無しでは困るだらう。併し餘り澤山金を殘す事は一文無し以上に惡い事だ。論より證據親から巨萬の富を殘された人にロクな人間は殆んど無い。

○

津田光造

『働かざる者は食ふべからず』と云ふのが人間生活の原則である。兒孫に私有財產を殘すのは兒孫を働かないでも食へる樣にしてやる事になるから、それは人間生活の原則に反する。兒孫の敎養は社會全體が責任を負ふべきものだ。兒孫の爲めて蓄財しようなどと考へてる今の卑しいブルジョア共には、『兒孫の爲めに美田を買はず』と云つた西郷南洲の爪の垢でも煎じて飲ませると好い。

○

山川菊榮

兒孫のためといはず、自分自身の病氣や老後のためにも、社會的に、生活の保障されて居らぬ私有財產の時代には、蓄財の必要あることは明白であります。けれども今日のパンの缺乏になやまされてゐる無產階級の間に於ては、中々明日のために蓄財するだけの餘裕がありません。即ち今日の世の中では、兒孫のために或程度の蓄財の必要はあるに拘はらず、百人中九十九人まではそれが不可能なのであります、萬人が萬人、我子が一人前になるまでの生活費や敎育費を貯蓄し得たら世間に無智なものは一人もなくなり、おかみや資本家が廉く使へる勞働者に事かいて不自由を喞つにちがひありません。個人々々が子孫のために蓄財する必要をなくして、社會が、社會全體の後繼者のために、必要な敎育と生活とを保障し得る世の中にしたいものです。

生理學講座

（第十二回）

女尊男卑か男尊女卑か

永井潜

私は、今迄、生物學醫學の立場から、專ら差別觀を以て男女を觀察したのである。而かも差別觀は終に價値の觀念と結び附くものであり、價値の觀念と結び附く時、必然、貴賤尊卑の別を立てずには止まない。私は、男女の尊卑問題に關して書かなければならなくなつて來た。

女尊男卑か、男尊女卑か、是れ實に人間に與へられたる最も大なる題目の一であり、斯の題目を如何に解釋するかは、人間生活に適切深甚の影響を及ぼすや言ふを待たないのである。否な影響を及ぼすと云ふよりも、寧ろ此の大なる題目が、人間生活の渦巻の中心をなして居ると言ふ方が正當である。さうして人間のあらゆる思索と現實とは、自から此の渦心に向つて牽き附けられる。宗教・哲學・藝術・教育・政治・法律・經濟・凡て此の中心に觸れて居ないものはない。さうして其の立場の如何によつて、多少の差はあるにせよ、藝術を除ける以外のものは、何れも一齊に男尊女卑を肯定して居る。女は三界に家なしと云ふ思想は、獨り宗教家の唱ふるばかりでなく、政治に、法律に、經濟に、教育に、人間生活の到る處に織り込まれて居る。凡てが男本位に仕組まれてある。現代の社會組織が、果して自然の理法に基く正しいものであるのか、夫れとも男子の横暴なる手によつて揮はれて居る專斷の笞であるのか、公平無私に之れが判斷を與へるのは、生物學の大切なる使命でなければならない。

生物學上から男女の優劣を論ぜんとするには、獨り人類ばかりでなく、生物全般に亘つて、兩性の差別に就いて廣く考察を下す必要がある。已に本講の劈頭に於て述べた樣に、生物の荷へる二大使命は、自己の生存と、種族の保續とであつ

て、而かも其の何れを重しとすべきかと云へば、無論種族の保續でなければならない。自己の生存は、壽命によつて制限せられ居る。露の命の個體の死滅を超越して、生命の流が、永遠より永遠に活き延びて行くのは、畢竟斯の種族保續の作用があるからである。其の意味に於て、生殖は生存を犧牲とし、戀愛が飢餓の上に立つのは理の當然である。而してこの大切なる生殖の仕事を成就すべく玆に兩性の別が起つた。さうして各違つた道を取り、違つた程度に於て、其の完成に努力して居る。惟ふに熱烈なる情緒を以て、生殖の殿堂の建設に第一石を投ずるのは、常に雄である。併しながら、根强き耐忍と、絕えざる盡瘁とを以て、斯の壯麗なる建築を最後迄仕上げて行くのは、雌でなければならない。

生殖の仕事を始むべく、雄は能働的である。彼は其の爲に必要なる特殊の體制を、第二次性徵として具備して居る。異性を見附け出さんが爲に、異性に近接せんが爲に、就中異性の歡心を買はんが爲に、而して又他の雄と相竝んで雌を爭はんが爲に、如何に大なる苦心焦慮が拂はれて居るかを、雄の第二次性徵が立派に具象して居る。之に反して、受働的に、生殖の果實を護り立てゝ行く雌性の第二次性徵は、何處迄も、保護と營養とによつて烙印されて居る。幼兒の唯一の命の糧の湧き出づる乳房、生命の芽生を血と肉とによつて培養擁護する子宮、皆な夫れでないものはない。又た之を一般新陳代謝の傾向に徵するも、雌が勢力を外に發露すべく、專ら分解的であるに反して、雌は勢力を內に蓄積すべく、大に集成的である。熱烈なる性の欲求を滿足すべく、雄は利己的・自我的であるが、雌が哀々劬勞して其の幼兒を哺育する態度は、全く利他的・博愛的である。

人は往々雄が示す勇氣と力量と、巨大なる體格、美麗なる色彩、宛轉たる聲音、馥郁たる香氣等を以て、雄が雌に優越せる證據と見做して居る樣であるが、併し夫れは決して妥當ではない。斯等のものは、何れも雌雄淘汰の爲に雄に現れた第二次性徵であつて、是れあることが、必しも發達の向上進步を標徵するものでない。加之、或る意味からすれば、夫れは往々にしてエネルギーの濫費であり、自己の生存を危殆に陷れるものであつて、敢て尊重すべき特性と言ふことは出來ないのである。勿論、生殖と云ふ最も大切なる仕事を始むべく、斯る苦心焦慮や斯る犧牲が拂はれなければならないのは、或は止むを得ないかも知れないが、夫れにしても、雄が、止むに止まれぬ內的欲求の爲に、斯く迄思を勞し、身を苦しめることは、寔にあはれ氣の毒千萬と言はざるを得な

い。然るに、雌はどうであるかと云ふに、雌雄淘汰に於て、雄が甘んじて被治者の位置に在るに反して、雌は治者となり主權者となつて居る。雄が渾身の力を竭し、至上の美を傾けて、歡心を得んと焦り立つて居る間に、彼の女は愼重に、冷靜に、批判し、考察し、容易に自からを許さない。何と云ふ心憎い落着であらう。其の力も、其の美も、總ては皆自分のものだと云ふ女王の誇を持つて居る。『四百餘州を掌握せし其の太閤も何んの英雄』といふ淀の君の自負と矜式とは、動物の雌の、どれにでも見出されるではないか。

魔女の厨ならぬ生殖の竈に、最初の火を燃すのは雄である。併しながら最後に立派な活き物を夫れから造り上げるのは、雌である。生物の最大使命である生殖の舞臺に於て、「シテ」となり、頭目となるのは毎も雌であつては、雄は單に「ワキ」となり小僧となるに過ぎない。動物の可なり多くの種類に於ては、生殖が單に雌丈けで立派に成就される。所謂單性生殖なるものが夫れである。斯る動物では、周圍の狀況が佳良で、十分に榮養が行はれる樣な場合には、雌丈けが出來て、夫れで單性生殖によつて雄なしに子が造られる。然るに一朝環境が不利になり、榮養が不良になると、雌のみならず、雄も生れて、生性生殖が行はれる樣になる。蚜虫では、夏時食物が澤山ある場合、雌のみ出來て單性生殖が行はれるが、秋になつて食物が缺乏すると、雄も生れて、始めて兩性生殖が行はれる樣になる。蜜蜂でも、榮養の一番佳良な卵から女王が出來るが、反對に卵に供給せられる物質の不足する場合、雄蜂が出來る。さうして夫の雄蜂は、一朝女王と交尾を終るや否や、多くの雌蜂（職蜂）の爲に、寄つてたかつて刺し殺されて仕舞ふべき哀れなる運命の持主であるのである。

私は、前に、性別決定の條下に於て、性の根本的差別は、遺傳物質の配合如何によつて決定せらるゝもので、ゲッツ、トムソン氏等の主張する如く、決して後天的に、榮養の如何によつて決定せらるべきものではないことを力說した。此の學說は無論何處迄も正しいものであるのであるが、併し事實上、今述べる樣に、環境の如何によつて生れて來る子の雌雄の數の割合は、甚しく影響を蒙るのである。環境が宜を得て、遺傳物質のみが專ら性別決定に與かる場合、遺傳の學說からも、亦事實の上に於ても、兩性の數の比は略相等しいのであるが、之に反して、環境が極端なる狀況にある場合、生れて來る兩性の數の比は等しくならないで、何れか一方に偏するのは、間違のない事實である。併し夫れだからと言つ

て、此の事實を以て、ゲッツ・トムソン氏等の樣に、性別の決定が、後天的に、環境の如何によるものと判斷してはならないことは、已に詳述した通である。然らば遺傳的、先天的に決定せらるべき性別が、何故に環境の如何によつて、斯くも著しく影響を蒙るのであらうか。斯の一見矛盾せる事實は、次の如くにして說明が與へられる。已述の如く、遺傳學說から論ずれば、受胎によつて雄性を造るべきを生殖細胞も、雌性を生ずべき生殖細胞（人間及び高等動物では精子に此の二た通が出來るのである）も、略同一の數が出來るもので、隨つて其の二樣の生殖細胞が、共に完全に活きながらへ、何れも同じ割合で受胎を行ふ場合（大數の統計が示す如く）生れて來る子の雌雄男女の數は相等しくなるのであるが、若し極端なる環境の變動がある場合、恐らく、二樣の生殖細胞の何れかが死滅し、斯くて或は雄が餘計に生れるか、若くは雌が澤山產れることになるのであらう。ヒープ氏の實驗によると、カナリヤ鳥では、溫度や榮養を變化することによつて、生れる子の兩性の比を、一方の極端では、雌一〇〇對雄七七より、他方の極端では雌一〇〇對雄三五三の割合に變動せしめることが出來た。ヒープ氏の考によると、カナリヤ鳥では、榮養を制限し、且つ早期に生殖を行はせると、雄鳥が餘計出來、之れに反すると、雌鳥が澤山出來る。ヤング氏が蝌斗に就て行つた試驗によると、自然の儘の榮養の下では、雄と雌との出來る數は略等しいのであるが、然るに蝌斗を飼養するに蛙の肉を以てして榮養を佳良ならしめると、百中九十二は雌になり、雄は僅に八つしか出來ない。斯樣な關係は、人間にも見られることで、戰爭や飢饉のあつた後には、男兒が餘計生れること、又た生產の多い季節には、女兒が多く生れ、之に反して生產の少い季節に產れるものは、男兒が多いことは、統計上の事實であるが、是れ亦榮養佳良なる場合には女兒が多く出來、之れに反する場合男兒の多く生れることを語るものである。是れに由て觀ると、雄性が出來るには、貧弱なる材料で足りるのであるが、雌性が出來る爲には、豐る潤澤なる榮養の供給を必要とする。即ち雄性は一般に粗製濫造の產物とも云へる。

雄性が粗製の產物であることは、他の方面からも論及することが出來る。解剖的に男女の身體を比較して見ると、筋肉にせよ、血管にせよ一般に男子に於ては正規より外づれた異常狀態が、遙に女子よりも多く見られる。例へば毛深い皮膚、形の尖がつた動かし易い耳殼、大きく發達せる犬齒、筋肉を供へたる尻尾等は、孰れも女子よりも遙に多く男子に

於て見られる異常形態である。而して斯等異常形態の多くは、所謂原始的の先祖戻である。白痴者の如きも、女子よりも男子に著しく多くある。又た色盲や血管病の如き遺傳的病氣は、男子に多くして女子には少ない。色盲の如きは、男子には百人中二乃至三人の割合であるものであるが、女子には男子よりも略十分の一色盲者の數が少ない。

更に又生産の數と生存に對する根強い力とに就いて比較して見ても、女子を造るべく、自然は、男子を造るよりも入念にして居ると云ふことを頷かしめるものがある。民族によつて多少の相違はあるが、産兒の數は女兒よりも男兒の方が毎に多いもので、其の比例は、女兒一〇〇に對して男兒一〇三乃至一一〇の間にある。而かも生後發育生存する數は如何と云ふに、女兒の方が多い。卽ち男兒は餘計生れて又た餘計に死ぬのである。試みに男女の死亡率を正確な統計によつて比較すると、男が女よりも著しく多いのである。卽ち男子は、女子よりも、生の脅威に對する抵抗力が弱いのである。高齢者の數が男よりも毎に女に多いのは其の爲である。併し此の事實に關しては、反對說がある。其の說によると、男が女より餘計死に傾いて居るのは、男女の先天的の性的差別と云ふべきものでなく、全く後天的環境的の相違によつて惹き起さるゝものである。卽ち男子は進んで劇烈なる生存競爭の荒浪と鬪ひ、其の爲に心身を過勞困憊せしめる。又た男子は生活狀態が放縱に流れ易く、斯くて男子の死亡率が高いのであるが、女子は退いて內を護り、親から競爭場裏に入つて無理をする必要が少なく、且つ又其の生活は一般に攝制があつて、爲に死亡率が少なくて濟むのであると云ふのである。是の說には、勿論、一部の眞理が含まれて居るだらうが、併し男女の生存力の相違は、決して斯る外的、環境的關係のみによつて、單簡に說明せらるべきものでなく、もつと深い內的、素質的關係に重きを置かなければならない十分なる理由がある。夫れは何であるかと云ふと、胎內生活をして居る時代に於て、早く已に、男女の死力に差別が現はれて居ることである。死産の統計を見ると、女兒の死産一〇〇に對して、男兒の死産は一三〇乃至一四〇と云ふ多數に上つて居る。又た生後一時間目、五時間目、十時間目、一日後二日後、と云ふ風に、時々刻々幼兒の死ぬる統計を取つて見ると是れ亦男兒に於て著しく女兒を凌駕して居るのである。胎內生活や、幼少なる時期に於ては、男女の環境的差別と云ふことは、全然考慮の中に入れる必要がないのであるから、斯る場合の死亡率の相違は、專ら之を內的性徵の現はれとして考へるのが妥

當である。又た病氣に罹る率を比較すると、女子は男子よりも、或る種類の病氣例へば生殖器病、癌、殊に日本では結核等には餘計罹るのであるが、其の他の大多數の病には、男子が多く罹る。又た病氣殊に傳染病等に罹つた場合、治癒する率は、女子の方が男子よりも著しく高い。

以上のことを結合して考へて見ると、女子の體は男子の體よりも、入念堅固に造られて居り、生の脅威に打ち勝つて生存を主張する點に於て、女子は男子を凌駕して居ることを否むことは出來ない。『弱き者よ汝は女なり』とセークスピヤーは喝破して居るが、生物學上から云へば、『強き者よ汝は女なり』と言はざるを得ないのである。

男尊女卑か。女尊男卑か。私は廣く生物の世界大觀し之れに關して冷靜無私の批判を下すべき批準の助となるべき爲に、以上の事實を提供した。私は此れ丈けの事實から、直ちに女尊男卑を結論しやうと言ふのではない。併しながら、最も普通に、又た最も多くの人が、始めから爾があるべきものとして信じて居る樣に、男子が女子よりも、雄が雌よりも一段尊いものであると云ふ考が、十分なる理由を以つて訂正さるべきものであり、又た訂正されなければならないことを、以上の論述から斷言して憚らないのである。否な、更に一歩を進めて、天の恩寵と自然の愛護とは、確かに男子よりも女子に、雄よりも雌に對して、より豊に、より深きことを、何人も否定し得ないと思ふのである。

併し之に關して、反對する人は言ふであらう。動物の世界に於て見たる處を以て、直ちに人間界に及ぼすのは不合理である。人間の問題は。宜しく人間其の物の生物的觀察によつて解決すべきである』此の議論は一應尤に聞へるのである、さりながら、性の問題に亘りて、徹底的に其の根本義を明かにし、因りて起る所の理法を基礎として、公平なる批判を下さんとするには、廣く生物全體に至つて達觀することは爲さざるべからざる最も大切なる仕事である。由來人間は、動すれば自己の小賢しき知慧にうぬ惚れて、自然の大なる理法を無視し、不測の殃を招いて覺らずに居る場合が多いのである。兩性問題に關しても、人間は、果して斯る誤りを繰り返しては居ないだらうか。須らく生物に通有なる自然の理法に鑑みて、現代男女の社會生活に於ける大なる過誤を匡正する所がなくてはならない。二十世紀の人類に投げられたる最も大なる懸案の一である婦人問題は、斯の用意と覺悟とがあつて、始めて解決せらるべきである。

さて人間の男女に就て直接比較を行ふ場合、男尊女卑論者

に最も有利なる論據となるべきものが二つある。其の一は、女子は多くの點に於て小兒との間に共通性を有すると云ふ生物學的の事實であり、他の一は、人文史上に遺されたる男女の其業績の考察である。女子の身體的特徴が、大に小兒に近似して居ることは、前講に於て稍細説した處である。而して、小兒は、大人の花に開くべき未發の蕾であるとしたならば、女子はまさに、進化の階梯の中途に留まつて居る者であつて、男子よりも一段低い地位にあると主張するのは、一見如何にも合理的に感ぜられるのである。

併しながら、我等は、茲にも退いて大に熟慮せねばならない多くの問題を有つて居る。今動物と人間とを比較して、人間の特徴を探求し、而して斯の人間味が、男と女と、どちらに餘計に現はれて居るかを見ると、夫れは確かに女子に餘計であることに心附くのである。皮膚がしなやかで、毛の少いこと。皮下の脂肪組織が適度に發達すること。口唇の朱かいこと。頭骨の頭蓋部が顔面部よりも比較よく發達して居ること。殊に下顎骨が優しく出來て居ること。眉弓の小さいこと。顴骨弓や咀嚼筋の發達が著しくないこと。脊柱に見らる、S字形の彎曲の顯著なること。凡て斯等の人間味は、女子に於て頗る潤澤であつて、固有なる女性美を發揮する基礎をなして居る。

又女子の身體が、小兒に近似して居ることの事實は確かに、女子の發育が、男子よりも遲滯して居ること、換言すれば、小供の蕾から、半開の花となつた儘で停つて居ることを明示するものである。さりながら、夫れだからと言つて、女子は男子よりも低い段梯にあるものと、どうして言へるだらうか。半開の花は、滿開の花よりも卑くないばかりでなく、或は却て美はしいものがある樣に、婦人が發育の道程に止まつて居ることが、婦人の力であり、美であるかも知れないではなからうか。

ハーブロック、エリス氏の説を假りて云へば、元來高等動物が、最も圓滿具足せる理想的生活をして居るのは、胎内生活でなければならない。茲には最佳良の生活要約が悉く具備してゐて母の血液と云ふ最善の榮養物を受け、何等の刺戟なしに、何等の不安脅威なしに、有機體が、思ふ儘に其の享有せる生命の全幅を開展して行くのである。其の意味に於て、胎兒の生活は、エデンの樂園にある夢の安らけき寵兒の生活である。然るに一朝胎外に出でると、其の生活は俄然として一大變動に逢著し、自己の力によつて、幾百の困難、幾千の脅威に打ち勝つて、悉く生存に必要なる仕事をなさなけれ

ばならなくなつて來る。嘗つて汗を知らなかつたエデンの夢は忽ち破れて、自からの額の汗によつて自分のパンを得なければならなくつて來る。さうして夫れに必要なる形態的機能的の變化が起り來る。斯くして蕾は花に開くのである。して見ると、小兒の狀態から大人の狀態に變化發達して行くことは確かに之れを生物に於ける順應の現象と云ふことは出來やうが、之れを以て進化向上と云ふことは不合理でなければならない。

試みにゴリラの親と、胎兒とに就いて、其の頭骨を比較して見ると、ゴリラの子供の頭骨は、親の夫れよりも遙かに人間味を餘計に示して居ることに心附く。ゴリラも亦、愛護せられたる胎内の樂園より去つて、胎外生活に移る時、獸類として彼れの生活に必要なる順應を行ふのである。小さな頭蓋部、大なる顏面部、恐ろしく嚴かめしい下顎骨、鋭い犬齒、凡て明瞭なる野獸性が、親になると明瞭に烙印せられて來る。惟ふに人體にのみ見らるゝ崇美平和なる人間味は、人間が、野蠻鬪爭の獸的生活を脫却して神に近づくべく平和の生活に入ること深ければ深い丈け、愈々顯著になつて來るものであつて、文化人と未開人とを比較して見れば、直ちにそのことを首肯することが出來るのである。若し野獸より神への進化の道程の半に現代人類が立つて居るものとするなれば、其の人類の中、神に近い最も惠まれたる理想的生活を營んで居る胎兒に於て、神々を具象すべき最も平和味の豐かなる身體を見るべきは、當然のことである。而して胎兒の蕾より大人の花に開くことは、神の理想より離れて、獸的の實現に歸することである。據ない順應現象であるとは云へ、實は進化の逆轉であると言ふことが出來るではないか。

斯く考へ來る時、婦人が小兒と近似することは、寧ろ婦人の誇でなければならない。恩寵厚く擁護深き彼の女の生活が、男子よりも、より長く、斯の神の具象であるべき平和なる人間味を保持することを、彼の女に許して居るのである。繚亂滿開せる花は最早散り失せるのみである。半ば開ける花、とは凋まぬ花、吾等は夫れを婦人に於て見出す。さうして生物の最大使命である生殖の殿堂を、最後迄築き上げて行く婦人に於て、夫れを見ることは、自然の大なる攝理であることを深く信じて疑ないのである。

若し夫れ文化史の上に遺されたる業績の多少を以て、男尊女卑を唱へる人あれば、吾等は夫れに對して云ひたいのである。文化の生活に於て、男子と婦人とが、教化、修養、活動の機會を得べく、果して同一の環境に置かれたかどうかと。思ふに、文化は或る意味に於て、自然の否定であり、人間が文化に一歩を進めて、生産の生活を始め、所有の動物となつて以來、力に於て優越せる第二次性徴を有せる男子が、社會生活の全部の鍵鑰を掌握する樣になり、自然に於て示されたる雌雄の位置と、人間生活に定められたる男女の位置とは、或る意味に於て逆轉が行はれた。さうして現代生活に於ける不合理なる男尊女卑の思想が、社會生活の經緯に根強く織り込まれたのである。斯くて幾百千年の人間生活に於て、女子は、精神的にも、身體的にも、幾重幾圍の封鎖を強いられたのである。斯る狀態の下に、女子の業績が男子に及ばないのは、當然のことであり、又男女の本質に基く差別でなくして、環境の罪でなくて何であらう。假りに一歩を讓りて、女子の文化に貢獻せる業績が少く、將來とても到底男子に及ばないとしても、夫れは單に哲學、宗教、科學、藝術と云ふが如き一半面に於ける短所であつて、人間生活の源泉である生殖の仕事に對して、女子が過去より未來に亘り、永劫如何に大切なる任務を遂行し、而して其の爲に如何に多大のエネルギーを消費するかを考へる時、斯の半面の長所は、優に彼の半面の短所を補ふて餘りあるものではなからうか。

要するに男女は各一個の半球である。斯の二つの半球が、相寄つて、玆に始めて完全なる人間生活の全球が顯現せらるゝのである。吾等は宜しく斯の半球に於て、體的に心的に、各獨自の特長あることを認め、而して其の特長によつて、相待ち相助けて、渾一融合せる人間生活を發揮する所以に於て斯の半球の前に深く禮讚す所がなければならない。



農村婦人の生活

泥の中の悲鳴

青木純二

一　女の居ない村

農村はもう疲れ過ぎた。

農村人は斷末魔の悲鳴を泥の中からあげて居るのだ。

農村は虐げられ過ぎて居る。

農村人は自由であるべき天地を泥の練獄として喰べも得ず泣きも得ずに悲しいあきらめの日と夜を送つて居る。

農村は死滅に近いのだ。

農村の青年達は搖籃の地と山とをすてゝ都會へ逃がれてゆく、そして、傷いて居る。

百の議論より、幾萬人の學者の机上空論よりも、代議士達が議場で放つ空砲よりも　ほんとうの農村の姿を見るがいい。農村の人々の血を吐く悲鳴を聞くがいゝ。私達は泣くよりも、もつと、もつと、たまらなくなつて來るのだ。

私が茲に書くのは越後の農村の眞實の有樣である。それは、日本に於けるすべての農村の赤裸々の痛ましき狀態でもあらう。

女の居ない村！若き女の姿を見ることを得ない村！なんといふ寂しさであらう。

越後に於ける大部分の村には若い女の姿を見ることが出來ない。

貧しき小作達、やうやくに生きてゆく自作農の人達にとつては、一人でも、喰べる人間のあることは苦痛である。それも、男ならば働いてすこしは役にも立たう　けれど、娘は邪魔だ。

越後女は出稼ぎをする――その裏面は彼女達は村に居ることが出來ないのだ、村に居ては喰べることを得ないのだ。泣いて他國へ他國へと出てゆかねばならないのだ。

色を賣る倫落の女――それのほとんど全部が越後の女のやうに信ぜられた時代は過ぎ去つた。そのかはりに『會社者』即ち紡績、製絲工場に出稼ぎにゆく女は越後の女、それも農村を追はれた女が大部分を占めて居ることは何を語つて居るのか！

工場に出稼にやれば幾何かの前借金を得られた上に食費は會社持でその上働けば多少の貯金も出來る――會社へ、工場へと親達は娘がまだ十二三歳位ひの幼い時にかの灰色の牢獄へと送り出すのだ。

下女奉公をするより、泥の中で稼ぐよりも工場にいつた方がいゝ。機械と糸との中で働く汗の勞働ははげしいけれど、しかし、村に居て百姓仕事をするよりは樂だ、その上に、食べ物がいゝ――工場の食物は普通から見ればあまりに貧しいのだがそれよりも農村の人達のものはひどいのだ――賃金も貰へる、都會を見ることも出來る、女工にならう、工場に行かう――農村の娘達の强いあこがれはこの『會社者』である。

農村を理解せず眞に農村の人達の幸福を考へぬ縣や郡の低腦な役人達は『勞働は神聖也女工は尊い仕事也』と、無智な人々を煽てあげる。それに、一層熱をかけて工場の募集員達は賣藥の廣告みたいに工場の効能書を並べあげる――そして人々は、何の考へもなく喜んで工場に娘達を出す、娘達も大喜びで工場に買はれてゆく。

かくして農村の若い女達は村を去つてゆくのだ。

娘を工場や娼婦に賣る程貧しくない地主級の娘達は女學校に入學するために村を去る。そして、卒業すれば村を嫌ひ農村人の生活を嫌つて都會へとお嫁入りをする。

農村にはかくして、若い女の姿を見ることが出來なくなるのだ。考へて見るがいゝ。女の居ない里の青年の寂しさつたらどんなであらうぞ！僅か十分間か十五分間乘る電車の中に女が居ないと寂しいなどといふ都會の人々はこの若い女が一人も居ない農村に行つた時にどんな感想を抱くであらう――。

そろた〳〵よ　まつかのおねさが

そ――ろ――たの――

おやま人形の様によく揃うた

かうした唄を揃へて田植をする時、百姓にとつては一年中で最も樂しい仕事であつた。それは彼等が命をつないで行く營みの上での最も重大な仕事の一つであると同時に彼等の心身を樂しませ慰める上での最も重大な行事の一つであつた。唄の通りに以前は若い女卽ち『早乙女』も交じつて樂しく田植をして居た。彼等は、この娘達と唄ひつゝ泥の中で働くことがどんなに樂しかつたであらう。

『唄などうたつてゐては到底完全な田植が出來るものでないから田植唄を廢した方がよい。』

これが低能な役人や學者の議論であつた、無智な單純な農民達はこれをよいことだと思つて、あの單純な文句ではあるが快い調子を具へる唄を廢してしまつた。その上に、田植の花とも云ふべき早乙女達は女工に奪はれて今では皺くちやの婆さん達や骨張つた嬶達の外に女の姿を見ることが出來ないのだ。農村の人達はかくて樂しかるべき田植すらも泥の中の苦しき勞働と感ずるばかりになつた。

夏の夜の唯一の快樂である盆踊――春秋の村の祭り、正月、于蘭盆――その何れもが農民の待ちこがれる嬉しい日であつた。だが、役人達が

『盆踊りは風敎上弊害がある。』

『生活改善のためお祭りはやめろ。』

『正月や盆は簡單にやれ。』

などと、おせつかいをして止めさせやうとする上に、これらの樂しみに唯一の花である娘達迄も奪はれてしまつて居る。農村に何の慰安がある。活動寫眞も芝居もない。美味な物を喰べる金もない――彼等は牛馬よりもつとひどい勞働を強いられて、泥の中で悲鳴のみをあげろといふのか！

二　群がる工女

くどいやうだが農村の娘達が志望して居る女工の末路と農村といふやうなものを語る必要を感ずる。

農村から狩集められた若き娘は二月の末頃に長野、群馬、東京、愛知方面へ續々と輸送される。

昨年私は長野驛頭でこの女の群を見た。

製絲王國へ！製絲王國へ！　と集つて來る女工達の群！はちきれさうな列車！驛頭の混雜！なんといふ物凄い有樣であつたらう、なんといふ悲しき農村を去る若き女の群であつ

たらう。

私が驛頭に立つたのは夜の十時半であつたが三等室は若き娘達をもつて埋まつて居た。彼女達は製絲場の事務員らしい男に引率されて群がり來つて居るのだ、中には學校の生徒みたいに身長の順で並んで居る團體もある。

彼女達は勿論越後、越中の農村をすてゝ來て居るのだ、二十歳近くから十二三歳のいたいけな手に風呂敷包みを抱へて、しよんぼりと立つて居る姿、思はずして出る郷里の言葉。おう！痛ましき、いとしき少女よ！、お前達は村を追はれて來たのか！私はなんとなく涙ぐましい感激を覺へた。

その夜驛頭に群がつた團體は千五百名であつた——出稼する女は越後だけでも十五萬人——。驛員は『團體の方は向ふから這入つて下さい』と出口に連れていつた、彼女達の長い長い列はぞろぞろと構内に這入つてゆく。長野の夜更けの風は冷たく吹いて彼女達の頰を凍らせる、冴ゆる寒月は忍びやかにショールも持たぬ彼女達の細い襟に照りつけて居る。

列車に乗り込む狀態は正に軍人の出征の感がある、さうだ！女工といふ娘子軍の出征なのだ、弱き、やさしき若い女だもの。その魂は追はれた家郷戀しさに戰いても居やう。その眼には父母を慕ふ涙がにじんでも居やう、しかし、多くの同性の中に交り、ぞろぞろと行列を作つてゆく時はもう興奮しきつて居るのだ。氣ははりつめて居るのだ！

若き女のみを乗せた女護の列車はやがて發車した、と、そこへ千五百名の女を乗せた特別列車が又すべり來んで來た。

市中の宿屋といふ宿屋はこの女工さんで滿員である。

長野縣工場課の調査に依ると昨年度の女工總數は八萬五千八百八十六名である。中、越後出身が八千十二名で山梨、岐阜、富山といふ順位になつて居る。

年齢を見ると一番多いのは十七才で次は二十才迄で、いたいけな十三才の者も三千名から働いて居るのだ。賃金は最低二十七錢最上八十四錢となつて居るからいゝ收入ではないけれど百姓の娘にとつては有難過ぎる程の金である。

現在では工場の組織も完備し、寄宿舎の設備も完全して居るから、世間でいふ如くに悲慘な生活もして居なければ『灰色の獄舍』でもないやうだ。

健康狀態は三千名中に左の如くになつて居る。

名稱	人數	%
肺患	一九	〇、八
心臟病	二四	一、一
トラホーム	一六四	六、八

肘験腫	一一九	五、二
頭腺腫	一八〇	七、〇
其他	三〇	一、二

　これらは工場課の役人の調査だからすこしは割引して聞く必要がある。

　ふくよかな乳房を持ち、血に燃ゆる唇を持つた若き女達だもの、色々なローマンスはさながら糸のやうに織り出されて居る。

『女工達の唄をきいて御覧なさい、面白いのがありますぜ。』と、ある役人は云つた。

『どんなものです。』

『いや。私の口では云へません。ひどすぎるので……』

『では書いて見て下さい。』

『書くことも出來ません。』と妙な笑を浮べて私の顏を眼鏡越しに見たことである。

　察するにやみがたい性の悶えがその苦悶の叫びとなつてひどい唄を歌ふものらしい。

　農村を追はれて機械と糸との中に働く女工の群には暗い『性』の悶へが流れてゐるのだ。そうして、之れを誘惑する黒い惡魔がニタリと笑つて居るのだ。

　女工の國といへば誰しもが直ぐに墮胎を想起する――事實長野縣には墮胎罪が甚だ多い。

ある席で檢事正に面會したので、その事を聞いてみると

『他に比較すれば多い樣です。墮胎の犯罪者の多くは女工となつてゐますが、これは、長野縣の女といへば大部分が女工なんですからね。女工許りが墮胎をするともいへないでせう。』との事であつた。そこで、私は更につき込んで

『これに對する何等かの取締方針はないものでせうか、出來るならば未然に防ぐといふ樣な……』

『私達も考へて居ます、何分、面倒でしてね。』と、檢事正は答へた。

　製絲場は農村を追はれた女工の王國であり、さうして墮胎の魔の世界だ。暗から暗へと葬らるゝ、不貞な呪はれた塊があまりに多いのだ。さうして果敢なく、悲しいローマンスがいかに多いことであらう。

　農村を追はれた娘達の女工生活だけでも書くべき事は多いそして、大きな社會問題である。

　賃金がどうの、寄宿舍が惡いの、勞働時間の制限、健康調査など當局者は八釜敷く云つて居るけれど、本當の人間の叫び、本能の働きを忘れて居ては佛作つて魂入れずであら

う——

魂を破產せしめ、身體を傷け、更に暗い魔の淵に身を沈め、思はざる犯罪者となる女がどんなに多いであらうか、考へると、涙がこぼるゝ。

若い女だもの、戀もしやう、性の衝動に打負けもしやうといへばそれ迄である。しかし彼女達の戀は、美しき花ではなくて、呪はしき實であるのだ。赤き實でなくて、黑い種子であるのだ。そこには戀の純情も、戀のきよさも、戀の幸福もない。たゞ、性の惱みのみが殘されて居る。

三　嫁が欲しい

魂を自殺せしめた女達は年に一度は追出された村に歸つて來る。

村を出る時に貧しかつた着物をまとつていつた彼女達は一年の勞働を終へると、紫のショールをつけて來る、節のたつた指には硝子のはまつた指輪を光らせ來る。縮緬の半襟を誇りげに掛けて安香水をプンプンと匂はせて居る。しかし、山と田と畑に育つて頰はいつも紅色を呈して、唇は艶々しく、豐かな肉體には血がふき出しさうだつた彼女達の健康な姿は見ることが出來なくなつてしまふ。皮膚の色は靑い、身體は瘦せて居る。唇は紫に頰はこけて眼ばかり光つて居る。

だが彼女達の着かざつた姿は村の娘を羨望させずには置かない。村に居れば、一生を働いても着物さへも買へないのだ、指輪など夢にも見ることが出來ない。

若き女が歸鄕したことを靑年達はどんなに喜びなつかしむであらう。けれど、一度村を追はれた女達は昔友達の若い男などに一瞥も與へない。

『なあんだ百姓なんかつまらない。』と、靑年達を馬鹿にしてしまうのだ。

村の若者達の哀れさはどうであらう、彼等は同じ村に生れた娘達から嘲笑と罵倒と冷視を與へられねばならぬのだ。

かくして女達は純眞な村に、いやな唄や、流行節を殘し、他國に行けばいゝといふあこがれを植ゑつけ、百姓などつまらないものだといふ感を與へて又他國へと去つてゆく、そうして、昔から殘つて居る唄のやうに

越後出るとき涙で出たが今ぢや越後の風もいや——。

と、故鄕を振返つて見ようともせぬ。たまたま歸つて來るのは怖ろしい肺病に身を冒されたもの、花柳病に身動きも出來なくなつて仕方なく身を養ふための女達だ、しかも、彼女達は村にこの呪はしい怖ろしい病毒を流布させる魔の女では

ないか。

娘達は村を出てゆく、さうして、村を振返つても呉れない。まして、町の女がどうして農村などを親しもう。村には若き女が居らない。

農村の青年はたゞに寂しいばかりでなく、一體、嫁をどこから貰ふのか！

生活に虐げられ、慰安さへも與へられぬ農村の青年達は嫁を貰ふことが出來ないのか！

事實青年達は迎へる嫁がない。それも、地主級の者はとも角小作人達は絶對に嫁を迎へる女がないと云つてもよいのだ。

悲劇はそこから織出される。最近にもこんな二つの事實がある。

山下友吉といふ若者は女工となつて信州にいつたお絹といふ娘と契つて居た。が、女が旅立つた始めは手紙を寄越したが遂には『わたしは百姓の女房になりたくはありません。今迄のことはあきらめて呉れ』と、いふ悲しき手紙を寄越した。

彼は泣いた。女を怨んだ。現在の生活を呪つた。そして、せめては女に逢つてその破約を責めたいと思つたが旅費がないので遂に強盗に押入り主人を惨殺して無期懲役に處せられた。しかも、女はその悲しき報に接しても村に歸らうともしなかつた。

その隣村でも同じ結果になつた浦野專三といふ青年は女を一度歸村せしめたいといふ無理な考へから女の家に放火をして捉へられて懲役五年に處せられた。

この二つの事實は何を語つて居るのだ。裁判官も檢事もただ『痴情の結果』と斷定したけれど、眞實に農村を知る人はもつと、もつと重大な意義を感ずる。

嫁も貰へぬ農村の青年——考へれば考へる程氣の毒である。

青年達は娘の居ない、虐げの多い村をすてゝ都會へ都會へと逃げてゆくのは當然過ぎる程の當然でなくてなんであらう。

若き娘の居ない農村には、やがて、若き男の居ない農村にならうとしつゝある。

『こんな風でこの先五年十年たつたらどんな事になるだらう？』

かうした歎聲は今や到るところの農村で聞かれる。

物質文明の跳梁と都會生活の誘惑と物質慾の増長とによつ

ていたましくも引き裂かれた仕事と快樂とは、日に日にそれぞれの最も惡い方向へと走りつゝ現在生活の趨勢をさながらに追ふことのいたましさをあまりに明かに示されて來た私達——少なくともさうした仲間の一人である私は都會へ飛び込んでゆく農村の青年達を悲しく見るばかりである。都會生活がいかに呪はしく、いかに淺間しく、そして彼等の夢を打砕くであらうとも、今の農村の有樣を見聞すれば、彼等が夢を追ふて都會に去りゆくのをとめることの方が痛ましいのだ。

四、青年の悲鳴

この間新潟縣青年雄辯大會が高田市で開催された。それは、修養的のものであつたにかゝはらず農村の青年は悲痛な叫びをあげた。いや、訴へたのだ。泣いたのだ。

ある青年は壇上に熱淚を溢して演說した。

『農村の振不振は國家の大問題である。經濟的に農村の衰退は刻々と深くなつてゆく、農村は死滅して居る。これは、都會本位の從來の政策が惡いのだ。今後は、農村中心主義で進め而うして、その具體的各種の方策も結局農民の政治的に自覺することとである』

次の青年は泣きつゝ叫んだ。

『物質文明に惠まれぬ農村が何によつて慰めるのだ。それは、一に精神文明の開拓に依るより外はない。しかし、精神文明に生きるには私達はあまりに淋しい。そして、悲しい境遇にあることをどうすればいゝのか！』

次に起つた青年は悲鳴をあげた。

『農村生活は今や牢獄の中に居ると同じことだ、吾々は鐵の鎖で縛られて悲しく生きて居る。どうにかして呉れ、農村制度をどうにかして改善して呉れ。』

田園詩人らしい青年は悲痛な聲で云つた。

『風流を樂しむ花圃ならで、後の畑・前の田の作物に志し、自ら鍬を把つて耕し、先祖のたまものと命の親に怨を慰し、吉野の櫻更級の月よりも己が樂こそ樂しけれ。朝夕、心をとめて打むかふ菜種の花は井出の山吹よりも好ましく、麥の穗の花は、牡丹芍藥、より腹ごたへあるかと覺ゆ、朝顔より夕顔こそよけれ。秋菊よりも芋、牛蒡に味あり。すべて、花紅葉より、栗、柿は實の木なり、稻の穗なみの賑はしく、藁の前より腹滿つる心地して、粟穗になるゝ鶉より野邊の虫音聞くが面白く、遠き名所舊蹟より近き田圃の見廻りが飽かず……

といつた一條の誇りは吾等の祖先の誇りでもあつた しかし、

今の農村はどうであるか虐げられて呪はれて居る。一條の言葉など今日から見れば既に遠く過ぎ去つた昔の人の愚かしい夢に過ぎなくなつたそれだけに悲しい。』

ある青年は純眞そのものゝ口調で叫んだ

『田植時からかけて田の草取りの時期の終る頃まで、私は多くの日の午後を田畝の間で釣竿を手にして過ごした。二十年ぶりで私はこの土地の人達の唄ふ田植唄や盆踊り唄や、松前節やその他多くの昔ながらの懐しいメロディーを心ゆくまで聴くことが出來た。そして、それによつて私の傷つきそこなはれた心はこれまで求めても得なかつたいきいきした力をどれだけ多く與へられたかわからない。私は永い都會生活の間に聴いたかなり多くの世界的名曲の演奏によつてよりも、はるかに力強い藝術的感化をそれによつて與へられたやうに思つた。私は更にそれらの唄が、それを唄つてゐる人達の生活にとりて如何に多くの意義あり價値あるものであるかをも如實に觀ることが出來た。勞働の苦しさを唄によつて慰めまぎらせると云ふやうな單なる消極的な効果以上遙かに高尚な遙かに多くの意義と價値とがそのうちに存することを、私はさまざまの點から觀ることが出來た。唄ふことの巧拙は別として唄を愛すると愛せないとの差は人々の間の人格的價値の無量の差を示すものであると云ふ事をも私は思つた……と、越後に歸つた詩人は六五年前に云つた。しかし現在の農村は所謂メロディーの唄の聲を聞くかはりに泥の中の苦悶と悲鳴を聞くばかりとなつたではないか！』

また一青年は臨場した役人達を睨めつけながらも叫んだ。

『農村は役人達から善導されるよりも惡化されて居る。考へて見るがいゝ。もともと百姓がいやさに役人や教師になつた人達に何で本當の善導が出來るものか！　自分で百姓を嫌ひになつた人々の農村の善導位ひ農村に迷惑なことはない。けれども、さうした皮肉は決して彼等にのみ限つたことではない。現代社會のあらゆる方面に、それと同様な事が盛に行はれてゐる。その最も甚しいのは、全體として農村生活そのものに就て、多くの所謂思想家、學者、藝術家、教育家などといふ種類の人々のなしつゝあることである。先づ自己の内部にみづから生そのものに對して農村そのものに對して燃え立つやうな愛着を感じない者に何で農村の眞實な考察があり得ようぞ！』

その他多くの青年達は『曉鐘は既に鳴れり』『農村の振興』『わが農村は救はるゝ日』『奮起せよ』—農村の死活問題』『呪ふ』『努力』『濁流に直面して』『新らしき道への歩み』『青年よ須

らく悲観せよ』等の題下に農村人の悲しき血の叫びを擧げたのである。

修養的の會に於てすらもかくの如くに彼等は叫んで居る。まして、農村に居て彼等は如何に農村を呪ひつゝあるであらうか！泥の中で喘ぎ苦しんで居るであらうか！私はこの演説を聽き彼等の生活を思ひたゞに涙にくれたことであつた。

しかし、叫び得る者は幸福である。この會に出た辯士の大部分は地主級の息子である、農學校或は中學校を卒へた青年である。だが村には滿足に食べも得ぬ二十萬の小作人の青年が居る。彼等は悲鳴をすらも擧げることが出來ずに泥の中に呻吟しつゝ生を呪ひ農村を呪ひつゝあることを考へる時に私は涙すら流すことが出來なかつた。

三、小作人達

小作人達は米をつくり乍らその米をすら喰ひ得ない有樣の下に牛馬のやうに喘ぎつゝ働いて居る。しかも、百姓の大多數がこの小作人なのだ。

何故に小作人は貧しいのか――彼等は大抵七八百刈の地所を借りて居る。（一段に七十刈）越後に於ける百刈の收穫は平均五六俵に過ぎない、その內地主への納米が七割又は六割であるから六俵として小作人が得るのは百刈二俵だそれを八百刈に見積つて年に十六俵に過ぎない。卽ち俵十三圓として小作人達の得る收入は一年に漸く二百二十八圓に過ぎず月額十九圓である。日に割當てると六十三錢弱にあたる。いかに農村といへどもどうして生活して行かれやうぞ。

しかも、彼等は朝は明けぬ內に夕方は星出づる頃迄も働くのだ、そうして、八百刈も持つ小作人達は主人は勿論妻君も老人も子供も汗みどろになり、泥塗れになつて働くのだ卽ち四月から十一月末まで屈強の人々が十時間以上の劇しい勞働を強いられて得る收入は漸くに二百圓內外に過ぎない。

北國は雪が深く冬が長いから麥作はほとんど駄目なのだからたまらない、この僅かな收入で一家五人なり六人なりがどうして喰べてゆかれやう、假りに一人四俵喰べるとして五人の家族があれば二十俵入用となる。彼等の得るのは十六俵なのだ、稼いでも稼いでも自分の喰べる米さへも得ることの出來ぬのが彼等小作人達である。

幸に副食物は豆でも野菜でも自分の畑から穫れる。長い冬の間は雪掘人夫などをして賃金をとる、時には日雇にもなるので小使錢や子供の扶養費は得ることが出來るけれど、しかし、以上の數字を見た人々は彼等が物質的にも何等惠まれ

ぬ痛ましさを知る事であらうがその上に税金、肥料代も出すのだ。

農村は疲弊して居るなどといふべき時代は過ぎた、小作人達は死滅に近いのだ。

彼等の食膳を見よ――自分で穫つた米も喰べ得ずに芋、豆、野菜の雑炊を漸くに喰べて居るのだ。魚屋は村に來ても買ふ金がない、豆腐屋は來てもこれも買ふには金がない――かくして彼等はたゞに痛ましい食膳に向ひ、常に空腹を訴へて居る。

小作人の子供達は生きた魚を喰べたことは恐らくあるまい、彼等は、魚といへばあの鹽つからい鹽鮭より知らない、それも、一年に漸く一度お正月に喰べるのだ。

『おかしいな。××さんの宅でお正月でもないので魚を喰べて居る。』

地主の家で魚を喰べて居るのを見た子供達が不思議がるのを知つた時私はたゞ涙が流れるばかりであつた。

喰べることを得ぬ人々が着ることが出來やう筈がない、病氣にかかつて醫師を迎へられやう筈はない。

一人でも人間を減らすことは彼等にとつては極めて必要なことだ、從つて、前に云つたやうに女工に出したり出稼に行つたりする。

そんな慘めな生活をする位ひなら何故に都會に出ないのか、それだけ働けば日に二圓位ひの收入はあらう――と、云ふ人があるかも知れない、しかし、小作農をするより外に仕事のない彼等である。農村から一歩も外に出ない彼等である。ことに、彼等は郷里に對して、土地に就て深い愛着を抱いて居るからいざとなると都會に出る勇氣を持たない。

だが、青年達はこんな生活と、こんな村に居られやう筈がないから前に云つた如くに都會へ都會へと逃がれてゆくのだ。

小作人達は赫灼たる眞夏の太陽にてらされ泥の中に働きつつ日一日と暗い底知れぬ世界へと誘はれて居る。

最近起つて居る小作爭議の如きは、工場勞働者の爭議の如くになまやさしいものではない、小作人達にとつても、本當に、生きるための悲鳴であり、地主に要求をせねば居られない心からなる叫びなのである。しかも、彼等は無智なるが故にその要求を容れられたことは尠い、大抵は、彼等を煽動する者達の喰ひ物になつて居る事實をどうすればいゝのか！世間からも小作爭議といへばある種の滑稽視され識者からも注目されずに、いつも、泣き寢入をせねばならぬ事實をどうす

ればいゝのか!

六、小作爭議

小作人に向つて踊れよと笛を吹く人々――それは多くは職業的煽動家であり、彼等を喰物にする野心家である。

『君達はなんといふ貧しい虐げられた生活をして居るのだ、君達の勞働に對する當然の要求をすら與へられて居らない、地主を見ろ、寢て居て贅澤な暮をして居るのだ 君達は何故に立たないのだ、受くべき報酬を地主にせまらないのだ。君達は自分の力によつて運命を開拓するにある。』

煽動家は小作人達を集めて笛を吹く、小作人達は成程さうだなあと感心する、そしてすき腹を抱へて踊り出すのだ。彼等は旗を押立てゝ地主に小作米分配高の增加をせまるけれど、その前に煽動家は地主から買收されてしまひ、地主は警察から護衛の巡査を呼集めて小作人達を一歩も近づけない。小作人達は毎日地主の門前で餓へ犬のやうに吠へるばかりなのだ、土地を返上すると地主が困ることを知つて居ても、地主がこれを容れると、先づ自分達の方が困るから強い要求も出來ない。遂には吠へるばかりで何等の要求も容れられずに止めてしまう、結極、騷いだだけが損になるわけだ。そして、小作人達が騷いで居る間は地主は美酒に醉ひ、煽動家は相當の金をせしめ、巡査達は生れて初めての絹蒲團に寢そべつて居る。

小作人達はしかしこの儘では苦しい、苦しいから又煽動家の笛にのつて踊り出す、そして、止める。結極、彼等の操人形のやうに踊るに過ぎないけれど、彼等は眞劍なのだ、血の悲鳴をあげて居るのだ。

越後ではこの小作人達を煽てゝ巨萬の富を貯へ縣會議員に當選した者がある、彼は更に衆議院議員選擧の際にも自ら農民のためと叫んで立候補して

『今は役人も代議士も宗敎家も信ずることが出來ない。農村の者は自ら政治を握つて、眞に農村のための政治を施かねばならぬ、私は諸君の眞の理解者である、諸君のために本當に働く者である、どうか諸君清き一票ではない諸君の尊き泥の一票を私に與へて頂きたい、そは、諸君のためである。』

と、彼は叫んで小作人達の喝采を博した。

無智なる彼等は彼を代議士にさへ出せば自分達の上に直ちに幸福が惠まれると思つて貧しき中から金さへも贈つた。

然るにどうであらう、その候補者は選擧近くになつて一萬圓近くの金で別の候補者に農村を賣つてしまつたのだ!

これが小作人達である、それを煽動して騒がせる煽動家なのである。

笛吹く者は多い、空腹を抱へて踊出す者も多い、しかも、その踊はいたづらに彼等を空腹たらしむる悲しき哀れな踊に過ぎない。

貧しいのは小作人達ばかりではない彼等の羨望の的となつて居る自作農の人達も同様なのだ、自作農をする人の財産は不動産として二三萬圓を有して居る、しかも、漸くに喰べる生活を營んで居るのだ。

地主といへども決していゝ生活を營んでは居ない、從つて、この財産をもつて町に出る人が多いのだ、卽ち、田畑に作物を植へる收益よりも銀行利子の方が割がよいから町に出るのだ。

若き女も出る、青年も去る、小作人達も逃げる地主も村を捨てる——農村には誰が殘るのであらう、日本人の喰べる米は一體誰がつくることにならう。

眞に農村の滅びゆく有樣を見た時、人々の痛ましき姿を見た時に私達は慄然たらざるを得ない。

七、痛ましき子供

世に農村の子供ほど幸福なものはあるまいが、又、痛ましき慘めなものもあるまい。

越後、越中、信州の山間部の農民達は昔ながらに産兒制限を行つて居る。

彼等は子供が多く出來ることは苦痛だといふ事は前に書いた事實で分るであらう、從つて意外に子供が尠い。

子供達の多くはこの世の光明にも接せずに暗から暗へと葬られて居る。

幸に生れた子供達は嬰兒の時からすでに惠まれて居ない、小作人達は、子供の世話をする時間さへもない。朝早く兩親が野良に稼ぎにゆく時に乳倉の中に入れられて一人取殘される、泣けども叫べども母は居ない、お腹を空かして晝迄待つ、泣き叫びつゝ夕暮を待つ、そして、汚ないものゝ始末もろくにして貰へずに生長する。

だが、その嬰兒達はなんといふ榮養不良な痩せ細つて居ることであらう。母は、自分の健康を保つ程の食事も攝つて居ないのだから、どうして、嬰兒に迄も充分な榮養を與へることが出來やう。

成長した子供達は惠まれた大自然の中に抱かれることは都會の子供に比すればあまりに幸福であらうけれど、しかし、

お菓子もない、繪本もない、玩具もないことは淋しくもあらう。しかも、彼等の腹は滿たされぬ空腹をのみ感じて居る。着るにはあまりに不潔な痛ましき着物を着て居る。村の地主の田植祝や、葬式や、祝事に招かれた親達の歸りを子供達はどんなに待つことであらう。

農村に於ける御馳走の大部分は家に持ち歸るやうにしてある。魚なども煮ないものを出してある親達は家に待つ子供のことを思ひ喰べもせずに持ち歸る。そして、小さな鮭の切肉を一家七人で頒けて無上の美味として舌鼓を打ち、餅の中に砂糖の這入つたあんのあることを非常な喜びとして喰べる。彼らは砂糖の旨さを知らない。餅でもまんぢゆうでも殆んど全部が鹽のあんがはいつてゐるのだ。

しかし、都會の子供に比して幸福なことは果物を與へられることであつた。春から秋まではとりどりに美しい果物が實るのを樂にすることであつた。しかし、貧しき人達はその果物も僅かの金にかへるために子供達から奪つてしまつたのだ。

學校といへども不完全なものである。俸給の關係からいゝ先生も居ない。金の關係から器具もない、運動會も、遠足もない。

教育費の激増にはほとんど全部の農村が苦しんで居る。福島縣に於て小學校教員の俸給を、數ケ月も支拂はなかつた町村があると、新聞紙上に傳へられた。越後でもさう云ふ事實、若くはこれに近い事實は多い。福島縣の一地方に限られた現象でなく全國の資力の比較的薄弱なる町村に通有の現象なのだ。たゞ、その事が如何にも體面に關するが如く思はるゝが故に、町村當局者が苦しい算段をして彌縫して置き、又、あまりその苦聲を大にしないために、それ程に大袈裟に世間に傳はらぬものなのだ。

福島縣下の或る町村が、かうした苦境に陷つたのは、前年戸數割規則の改正と共に、その納期の改められたことが原因して居るなどと云はれて居るが、私達から見れば、そんなことが果して原因であるとすれば、之れを是正することは、なんでもない事であると思ふ、何故ならば戸數割の納期の如きは府縣だけで自由に改正の出來ることだからである。福島縣は何を苦しんで、一定期間町村の收入を斷つて、その倉庫を空にするやうな納稅期などを保守してゐる必要があらう。しかし、翻つて考へて見れば、町村の支出は、自らその年度の豫算に依つて定まるものであつて、それ以外には一錢の支出をもなすことが出來ないものである。懷中が豐であるか

ら、贅澤品を一寸買込んで置かうといふやうな個人經濟とは、大いに趣を異にするものなのだ、だから本來收支の辻褄を合せてその計算を立てゝゐる者の町村財政が、たとへ、納稅期がある時期に片寄つたことがあつても、別言すれば町村の收入がある時期に偏傾するやうなことがあつても、そのために町村の財政が、それ程に急激に窮乏に陷ることなどは、決してあり得べからざることである。斯く考へ來ると、その原因は戸數割納期の改正などと云ふことでなく、かりに、それが多少の原因をなすものであるとしても、他にもつと大きな、深い原因がなくてはならぬ。

單に福島縣の町村のみでなく全國一體の各町村の支出の六割も七割も占めてゐる敎育費の支出に甚だ苦しんでゐることは爭ふべからざる事實である。その極端なるものが遂に小學校敎員の俸給不支拂となつて現はれるのであつて、それは、租稅の納期などの問題でなく町村財政そのものゝ疲弊である。

支出は激增する、殊に敎育費は激增して居るに拘らず資力は少しも增加せぬばかりか減じて居る、それは、前に書いた事實が物語つて居るのだ。

例の義務敎育年限延長の如きが實施されたなら町村財政は一層窮乏を告ぐるであらう。

農村の財政の窮乏ははかくして少兒達の貴き敎育さへも滿足に與へさせては居ない。

たゞにこの一事實のみでも極めて重大な問題ではなからうか──。

八、役人の空論

死滅してゆく農村の悲しき事實は語れば盡きない。

本當の農村を知り、農村のことを思ふものは農村の人々より外にはない、學者も、宗敎家も、デモ政治家も役人も駄目なのだ。

役人といへば縣廳や郡役所あたりの役人程農村を惡導し惡化せしむるものはない、彼等が眞の農村を知らずして農村を善導しやうなどと、講習會だの、機械獎勵だのと、理屈ばかりを並べて正直な農村人を迷はせるのだ。

ある篤農家の話だ。

『この間縣廳の役人が來て、百姓は生活難を訴へて居るさうだが、白米などを喰べずに芋だの、麥だのを代用食にすればいゝと云つた。癪に觸つたから私は答へてやつた。米は百姓がつくるんですぜ、自分でつくつた米を喰べることが出來ないなんてそんな悲しいことがあるものか、代用食を奬めるお

前さんこそ先づ芋を喰べるがいゝ。』

一事が萬事この調子だ、從つて、お役人樣の仰ることはいゝ事だと盲信して居た農村の人達も今では極度の反感をもつて居る。

農村電化——機械奬勵——多作方法——理屈はどうでも云はれる、だが、事實をどうするのだ。肥料を買ふ金がないので、多作を得ることを知つてもその肥料を使用しない農村の人々ではないか！米が豐作すれば米價が安くなるので結局勞力だけの損をする現狀ではないのか、機械使用を奬勵するのもいゝがこれがためにあまる人間をどうすればいゝのだ、機械を購入する金は誰が出すのだ。

農村はもう疲れ過ぎた。

農村の人々は斷末魔の悲しき跡をつゞけて居るのだ。

どうにかしなければ死滅するより外にはないのだ。

舌の議論より千の理屈よりも一の救濟策の方が人々にとつてはどんなに有難いことか分らないことを知れ！

農村の人々の泥の中からあげて居るあの悲鳴を聞くがいい！

女教師の見たる農村

吉川雪羊子

「アノ子はどうして來ないのだらう」

そう案じながら過ぎるとなし半月も經ちました。體の弱いとも思へぬ子が突然休むので氣になつてなりませんでした。

或土曜の日學校を早くしまつて十町餘りもあるその子の家を訪れることにしました。遊んでゐる村の子供に道を聞き聞き尋ね當てたのはもう幾年にも葺きかへたことのない藁屋で軒が左に傾いてゐる極く小さい粗末な家でした。

雨戸が一枚開いてゐる敷居をまたんで入つた土間の隅には草履の作りかけや藁屑等が散かつてゐました。薄暗い家の中には、爐のきつてある板敷の勝手にその奥に黒ずんだ疊のし

かつた小さな間が一つ見えました

「今日は」と呼ぶ聲に、眼鏡を外しながら立つて來たのは奥の部屋で今迄何かをつゞつてゐたらしい七十を越えたお婆さんでした。

「どなた樣ですか？」

「やすい樣が餘り永い間休みますんで、どうかなすつたかと思ひましてね……。」

　私は臺所に立つたまま、板の間に座つて挨拶をしたお婆さんにこう答へました。

「ハアそうですか、マア先生樣、わざ／＼お出で下さつて……。實はやすいのお袋がもう一月も寢こんでゐやしてねえ。」

そう言はれて奥を見れば、小さな布團にくるまつてやすいの母親と言ふのが枕もとに煎じ藥の土瓶をおいて寢てゐるやうでした。「アレが達者なら何もねえんですが、小さいのが二人もあるに看る者がないので、遂ひ仕方なく學校を休ませて子守をさせておきやす。私が見ればいいやうなものの、眼は見えないけれど、こうしてアレが賴まれたものを代つてやつてゐるのでごわす。お醫者樣にでも見て貰つたら早く癒る事もごわせうが、何しろこの通りの日雇ちやそれも出來ず、家で少しばかりの蠶をして見やしたがお知りのやうにこの旱魃で、桑はちぢれるし、硬くはなる、出來た繭も碌なほどないし、それに相場が惡いので賣つた金は、いつもの半分にもならないやうな始末でごわす、畑でもあつて家の桑でやる人はいゝでせうが、家ぢや桑を買つたのでそのお金を拂へば一月もの間汗水流して、寢るや寢ずで稼いだ苦勞も一文のたしにもならなくなつてしまひやしてね。マア何て言つたらいゝだか……。」泣き言を交へて言ふのを聞いた私は返事のしやうに困りました。

「家のお袋が達者にさへなれば、すぐ學校へ上らせやす。それ迄もう少し休ませておくんなさい。」私はもう何も言ひ得なかつた。暗い空氣に閉された一家が哀れでならなかつた。

　生活の脅威と貧苦の犧牲になつて、樂しい學校の友から離れて、幼い身にいまわしい悲痛の心を味はねばならない敎へ子の一人を、どれ程可憐に思つた事でせう。

「え〻〳〵。學校の方はどうでもい〻ですからどうぞお母さんをお大事にしてやつて下さい。」涙に滲んだ胸を抱いてたゞこう言つたままお婆さんに別れて、この不幸の家を去りました。

「何！山崎のお父さんが氣狂になつた」

私は組の子供が朝の休みにこんな噂をしてゐるのを聞いてから叫んだまゝぼうとしてしまひました。

山崎と言ふ子の家は父と後妻に來たなさぬ仲の母と三人暮でした。家は僅かの田を他から借りて小作をしたり暇の時には働きに出、又母はすぐそばのS町の製糸工場へ通つてゐるのでした。

その子は學校が終へても家へはすぐに歸らずに、よく遲くまで遊んで行く事等がありました。不思議に思つて、それを尋ねて見ると、早く歸つても家は留守で鍵が下してある爲入れないと云ふのです。無理もない父は仕事に行く母は工場へ行く。工場は五時には始まるので母が先に出れば父は後から子供を學校にやつてから鍵をかけて出先に行く。歸りは暗くならなければ來ないのがおきまり、それまで子供は學校で時を送るか、近所で遊ぶかして我家の開くのを待つと言ふわけなのです。

それが例へ借家だとは言へ、親しまねばならない、そして疲れた身の慰藉所、虐げられた心の避難所としての我家に對して、こうした行動を取らねばならないと言ふ事は、どんなに痛ましい慘事でせう。

或曇つた日の午後でした。其母親は見苦しい着物のまゝ學校へ訪れて來ました。其顔付を伺つたゞけで、一方ならぬ心痛と苦惱が彼女の周圍を取り卷いて、日に夜に嘖まれてゐることが讀めました。

彼女の語る所によつて私は一層の驚愕を受けました。父は發狂後、亂暴の振舞をするので親類で相談をして、座敷牢へ入れた所が、五日の後狂つた心のまゝ死んだと言ふのです、母は言ひました。

「そんなわけで私一人女の手でどうにもならないから松本の知つてる人が家の子の面倒を見てくれると言ふんです。魚屋ですが商賣を見習はせたり學校へも出してくれると言ふので、そこへやることにしやしたが、明日から學校の方を暇を貰ひたいと思つて、お願ひに上つたのです。」

それから六日許り經つた朝、登校の途中偶然にも、何時になく整つた風をしてゐる山崎母子に會ひました。もう松本へ行つてるとのみ思つてゐたので少し驚いた氣持でした。

「松本の方が都合惡いと言ふので、やどの弟が東京にゐるもんですから、これを連れて行つて來たんです。やつぱりいゝ工合に行かないで昨日連れ戻つた所です。今日はこれから長野へ行つて知つてる人に頼まうと思つてゐる所です。」

親類や知人等も皆貧しいので誰一人引取つて育てゝやると言ふ者がないらしいのです。母も生さぬ仲ではあり、種々に氣を揉んでゐるやうでした。

私はその後その子が長野に落付いたと言ふ事を聞きました。大工さんの家へ行つたと言ふ。温い肉親もないその子が十や十一で仕事場に出て知らない家で辛い思ひをしてゐるその姿が目に浮んでなりません。

ソレ暑中休暇だ。海か山か？　金の捨て場に困つて永い夏の身の置き所に迷ふと言ふ階級があると思へば又こゝには何といふ地獄にも等しい生活の營まれてゐる事だらう。

「おゝ休かそりやよい、少しは手傳になる」

そう言ふ提言のもとに小さい生の前には何が待つてゐるだらうか？

恐らく一級の中で温泉だ海水浴だと言つてゐる者は一二を出でないであらう。農を業とすることは苦熱の今こそ食を得るや否やの時期なのだ。一年に二回乃至三回の養蠶、一回の稻作、その豐凶、天候の善惡。焦熱を焦熱とせず、苦汗を苦汗とせず、炎天に曝されて桑摘みに、除草に一家死物狂での勞働はかうした生活に直面した者ならでどうして知ることが出來やう。暑中休暇は農村の兒童等にとつては苦肉の試練に等しい――一日中を子守に――未明に桑摘に――燒けつく眞晝中を水田の草取りに――夜は家人と共に給桑の手傳ひ――贅澤な都會の消費階級にたつた一日でもいゝ、こう言ふ生活もあるものだといふ事を見せたいものだ。

しかしこの勞働が何かの報酬を齎したとするならば、それも或はいゝかしれない。が農業者に何時の世に、苦痛の恩惠と、文化の惠澤に浴したことがあらう。

こう言ふ狀態で何で教育の徹底が期されるものか、始めに揭げたのは最近のほんの出來事の一片だ。學用品の揃はぬのは當然の日常事だ。書方の紙がない手帳がない鉛筆を買つて貰へないと言ふのはざらだ。買つて持つて來いとは強いて言へない實情にある。自分で紙を供へておいて無いものに與へたり、鉛筆を一打位おいて貸してゐる。そう言ふ兒童は又晝食を持つて來ないのが普通だ。

お役人はこう言ふ事實を知らない。稅金は絞り上げるが、その金は農村への何物の施設ともならない。中等學校は完全な設備の許に續々と增設されて行く。しかし義務教育と言ふ小學校の方は農村に任せて、疲弊困憊の極みも知らなげに涼しくおさまつてゐる。農村振興を綱領にかゝげて代議士に立

つたものは多かつたが、議會にあつての彼等は誰一人、この窮状を救はうとするものがない。

なるがまゝに萎微、困窮に向ひつゝある農村に文化の片影をだに認め得るの時は果して何時であらうか。

田畑千圓馬二百圓

小川みち子

繪に畫いた田植の姿は美しいもので御座います。東京府下粕谷の德富さんは「美的百姓」なる言葉を御用ひになつて被居います。しかし今の世にそんな美しい百姓は、何處へ行つても見出すことは出來ません。もしあつたといたしましたら、それは必らず眞の百姓ではありません。德富さんが矢張眞の百姓でないやうに、

如何なる事柄にせよ、生活といふ色をつければ、それは苦しい悲しいものになりませう。土を耕す百姓が美的でも詩的でもあり得ないのは、今のやうな世の中といたしましては、當然過ぎる程當然な事と存じます。

農村に住む人、必らずしも農民では御座いません。農村に生れ、農村の空氣を呼吸し、農村の水を飲みましても、それ丈けでは農民といふことは出來ません。

眞の農民とは、大地に勞働を加へて生産に努力する人を申しませう。斯う申しますと、自作農と小作農と丈けが、眞の農民で御座います。多くの場合農民顔をして、農民を代表してゐる處の、何々議員、何々委員、何々村長助役といふ人達は、あれは農村に住む農民ならざる、適切に言へば僞百姓で御座います。恁うした人達に依つて叫ばれる農村振興策、農村興隆策などといふものは、その聲如何に美しく尤もらしく聞えましても、それは決して眞の百姓である處の、自作農小作農の叫を代表するものでは御座いません。いふ迄もなく地主振興策で御座います。農業資本家の繁榮策で御座います。

筆者の農村生活は六年になります。其間に多くの家が倒れ

ました。時々村々を訪問しても、曾て親しかつた人の家に、全く別の人が住むで、裏の柿の實が、昔のやうにみのつてゐるのを見るならば、隨分淋しい心地がいたします。かくして或人は北海道、樺太、朝鮮等へ出て行きます。そうした出來事は、怎して起るでせうか。それは農村を我物顔して、農民でないくせに農民顔をして農村振興策などを叫んでゐる地主に喰はれ搾取せられた結果に外なりません。かく考へました時に、今日叫ばれる農村振興策などといふものは、眞の農民にとつては、自分等に對する搾取機關の擴張、自分等を蠶食する地主の興隆策で御座います。

國にとつて、社會にとつて、怎した大なる矛盾が外にあるでせうか。所にも依りますが、妾の住む此地方の上田（一番收獲の多い上等の田）では、一反の米の收獲は、よく出來て三斗俵九俵位で御座います。小作料として、地主へは七割納めるのが、此の地方で普通とされて居ります。小作人は、今日の如何なる職業にも見る事の出來ない程の烈しい勞働を、しかし家族總動員で致します。肥料は勿論農具馬等一切の費用を負擔いたしまして、得た所の生産品はたとひ山と積まれても、その七割は、地租を納める外何等の勞働も負擔も加へない地主へ納めねばなりません。自ら馬の脊に積み、地主の家へ運んで「まことに有り難う御座いました。御陰樣で……」怎う言つてその小作米を納めます。それは嚴重な桝に依て計られる迄、そこに腰をおろして、待たねばなりません。昨年の秋、此地方の小作人は、不作で定めた小作料を納める事が出來ない爲め、米を買つて加えて小作米を納めたと申します。豐葦原瑞穗國の、米をつくる百姓が、米の飯に腹皷が打てないといふことは、奇々怪々驚くべき事では御座いますまい乎。

物價といふものは、生産費を基礎として附けるのが元則では御座いますまいか。しかるに百姓の生産品丈けは、生産者には何等問ふ所なく勝手に買方が代價をつけます。米は蠣殼町で、糸は横濱で。生産者たる百姓は、その生産に要する肥料桑農具等一切は商人の定めた代價に依て買ひます。農家經營法などと言つて、郡役所や縣の技手位の人が、時々農村へ來て講演いたします、かゝる人は、百姓の貧乏は百姓一家の經營法がよくないからだと申します。そうした場合、少女會、主婦會などといふ官製の團體をば、村長や校長等が栽配を振つて、强制的に講話させます。けれども前述のやうな制度が改められない間は、いくらよい米やよい繭を生産しても、必らずしも收入を得る事が出來ないといふ不安定な組織である間は、人は農村の主婦等に農家經營を説教する事は出來ない

と存じます。況んやその説教者は、地主を背景とする農會や縣廳の官吏であつて見れば、尚更ら辻褄の合はない事であるまいかと存じます。

　養蠶……それは思つても見る事の出來ない程烈しい勞働で御座います。而して多くは女の力が主になつて致される仕事で御座います。蠶といふ生きて居るものを養ふ仕事は、決して普通の勞働と同一視する事は出來ません。彼等は文字通り不眠不休で御座います。養蠶の間は、百姓は眠るのではなく倒れるのであります。かくして我子に乳を與へなくとも、蠶には桑を與へます。日が落込み、體量が減ずる程の大勞働の後、出來た繭をば家族各々の脊に負ふて、一里も二里もの町へ行きます。其所には各所から來て居る繭買商人の店がありますから、其處へその重い荷をおろしまして「今年はいくらで買つて下さいますか」ときゝます。商人は出來る丈け安價な代價をつける事は言ふ迄もありません。そうした場合、土そのもののやうな顔色をした百姓が、繭を悲しそうにつまみ乍ら「こんなによく出來た繭だが隨分値がわるいのう」と泣き出しそうに申します。やがてあきらめたやうに太息を洩らし乍ら「桑代が又借金になつた」とう言つて、何にも足りない金を財布に入れ乍ら、親子で泣いて行くのを妾は幾度となく見て居ります。

　毎年の例として、養蠶に着手するころは、新聞は生糸の有望を報じ、郡役所や村役場の技手等もその有望を説明いたします。蠶が四眠頃になつた時、そろ〳〵不況の報知が傳はります。これは米に於ても同様で御座います。何人も心附ない迄に大袈裟な組織の下に虐使されて居るのが今日の農民では御座いますまいか。

　斯うした社會に於て、最も慘めなのは子供と女で御座います。農村の子供は育ちません、死亡率は都會に比して驚く許り多いので御座います。農繁期に於て、托兒所も幼稚園もない農村では、五六歳の子供に嬰兒の守をさせます。隨て此季節に於ける農村には、子供の變死が多いので御座います。守をし乍ら川へ落ちたといふやうな類で御座います。

　爰に申上げたい女の生活、それは涙の生活で御座います。

　農村は、勞働といふ事に於ては、男も女も何等の區別が御座いません。その筋肉の勞し方に於て、その腕力の用方に於て、女は男子と同等であらねばなりません。加之普通都會の女のやうに普通の仕事は、矢張農村の女に於てもせねばなりません。人より早く起きて食物をつくり、人よりも遲くまで起きて居て跡を片附ける事は女としてせねばならず、洗濯裁

縫はいふ迄もありません、草履草鞋の製造、機織る事も、皆女の仕事で御座います、而して其他何男子と同等に糞尿の中に牛馬とともに働かねばなりません。虐げらるゝ者は、時に却て虐げる事を敢ていたします。虐げらるゝ農村は、女と子供を虐げて居ます。自棄酒を飲まず、醜業婦に行かない農村の女は、涙丈けが悲しみのやり所で御座います。

ある年の田植時、妾は村の友を訪れました、まだ十八歳の美しい少女は、その日田に働いて居ましたから、妾はその田へまゐりました。一見して男子と異らないやうなその日の友の姿は、見て悲しく思ひました。腿の上部まで露出された兩足は、泥で鼠色にそまつて、その泥の中を、蛭に吸はれた赤黒い血が、しかも七八個所から流れて居ます。その美しい顏は壁人形といふ文字通りで、僅かに兩の眼のあたり計りが皮膚が見えます、それは烈しく泥の中を歩む馬に依て、泥の飛沫をあびせられたからで御座います。餘りの慘さに、涙さへも出ませんでしたが、それを普通の事にして、早朝から夜迄働くその聖者にひとしい體驗を見た妾は、心で合掌して禮拜いたしました。不淨を淸しと見、汗と涙を喜びとする。聖賢の道は、今日農村婦人に見る事が出來ます。

盆踊や村演劇では、今日の農村婦人は樂しめません。けれども上のやうな、暗い重苦しい彼等の生活には、何等の慰安も御座いません、時々來る活動寫眞に都會の香をかぐのです、時に村に一冊二冊と來る婦人雜誌を見て、都會の流行を究めます、泥人形になつて働くよりも、サツパリした着物で仕事をして、しかも收入の多い製糸工場に走るのは、當然な事で御座います。かくして農村には結婚難と肺病とが起りつつあります。

何等文化の設備のない農村には、迷信と因襲とが律法の如くに重ぜられて居ます、そうして中に農村の女は泣き乍ら暗い生活をいたして居ます。

なぜお父さんは百姓になつた。
朝から晩迄、まつくろになつて、
牛のやうに、馬のやうに、
土をこねくつて働いて、
百姓なんか、つまらない。
田畑千圓、馬二百圓、
家も納屋も賣つたなら。
名古屋で、立派に商賣出來る。
なぜお父さんは百姓になつた。

これは尋常六年生の女生徒のつくた童謠で御座います。國

民皆が考へさせられるうたであると存じます。

小作農の生計調査

玉木イシ

農村に於ける婦人の生活狀態は、その眞相を傳ふ可く餘りに悲慘なる事實に、充たされて居ります。妾共は淚なしに此の眞相を傳へることは出來ません。今日は三越、白木、明日は帝劇、歌舞伎と華美な流行と、歡樂を追ふて、尙ほ飽くことを知らない、都會に住める一部の特種婦人方等は宜しく襟を正して左の如き小作農の實際に於ける生計調査表を讀んで頂き度いと思ひます。

一片の社會的良心があり、人道愛に燃ゆる至誠のある方々なら、恐らく此の調査表を見て無限の嚴肅感を催すことでありませう。

妾が殊更此處に、小作農の生計調査表を用ゐやうとするのは、實に次の如き理由に基くのであります、一口に農村婦人と申しましても、その中には大別して地主、自作農小作農及び自作農兼小作農の三種の農家がありまして、一般に言ふ農村婦人とは此の内の何れかに屬して居る婦人を言ふことに當るのです。例へば現在農家は左の如く分かたれて居ります、

耕作せざる地主 自作兼地主	一、六六九、〇九〇	三〇、五九
小作農	一、五五四、六六七	二八、五〇
自作兼小作農	二、二三一、九二四	四〇、九一

（以上大正十年農商務省調査）

所が此の内の自作兼小作農と、純粹の小作農とはその生活狀態が、何れも五十步百步でありますから、之れを階級別に申すときは、前二者に對して、後者を一括して小作農階級と申します。そう致しますと、此の小作農階級は、約農村の七割を占めて居りますから、取りも直さず、小作農階級に屬す

る婦人は、農村婦人の最大多數（約七割）を占めて居り、且つ此の種の階級に屬する婦人が、農村の内でも最も悲慘の生活をして居るから、そこで此處に小作農の生計調査表を記して見たのであります。

小作農の生計調査

一、耕作反別田六反歩　畑四反歩
二、收入金五百十圓三十九錢
三、支出金六百十九圓〇五錢
四、缺損一百〇八圓六十六錢

內譯

一、耕作の部（收入）
一、、耕作の部（收入）

(1)〔米作收入〕米作收穫高	三〇俵	六〇〇、〇〇円
小作米	一四俵	二八〇、〇〇
差引所得	一六俵	三二〇、〇〇
〔米作支出〕		
肥料代金肥五八圓糞尿一〇圓		六八、〇〇
種子代 種籾一斗八升）		九、〇〇
差引收益		二四三、〇〇
(2)〔麥收穫高〕裸麥六俵小麥四俵		一〇七、三六
肥料代 豆粕一九圓、糞尿六圓）		二五、二〇
種子代（九升分）		二、五七
差引收益		七九、五九
(3)〔蔬菜〕		
甘藷（七畝二〇〇貫）		二六、〇〇
大根 蕪 菜 瓜類		三〇、〇〇
種子代		一、〇〇
肥料代		六、〇〇
差引益金		四九、〇〇
(4)〔桑園〕		
桑葉		二二、〇〇
肥料代 豆粕一九圓二〇錢、糞尿五圓）		二四、二〇
差引缺損		二、二〇
(5)畑作全部の小作料		二九、〇〇
農具損料		一〇、〇〇
以上總差引收益		三三〇、三九
二、勞働の部（收入）		
主人被傭賃銀（半年分）		一五〇、〇〇
娘の季節雇賃銀		一五、〇〇
娘の總工賃（手内職）		一五、〇〇
收入總合計金額		五一〇、三九
三、生計費（支出）		
消耗品		一〇、〇〇
交際費（祭禮、來客、贈答）		一五、〇〇
教育費 尋常五年教科書筆墨紙代）		五、〇〇
娯樂費（芝居、活動寫眞等）		二、〇〇

同　娘分	三、〇〇
治療費（賣藥）	二、〇〇
被服費	三〇、〇〇
同　娘分	四〇、〇〇
化粧品費（石鹼、白粉、油其他）	一〇、〇〇
旅行費（神佛參詣其代）	三、〇〇
同　娘分	六、〇〇
酒代（一日十五日の神酒代及來客用）	二、〇〇
米代（自給なれど買ふものとして）	二五五、五〇
麥（右に同じ但米麥共主人半年分は除く）	六三、七五
蔬菜代（自給）	五六、〇〇
魚　類	五、〇〇
肉類（牛又は豚）	一、〇〇
鹽	三、〇〇
醬　油	三、八〇〇
砂　糖	六、五〇
麵類（自給）	二〇、〇〇
油揚、豆腐	一、五〇
味　噌	五、〇〇
餅類（自給）	一五、〇〇
菓　子	六、〇〇
理　髮	三、二〇
租稅（戸稅三、二〇戸數割六、四〇區費二、〇〇）	一一、六〇
支出總額	六一九、〇五

備考（家族八人）此の內勞働に耐えない者、老母、少年各一人、幼兒二人（以上四人）
勞働に耐ゆる者、主人、同妻、同長女（十九）同長男（十五）（以上四人）此內主人は一日置きに雇傭勞働に出る故半人分の勞働能力しかありません。

此の生計調査によつて見ますと、主要なる勞働能力は主婦と長女であります。主人は一ケ年の中、日替まり半年雇の賃銀勞働に出て居りますから、半人前の能力しかありません。その外男手は、十五歳になる長男一人切りでありますから、結局田畑一町歩の土地を此の調査に依つて見ると、主婦と長女二人で負擔して居るのであります。其處で私は此の主婦の勞働狀態を調べて見たのでありますが、田植時や刈り入れ時の繁忙な時には、その勞働時間が十八時間に及んで居ります。斯樣な狀態ですから、都會の御婦人が最も氣にして、暇さへあれば髮に手をやつて居る、その髮の如きも、漸く一週に一度ソコ〳〵、それも僅かに、一寸、櫛の齒を入れるに過ぎません。恐る可きことは、かうして勞働して居ると、大便は勿論、小便回數も極めて僅少となつて、日に一回若くは二回內外に止まるといふことであります。即ち知る過勞の結果は、小用として出る可き尿素が悉く發汗してしまふのでありま

す。斯樣な狀態でありますから、幼兒二人の養育は老母一人に任せ切りで、僅かに一日二三回、畦畔で、哺乳する場合にのみ、母子が明るい日の下で顏を見合せるに過ぎないと云ふ有樣です。

斯樣に過激な勞働をして食物は何を食べてゐるか、と調べて見ると、魚類が一ケ年に五圓、肉類が一圓、油揚、豆腐が一圓五十錢です。都會の御婦人に比べると殆んど飲まず食はずに働いて居ると申して差し支へありません。それで此の家計收支は何うかと言へば、一ケ年に一百〇八圓六十六錢の缺損をして居ります。それも主人が一日置きに出て得た賃金や娘を季節雇に出したり、手内職さして得た金まで入れて、尙ほ且つ斯くの通りであります。娛樂費身嗜費等は言ふ丈け野暮です。

斯くて仕事に追はれ、生活に追はれ、缺損が年々に積つて行く曉には、斯うした小作農家は何うなつて行くことでありませう。猫の額程でも持ち地があれば、それが抵當となつて地主の懷ろに入つたり、最愛の娘でも債鬼には勝たれず、貞操賣買機關の手を潜り、何々美人の名稱の下に、如何がはしい店頭に曝されまいものでもありません。女工や女中に出るのは最上の方です。吉原、洲崎等に現はれてゐる女性の最大多數は、農村に於ける斯うした小作人の娘であると斷言致しましても決して間違ひではありません。慘ましいではありませんか、農村婦人の行詰つた生活の現今は！　心ある御婦人方は、農村婦人の此の現實の悲哀を徒らに看過致してはなりません。何等か此の間に適當の救濟策を考へて頂き度いものです。

或日の話

伊澤武子

靜養のためこゝ二年餘H村に滯在して四五日前に歸つて來た私は久し振りに私の友人M子の家を訪れた。

『田舎の生活はよかつたでせう。あなたもお百姓なすつたの。ほんとに元氣さうになんなすつたのね。まあどんな生活だつたか聞かして頂戴よ』

『いやねえ、私なんか靜養が目的だつたので小さい三坪位の畑に草花と少しばかりの野菜を作り、時々油繪を描く位の事でした。しかし何と云つても百姓の生活は苦しいものですね』私は二年餘見せつけられた百姓の働く姿を頭に浮かべた。

『まあ私の見た中で最も苦しいと思つたのは田の草とりですね、夏の炎天、十四五の子供から家内中田に出て草取りをするんです。朝から晩まで一生懸命かゞんで取るのに腕がすれ、足が棒のやうになるさうです。それでもね又明朝は早く出てゆくんですよ。私なんかあの日中一時間も立たされたら生ぬるい風と稻の臭ひとで氣分をわるくされてしまふでせうよ。私達が街にゐて田園生活を羨ましく思ひますが百姓になりひたつて見ると決して我々の田舎に對する憧れや空想のやうな呑氣なものではありません。ほんと私は百姓でなかつてよかつたとさへ思ひました。

秋などは最も忙はしい收穫時ですわね。芋掘り、稻刈り。稻こぎ、籾摺り、麥蒔き。そりや一寸も休む暇はありません。それが一日や二日で終るのぢやないのですからね……彼の人達が一日中働き通して歸つて來るのは日もとつぷり暮れてからです。それでなくとも秋の夕暮は淋しい泣きたいやうな感じがするのに、暗くなつて夕飯の米を炊ぐ音が聞えたり、乳を求めて泣く子の聲やそれをあやしてゐる子供の泣きさうな聲など聞かされる時はたまらなく慘めさに涙する事がありますよ。

尤も忙はしい彼の人達には育兒法なんて考へる暇もありませんしね、田舎の兒は育つがまゝ、大きくなるまゝなのです。只野に出て土を掘つたり耕したりする事ばかりに專心ですうすら寒い日暮れなど藁打つ音や、ギーットン／＼米を搗いて終り頃の氣だるい物音をきく時如何にも働きつかれた年寄のゆがんだ顏を思ひ浮かべひとり彼の人達の慘さに涙せずにはゐられませんでした。全く百姓の生活は生涯、辛い勞苦の裂に外なりませんね自給自足もいゝですが、個人の自給自足は辛いものですね』私は一寸言葉をきり裂を一片つまんだ。

『そんな辛い生活を百姓の人たちはどう思つてるでせうか』

M子はかうきいた。

『えゝ、年寄なんかは否多くの人達は自分の環境が皆百姓だ

し、餘り外部から異つた刺戟も受けないし、大抵あきらめてゐるんですよむしろ、年寄なんかあたりまへのやうに思つてゐるか知れません。然し若いもの達は決してそうはゆきません。自己に目醒め、自己の伸展を考へてゐる者はどうしても百姓の生活に不滿を感じるのは當然な事でせう　それについてね、私の居た家の子が家出した話があるんですよ。この家には今祖父と母とA子と三人ゐますが、父の生前は中々開けた頭を持つてゐてA子に女學校へ兄Gには中學校へ入れたのです。ところが反對したのは祖父でした父の死後は『大きな子を勉强させて遊ばしてをくのは不經濟だ學校でもやめて百姓せんけりや世間に風が惡い』と事毎に云ひますからGは中學を卒業したきり何處へもゆかず無理やりに百姓を手傳はされたのですが、何時も憂欝で物數云はず英語の辭書だけは離しませんでした。丁度八月十五日、お盆ですね、村の若者や娘達は盆踊に有頂天になり月の出てゐる白い路を足も地につかぬ樣子ではしやぎながら宮の廣場へ出かけてゆく頃、よく覺えてませんが「親は大切だ家も大事だ然し自分と云ふ一個の人間を生かしてゆく事は更に更に大切な事だ。一時の不孝は永久の不孝ではない。きつと更に〱孝養し得る日がやつてくるのだ。只自分の今の行動を許されよ。殘る人々へ。」かうして風呂敷包一つを抱へて母の止めるのもきかずその夜家を出たのです。人一倍メランコリックだつたGの日頃を思ひ浮かべて内心に如何に百姓に對する不滿を抱いてゐたかを想像する時Gの家出がうなづかれたのですが、何て反逆な行だらうと思はざるを得ませんでした。ところが妹のA子もGに負けない反逆者なんです。A子は云ひました「兄さんは羨ましい。私は女だからあんな事出來ません。私も時には兄のやうに凡てを捨てゝ自己に生きやうと思ひましたが祖父を思ひ母を思ふ時やつぱり私は百姓をしやうと思ふんです、然し祖父は二口目には近所の中で一番つまらんのはお前だ。學校へ行つた者程役立たんてなんて云ふのでます〱百姓は厭になり毎日何知らぬ顔で野に出ますが心の中では一日として快く出た事はないのですと云つて泣くんですよ。私は彼女の伸びんとして伸び得ず家と親のために餘儀なく田園生活をさゝれてゐる苦しみ、自己と環境との矛盾に苦しめられてゐる事も同じ人間でありながら田舎者は凡ての點に於て都會の人よりも損な位置にゐて窮屈さを永久に感じねばならないのですわ、私は思ひきつて自己は自己に生くべく田舎を去つてゆかうかしらと苦しい内的爆發を見る事もありますとA子が嘆息する時實際可愛想で涙ぐましくなります。どうかして精神的

に救つてあげたいやうにも思ふんですよ。今年の夏だつて山の頂で焚く火も祈遙でする雨乞ひも人の力には何等酬られず誰も彼もが血眼になつて水をあせつてゐますが要するに枯草のやうな稲とヒヾ割れた田を熟々眺め入るより外なく、見えすいた損害をどうする事も出來ないんです。彼等は「作らねば飢餓する」と云ふ無意識の綱に縛られてゐるやうなものですね、ほんとに田舎の人達の生活を見つめる時その氣の毒さに胸が痛むやうな氣がします』私は更に梨を一片つまんだ。

『それから私が田舎へ行つて一番いやに感じたのは若き人々の群でした。あきらめ的な生活に押縮められたものが一度にその反動を見るやうな感じがしました。あの田舎の人の最も享樂するお祭りとお盆に、娘達は殆どお揃ひで七分三分とかに分け、見苦しい程脂粉を施し、色も調和も考へないで、やたらに身のまわりに苦心しそして不調和な姿で得意氣にねり歩き一日を過すのです。夕方などは寄つてたかつて奉公に行つてゐた時の自慢話をする。話もつきると最上の音樂ででもあるやうに「枯れすゝき」の唄を歌ふ。まるで幾世紀か前の廢頽しきつた人達のやうに思はれその人達の面に蒼白い悲哀を感ぜしめられるのです。然し刺戟の少ない田舎に毎日〱働き疲れる人達には無理からぬ現象なのですわね。

文化生活だ。女權擴張だ。臺所改造だ婦人の向上だなんて云ふのは都會の閑な人の暇つぶしの問題であつて毎日忙はしく眞劍に勞苦と戰ひつゝある田園生活の人々の到底考へる暇もない事なのです。』

『ほんとうに誰もが苦しめられてゐますわね。それにしてもA子さんはどうなさるでせう』

『私は少しばかり彼女の穩かな反省を促すため申してをきました。どんなに呪つてももがいても貴女はやはり田園生活をせねばならない人なのです。一時の妥協でなく、ほんとうに貴女の内心からの自覺がないと何時までもそうした同じ苦しみを感じてゆかねばならないのです。勿論田舎娘の低級な氣分に甘んじよとは云ひません。貴女の歩みゆくその足下をより深く堀る事です。誰だつて不滿は多くある事ですが貴女が田舎の生活を呪ふ間は貴女の生活にはまだ空隙のある事を證明してゐるといふ事を考へねばなりません。一體生活に間隙のある間は人間の凡ての事が皆馬鹿々々しいものとしか思ひませんからね。色んな空想を取り去り現在の田園生活にもつともつと意義あらしめ精神的に救はれないと永久にグチの多い進歩しない人間になつてしまひます。貴女はミレーを知つ

てゐますね又汝の額の汗によつて汝は汝の生命を得ん。事も御存じでせう。とに角自己の現在を深く見つめる事です。初めの無理は更に大なるとりかへしのつかぬ悔をもたらしますからね。家を出るなんて考へる事はおよしなさい。親の下にゐる間程幸福を感じる事はありませんよ。お互に現在の自分を現在の境遇の中から、より高めてゆかうではありませんか。と云つたのは云つたけれど「凡てのパン、全世界の凡ての善人がよりて以て生き、且つ富む凡ての者、すべて勞働者によりて作られる。されど彼が作るところのものによりて利益を得るものは彼等ではない」矢張り百姓の生活は生涯絶ゆるなき勞作の苦しい記錄だと思はれ、何だかその後は云ひ知れぬ暗い感じに打たれたのですよ』

丁度そこへ運ばれたコールコーヒーを二人はすゝりながら云つた。

『やつぱり私共の現在のまゝが一番幸福だと云ふ事ですね』

村の嫁さんの氣苦勞

野蛙子

曉鷄のあしたに、夕べに星をいたゞいて、野路をいそぐ農婦のすがたはいゝ畫題にもなるでせうが近寄つて見れば何の生氣の無い顏であらう。この清らかな空氣の中に息づきながら、さて考へれば考へる程悲慘なものは農村婦人です。何といふ因果で百姓女に生れたやら……」みんなはかう言つて歎いて居る。「百姓させるに學問を何する」と言ふ。實際從來のまゝの因襲と無智の社會におとなしく入れようとするのには、然も女には小學教育も全く無駄なものです。小學校の優等生であつた一人の友は結婚して二三年過ごしたら字といふものが書けなくなつたと云ひました。

朝未明に起出て家庭の雜事もそこ〳〵に男と共に野に出て一日の勞働にとりかゝり薄暮時に家路について夕餉の仕事や

ら夜業の用意をなし夕食後は直ちにそれにかゝり寢に就くまで、只働きに働く。「寸暇を惜しむで働け」これが現農村の理想となすところです。決して能率を考へることもなく……。

春はまだらの雪を踏むで凍るばかりの冷たい水田を耕し。夏は炎天に脊を晒しながら熱湯の如き泥田の除草。かゞんで居た爲に充血して腫れた顔をしてひよろ／＼這上つては來ても食物が喉へ通らないことさへ度々あります。

赤坊が飛びついでも昂奮の爲にお乳もよう出ないとは無理からぬ事でせう。

この地方だけだといつて笑はれるこの頃の午睡も女は雜用に追はれて殆んどし得ない。

五十日間の草取りが終ると畑仕事をしたり醬油を作つたり、茶をこしらへたり、その間に一年中の洗濯もしなければなりません。

一年の中十何日の休日をのぞいては起床から就寢までの生活樣式は季節によつてその仕事の種類が變るだけです。この休日さへ私の友達は「某のお嫁さんは休日でも働く感心な」等といふ姑の言葉に雜誌を讀んでゐても身にならない、とてものこと無いがましだと云ひます。

又一方この休日だけは身の自由を得た娘達にはその大事な一日を何うして送つてよいか迷つている内に暮れてしまふ。魂を慰める何一つあるではない。二三人集つて只雜談にすますのが關の山。近頃所々に起つた感心？なる老婦人を戴く村の婦人會はこのむざ／＼過す休日を利用してお祭の料理の稽古をせよ、廢物利用の絞染をやらう。あるひは又基本金を積む爲に働かうと云ふ。乙女達は「私達は何時からだを休めればいゝの……」といつて嘆く。感心なる企てはあつてもその社會の狀態を考へなくては、さらでだに時間の經濟を無視した生活に又趣味といふ心の餘裕もない寸暇も無い人達に、廢物とは雜巾にもならないものをいふことに、嫌の人までにすゝめる必要を認めない。自分達は大根の切れでも何でもお腹が充たされゝば有難いこと、お客樣へのお料理は成可くものゝかゝらぬやうにていさいよくとのお稽古……。田舍には新鮮なる野菜があるだらうですつて。いゝえ米を主として作るところではほんの少しだけ然も秋から春にかけては大根だけで暮して居ります。やはり野菜は買はなければならないがお金を出すといふことの一番いみ嫌らはれる農村です。魚を食べるは榮華のことなんです。この乏しい臺所に立つて首をめぐらすのも女の一苦勞です。

極端なる粗食にあきたらない男子は自由に他に向つて求め

ることが出來るのに……。

今又近づきつゝある秋の戰鬪！

田圃の遠いところでは三時頃に家を出掛けるので女達の起床は午前二時。晝間の過激な勞働をしながら睡眠時間は四時間位。一方夜の十時頃まで刈つた稻の仕事をして寢る時間は十二時になるといふひどいものもあります。

お米に仕上げるまでの種々の仕事は十二月までも續きます。寒の日にも納屋の土間に冷えびえと裸足で働くが臼をすつたりすると白い半襦袢一枚で汗びつしよりになりふとそれを止めた時に感じる冷氣に其頃は風邪の絕えまがないといふ者もあります。姙娠時にしろ、月經期にしろこれらの生活より離れることは出來ません。故にか、農村婦人の十中八九人までは病を持つといふ。雪に閉ぢ込められた寒い日の針仕事にもお火鉢をかゝえることもしない。

しかし、私共の地方はこれ程にしなければ困る程貧しくはないのですが。

一年に一度も活動見物することとさへ贅澤だと思はれて居ることです。處女會に入りませうと誘ひに行つたら「そんな贅澤なこと俺の家の子供にやさせられん」といつてその父親に怒鳴られたと友達はこぼしました。

勞働生活はこゝに記した以上にみじめな者もあり、はるかに安らかな者もありますが精神的苦痛は殆ど一樣だと思はれます。如何にその自由を束縛されてゐることか。女子農事講習會があつても講演會に來いと云はれても嫁いで居る人達はその暇を貰ふことさへし得ない。家人の不機嫌を買つてまで行きたくないといふ人もある。村の資產家の一人娘は他から贈られた立派な樂器を持つてはゐるが親達は「世間に對してはづかしいそんなことまかりならぬ」と彈ずることを許さない。空虛な心は何によつて充たせばよいであらうか。雜誌でも讀んで僅かに刺戟を求め心を慰めようとすることの許される者もその何分の一かに過ぎない。

此處では生れ落ちるとから女は嫌はれ厄介がられる。さもあらう。折角一人前に育て上げやつと衣裳道具で身をかざらせて嫁入らせ、さて一年に何度となくお餅を搗て婚家の近所合壁へ「厄介者を御世話のことで……」とくばつて步く。かうしなければ社交が保てない。お嫁にいつた先では自分の用事といふものは全くすることが出來ないから一生懸命に働いては時々實家へ洗濯やら休養やら自分の用足しにやつて來る。子供を產みにくればその子の小學時代に着るものまで整へおしめ籠まで持つて行く。

何人かの娘を持ち、そして各々何人かの子供をもつたなら大方の財産もかたむく筈です。

近所のあるお嫁さんは嫁して十何年小學二年もの子供があつても未だにこのまゝの生活を續け、しかも草取りが終つて仕事が少くなると、食ひつぶしだから實家へ行つて洗濯して來いと言はれる。子供を引連れて大きな風呂敷包を脊負つてそれでもいそ／＼と行く。實家へ行くのだから、それが唯一無上の樂しみだと云ふ。そこに初めてほつと息をつくであらう。

結婚とは何であるか？　婚家とは何であるか？　小遣費まで實家から貰つて行つて舅姑、義兄弟、夫、世間に、おろ／＼と仕へて暮さねばならない生活を想ふ時、結婚前の自分は今力の限り何をか決心しないでは居られない。遣瀬ない心のやり場としては着物を作ることだけが許されてゐる。世間も親も雜誌でも買ふお金があつたら衣裳でも整へよと云ふ。

女學校を終へたものまで曾ては持つた智識慾も向上心も潑溂たる若やかさとともにあたら無智困襲の社會にうばはれてゆく生活は下等社會のそれであつても、五十圓の着物も着れば、百圓の帶もしめる。一尾の魚を買ふのも一把の人參を買ふのも、主家にある家婢の如くその主人の意見に待たなければならないこゝの女達に入るを計つて出づるを制せの言葉は全く知り得ないことです。

只だ一つ今、爲政者によつて唱へられてゐる農村振興策が經濟方面の救濟だけであることは女に取つてあまり關係の薄いものであつてもの足りなく思はせる。それさへ實現困難とのこと、まして自分達の希望する社會の精神的前途は、あまりにも遼遠すぎる。

「俺の子供は決してこの、自分の味はつた苦しい百姓にはしない」と云ふ一部の大人。「毎日汽笛が鳴る毎にほろつとする」都へ通ふ船によつて異つた社會の生活をしのび現在の自分を嘆く此處の島國の子持ちの三十路女。婦人に比べたら問題にもならない多くの自由さを持つ青年さへ捨てゝゆく農村。此處にこのまゝ從來の奴隷生活の後繼者として生くるの非をおもひ、身をもつてのがれむとする若き女は、果たして道學者の言ふ「華やかな都會に憧がれて祖先傳來の尊い職業を捨てる不埒なる者」であらうか？

目醒めた者程一層苦しみを覺えなければならない哀れなる農村婦人は身も心も萎縮してしまつて、この悶々を訴へる意氣もなく、ところもないのです。

この度女性改造がこゝに心を止めて下さつたといふ一事に

さへ泪ぐましい感謝をして居ります。が詳細を傳へ得ない自分を悲しく思ひます。悲慘なる農村婦人の爲めに。(完)

北海道の野良女

H Y 生

北海道の西南部の或村で私は今年の五月に植樹し八月その下刈りをしました。その際雇入れた人は主に村の若い婦人でした。婦人にとつて過分な勞働ではありませんが今年のやうに暑い夏では廣い高原の下刈りは私の如き健康體でも耐えられない程の苦しみです。一圓二十錢の給料で八時間の炎天勞働は化粧に浮き身をやつして日を暮らす人とは勿論のことせいせいタイプライターやペン位を持つ職業婦人との間に苦樂の點に於てかなり廣いハンディキャップがあるのです。可憐なる羊等よ。婦人等は喜んで私の仕事に雇れました。北海道の畑作者は本州の諸地方と異つて耕地が餘つてゐますので自家の仕事が山積してゐますのにも拘らず喜んで下刈りに來るのは別に私を崇拜するのでもなくまた私を助けるためでもありません。他の同樣な仕事より二割位値のいゝ一圓二十錢の日給が嬉しいのです。婦人等のうちには二人の娘や乳呑兒がある若い母もゐました。道廳の役人共は如んなうまい事を言つて内地(北海道では北は青森から南は鹿兒島までを内地と稱びます)の移住民を勸誘してゐるか知れませんが現今北海道の畑作農民位悲慘困苦な生活をしてゐる者は廣い日本國中に恐らく無いと思ひます。私は彼等のうちから婦人の生活の一端を紹介し諸姉の一考に供し度いのであります。

北海道の半分は冬であります。雪は十一月に降り始めて五月にならねば耕作する氣候になりません、後の半年に多種類の作物を過ぎる程の地積に植栽して收穫するのは繁忙といふ字が如何にも良く當て嵌ります。それに土地の割合に人口が少いのですから雇入れ度くても人がありません。勢ひ家族の勞働に俟つよりより外ないのです。女でも小學校の尋常科

を卒へる頃には農婦として男子に伍して働かねばなりません。冬のみ多い北海道では春は倉皇として來り倉皇として去るのですから雨の日風の日と雖も休むことなど出來ませんもし彼等の家族が夫婦の外に幼い子供だけであるならば夫は夜の明けるのを待つて野良に出で妻は暗いうちに起きて朝食と子供の世話をしねばなりません。晝の間は夫と共に耕作に從ひ夫は夕べ手元の見えるまで野良に居ますから妻は一時間か三十分先に歸つて夕食の仕度にとりかかります。夕食が終れば春五六月頃ではたいてい九時過ぎになります。ですから十時にならねば臥床出來ません。工場に働く者のやうに衣服を取替へて休養のため入湯することなど一年中に數へる程でも出來る者は先づ上等の方です。しかもいつも仕事に追はれて永い春の日も永いと感ぜられないのであります。現今女性が從事してる勞働のうちで最も女性美が損はれる勞働を終日絕ゆることなく爲してゐて如何程彼の女等が報いられてゐるでせう勿論收穫した作物は家族が分配するのではありませんから、妻でも娘でも彼の女の貧富は家族の貧であり家族の貧富は彼の女の貧富であります故に衣食住に於て彼の女の生活は家族の生活であります。彼等の家屋はたいてい草の屋根に草の圍ひであります。北海道主要農產物の一である燕麥の藁がその材料です。內地で貧乏に追はれて北海道に移住して來た彼等には木造など思ひもよらないことです。間數は臺所も寢室も全部合併の一間で疊など勿論無く板張りに茣蓙でも敷くのは上等の部類です、中には馬と同じ屋根の下に住む彼等を照してゐるランプは同時に馬にも光を與へてゐるのであつてかかる農家は一部落の二割にも及ぶ所も珍しくありません。而して木造で屋根が柾か茅で葺いてある家などは一割にも足りません。彼の女が野良で働く衣服を見るに木綿の最も安い而も垢と土で汚れ都會人など手を觸れたならそのまま食物を摑むで食べられる者は恐らくいくらも無いでせうその衣服は野良專用ではありません。寢るにも起きるにも買物に市街地へ出るにも兎に角破れて用をなさないまで而かも洗濯するともなく着破るのが普通であります。でも若い娘だけは多少惠まれてゐます。盆や正月には木綿の着替へを着けます。盆には新しい單衣に新しい下駄で市街地に遊びに出る若い娘等の姿が見られます。衣食住のうち女性の心を最も引くものは衣服と裝身具であることは農村でも變りません。千圓の指輪や百圓の着物は彼の女等の夢にも往來しないでせうが紡績の女工から歸つて來た友達が行李に納めてる二三枚の銘仙の着物は彼の女等にとつては少くとも憧憬の的となります。彼の女等

が野良で仕事の休み間に語り合ふ着物の話は木綿かせい〴〵安モスリン位のものです彼の女等の食物ときては衣服以上粗末であります一家族の農家が耕す畑地の面積は五町歩から十町歩であります。內地から移住して道廳から貰ひ受ける耕地は一戸分五町歩となつてゐます。五町歩の耕地は夫婦二人懸命で働くに適當な面積であつて働ける家族が增すにつれて十町歩位までは家族の勞働のみでも間に合ひます。今耕作地を七町歩とし家族は五人そのうち長女が十六才であるとして一家の家計を昨年を規準にして調べませう。大正十年十一年の農作物不況と値段下落のために農家は殆ど最後まで食いつぶして了ひましたのみならず市街地の商店からは肥料食料品のため多大な借財を負ひました。彼等の生產する物は大豆小豆燕麥等で主要食物ではありませんから米を買つて食べねばなりません。然らば彼等の生產高は如何程かといふに左に表を掲げて說明しませう

農作種目	一反ノ收穫	値段	
大豆	一俵	六圓	五町歩三百圓
燕麥	二俵	二圓半	二町歩百圓
副業			八拾圓
計			四百八十圓

これは勿論昨年の例ですから大豆一反歩に一俵ですが中作以上は二俵位であります。けれども昨年秋大豆の値段は前年又は前々年より二割又は三割程高いのですが昨年は例外と見ねばなりません。四百八十圓のうち百二十圓は肥料代として差引き其他農具、馬具と稅金等を差引くとしたならば殘り三百三十圓以上は出でないことは疑ひありません。三百三十圓のうちから農家の大部分が擔つてゐる借金の元利金を支拂つて物價の高い北海道に於て彼等は何を食し何を着て生活せねばならぬでせうか。彼等の鍋には外國米より上等のものが見當りません。その外米も一日三回膳に上るのではありません一回乃至二回は馬鈴薯や唐黍で飢を凌がねばなりません。食物と營養價値とを比較考慮して選擇する餘裕などは彼等と全く沒交渉の問題であります。かやうな經濟狀態では家族中に病人のある時やお產の時など都會の上流階級の婦人の目から見るならば彼の女等の生存することが一の謎と見らるゝでせう。現代の文化も彼の女等に門戸を堅く閉してゐるではありませんか。悲慘なる彼等よ彼の女等よ。彼等一家族一年の血と汗と最も低下せる生計との賜物は小學校の最下級の女教員に劣るではありませんか。北海道では十五六の小娘が準敎員として小學校に奉職せば月給三十圓貰ひます。農村婦人と女

教員とその報いらるる點では餘りに隔りがあります。もう一回繰り返して言い度い。悲慘なる彼の女等よ。毎年の不況で今や彼等はその所有地を奪はれつゝあります。されど虐げられたる者がいつか猛然と飛びつく時があると言ひますが内地から北海道の大地主を夢見て渡來した彼等には無産者としての自覺を呼び起さすに充分な素質が乏しいことを如何にせん。彼の女等の奥にはブルジョア根性が根深く食ひ込んでゐます。それは娘の結婚や葬祭に餘りに明かに露出してゐるのであります。北海道の農村は集團を爲してゐません。自己の土地に一戸を構へるのですから五十戸の部落は一里四方位に散在します。數部落に一つの二學級か三學級の小學校がありますので忙がしくて貧乏で加ふるに不便な道路に依つて遠い小學校に通ふ彼等は義務教育すら頗る不完全であります。彼の女等のうち婦人雜誌の最下級なものを了解する者果して何程あるでせう。義務教育を了へても貧と勞働とで殆ど文字を近づけぬ彼の女等は何日の日か都會に婦人參政の叫びがあるなど直接新聞雜誌に依つて知り得るでせう。彼の女は今社會の最下層に哀れな姿を横たえてゐます。新しい婦人等は彼の女を最初に家庭の奴隷といひました。次に地主の奴隷といひました。彼の女が内地から北海道に渡來して二つの奴隷はまぬかれません。第三に彼の女等は社會の奴隷となりました。この後また幾何の奴隷が彼の女を待つてゐることでせう。

今や道廳では水田を奬勵して灌漑溝を造りつゝありますされど資力のない彼等は只灌漑溝を指銜へて眺めるのみです。三年間の不況で農民の大半は土地を失ひ、いままた水田のために失はうとしてゐます。彼等全體の無産化に餘り遠い將來でもありますまい。今や地主への奴隷とならんとしてゐます。

ドン底生活の台灣婦人

蔡素女

私は臺灣人であるから、特に臺灣に於ける農村婦人の生活狀態を書いて見やうと思ひます。然し日本語は私に取つては一つの外國語であるから、現在の臺灣農村婦人の如何に貧苦な生活をしてゐるかは、充分に表現し得ないかも分りません。其の點は何分の御諒察を願ひ度う御座います。

臺灣婦人と云つても別に變つた人間ではありません。矢張り三百年前支那の福建省から移民して來た支那民族であります。其の數千年の文化を有し、且つ誇つた其の支那民族の一部が現在臺灣に於ける數は約三百六十五萬ありますから、婦人は百八十萬ある譯で、彼等は皆貧困のどん底に生活して居ると云つてもよいのであります。現在臺灣人男子の智識階級は、三十年來專制政治の爲め塗炭の苦に呻吟してゐるに反して男子の無識階級と大部分の婦人とは無智と經濟とに困憊してゐると云つてよう御座います。

我々が臺灣農村婦人の生活を書く前に、臺灣の產業の概念を語る必要があります。臺灣は工業が發達せず、農村の生活の道は唯一の農業であります。單に農業と云つても米と甘蔗作との外は、餘り目立つた物がありません。茶は臺灣の北部の一部に限つてゐるし、樟脳は總督府が占めてゐると云ふ樣な狀態で殘る米はあんなに質の惡いものではあるし、甘蔗作は製糖會社に搾取せらるゝばかりと云ふ樣な譯なので、根本的に已に餓死せらるゝ樣な狀態に置かれて居るのであります。

試みに村落を歩いて見ると、凉しい何百年經たか知らぬ大きな南國特有な榕樹の下で、大勢の農村婦人が何時も座談をして居ます。彼等は餘り閑なので斯うして榕樹の下で時を過ごして居るのであります。そうして彼等一群の中に於いて必らず蒼白な顏をして大きい腹を抱えてゐるのを數人見受る事が出來ます。斯んな人は皆臺灣の風土病である「マラリヤ」と十二指腸蟲病に罹つて醫療するに金のない哀れな者であ

り、殊に或る者に於ては一度さへも醫師の診察を受けずに彼の世の人となり行く聞くだに涙ぐましい可憐な者も居るのであります。

扨て農繁期なる年二回の收穫とか田植とか、草取の時期になると、婦人は家庭に居つてやれ豆粕を削づるとか、食事（農繁期は日に五度の食事がある）の用意とかお茶の準備とか或は豚鷄鴨にも餌をやるとかで一日中目の廻る忙しさであります。其の上頑是のない子供が哭いたら、母親は暑さに熱が加へられて家内に打擲の聲が門外にまで聽えるのであります。臺灣の樣な暑い所では皮膚に多くの濕疹が出來て、家屋は通風の極めて惡い樣に低く暗く窓がホンの尺四方位なものが一個か二個しか出來て居ないので、婦人は皆、其の内で勞働しなければなりません。その家といふものは茅の屋根で壁には土角と云つて一尺四方、厚さ六寸位の粘土で固めた物で煉瓦の代用として造つて居る樣な次第で、一寸でも強い暴風雨でもあつたら直ぐと吹き飛ばされて終ふと云ふ狀態であります。そして屋間が多くしきつてある割に、極めて狹く小くその中には長さ六尺幅四尺の竹で造らへた粗末な寢臺を置き、蚊帳もなしに數人寢ころぶと云ふ有樣であります。もとより水田で蚊が多くゐるのでさへ堪えられぬのに、まして豚を飼はない所が殆ど無いと云つて可い程、どこの家にも豚小屋があり、その不潔さと申したらとても御話になりません。臭氣プン〳〵鼻をつくと云つた風で、蚊を養成するのに極めて好適所でありませう。日が暮れかゝると人間の世界といふよりも、蚊の世界とでも云ひ得る程マウ〳〵と聲を立てゝ飛び廻り、道を歩いて居ると何萬匹と頭の上について來ます。斯くも蚊が多く居るにも拘はらず蚊帳のないのみか蚊取線香と云ふ贅澤なものは勿論ありません。其の蚊の驅除法として古き襤褸なり藁なりに火を付けて燻らせる程左樣に慘めな有樣であります。

病氣でもしたら病婦は暗い暑苦しい室の中に、汚い薄つぺらなぼろ布團に包まれて、蚊帳のない壞れた寢臺に橫はらなければなりません。そして其の側に襤褸着物を着て顏には垢で彩どられて居る榮養不良な幼兒が目をパチ〳〵さして居ります。

彼等の食事と申したら之れもまた哀れにも慘じめな物であります。蕃藷を常食としお米はほんの味付け見た工合に混ぜます。大抵男子の食べた殘りを食するは勿論稍良いお菜等に買ふて來た食品は皆夫や子供に殘すのであります。

彼等は一丁字をも識つてゐない計りか市街の就學兒童數の

年年の増加するに反比例して農村の就學歩合は年々低下しつゝ漸々貧乏に落ち行くのであります。

農繁期が愈々過ぎれば甘蔗收穫期には入るのであります。その時婦女子は、一家の暮を助ける爲め製糖會社の日傭となり、朝は星を戴きて出て夜は月を被りて歸ります。

其の十三時間に亘るエネルギーの代價として僅々二十錢乃至三十錢の賃銀を支拂はれて歸へるので、奢侈流行なぞと云ふ贅澤な騷ぎを夢だに味ふことが出來ません。そうして製糖會社は其等を搾取したる結果、株主總會に於て何百萬圓の純利益が上つて來たと報告します。

海岸に近い婦女子は半日を費やして、牡蠣やら蛤やらを拾つて來てそれを幼ない子供に町へ持つて行つては幾等かの金に換へて其の日の生活の糧にあてるのであります。

斯樣にして農村婦人の生活は漸々とどん底に落ちて行くのであります。

良人は海、妻は畑

今紺誠一

「良寛和尚」をふりまはして、天晴れ靜寂な自然の讃美者として、おさまつてゐる相馬御風氏を、夏季大學の講師として招聘したまでは、私共の郡の事業としては非常な出來榮であつた。

しかし其の御風氏は會場に傭はれてきてゐた、賤しい給仕女に戯れたことが、問題となつたために、御風氏を崇拜し、御風氏を推薦した、郡視學の平木氏は、その責任と、而して裏切られたもの丶悲哀とを痛感し、遂に去る七月の十一日、波靜かなる九十九灣の會場に於て憤死した。

私の村は、其處から小蒸汽船で、約一時間を費して着ける、やはり能登の珠洲郡に在る。從つて村民の大半は、農業に、約三割は半農半漁と言ふ繁煩な生計を營んでゐる。

だが、農村婦人としての、彼女等の父は、彼女等の夫は、そうして彼女等の家兄は、その血の滲むに等しい、激しい勞働に對して、それに相當するだけの報酬を、充分に受けてゐるであらうか？

私はきつぱり「否」と答辯せねばならぬことを悲しむものである。

田畑が地主の所有に屬してゐる如く、漁船も、漁具も、そうして漁網も、漁師の生命とすべき殆んど總てのものが、二三資本家の私有である以上、捕獲された獲得物は、當然その資本家たちの手によつて、賣却され、その分配の割は、恒に資本主七、舟人三の割を以つてなされてゐる。

その三割を、舟人の十數人が、更らに平等に分配をする。

彼等は、僅かに得た、其の日の報酬の幾らかを割いて、疲れた心身を醫すべく、小さな居酒屋の、穢い座敷に車座になつて熱い酒を飲むことが、殆んど毎日の日課になつてゐる、醉が身體を環る頃には、彼等は恐ろしく大きな聲を上げて、唄を唄ひ出す。

唄は空虚な生活を紛ぎらす、彼等にたつた一つ許された特權なのである。

彼等は酒なしには生きられない人間なのだ、「何故」と反問する閑人があるなら、その人はたつた一日でいゝから、板一枚下が地獄の海上に、絕へず押寄せてくる怒濤と戰つてみろだ。

彼等が、親しみの濃い仲間と別れて家に歸へる頃には、既に薄暗いランプに灯が點いてゐる、それから彼等には、他の仕事がどうして出來やう。

けれども、彼等が歸つてから、なほ幾時間かの時が經たなければ、彼女等は自分の家に歸つて來ない。

父のする仕事、夫のする仕事、それを彼女等は、子供とともにせつせと働かねばならないのだ、四邊が暗くなるまで野良に居るのだもの、家に辿りつくまでには可成りの時間を要するのは當然のことである。

それから簡單な食事が濟む、食事が終ると、彼等は一日の激しい過勞から、貪るやうに睡りに陷つて了ふのだ。

そこに樂しかるべき家庭の團欒が覗がはれるだらうか？

又それには幾分でも、家庭の溫い潤ほひを見出し得るであらうか？

それが半農半漁の人たちの生活である。

一方、一意專心、農業にのみ從事してゐる側はどうであらう、

私はそこに、前者にも增して苦しい生活の喘ぎに呻く、慘めな人たちを見ることができると思ふ。

切迫してくる陰慘な生活の影に脅かされて、男は大抵「都會」を目覓けて遁れるやうに去つてゆく。或る者は手馴れない工場に、そして或る者は酒屋男——酒を釀造する方の人足——として、後に殘された彼女等と子供。

彼等を扶助するものは誰か、あゝそれは、彼等の勞働、それのみである。

譬へ年貢として、地主に搾取されたのち、飯米として殘る米が幾何であるにせよ、そんな事に頓着なく、やはり彼女等は、働くだけの働きを續けてゆかなければならない、無論男の爲す分もともに、彼女等はやつてゆく、

だが、此の勞作だけによつて、數人の家族を有する一家が、收穫期——一年の總勘定に於てよく餘裕のある生活を、三日と續け得るものが幾人居るであらうか？

それを思ふとき、腹のドン底から迸りでる「あゝ」の嘆聲をどしやう。

男の困憊がとりも直さず、彼女等の困憊なのだ。男の疲勞が彼女等の疲勞なのだ。

彼女等は疲れ切つてゐる。けれども働く、働くこと夫自體が、彼女等の生命であるかのやうに、骨が粉になるまで、一瞬の憩もなく働いてゐる。

彼女等は凝乎として居られないのだ。

暴君のやうに迫つて來る生活の脅威は、彼女等に一刻の休息をも與へては吳れないのだ。「これでは可ない」と藻搔き乍ら、彼女等はありと凡ゆる副業に手を出してみる。

郡役所と村役場の農會が、奬勵する「養蠶は有望」の聲は、如何程このとき彼女等に力を着けることだらう、彼女等は裏切られたのちの大きな悲哀を、考慮する暇もなく、養蠶をもやつてみやうとする。

春蠶は、繁忙な田植と殆んど同時期に、掃き立てねばならない。

彼女等は、此の頃子供の手まで借らねばならぬ位、忙がしさを極める時季なのだ。けれども、彼女等は役場からの督促が嚴重なため餘儀なく、男の子、女の子の差別なく、母乳を慾求して泣きじやくる赤ン坊を無理に背負はせて通學させてゐる。

世の識者よ、彼女等とても、子女敎育の忽がせにすべから

ざる位のことは知悉してゐる、けれども襲ひくる生活苦に追はれた彼女等は、さうした理論を、無理に叩き壞さねばならないのだ、教育價値の否認――彼女等の、生活の前には、全く教育の價値は零に等しい、何と云ふ、重苦しい人生の惡闘を、彼女等は續けてゆくことぞ、

呪はれてある者は、農村の婦人だ、そして最も呪咀はれてある物は、農村の子女だ。

甞つて某婦人雜誌の質問に答へて、

「好きなものは」、私のお人形、

「嫌ひなものは」、毛虫よ、と都會に住む子女の、甘やかな言葉を、或る婦人雜誌に見たとき、私は耐らなく土地の子供が不憫でならなかつた。

毛虫を好むものが居やうか？けれども、彼の小さな子供達には、嚴然として生活の脅威である。働かねば食へないと云ふ、悲慘な潜在意識がある。その尊い意識の仄きは、已むなく彼等をして、背に赤ン坊を負ひながら、さうして腰を屈めながら、執拗く桑の葉に喰ひ着いた毛虫の、一つ一つを取り捨てねばならないのだ。

さうした悲境に伸長すべく、運命づけられた彼等の狀態を、涙なしに見戍られるだらうか、更らに、恁うしたことを自分の兒になさしめつゝある彼女等の心中を思へ。

彼女等は恁うして幾日かの不眠の日を送る、やがて蠶は繭を作り得た。

あゝ、彼等の期待は裏書きされたのか？彼女等は、夫によつて幾分でも潤ひのある歡びに浴し得たか？幸福であり得たか？――否々、事實は凡て彼女等の期待を裏切つた。彼女等をして更らに深い失望のドン底に陷れた。

米國との雲行が怪しくなつたのと、私の村に乾繭場の設備がない弱點を、知つてゐる商人は、奸策を弄して嘗つて例のない安價な相場で買上げた。今春の最上繭價が百匁壹圓〇五錢、甚だしきは七十錢臺、あゝ「弱き者よ汝の名は貧しきものなり」

一貫の繭價が拾圓とする、一貫の繭を作つた蠶は二十貫の桑と、幾十數日の日數を費してゐる。桑十貫の値段は五圓だ、二十貫で十圓になる。

彼女等の不眠不休の尊い報酬は全部、桑代として支拂はれて了つた。

然るに、彼女等は、蠶室の溫度を保つために、間斷なく細心の注意を施して、どの位の炭を費したか？其の炭代は何處から支出されるのだらう、結局彼等は、左のやうな形式によ

つて、廿日間の苦闘に報ひられたのだ。

（婦ー生活費ー米代＝演説聖十誡命）

彼女等は、都からのたとひ僅か宛でも仕送りして呉れた、夫の仕送りに、さうして父の仕送りに手をつけたとき、どの位悸き嘆じたことだらう「人生の悲劇」よ――然るに其は、

「食べること衣ること、只それ丈の苦しみは、苦しみの度が強いとしても單純である。今日一日を生き切れない貧のドン底にある人の安易な生活がくり返されてゐるではないか」（女性改造九月號の三宅夫人中條百合子論の中より）と。

食ふこと着ること、それが何故單純なのか？、その苦しみのために、子女の教育をまで無視した、人生の悲劇が、何故生れて來るか？表面の觀察は何時でも眉唾ものだ。

而も夫を、有識階級が社會に實在すべきものとして是認してゐる。そして口だけは、何と云ふ立派な農村改善ぞ、――

あゝ、農村は涸れてゆく農村婦人は喘いでゐる。限りなき狂暴な運命に引摺られて、子女は都會の塵埃に吸はれてゆく。

眞に、此の狀に對して襟を正す人や幾人、而して同情の淚を惜しまざる人や幾人。

愛國婦人會支部總會の、掲示を眺めつゝ、野良に出てゆく女達よ、御身たちは、何故淚を以つてそれを讀まないのか？

あゝ日每に眼窩の窪みゆく、農村の婦人たちよ、御身たちは、御身たちの限りある力を以つてして、何時まで擔ひ切れない大きな試錬の前に、從順であらうとするのか？

無智と呼ばれて泣き得ざる、忍苦の生活をいまこそ、社會に訴へるのだ。

さあ女達よ！！

雨乞ひの唄

古屋　悌

カーン、カーン、カーン…………

雨乞ひの鐘が、もう十日も鳴り續けてゐます。晝も夜も少

しの休みもなく鳴り續けてゐます。少しでも休めば、雨は降らぬものと昔から言ひ傳へられてゐるのです。夜半フト夢から覺めて耳を澄ませば、この哀れな鐘の音が、幾つも幾つも枕に響いて來ます。雨戸をくり開けて空を仰げば、心なの星が爛々と光つて、雨の一滴も落ちさうな景色はありません。

水田はもうスツカリ干割れてしまつて、植ゑた儘の短かい稻は、先の方が枯れて黄色くなつてゐます。桑園は一面にこげ茶色を帶びて、硬ばつた光澤の無い葉が、ガサ〳〵と風に鳴つてゐます。無論蠶に食はせる事も出來んのです。田草取りの要もありません、蠶を飼ふ事もあきらめました、農村はもう何も仕事が無くなりました。青年は續々と東京や名古屋へ出稼ぎに出掛けます。家を離れられない人達は、雨乞ひの場所へ集まつて火を焚いたり鐘を叩いたり、そして味噌を肴に酒を呑んでゐます、それは無論自暴酒です。

諸方で水喧嘩が起つてゐます、仲間うちでも喧嘩の絶間がありません、殺人が行はれて警官や檢事が飛び歩いてゐます。嗚呼、農村は頽廢の極に達し、人々の精神は異樣な昂奮に尖つてゐるのです。

これは信州の或る温泉近くの村の有樣です、少しも誇張の無い眞相であります。かうした　ない村のほとりを、温泉行きの自動車は、都の避暑客をあまた乘せて、乾き切つた路を砂塵上げて走つてゐます。何といふ皮肉な、いらだゝしい對照でせう。

村々の晝夜を分たぬ必死の雨乞ひも何の效なく、空は愈々冴え渡つて、いつ降りさうもありません。遂に最後の雨乞ひが行はれる事になりました。村の若い娘達は皆出動する事になりました、男達は地藏堂の地藏樣を擔ぎ出しました、娘達は褌一つの裸體になつて、先づ地藏樣に雨乞ひの祈願を捧げ、次に其の褌を取つて地藏樣の上から隙間もなく被せました。

娘達は全裸體です、そして口々に

『地藏樣、地藏樣、もし雨降らして下されば、この褌を取つて上げます、どうぞ降らして下しやんせ』と唄つて、地藏樣の周圍を廻りました。嗚呼、何と云ふ哀れた狀景でせう。無論笑ふ者もありません、涙さへ出ません、人々は只昂奮の極度に達してゐるのです。

雨乞ひがどれだけの效能があるかは、經驗によつても明かです、しかし二ケ月餘り雨らしい雨も降らず、稻も野菜も桑も全滅に瀕し、只さへ苦しい農村の生活が、ます〳〵壓迫されるのを見ては、もう神に祈り地藏にすがるより仕方が無いのです。效能があるとか無いとかといふ樣な事は、此の場合もう考へたり理屈を並べたりする餘裕が無いのです。そし

て遂には、女の最も大きい羞恥まで此の効能の無ささうな雨乞ひの犠牲に供するのです。

農村婦人の生活はこれです。農民の生活は年を追ふて苦しくなり、農村の疲弊は年を逐ふて甚だしくなります、そして才氣ある青年は相次いで農村を去つてしまひます、今日農村には如何に老人が多く如何に女が多い事でせう。そして老人は生活苦と闘ひながら荒廢して行く田園を悲しんで居ります。女は生活苦より以上に結婚難に惱み、若き强き男の幻を追ふて居ります。或は製絲工場へ或は紡績工場へ、流れ走るのは、單に生活苦ばかりではなく、結婚難に惱むオールドミスが多いのです。女工の性的墮落が非常に多く、女工の花柳病が娼婦のそれに劣らぬと言はれる反面には、農村婦人のいたましい結婚難があるのです。

今や農村の婦人は、農村頽廢の潮流の中に自己の尊き貞操をまで投げ入れるの已むなき狀態にあります。それは恰も褌を取り去つて全裸體の羞恥を感じつゝ、農村哀亡の哀歌「雨乞ひの唄」を唱ひ踊らねばならぬのと同じものです。

極度の羞恥を感じつゝ、悲しい「雨乞ひ」の唄を唄ふ時、溫泉の自動車の中には、美しい都の女が乘つてゐます。しかしそれを羨ましく妬ましく思つても、彼女等にはどうにもなりません、女工に出ても女中になつても、そこには依然として生活難と結婚難とがつき纏ふて居るのです。否、彼女等の多くは、澁紙のやうに日に燒け、油香の無い髮を束ね、農村と共に老ひて行くのです。でも彼女等は婦人雜誌の一種位は讀んでゐます、しかしその婦人雜誌を讀んでゐる時の、彼女等の心持を想像して下さい。

雨乞ひの鐘は、相變らずヵーン、カーンと鳴り續けてゐます、それは溫泉場の料理屋から聞えて來る三味線の音と、世にも皮肉なそして哀れなハーモニーとなつて……。

——一三、八、二五——

選評

應募篇が百三十二篇もありました。しかし抽象的議論の多かつたのは少々失望しました。設題の主旨は具體的に農村婦人を如實に現はすことにあつたのでありますからそうでない抽象論、机上論は落第としました。「泥の中の悲鳴」は優賞として推薦しました。此一篇は所定の枚數を超過しましたが、農村の實狀が手にとる如く胸を打つので敢えて選んだ譯です。それから吉川雪羊子氏の「女敎師の見たる農村」小川みち子氏の「田畑千圓馬二百圓」玉木イシ氏の「小作農の生計調査」の三篇を加へて當選者とします。次に選外として六篇採用し「本社圖書劵」を呈上することにしました

法學博士 河田嗣郎著

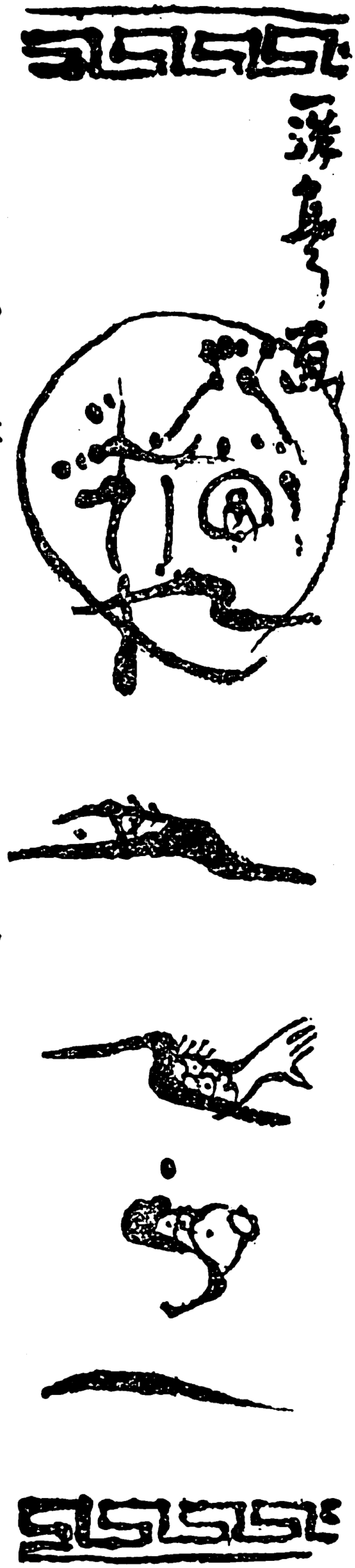
家族制度と婦人問題

四六判上製 定價二圓 郵送料十七錢

最新刊

我國の金城鐵壁として立國の最大强みであつた家族制度は個人主義的、社會主義的思想の成長と共に崩壞的行程にあるが如く、我經世家は此問題の爲に革命前の露西亞の如く、或恐怖に襲はれて居る。著者は本問題研究家としての權威で、本書の一部は『婦人問題』として發表されて一度は當局の忌諱に觸れ絶版となつた者だが、澎湃として寄せ來たる解放的精神は、婦人問題にも、家族制度の上にも劃時代的の變革を來たさでは止まぬ氣勢である。敢えて我國の家族制度の崩壞、及婦人問題の前途を憂慮する人々に此一書を贈る。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四二〇番 改造社



怠惰なる秋

吉田絃二郎

私は怠惰なる日を愛する。怠惰なる秋の朝を愛する。
かすかなる物の影は冷たき地に這ひ、縁に這ひ、私の心に這ふ。
高い木で百舌が啼く、草の下にこほろぎが鳴く。
何でもないたゞこれだけの月並な秋の聲、秋のシインに觸れたゞけでも私の心は動く。
微風が吹く、葉がゆらぎ、網の目を作つた地上の影が顫く。窪みの潦水が揺れる。
二尺ばかりの水脈が地を這ふ。
何でもない、こんな庭の秋の色を、秋の動めきを見つめてゐるだけでも私の心は踊る。

私は秋の怠惰なる日を愛する。
秋の怠惰な日を悦ぶ心を賦へた神に感謝する。
秋の怠惰なる日、空を見れば私の心は澄む。私の心の奥の奥に眠つてゐたいろ／＼な思ひ出がいろ／＼な思ひが、いろ／＼な影が動く。
その思ひ出、その思ひ、その影は、私にとつて世界の何物よりも尊いものである
私は本を讀まない、秋の日を、悔みはしない。私は何一つ作り出さなかつた怠惰な日を悲しみはしない。
私は怠惰であつた。けれども私は忘れかけてゐた思ひ出を見出した。雑念の靄につゝまれやうとしてゐたいろ／＼な思ひを、いろ／＼な影を磨き上げた玻璃に映すことができた。
それは私にとつて哲學を思惟するよりも尊い經驗であつた。それは私にとつてパンのための藝術を作り出すことよりも尊い精進であつた。
哲學も藝術もそれが私たちの心に、靜かな影となつて、心影となつて再び三度生きかへつて來るのでなければ眞實な相は摑まれないであらう。
すべての自然の相といひ、すべての人間生活の意慾といひ、執着といひ、哀愁といひ、歡喜といひ私たちは果して現實在として一つのものでも持つことができるか。すべては過ぎ去つた心影ではないか。現在の世界に現實存はない。現在の世界では私たちはたゞ過去の心影を靜かに、できるだけ靜かに、確かに思ひ出すより他に方法はない。映し出すより他に方法はない。
怠惰なる秋の日は私に王候以上の富を與へる。私は秋の日を怠惰なるがゆえに、すべての空を持ち、微風を持ち、潦水に映る雲を持ち、私の心の表を撫でゝ行くあらゆる過去の心影をさながらに持つことができる。

×

秋の風が吹く。青空が漂ふ。
怠惰なるがゆえに、私の心は秋の風を聴き、青空を仰ぐ。
いたましき過去の心影は重い鎖につながれつゝ私の心を撫でゝゆく。
いたましき過去の心影のProcession！
秋の朝をいたましき心影の行列が歩む。
とざされたる扉、空虚なる舗道。鈴懸の葉は落ち、野良犬は眠る。
鎖の音は死の町の秋に響く。
死んだ女、死んだ男、かの友。いたましき心影の行列は歩む。
心影の世界に於いては人は永遠に生きる。
秋の風が吹く。かけすが鳴く。
いたましき心影の鎖は断たれる。
地上から失はれた人々。
すべての美しき人々の上に冷たき土、幾何の墓。
静かなる瀧水は動く。
老ひんとする我。

×

この静かなる心

紙を喰む蟲のごとく一つ一つの心影が私の心臓に
靜かなる心影の音
靜かなる心影の跫音
秋は沈む、草叢に還る蟲のごとく靜かに。
たゞ秋の一日の怠惰、たゞ秋の數日の怠惰。
巷の下の人々生き。來り。我が心遠くに住み、惱み、思ふ。
この靜かなる心の奥に死の國のさゝやき
この靜かなる心の奥に實在そのものゝ寂しき永遠の影
死の國のさゝやきを聽かんがために
實在そのものゝ寂しき聲を聽かんがために今日も怠惰なる秋の日を過した。
何もせず、何も思はず、たゞ心の奥の秋の扉を見つめたまゝ

×

怠惰な秋の日の午後
草の中にしやがんで山を見る。廣い川を見る。汽車は幾度か長い鐵橋をわたつて往き、來る。
東に往く旅人、西に往く旅人。
秋の風は川の眞つ白な礫を奥の山へ吹く。
それはほんとうに廣い礫である。
礫をへだてた向う岸の町がかすむほどに廣い礫である。

私は廣い磧の一つ一つの礫を見つめる、
一つ一つの礫が、一つ一つの悲しみを持つてゐるやうに思はれる。
私は廣い流れを見つめる。
一つ一つのさゞなみが一つ一つの憂欝さを持つてゐるやうに思はれる。
何と名づくべき悲しみでもない。何と名づくべき憂ひでもない。たゞ一つ一つの礫は喘ぎ、一つ一つの波は秋の憂欝さを射かへしてゐる。
長い鐵橋を旅人は西し、旅人は東する。
私は廣い磧を見つめてゐる。私自身が旅人であることを忘れて。
永劫の時を通して、私はこの刹那だけそこの草の中にしやがんで、そこの磧を見たのであつた。恐らく永劫を通じて私はふたたびこの草の中を歩むこともあるまい。
私は磧の礫に對してほんとうに永遠のさよならを言はなければならぬ。遠い山に對しても水に對しても鐵橋を吹く秋の風に對しても。

×

私は廣い川の畔の草の中に立つてゐる。
草を吹く秋の風を聽いてゐる。
旅人は西し、旅人は東する。
風は一つの草から一つの草へと永遠のさよならをさゝやいてゆく。
旅人は一つの山から一つの山へと永遠のさよならを投げかけてゆく。

時とは永遠のさよならではないか。
刹那とは永遠のさよならの一つ一つではないか。
秋の風の過ぎゆ
一つ一つの永遠のさよならではないか
人は現實に生きることはできない
人はいつも永遠のさよならのなかにのみ生きてゐる

×

音一つ一つの音、音なき音
光りに溶け來る音、いづこより流れ來るか音なき音
秋の朝の冷たき小陰に凭り立つ音
青空に流れゆく音なき音
いづこへ
すゝり泣き、木の葉の落つる寂しき笑ひ
いづこより
地を踏みて朝の街に思ひつゝ歩む
昨日歩みし街
住み馴れし街
秋の朝の光り

旅人のこゝろを我に見出す

×

秋の曇り日の光りを一つ一つペンの背に負ふて私の詩が白い紙の上を歩む
小鳥らは木にありて
草は地にありて
私の血は脈管に遠し
かれらこの心と何のかゝはりもなし
ペンを走らせる我、思ふ我、憂鬱な心、
神は遠し
ペンは走る、空しき心の足跡を曇り日の光りは照らす。

×

廣い草原に立つて思ふ存分笑つて見たい
何もかも忘れて、忘るゝまで笑つて見たい
かれは笑つた、ほんとうに笑つた
笑つてしまつたらかれはきよとんとしてゐた
胸が痛いと言つてゐた
頭が痛いと言つてゐた
たまらなくなつたと言つてゐた

かれは地にうづくまつてしまつた
かれは泣いてゐた
傍で見てゐた神が笑つた
かれはすゝり上げて泣いた

×

何もかも忘れて、忘るゝまで笑つて見たい
かれは笑つた、ほんとうに笑つた
そしてきよとんとしてゐた
秋の風が吹いてゐた
たまらなくなつたと言つてかれはまた笑ひ出した
笑ひこけた、泣きながら笑つた
横つ腹が痛むと言つて笑つてゐた
ぼろ〳〵と草の中に涙を落した、手の甲で拭いた、そして笑つた
かれはきよとんとして草の中に立つてゐた
かれはたうとう氣が狂つてしまつた
秋の風がかれの汚れた髭面を吹く
かれは今日も街を歩きながら笑つたゐた

×

歩いて歩いて歩き通しに歩いて見よう
疲れ切つて何もかも忘れてしまうまで
惟然坊は歩きに歩いた
西行も歩きに歩いた
何もかも忘るゝために
歩きに歩いて魂を摩り減らしてしまうことができたらどんなにかうれしからう
秋の風が吹く
惟然坊を吹いた風が、西行を吹いた風が
惟然坊が一生歩いても、西行が一生歩いても
地は一寸も減りはしなかつた
秋の風は一尺も短くはならなかつた
秋の風が吹いてゐる
惟然坊も、西行も死んでしまつた

×

なぜ踊ることができないのだ
誰か笛を吹いてくれ
踊つて踊りぬけたら人間の世界がどんなにか面白からう、人間の世界がどんなにかばか／＼しからう
誰かゞ踊つてゐる

誰かゞ笛を吹いてゐる
たつた一人だ
街の男や女たちが笑つてゐる、冷笑してゐる、
でも、たつた一人の男が踊つてゐるたまらなく愉快さうに
たつた一人の男が笛を吹いてゐる、たまらなく面白さうに
世界で一番幸福さうな顔をしてたつた一人の男が踊つてゐる
たつた一人の男が笛を吹いてゐる
みんなはなぜ踊らないのか、笛を吹かないのか
狂人だ！ 狂人だ！ とみんなが言つてゐる、笑つてゐる
けれども男は踊つてゐる、男は笛を吹いてゐる
秋の日が踊る男と、笛を吹く男の上のみにかゞやいてゐる

×

プロメシウスが神に罰せられなければならなかつたなら、酒を作つた男も鷹に腸を裂かれなければならぬ
なぜなら酒を作つた男もプロメシウスと同じやうに人間に至上の幸福を持つて来てくれたからである
プロメシウスの炬火、酒を作つた男の酒甕！
人間は酒を飲むことによつて神の世界の扉を覗きこむ
酒に狂うた男は神の鞭を忘れてしまう
狂人になるといふことはめぐまれることだ

コスモスのやうに痩せこけた赤い鷄頭が庭の隅にある
狂人の眼で見ればそれはたゞの鷄頭ではない
そこには王冠がある、雪の中のたとへばクレムリンの大伽藍が見える、燒けさかるモスクワの街がある
一片の葉がゆらぐ
狂人の眼には
或るものゝさゝやきが動く、遠い世界の人々の俤が映る、悠久が流れる

×

狂人でなくてどうして貧しき者は幸なりと說くことができよう
狂人でなくてどうして草の上に神の炎を見ることができよう
狂人でなくてどうして五千人の聽衆をたゞ幾片かのパンと魚だけで滿腹せしむることができよう
狂人でなくてどうして十字架に上ることができよう
狂人でなくてどうしてイヴンの馬鹿の王國の實現を想像することができよう
狂人でなくてどうしてガンヂの言葉が語られよう
自然はいつも狂人に似てゐる
自然は平氣で幾十萬の人を殺す、狂人だからだ、だから自然はまた全く無報酬で幾億の人々を生かす
秋の風は狂人だ、だから世界のどこまでも考なしに走つてゆく
そこに生きとし生けるものゝ心を打つて寂寞に狂死せしむべく
狂人である秋の風に吹かれて狂人西行が生まれ、惟然坊が生まれ、芭蕉が死んで行つた

×

一生を壺を作る男
一生を繪絹の前に坐る男
一生を草を植え、草を刈る男
それが狂人でなくて何であらう
何かに狂つて現實を忘るゝのでなければ、生きてをれないのだ。本能といふ脅迫のために、寂寞そのものゝ跫音のために

偉大なる狂人ミケランゼロの玩具が美術館に飾られてゐる
孤獨な狂人ベートウエンの手ずさみが高い丸天井の下から流れて來る
しかし、かつてありし偉大なる狂人等のすべての事業もいつかはすつかりこの地上から滅びてしまうであらう
しかし人間が生きてゐるかぎり、狂人等は壺を作り、詩を作り、繪を描くであらう。
絶えず人間を脅かし、忍び寄る或るものゝ跫音を恐れつゝ

——一九二四・一〇——

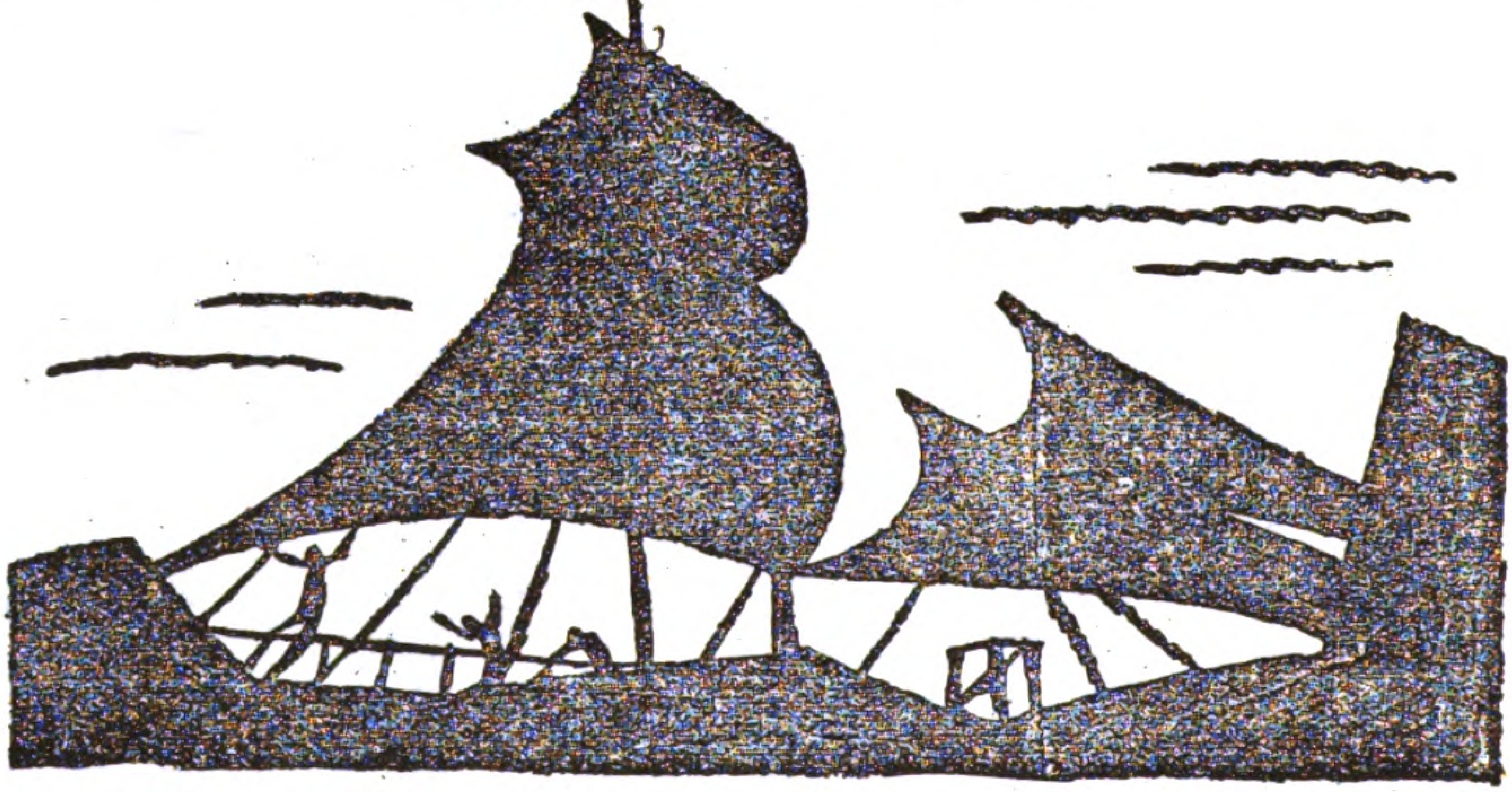
山川均著「十一版」

レーニンとトロツキー

◇定價壹圓五拾錢
◇送料金拾五錢

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

レニン傳及彼の人物評は澤山あるが、本書は類書中の尤も卓越した評傳だ。彼の不朽の事業、雄大な人格を知らんと欲するものは本書に如くはなし。震災後永く絶版となつていましたが今回増補訂正の上、再び出版を見るに至つた。



女客

中村星湖

一

獨身者の松永氏は隣家で賄ひをして貰つてゐた。ある晩、おそく歸つて來て、隣りの細君が用意して置いてくれた食卓に就くと間もなく、かれはかの女の例の揶揄ふやうな調子の聲を聞いた。

『をぢちやん！　今日はよつぽど好い事でもあつたと見えて、大へん御機嫌ですねえ？』

その時、かれはなみ〱と注いだ盃を中途まで持ちあげたのだつたが、それを口へは當てずに食卓の上へ靜かに卸した。

『をばちやん！　そんな風に見えますか？』とかれはかの女の方を振返つた。

『見えますとも！』とかの女は續けた。『いつも遲くお歸りの時には、まるで餓鬼か何

そのやうに、怒つたやうな顏をして、ガツ〳〵と食ふ氣や飲む氣にばかりなつてゐなさる樣子なのに、今夜は違ひますね。へんにかう、ニヤ〳〵してゐるぢやありませんか？　獨り笑ひをしてさ……』

『あは、は、は、は！　思ひうちにあれば色外に現はる……ですか、をばちやんもなか〳〵の天眼通です。』

『圖星でせう？』

『えゝ。』

さう答へて、かれは一層柔かな皺を眼のふちに寄せて、三十八といふ年齡よりは老けて見える、大きな、圓い、禿頭を片手でつるりと撫で上げた。

『何んな好い事があつたのですね？』

隣りの細君――と言つても、去年亭主に別れた寡婦――は、子供たちのうち、大きい方の一人は二階の部屋へ勉強に引込んだ切りらしいし、末の女の兒は茶の間に取つた床のなかに眠つてゐるらしいし、ほかに話し相手のないせいもあるがさうでなくとも、心配と苦勞の絕えない淋しい生活のなかで、飯時にだけ顏を見せる松永氏を捕へて、何か無駄口を叩くのは、一種の心遣りでもあり、慰めであるらしかつた。かの女はかれと同年配だつたが、子供たちがさう呼ぶのを眞似てかれを「をぢちやん」と呼び、從つて、かれの方からもかの女を「をばちやん」と呼び馴れてゐた。かれらの間の親密さは、普通の素人下宿の主婦とその下宿人との關係または飯屋の內儀とその客との關係よりも深かつた、と言ふよりは、ずつと〳〵無遠慮だつたと言ふ方が適當であらう。もとから、かれらは親類の間柄でもあつた。

『實はね、をばちやん！』とかれは好きな酒を一杯ぐツと呷つてから言つた。『僕また明日見合ひをする事になつたんですよ。』

『また？』とかの女はその大きな眼を瞬つた。

「では、せんだつての話の方は駄目だつたのですか?」

「えゝ、どうも、これまであつた幾つかの縁談が一つも纏まらないものだから、僕も聊かきまりが惡るくなつて、どころではない、大いにしよげ込んで、もう女房などは迎へずに、淋しいけれどもそれだけ氣樂な獨身で一生を送らうとも考へてゐたのですよ。ところが、僕のアメリカ以來の友人で、丸ビルの或事務所に勤めてゐる男と、二三日前に電車のなかで出會つて、久し振だから、何處かで一杯やらうツてわけで、或カフエへ寄り込んで、互にその後の身の上話をはじめたのです。昔は同じあつちの農場で働いた事もある仲だから、可なり立入つた事まで打開け合つてみると、その友達は既に一家の主人となつて妻をも子供をも持つてをるが、僕はこの頃やうやく自分の住所だけは拵へたが、運がわるくてまだ氣に入つた女を手に入れる事が出來ない、たまに好いたらしい女が見付かつて、あひ手の承諾を得ても、先方の親が故障をするとか、兄貴が不贊成を唱へるとかで、みんなオヂャンになつてしまふ……」

「へえ? をぢちやん見たいな呑氣坊でも、お友達となら、そんな愚痴話をする事がありますか、ねえ?」

「そりやあ、僕だつて人間だから、そんな場合もありますさ。……まあ、冷やかさずに聞いて下さい。……そんな愚痴話を僕がすると、友達が、では、僕の妻の知人で、ちやうど君に向きさうな女があるから、それを一つ世話をしやうか、といふ事になつたのです、縹緻も好い方だし、年も婚期を過ぎてゐるといふ程ではない、すこしハイカラで高く止まつてゐた爲めに緣遠かつたといふ事に自分で氣が付いたと見えて、この頃では、よつぽど碎けて來たと妻なども言つてゐるからたぶん、よからうよ、君が望むなら、すこし近付きになつてみては何うか? とまで言つてくれるわけです。をばちやんは嗤つてゐるが、僕はじつさいこの頃まじめになつて女房を探してゐるのですから、さうでせう、半年も懸つて自分で住居を拵へて、どこもかこしこも、ほゞ出來上りはしたけれど、あそこを守つてくれる肝腎な宿の妻が無くては、まるで、佛造つて魂を入れぬ遺憾がありますから、ねえ?……例へば、まづ第一に、朝晩の食物の事からして、自分で手鍋をさげるか

をばちやんの世話になるかでなければならず、外へ出懸けるにも送つて出る者はなし、あとが不用心だから一々ドアに錠を卸して行く。そんな事には、殆んど二十年來慣れ切つてゐるから、ふだんは全く平氣ですが、これが雨でも降つてる晩おそくに歸つて來でもした時などには、電燈は點いてゐず、暗闇の中を手さぐりで錠前の穴をさがして鍵をさし込む間のわびしさとか、やつとドアを開けて内へ入つて、電燈を點けてみても、そこらが一時にパツト明るくなつたゞけそれだけ此の家には自分以外の誰もゐないと思ふ寂しさとかは、とても言葉には表はせませんよ。」

　そこまで話して來ると、かれは我れとわが言葉に感激したやうに涙含んだ眼を俯せた。

「……そりやあ、全く、そんな場合もありませうねえ！」

　隣りのをばちやんも、さすがにかれに同情するらしく、急にしんみりとした低い聲でさう言つて、側の長火鉢の銅壺に漬けて置いた第二の徳利を拇指と人差指とで吊しあげて、もう大方空になつてゐるらしい松永氏の前の徳利へ比べて置いた。

「だからをぢちやんも、もう標緻だとか學問だとかいふ事をむづかしく考へずに、可い加減の所で辛抱して、早くお貰ひになるんですね。」

「さうは思つてゐます。何んな女でも、僕のところへ好んで來てくれるといふ人でさへあれば……とは言ひながら、そんな謙遜な氣持になればなるだけ、すべての女が僕から遠ざかる。すべての堅氣の女が……そして、僕にいくらか色眼を遣つたり、やさしい言葉を掛けたりするのは、金で貞操を賣るやうな手合ばかりだから情けなくなつちまう！」

「一つは、をぢちやんが、若い頃から、あんまりさういふ商賣女を樂しみ過ぎた罰ですよ。それから、初めて結婚した女を、不標緻で間が抜けてゐるとかつて、むごたらしい目に逢はせて追ひ出したりした罰ですよ！」

「そりやあ、さうかも知れない。」

『だが、まあ、過ぎ去つた事は致し方ありません、これから本當に眞面目になるんですね。さうすれば、きつと、よいお嫁さんが來ますとも！』
『今では、僕、ちつさい眞面目になつてる積りだが、ねえ、をばちやんなどにはさう見えませんか？』
『眞面目になつた、とは未だ言ひ切れないでせう、眞面目になり掛けた、といふ所でせう。』
『そんならさうでもいゝ。とにかく、明日は、あの友達の世話してくれるといふ女が僕の家へ來るんですよ。』
『まあ、それは、なか／＼開けた方と見えますね。』
『今時の女は、をばちやんなどの娘の頃とはすつかり違つてゐますさ。』
『へーえ？　で、ひとりでお出でなのですか？』
『友達が附添つて來るさうです。今日、電話で知らせて來ました。あんまり急な事だから、僕ちよつと面喰つたが、却つてそんなに簡單に運ぶ奴の方が物になるかも知れないと思つて、承諾したんです。』
『そりやあ、しつかり御馳走でもして、是非物にするんですね。』
『だが、どれ位ゐの代物か、逢つてみてからでなくちや解らない。をばちやんもよく見て置いて僕に敎へて下さい。女を見るには女でなくちやならない點がある。男が女を見ると、どうしても甘いから……』
『そんなにむづかしく考へない方が好いですよ。お仲人が昔からのお友達なら、まんさらの人を世話しやしないでせう。』
『さうでせうかね、をばちやん？』
その時、をばちやんの長男が、英語の暗誦をしながら、ツシ／＼と梯子段を降りて來た。

二

翌日は日曜だつた。前夜、隣りのをばちやんとすつかり話し込んで、十一時ごろにやつと飯にしたので、松永氏が自分の住居へ戻つて寢床へ入つたのは、かれこれ、眞夜中近くだつたが、いつもよりすこし餘計に酒を飲んだせいか、いや、原因はほかにあつたであらう、へんに頭が冴えて、直ぐには寢就かれなかつた。そこで、かれはをばちやんとした話を繰返して考へてみたり、やがてかれの妻となるかも知れない未見の女の姿を空想してみたりした。でも、朝、五時ごろにはかれは習慣で眼をさました。そして、睡眠不足だとは思つたが、寢床の中で愚圖々々してはゐずに、むつくと起き返ると寢間着のまゝ、あちこちの窓のカーテンを開け歩いたり、ドアの錠を外したりした。

朝霧が薄りと降りてゐて、戸外の景色は夢の中のやうだつた。

『この模樣では今日も晴れだ。友達が女を連れて來るのは午前の筈だが、その頃には、美くしい日の光がこの庭や土堤の芝生の上に一ぱい當つてゐるに違ひない。』

かれはそんな事をまづ考へながら、澁い眼瞼をパチ〳〵させて、一つの窓の玻璃戸を透してあちこちを眺め廻した。やがて、寢間着を仕事服に着換へようとしたが、待て、と思つて、卓子の抽斗から鏡と西洋剃刀とを取出して、かれの顏を剃る仕度をした。剃刀を革砥で磨いで、サラ〳〵と掌に當てゝみてから、再び卓子へ戻ると、顏ぢゆうをシャボンの泡だらけにして、その眞つ白い奴を片端から剃り落して行つた。はじめはまるで化物のやうだつた顏が、次第に人間らしくなつてゆくのを、かれは鏡の中で見た。

『おれだつて、さう見つともない顏をしてゐるわけではない。ちよつと西洋の喜劇役者——活動寫眞の道化役と言つたやうな樣子が無いではないが、これで、明るい、好い所が有るんだ。アメリカで毛唐の商賣女の情夫になつてゐた時分にやもつと生き〳〵した可愛らしい顏をしてゐたものだ、額だつてこんなに禿げ上つてはゐず……こゝの禿さへこんなでなけりや、これでもまだ……』

そんな事を考へながら、かれば顔剃りの道具を片付けたり、立てゝ置いた鏡の脚を疊んだりした。つぎに、口を嗽いだり、顏を洗つたりする爲めに洗面所へ行つて、そこから出て來る時分には、かれの眠氣はすつかり去つてゐた。

かれは古い泥の喰着いたまゝな仕事服、ボタンがむしれたり、綻びが切れたりしてゐる、古洋服に着換へて、靴箱の隅からやはり泥まみれの古靴を引摺り出して穿いて、元氣よく庭へ降りた。

家のまはりに作つて置く、里芋やトマトやその他の耕作を、百姓の「朝づくり」と同じに、かれは勤めに出懸ける前にやるのを習慣とし、且つ無二の樂しみとしてゐた。今日は無論、社の方は休みなので、いつものやうにあわたゞしくやるにはおよばなかつた。ゆつくり一日庭で働く事が出來るわけだつた。

だが、午前には、友達が女を連れて來る筈だ……

その事を思ふと、いかに自分の道樂だからつて、こんな見つともない風をしてゐるのは憚られた。されぱと云つて、一張羅の服を着て、かれ等のやつて來るのを待ち構へるのもかれには馬鹿臭かつた。かれはそれ程初心ではあり得なかつた。むしろ、かれの田園生活の甲斐々々しい所を女に見て貰ひたかつた。……こんな爺では厭だ、こんな汚い服裝をしてゐては嫌ひだ、と思ふやうな女なら、こちらで御免を蒙る！　と考へた時には、かれはこの頃にない昻然とした意氣の胸中にみなぎるのを覺えた。

霧は次第に晴れ渡つて、朝日がパツと射して來た。森かげの線路を走る電車の音や、隣りの井戸のポンプをガタ〳〵させる音や、雨戸だの、玻璃戸だのゝ轢る音や、夜もすがら鳴いてまだ鳴きやまぬ虫の聲や、今起きたばかりで挨拶を交はすらしい人の聲やが聞えて來た。

『ゆふべもふつと考へた事だが、おれといふ人間は、たしかに色々な弱點を持つてゐるが、かういふ風に朝早く起きる事

と、せつせと働き廻る事と、下らぬ心配をしてくよ〳〵思つてゐるよりは面白可笑しく世を渡らうと諦めを付けてゐる事とでは、誰にも退けは取らない積りだ。隣りのをばちやんに訴へたやうなあゝいふ氣持も一方に無いではないが、なむに！　人間てものは、さう窮屈な思ひをするにやあ及ばないさ、常に動いてさへゐれば、つまりは何うにか成るもんだ。」

草葉にやどつた露を浴びながら、耕したり、耘つたり、肥料を引ひたりしてゐる間に、かれはそんな風にちよい〳〵物を思つたが、それは大方、今日來る筈になつてゐる女の事を關聯してゐるのだつた。それ程その女の事を思つてゐる積りではなかつたが、自然に心がそちらへ集まつて行くのだつた。

或時には、かれはその女が非常な美人であつてくれゝばよいと思つた。勿論、かれと雖、醜婦よりも美人が好きだつたならである。だが、或時には、かれはその女があまり大した美人でない事を望んだ。大した美人だと、かれのやうな、全く無一物といふのではないが、借金に借金を重ねてやうやく一軒の住居を作つた程度の貧乏人で、外國へ長い間行つてゐたから多少氣が利いてはゐるが、風采だつてさう揚つてはゐない男のところへ、好んで來さうには思はれなかつたからである。或時には、かれはその女が何も彼も中庸を得た女であつてくれゝばよいと願ひ、或時には、その反對に、極端なお轉婆であつてくれゝば面白からうと思つたりした。

まだ十代で、始めて女といふ者を知つた時からこつち、かれが何等かの意味で接觸して來た女たちの顔や形が、つぎつぎにかれの前に現れたり消えたりした。そのうちのどれに今度の女は似てゐるだらう？……

そんな空想を續けながら、かれは小一時間庭で働いてゐた。健康な飢を感じはじめると、かれは鍬をそこらへ抛り出して、井戸端へ行つて手を洗つた。そして、上衣と泥靴だけを脱いで、臺所へ入つてコーヒーを沸し、パンを切つた。朝飯だけは、西洋風にそんな物で濟まして、隣家の厄介にならない事にかれはしてゐた。

三

友達が若い女を連れて、野道の一端に現れた時には、かれは垣根の檜葉の植變へに懸つてゐた。仕事に興味を感じてそれに熱中してゐると女に對する心などは全く起こつて來なかつたが、でも、時々、思ひ出しては、まだかしら、と頭をもたげて遠くの方を、森かげになつてゐる電車の停留場の方を、森手前の野中の道の方をかれは眺めた。そして、パラソルを翳して來る若さうな女の姿を認めると、あれではないかと伸びあがつて見たり、こちらへ來るのではなくてあちらへ去り行く女の後ろ影を、もしひよつと自分の家を訪ね當て得ずに引返すその女ではないかと疑つたりしたが、それらの女の多くはひとりぼつちかさもなければ亭主や子供と一緒に、かれとは何の關りもなく往き來してゐるのだといふ事が直ぐに知れるのだつた。最後にかれの視野へ入つて來た二人の男女は、男の背恰好がかれの持つてゐる友達の黒田らしくはあつたが、あれもやはりよその若夫婦が日曜を幸ひに郊外散歩に出懸けたのだらうと輕く考へて、度々の失望から、また失望を重ねるのを厭さに、強いて輕く考へて、かれは仕事を續けてゐた。よし、あれらがさうであつたにしても、あわてくさツて着物を着換へたり出迎へたりする事はない、ともかれは思つた。それ程待ちわびてゐたやうに思はれるのは癪でもあり、馬鹿らしくもあつた。ところが、あれらが今日の客だつた。

『松永君か？　何處のお百姓だと思つたよ。大そうお稼ぎだね。』

かれはさう突然に話し懸けられて、さすがに顔を赧らめながら、垣根の外で立止まつた二人の方を見た。チラと見て取つたところでは、女は案外に年若らしかつた。そして、可なりよい縹緻だつた。

『これは素敵だ！』

かれは心でさう叫んだ、がさあらぬ體に、友達と眼を見合せて笑つた。

『あはゝゝ　これが僕の道樂でね、社へ出る日でも、朝一度は必ず泥だらけになつて働き廻らないと氣が濟まない。さあ
さあ、どうぞそちらから、表の方から……』

かれは入口を指しゝて數へて置いて、急ぎ足で自分は裏から家へ入つて、手早く仕事服を脫ぎ、顏や手足を洗つ　さて、何を着ようと考へたが、洋服も改たまり過ぎてをかしいし、和服の準備はないので、寢間着の上に銘仙溫袍を重ねて兵兒帶を結んだ。

　ところで、正式に客を迎へる段になつたのだが、迎へられないさきに、もう友達は女を連れて應接間へ入り込んでゐる樣子だが、スリツパが一足しか備へてない、いや二足ある事はあるが、一足の方は古靴を引切つて間に合はせてあるので、とても今日の珍客の前へ出すわけには行かない。隣りの家には、安物ではあるが、新らしいのが二三足ある事を思ひ出して、かれはをばちやんへ借りに行つた。

『をぢちやん！　來たやうですね？』

　かの女は例の揶揄ふやうな眼付で言つた。

『えゝ、來ましたよ。』

　かれもニコ〲しながら答へた。

『わたしは顏を見たゞけだが、』とかの女は續けた。『ずゐぶんの別嬪ちやありませんか？　それで、なか〲着付けだつて凝つてますよ、地味なやうで派手で――白粉を濃くしてゐるらしいから、年頃は解らないが……』

『よからうかね？』

『をぢちやんには過ぎ物ですよ。』

『やあ、さう早くきめられては叶はん！　まあ、あとでゆつくり觀察してから御教示を願ひます。』

かれは、ツカ〳〵と隣りの家へ上り込んで、案内知つてゐる梯子段の下からスリツパを探し出して、『借して下さい』とも何とも言はずに自分の家へ持つて來た、そして、應接間の床板へそれを並べた。

『足袋はだしでは汚れます、どうぞ……』

それがかれの女客への最初の挨拶だつた。先刻のやうには顔も赤らまなかつた。女も割合に冷靜で、普通の客に來たやうな取澄ました顔をして、言葉すくなに挨拶を返した。

『高く止まつてゐるばかりではない、この落ち着きやうでは、年は相當に取つてゐる。事によると處女ではないかも知れぬ……』

結婚生活や家庭生活の經驗には乏しかつた、と言ふよりは殆んどさういふ物を持つてゐなかつた松永氏も、色々な女の種類を知つてはゐるので、まづ、そんな判斷をあひ手へ下した。

『何だつて好いんだ。自分にしても、初婚ではないし、童貞ではむろんないんだから……この縹緻で、この品格で、こんな家へ入つても好いと言ふのなら、むしろ、おれは幸福だ。隣りのをばちやんの言ふ通り、おれには過ぎ物だらう……』

かれは友達から話し懸けられる言葉へ、トンチンカンナ返事をしながら、そんな風にも思つたが、頭が批評的である程には心が沈着でなかつた。かれは白足袋を穿いてゐる女の足がほこりだらけの床板を踏んでゐるのを見た程にはそのまツ白な脛を靜かに見得なかつた。

一つは、友達の手前、女をヂロ〳〵見る事は極りわるいからでもあつた。

かれには拘らずに、座の白けるのを防がうとするかのやうに、友達は言葉を續けた。

『實に、この周圍の眺めは好いね。森があり、林があり、丘があり、田畑があつて、まさに一幅の畫だ。その間にポツリポツリと別莊風のシヤレた住居が立つてゐるのだから、殊に君の家の恰好は面白いし、壁や屋根へ塗つたペンキの色も、

すこし派手過ぎるが、それだけに遠くから見ると面白い。内部にはまだ未完成の點もあるが、未完成は未完成でまた面白い。金もよほど懸つたらう？』

『いや、金はさう懸けない、』と松永氏は我れに返つて答へた。『金の懸かつたのは材料だけで、仕事は、土臺から柱立て壁張りペンキ塗りまで皆自分の手一つでやつたやうなものだから、これで、勞力と時日とだけは豫想外に懸つてゐる。』

さう言ふ時には、かれはなか／＼得意だつた。そして、友達の方をでなくて、女の方を見たが、その時、かの女は横を向いて、まだ上張りのしてない壁や天井を見廻してゐた。

『えらい者だよ！　君にはさふいふ腕と根氣があるからなあ。』

友達の讃美でいよ／＼得意になつたかれは、椅子から起ちあがつて、二人をあちらの部屋へこちらの部屋へと案内して歩いた。一つの部屋には日本風に疊が敷き込んであつた。一つの部屋には、まだ材木がごたくさと置かれて、斜めに据ゑられた仕事台の上にはけづり懸けの板や鉋や鋸が散らばり、鉋屑がそこゝに渦を卷いてゐた。

二階の屋根裏部屋へまで、かれはかれ等を案内して歩いた。

再び應接室へ戻つて、石油こんろでコーヒーなど沸してゐた時、往來の方に豆腐屋の喇叭が鳴り響いた。

かれは窓から首を出して、隣りの家へ叫んだ。

『をばちやん！　豆腐屋に寄らせて下さい。』

『をぢちやん！』とむかうから答へた。『豆腐屋さんから何を取るのですね！』

『油揚げ！』と口まで出懸つたのを抑へて、かれは裏口から下駄を穿いて出て行つた。そして『油揚げを五枚程』とをばちやんに頼んだ。その時、をばちやんは問ひ返した。

『もうそろ／＼お晝飯ですが、こちらで仕度しなくても好いですか？』

『え、いゝです。』とかれは答へた。『僕、ゆふべ肉を買つて來て置いたから、あれで飯を食べさせてやる積りです。』

『御飯はをぢちやんが炊きますか？』

『お手並拜見といふわけで、女に炊かせてみませう。』

『でも、まだ來ると極つたわけぢやなし、今日はお客様だから、台所をさせるのは氣の毒でせう？』

『だが、僕が獨り者だといふ事は承知ですもの、後は兎に角、今日一日は主婦らしい事をしてくれますよ、氣の利いた女なら。それに、友達が附いてゐて、色々指圖しますからね。』

『それなら、こちらで仕度は致しませんから……』

『えゝ、どうぞ、御心配なく。』

豆腐屋は來たが、油揚げが賣切れたといふので、生豆腐を二丁取つた。葱でも有るとよかつたが、その貯へもなく、里芋が地下室の奧から出て來た。

松永氏が友達に耳打ちをすると、あひ手は心得たといふ風に首肯いて女に笑ひながら其旨を傳へたらしかつた。女も笑つて、機嫌よさゝうに、手提げの中から紫色の細紐を取出し、それの端と端とを結び合せて襷を造つて黑つぽい着物の袂を巻き上げた。松永氏がナプキンの大きいのをエプロン代りにしてくれと差出すと、それを帶の下へ挾んで、流しの窓の前に立つに、くる／＼と巧みな手つきで芋の皮を剝きはじめた。

『君等がそツちをやつてくれゝば、僕が飯を炊く。』

飯まで炊かせては濟まないやうな氣持と、もしそんな事から愛想を盡かされてはならないといふ懸念とから、かれはさう言つて、米を米箱から持ち出したり、薪を竈の側へ集めたりした。

やはり炊事の手傳ひをする積りであらう、上衣を脱いで手拭を頭にぐる／＼巻きにした友達は、女と流し場に並んで立つて、時々何か低聲で言ひ合つては笑つた。友達は細面の好男子だつた。年も若かつた。それをすこし離れた竈の前か女折々眺める松永氏の胸には、一種異樣な淋しさが湧いた。

『おれはちよつと、新婚の夫婦に使はれてゐる下男と言つた恰好だな……』

—一九二四・一〇—

すこし派手過ぎるが、それだけに遠くから見ると面白い。内部にはまだ未完成の點もあるが、未完成は未完成でまた面白い。金もよほど懸つたらう？』

『いや、金はさう懸けない。』と松永氏は我れに返つて答へた。『金の懸かつたのは材料だけで、仕事は、土臺から柱立て壁張りペンキ塗りまで皆自分の手一つでやつたやうなものだから、これで、勞力と時日とだけは豫想外に懸つてゐる。』

さう言ふ時には、かれはなか／＼得意だつた。そして、友達の方をでなくて、女の方を見たが、その時、かの女は横を向いて、まだ上張りのしてない壁や天井を見廻してゐた。

『えらい者だよ！　君にはさういふ腕と根氣があるからなあ。』

友達の讃美でいよ／＼得意になつたかれは、椅子から起ちあがつて、二人をあちらの部屋へこちらの部屋へと案内して歩いた。一つの部屋には日本風に疊が敷き込んであつた。一つの部屋には、まだ材木がごたくさと置かれて、斜めに据ゑられた仕事台の上にはけづり懸けの板や鉋や鋸が散らばり、鉋屑がそこゝに渦を巻いてゐた。

二階の屋根裏部屋へまで、かれはかれ等を案内して歩いた。

再び應接室へ戻つて、石油こんろでコーヒーなど沸してゐた時、往來の方に豆腐屋の喇叭が鳴り響いた。

かれは窓から首を出して、隣りの家へ叫んだ。

『をばちやん！　豆腐屋に寄らせて下さい。』

『をぢちやん！』とむかうから答へた。『豆腐屋さんから何を取るのですね！』

『油揚げ！』と口まで出懸つたのを抑へて、かれは裏口から下駄を穿いて出て行つた。そして『油揚げを五枚程』とをばちやんに賴んだ。その時、をばちやんは問ひ返した。

『もうそろ／＼お晝飯ですが、こちらで仕度しなくても好いですか？』

『え、いゝです。』とかれは答へた。『僕、ゆふべ肉を買つて來て置いたから、あれで飯を食べさせてやる積りです。』

『御飯はをぢちやんが炊きますか?』

『お手並拜見といふわけで、女に炊かせてみませう。』

『でも、まだ來ると極つたわけぢやなし、今日はお客様だから、台所をさせるのは氣の毒でせう?』

『だが、僕が獨り者だといふ事は承知ですもの、後は兎に角、今日一日は主婦らしい事をしてくれますよ、氣の利いた女なら。それに、友達が附いてゐて、色々指圖しますからね。』

『それなら、こちらで仕度は致しませんから……』

『えゝ、どうぞ、御心配なく。』

豆腐屋は來たが、油揚げが賣切れたといふので、生豆腐を二丁取つた。葱でも有るとよかつたが、その貯へもなく、里芋が地下室の奧から出て來た。

松永氏が友達に耳打ちをすると、あひ手は心得たといふ風に首肯いて女に笑ひながら其旨を傳へたらしかつた。女も笑つて、機嫌よさゝうに、手提げの中から紫色の細紐を取出し、それの端と端とを結び合せて襷を造つて黑つぽい着物の袂を巻き上げた。松永氏がナプキンの大きいのをエプロン代りにしてくれと差出すと、それを帶の下へ挾んで、流しの窓の前に立つに、くるくると巧みな手つきで芋の皮を剝きはじめた。

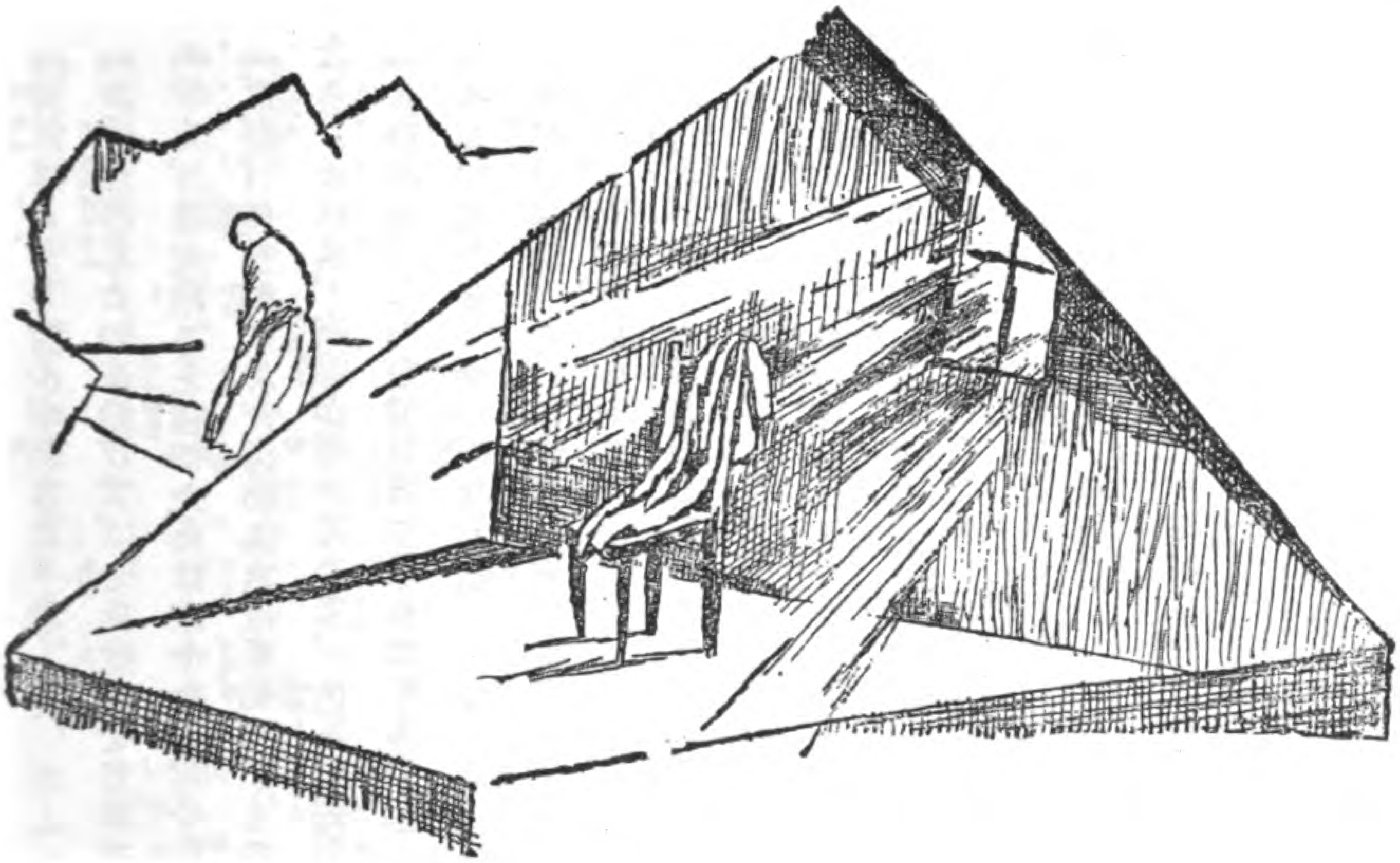
『君等がそッちをやつてくれゝば、僕が飯を炊く。』

飯まで炊かせては濟まないやうな氣持と、もしそんな事から愛想を盡かされてはならないといふ懸念とから、かれはさう言つて、米を米箱から持ち出したり、薪を竈の側へ集めたりした。

やはり炊事の手傳ひをする積りであらう、上衣を脫いで手拭を頭にぐるぐる巻きにした友達は、女と流し場に並んで立つて、時々何か低聲で言ひ合つては笑つた。友達は細面の好男子だつた。年も若かつた。それをすこし離れた竈の前から折々眺める松永氏の胸には、一種異様な淋しさが湧いた。

『おれはちよつと、新婚の夫婦に使はれてゐる下男と言つた恰好だな……』

──一九二四・一〇──



春遠からじ（第五回）

ハッチンスン作
木村毅譯

二

しかしトワイニングは椅子の傍に立つて、鼻息を吹きつゞけてゐた。彼はセェバアの肩越しに原稿を讀んでゐた。新たに着手した『英國』の、既に書き終えた數枚の原稿は、第一頁を一番上にして、セェバアの肘つきの眞正面においてあつた。トワイニングは讀みながら、時に、例の怪しい鼻息を立てゝは合の手に挾んだ。

『成程、どうしたつて此の本は僕のために書かれたものぢやないや。』と、彼は口を切つた。

セェバアは簡單にうなづいた。『勿論。――だが、君は何うしてこれが君のために書いたものでないと言ふのかね。』

トワイニングは冒頭の數語を聲高に讀んだ。

『諸君の住んでゐる此の英國は諸君のものである――と書いてあるね。全くだ。併し誓つて言ふが確かに僕のものじやない、只の一インチだつて僕の所有には屬してないのだ。今、現に僕にどんな事件がふり掛つてゐると思ふ。僕は家から追立てを食つてるんだぜ。借地期限が切れたもんだから、あの呪はれた家と、僕の使用して來た一切の家具とは瘦せ華族――ロード・タイバアの手に渡つてるんだ。あいつの祖先だつてまさか此の家のことなどは考へても居なかつたらうに、あの家の立つてる地面を、公けの共有からゆすり取つて、地代をポケットへくすねこむやうにしたいもんだから、こんな事になつたんだ。あの家は月世界の住民の所有でないと同じ程度に、あのタイバアの所有でもないんだ。而もその家がタイバアの所有に歸する許りに、僕は路頭へ放り出されにやならん。君はこれを道理に叶つたことゝ思ふか。』

『いや、思はん。』と、セェバアはやゝ氣色ばんで言つた。『まさに泥棒だ。それは。』

トワイニングは驚いたやうな顏色をした。

『泥棒だつて、だが、さうすると此の本はどうする積りだい。僕の言はうとするのは――』

『僕はこの本の中へだつてさう書くんだ。それはどこへ公言したつて憚らぬことだ。』

トワイニングは考へこんだ。『ほんとうかい。だが君、そんな考へは自由主義だ。過激派だ。小山羊達に宛がふ粥としてはきつすぎるぢやないか。』

『勿論、この本だけは小山羊の粥にする積りで書いてるんぢやない。』

トワイニングは笑ひを鼻から吹き出した。

『これは失敬、まあ腹は立てないでくれ給へ。だが今度はまじめに言ふ。僕達はお互にそんなものを世に出すことは出來ないね。過激派なんて僕等と拘はり合のないことだ。僕が言はうと思つたのは――』

セェパアは原稿を集めて机の抽斗へ投げこんだ。『トワイニング君、批評をすることは全部脱稿の暁まで待つて呉れ給へ。その思想がどうあらうと。』

『いいよ、いいよ。僕は批評した譯ぢやないんだ。本の題は何とするね。』

『英國』

沈默――

セェパアは、著者が著書に於てのみ持つ愛兒にでも對するやうな愛着の敏感さから、この沈默の中に何物かを讀んでトワイニングを見上げた。『どこか、いけない點があるかね。「英國」と云ふんだが、君は書き出しの文章を讀んだらう。』

トワイニングはゆツくりと答へた。『いかにも僕は讀んだ。その時、それに就いて僕は考へた事があるんだ。』

『何と考へた。』

『つまり「英國」――この「英國」はそれでいいとして、ぢやスコットランドは何うするんだい。僕の言ひたいのはそれさ。』

『何だつて。スコットランドだつて。』

トワイニングは極めて眞劍さうな顔色をした。この顔の上の皺は前から目立つ程深くなつてゐるのであつた。そして依估地になるのは、普段からの彼が話しぶりであつた。

『ねえ、蘇國人がどんな人間か、又それらの蘇國人が今日如何に呪はれた境遇にあるかは君も御存知だ。僕は言ひたいもし斯る表題をもつ本を今日吾々が刊行すれば、蘇國人は――』

セェパアは不意にトンと机を叩いた。トワイニング風情の口から假りにもそんな言葉をきくと、彼はむか〳〵と腹が立つた。特にその朝はそんな事に耳を藉してゐる氣になれなかつた。彼は机を叩いて言つた。『蘇國人がどうしたと云ふんだ。

とこに蘇國人のことを持出して來る必要があるんだ。此の本は蘇國のために書かれたのでなくて、英國のために書かれたんだ。英國のために。それからもう一つ君に言つとくがね。君は「吾々が」こんな本を刊行すればと云ふ。併しそれは「吾々」ではない、失敬だがそれは勿論君の與り知つたことでない。それは「僕」の著書だ。』と言つて、彼は言葉を切つた。そして笑ひ出した。『どうも失敬、トワイニング君。』

三

トワイニングは既に顏色を變へて、齒を食ひしばつてゐた。『仰せ重々御尤も』と彼は出て行きさうにした。が、直ぐ又引き返して來た。彼の顏は柔らいでゐた。『全く君の言ふ通りだ。ちと僕の口が過ぎた。だがね。』と言つて神經的な笑ひを洩らした。『その本は「僕達」のぢやない、と君は言つたね。だが僕が茲へ來たのは君に話すことがあつたからだ。而もそれは「僕達」お互に拘はりのある事だ。』彼は最前から手にしてゐた紙片をひろげて、親指で上欄の左隅を指示した。『この線の上に僕が居たなら何と思ふね、君は。』

紙はこの商會の用箋の一枚で、上欄の左隅に『僧正セバスチヤン・フオチユーン』と小型な活字で印刷してあり、その下に短い線が引かれてゐて、線の下には『シエーヤマン・トワイニング氏、マーク・セエバア氏』と並べて刷つてあつた。即ち左のやうな形式だつた。

The Rev. Sebastian Fortune.

Mr. Shearman Twyning.
Mr. Mark Sabre.

セエバアはゆツくりと言つた。『君が線の上に居たらつて——一體それはどういふ意味だい？』

トワイニングは人さし指でその線をついた。『この線だよ、君。ヨナ奴、僕を重役に取立てる意嚮なんだ。たッた今さう話して聞かされた許りさ。』

彼は用箋をセェパアの手に渡したが、セェパアは『結構だ』と一語言つただけで、それをつき返した。

トワイニングは又顔の色を變へて、前の時よりも一層險しい血相を見せた。彼は掌で用箋をくしや〳〵に揉んで、やつぱり只一語『有難う』と言つたまゝ、いきなり踵を返して、戸口へ出て行つた。

『おい、トワイニング君！』と、セェパアは椅子から飛び上つて、握手を求めながら彼の方へ寄つて行つた。『僕はあんな素ッ氣ない振りをするんぢやなかつた。勘辨して呉れ給へ。――僕は君にお祝ひを言ふ。おめでたう。大成功だ。僕は君に言ふが――と言つて別段言ふ必要もないんだが――僕はあの瞬間、眼にかすみみたいなものが掛つてゐたんだ。何分にもこの仕事に夢中なんでね。』――と彼は積み重ねられた本箱と、それから此の商會刊行の書籍と、それから彼個人としての刊行書籍とに一瞥を投げた。……『どうぞ僕の意を諒として呉れ給へ。』

その咽喉と口邊の筋肉の一種の動き具合は、その言葉以上に彼の意のある所を語つてゐた。卽ち一種の輕蔑を―

トワイングは差出された手を取り、握手の際の自分の特徴を丸出しにして、堅く〳〵握りしめた

『有難う。大いに感謝する。君の意の存する點は勿論僕によく分る。だが、物事はよく考へてみ給へ。つまり君が此處へ來て何年になると言ふのさ。――十年、いや十二年だつけな。僕はこれでもう廿五年以上になるんだぜ。その位な拔擢は當然だらう。勿論君は素晴らしい仕事をやり遂げはした。それは誰しも認める。だが凡ては時の問題だ。併し呉れ〳〵も有難う。』彼は二度も三度もセェパアの手に觸れて、強く握りしめた。

セェパアはもとへ戻つて机に向つて坐つた。『僕が氣にしたのは寧ろ、フオチュンはつい此間一度迄も僕を重役にすると約束してるから、それを何うして呉れるかと云ふことなんだ。問題が凡てさう早急にきまるのなら。』

『約束をしたら？　本當にさう？』　トワイニングの言葉には握手の際の力の入れ方に一致する感情がこもつてゐるやうに聞えたが、實際はやゝ毒氣を拔かれたやうに言つたのであつた。

『あゝ、二度だよ、だから君が僕に話して聞かせて呉れた時、僕はさう思つた――はゝあ、して見るとフオチュンは、僕に何か不滿を以てるな、と。』

トワイニングはその點に觸れやうとはしなかつた。『だが君は、そんな約束を受けた話は一度も僕にしなかつたね。』

『だから今話してる。』と言つて、セエバアは、やや悔やむやうに笑つた。『それでも同じぢやないかね――歸する所。

『さうだ。併しまだ……とに角も少しの間、僕達二人は一緒に仕事が出來るやうにと、僕は望むのさ。僕はいつでもさうしたいと思つてゐるんだ。ね。やらうぢやないか。二人でさ。』

セエバアは答へをしなかつた。トワイニングは『二人でさ』と繰返して、うなづいて、そして室から出て行つたが、すぐ又扉をあけ入つて來た。『君は勿論、ヨナには何も言ひつけやしまい？』

セエバアは無愛想に笑つた。『いや、言ひ出すつもりだよ。』

彼は又顏色を失ふた。『よして呉れよ。冗談ごとぢや無いんだぜ。』

『氣にするな。フオチュンは僕に約束をしてゐる。彼は如何なる理由でその實現を遲らしてるのか訊ねてみるだけさ。君の話したこととは些とも關係ないんだ。』

『だつてそれを言ひ出すからにや、僕のした話も引合ひに出さずには濟むまい。』

『だが、血が通つてる限り、僕だつて感づく道があらうじやないか。』

『なる程、何とかしてね。それなら結構。まだまだ同じ地位にゐて働く同志だと云ふことを呉々も忘れ給ふな。』彼は室を出て戸をしめた。

戸の外でトワイニングは兩手をつかみ合せて思つた。『眼にかすみが掛つたつて、本當かよ。こんな月に眼がかすむやうじや、今につぶれて了ふぞ。汚い犬ころ奴！』

四

戸がしまるとセヹバァは直ぐに、何等の躊躇も狐疑もなく、フォチュンの所へ掛合ひに出かけた。初め一つノックした丈けで返事も待たずにその戸をあけて中へ入つた。鯨のやうな横腹をつき出したフォチュンは、送荷狀を見ては、黑表紙の手帳へ手控へを取つてゐた。いつもはこの手帳を彼はジャケツのポケットへしまひこんでゐるのであつた。

『一寸お話ししたい事があるんですが。』

フォチュンは素早く或る書付を、手帳の中へ隱して、口に讀みつゞけた。『二十八なり、十六なり、四ンなり』――それから幅廣のゴム帶で手帳を卷き、巧みに腹をすべらせてポケットへしまひ込んだ。彼は兩手をはたき、丁度手品師が何の仕掛もない事を見せるやうな格好に、掌を上向けにして、暫らくの間兩手を擴げて見せた。『さあ、お話を承はらう。』と椅子で例の鮮かな曲藝を試みた。『實の所、私の方から君をお呼びして、話をしようかと思つたところだつた。』彼は鯨のやうな顏をしやくつて、彼の机の横にある大きな皮製の安樂椅子へ掛けるやうにと促した。

その安樂椅子の座席には大きな窪みがついてゐた。その商會へ取引きに來た。それは教會や學校の柱礎なるお歷々の尻の重みを幾回となくのせて、いつの間にか出來上つたのであつた。セヹバアは自分その椅子の横へ張り出た肘の上へ腰をかけた。『あなたのお話と云ふのは重役問題に關してですか。』

フォチュンはセヹバアが、腰をかけるべき所でもない椅子の 肘の上に腰かけた のを見て、既に顏をしかめてゐたが、この問ひで一層險しいしかめ面をした。

『重役問題とは？』

『あなたは僕への御約束を御記憶でせう。御親切に二度まで、僕を重役に推擧してやると仰有つて下さつたのですから。』

フォチュンは鯨のやうな額の上で兩手を組み合せた。『そんな記憶は一向ないね。』彼はこの返答に應はしい身振りとして手を上げた。『御勘辨願ひたい。私にはどんな約束も思出せぬ。一回にせよ何回にせよ、それより多くにせよ少しにせよ、記憶がない。尤も私の方で適當と認める時に、さう言ふ話を持ちもち出して上げるかも知れないと云ふ可能性だけの話なら、君にした事を覺えてゐる。君の重役問題と言ふのはそれかね。』

『ええ――まあ一部分は。そして今こそ一番適當な時機じやないですか。あなたがその話を私にして下すつて以來――』

フォチュンは金鎖に指を掛けて時計をひき出した。そして「適當な時」の期限がそこに指示されてゐる事を期するもののやうに時計を眺めた。が時計がその義務を怠つたので、彼は赤耻でもかいたやうに、兩手でもとへ突き戻した。『私はキャノン・ーマッチ氏を待つてゐるんだ。』と、彼はポケットの中で小さくなつてゐる（と想像せらるる）時計を上から叩いた。『ねえ、わが親愛なるセェバア君。そんな話をもち出すのは少々奇怪であり、且つ少々變挺だと私は思ふがね、君のやり口は私にはよく分つてゐる。よく分つてゐる。あれじや君は到底重役に取り立てることは出來ないよ。あ、お願ひだから、その紙片をいぢくり廻さないやうに、有難う。――そして私は君のやり口は大目に見のがしてゐるのだ。隨つて重役と云ふ地位はまだ差上げるわけに行かない。君は、充分な理由もなく、適當な又機會でもないのに、突然に君を重役にとり上げるやうに、私はもち上げやうとしてゐる。何だか私はさう云ふ印象を受けたよ。私は君が勝でさう思つてゐると云ふのじやない。たゞそんな印象を與へられたと言ふんだ。私は決してもち上げられる人間ではないのだ。これ迄もち上げられた事もなかつた。私には持ち上げられる積りはない。又持ち上げられることを欲しないと考へて貰へば一番間違ひがないね。』

セェパアは思つた。『什器をもち上げるには蒸汽起重機が必要だ。』さうして口に出してはかう言つた。『僕はあなたをおだて上げやうなんて氣持は毛程も持つてゐません。僕があなたにそんな印象を與へたとすれば悲しいことです。僕はあなたが急に氣が變られたのではあるまいか、變られたとすればそれは何故であるかを伺ひたかつたのです。言ひ換へればあなたが約束――いや最初仄めして下すつてから今迄に、何か僕が御不滿を招く原因をあなたにお與へした事でもあるかどうかをお伺ひしたかつたのです。』

フォチュンの鯨のやうな前額はおだて上げられる事に對して拒絶の辯明をする間中、青筋が浮いてゐたが、今や漸く平常の威嚴に還つて來た。『勿論君は與へたことはない。不滿の原因なんか何もない。却つてその反對に大滿足だ。尤もこれだけは君も氣付いてゐるだらう。君には一種變な特癖がある。さあ、私に分つてるんだが、はつきり言葉に出しては言へないのだ。――あツ、お願ひだ、どうかそんなに鐵を玩具にしないで呉れ給へ。ありがとう。併し君のその特癖は幸ひにも君の仕事とは全く關係のない事なのだ。私は不肖ながら、そんな些細な事で君に對する評價をぐらつかせるやうな男ぢやない、その點は君も自分で安心していゝ。併し君はどうして、私が氣變りしたものゝやうに想像したのか、その理由を今度は私の方から承はりたいね。』

『それはあなたがトワイニングに彼を重役に取り立てゝやるつもりだと仰有つたといふ事を、つい今しがた聞きこんだものですから。』

鯨のやうな顏は、クリッケットのボールで打たれたやうに、急にふくれ上つて、慄へ初めた。フォチュンの聲は際立つて硬ばつた。

『それについては私に二つの言ひ分がある。第一、トワイニングが君にそんなことを告げたとは以ての外だ――』

セェパアは口を挾んだ。『いや、彼は告げはしません。失禮ですがその點ははつきりしておいて頂きたいんです。トワイ

コングは決して僕に話しはしませんでした。僕が彼とある話をしてゐる中に間接に洩れて來たんです。僕はそれを耳に留めたことを彼は氣付いてゐるかどうかさあ疑問な位です。僕はさうと推察したに過ぎないのです。して見ると、この推察は正しかつたのですね。』

フォチュンの心中には深い後悔の念が閃めいたが、場合が場合だから否定はしなかつた。彼は言つた。『さう聞いたので私も大いに悟る所があつた。トワイニングにはまさかそんな愼重さの洩れ口はないだらうと、私は危く思ひこみかねない所であつた。元の話に還るが――や、セェバア君、本當にお願ひなんだから、私のテーブルの上にあるものを弄くる事だけは止めて貰ひたい。――元の話に還るが、私は無かれかしと祈る第二の問題を言はう。私の社員の或る者に對して言つた私の言葉尻を基礎として、同じく社員の或る者から、何か詰問でも受けると云ふ事は、私の最も憤慨する所だ。この事業は私の事業である。君はやゝもするとそれを失念するのじやないかと私は思ふ。たとへ私が君の部署に於ける君の活動力を増した方がいゝと考へても、それがトワイニングと何の關係があるか。又たとへ私が、トワイニングの分擔に於てトワイニングの活動力を付けてやつた方がいゝと考へても、それが君と何の關係があるか。』

セェバアは此の問題に關し私的感情は色々あるが、少くともこの議論の進め方に非のない事は認めた。そして言つた。『なる程。それがあなた一流のお考へです。僕は決してそれが充分な正論でないとは申しません。――あなたの見地に立つ限り。』

フォチュンは物々しげに頭を傾げた。『お聞入れに預つて忝い。』

『――たゞ、外の人は事物の表面だけを、外に表れた所だけを見ます。御承知の通り――どうも、はつきりと言葉で云へないが――僕はこれ等書籍の中に自分の心臟を打ちこんでゐるのです。』と、彼は自分の室の方を身振りで示した。『僕は充分に説明出來ません。が、そのあなた方の輕蔑は、或ひはその輕蔑らしきものは、僕の上に投げかけられてゐるのでなく

で。書籍の上に投げかけられてゐるのであるやうな氣がします。』彼は困惑した時の例の癖で後頭へ手をやつた。『恐らくきだはツきりなさらないでせうが、それは書籍へであつて僕自身へではない。だが僕は書籍を愛惜します。それは僕に取つては單なる紙と印刷とではありません。書籍も又それを感じて呉れてゐるやうな氣がします。――と言つてもまだお分りになりますまいが。』

『白狀するが、恐ろしく六ケ敷いんだね。』とフォチュンは額を撫でながら言つた。それから二人は互に相手を見つめたまま向ひ合つてゐた。

突然、不愉快な音がちり〱と室中に響き渡つた。フォチュンはほツとして机の方へと例の急廻轉を試み、卓上電話を取上げた。『はあ、はあ』彼は受話器を耳にし、それから送話器を口にあてた。

『キャノン氏はこちらへお通ししてくれ。』さう言つて彼は電話器を下へおいた。

セェバアは身を起して、だしぬけに立ち上つた。『あゝ、どうも有難うございました。』と言つて彼は戸口へ出て行つた、

『セェバア君。』とフォチュンが尋ねた。『君、大丈夫トワイニングと親密にやつて行けるだらうね。』

『親密に？　ええ。元來吾々はお互に仕事の上の交渉はごく少いのですから。』

『君はトワイニングが嫌ひか。』

『嫌ひではありません。僕は彼に無關心なのです。』

『さう云ふ返事をきくのは非常に殘念だ。』とフォチュンは言つた。

戸口からセェバアは振返つて尋ねた。

『あなたは何時頃、トワイニングを重役に拔擢なさるお積りですか。』

『今日のことではない。』

『私にもその地位を仄めかして下すつた事はお忘れにはなりますまいね。』

『勿論、君も重役になる人だ。』

『大凡いつ頃ですか。』

『今日のことではない。』

何と云ふ人を焦らす言草だ！

セェバアは自分の室へ歸つて椅子の方へすゝんだ。彼はそれに腰かけやうとして、ある事を思ひ出した。彼は廊下傳ひにフォチュンの室を通りすぎて（キャノンは重々しげに階段を上つて來る所であつた）トワイニングの室へ行き、頭を突つこんで言つた。

『おい、トワイニング君、例の件について、君が僕に話したかどうか、フォチュンが君に尋ねたらね、君は決して口外したことは無いと言つていゝよ。』

『あゝ、あゝ、結構々々！』と、トワイニングは言つた。戸がしまつて獨りきりになると又言つた。『彼奴、おじけて、よう話し出さなかつたのだな！』

五

セェバアは再び室に歸つて椅子に腰を却した。彼の眼には、フォチュンに向つて書籍の説明をした時二人の間に起つた樣子や、フォチュンが彼の說明は六ケ敷くて分らないと白狀した事やがちらついた。彼は考へた。『書籍……勿論、フォチュンはそれを考へたこともない……それが成長するのを見たこともない……それの成長を助けたこともない。……併しそれはいけない、地獄のやうに、有害だ。……けれども遺憾ながら僕は書籍について僕がどう感じてゐるかを彼に說明して

やる事が出來ないのだ。……誰れにも、説明する事が出來ない。』

彼の默想はなほ進展した。『僕は十二ケ年間彼と一緒にゐた。十二ケ年間吾々は殆んど毎日一緒にゐた。そして今、書籍について僕が説明した時には、彼はあしこに坐り、僕は又あしこに坐つて――お互に向き合つてゐたのだ。そしてお互に假面でも被つてゐる者のやうにじツと見合つたのだ。假面よ！ 吾々お互が見わけ得べきものは假面以外に何物もない。僕は自らの假面の裡に隱れ、彼は彼の假面の裏に潛んでゐる。それがお互に分ることの凡てだ。あゝ、徒らに流れし十二年よ！……無數の商會に……無數の家庭に……無數の人がうよ／＼してゐる。……それがみんな同じに、みんな假面の裏へ隱れ合つてゐるのだ。不思議な事だ。どうして吾々は眞の自己を隱しておくのか。なぜ隱しておくのか。吾々はみな同じ生活を經て行きつゝある。同一規道を來、又同一規道を行く。試みに急がはしく飛び廻つてゐる昆虫や蟻を見ると、その中にある二匹が共同して一つの物を持ち合つてゐるやうには見えない。又その中のある二匹同志がお互に知り合つてゐるやうにも見えない。それは奇妙だとも考へられる。又それは彼等が同一の船の中に乘合はしてゐる理法を心得てゐないからだとも考へられる。併しその點は吾々人類だつて同じでないか。虫の見地から却つて吾々人類をそんな風に見てゐないとも限らない。吾々はそれを心得てだけはゐる。しかもひと度、二つの生命が合して十二年間も、同一の商會に暮らし合ふ……それが家庭では形を換えて……メーベルと僕になる……ほんとにひと事ではない、私達夫婦も亦一緒に坐つて、一緒に相手をまじ／＼と眺め合つてゐるのだ。……そして彼女の假面……僕の假面！』

彼は考へつゞけた。『蟻が何であるか、どう見えるかは誰でも知つてゐる。彼等は氣違ひか何かのやうに、あくせく働いてゐる。みんながみんな同じく或るものを求めてゐるやうに見えるものだから、お互同志知り合ひもしないし、注意もし合はない。……ふしぎだ、あゝ實に不思議だ――然るに吾々人類は？ なる程問題はそこにある。みんなが何物かを求めてゐるだらうか。……吾々が會ふ人のうち半數に求めてゐる……彼等は求めてゐるし、又自分が求めてゐる事を知つて

ゐる。が、殘る半數の者は何者か求めながら、そこ丈けで我慢して、求める者が滿たされないのに平氣でゐる。それは明白だ。併し何をさがし求めるのか？　戀愛か？　併し戀愛は運のもたらすものだ。然らば幸福か？　併し幸福も運次第でないと言へるか。然らば求める對象はあるのか？』

彼は眉をひそめた。『これはそんな事以上に深刻な問題だ。缺けてゐるのは或る普遍的なものだ。然らばそれは宗教が當然與ふべくして、まだ與へてゐないものか？　光明から各人に、宗教上、信仰上の確實性を與ふべきある光明か？　ああ、それは光明から』

彼の考へはソーベルに還つた。『キングスクローズのあの家には年八十磅の屋賃ださうです。トウラア夫人が一軒お借りなさるさうですが、あなたどうお思ひになつて。』彼女がさう言つた時、セェバア自身は答へないで新聞を鳴らした。さうしてなぜ新聞を鳴らしたか、そのわけを彼女に悟らせやうとした。つまりそんな事下らない話はしたくないのを知らせるつもりだつたのだ。不親切な仕打！　彼の心はソーベルのために自らを責めた。だがメーベルがそんな些末な事にも興味を見出だすとは！　ああ、興ざめる興ざめる。だが、それならなぜ、ガサ〳〵言ふのを喜ぶからと言つて赤ン坊に新聞を鳴らして見せるか。理屈は同じだ。新聞の鳴るのが大人には面白くない、併し赤ン坊のためには、大人がそれを鳴らしてやるではないか。トーラア夫人が自分不相應の家を借りたと云ふ話はセェバア自身には一向興味がない、なが何故彼は彼女のために――？

かうしてその推理法を自分に向けた時、思はず又額に八の字を寄せた。彼女は彼の妻なのだ。彼女は彼の家庭のため、自分の生育した家庭を去つて來てゐるのだ。彼女には、彼女の内生活に彼が興味をもつてくれるやうにと、主張してもよい權利がある。彼は彼女の内生活の如何に對しては義務を負ふものだ。それなのに不親切であつた。あてこすりをした。

ある突然な衝動で、彼は時計を見た。丁度十二時を過ぎた許り。まだ晝飯までに歸宅しやうと思へば出來ない事はな

い。彼女は淋しいであらう。毎日々々、丁度今朝彼が彼女を殘して家を出たやうに、たツた一人で留守居するのだ。これから歸れば午後を樂しく一緒に送る事も出來る。——しかし兎もするとノナが彼の思索の中へ潛びこんで來た。このトワイニングとの折衝の後で殊にさうであつた。彼は努めてメーベルの事を思はうと努めた。

彼はフォチュンの所へ行つて、別に要事がなければ午後早退けがしたいと申出た。彼は自轉車を驅つて、殊更にメーベルの胸へと歸りを急いだ。

第三章

一

例の特意な自由消走でペニイ・グリインの坂を下ると、門の少し手前で留まつた——惡い成績ではない、彼は、車の隋勢が大分弱くなつた所で、郵便配達のピリップを追ひ拔いて了つた。ピリップは死ぬるやうな苦しみをしながら後を追つかけて來て、この輕業のやうな曲乘りを興深く見入つた。尤もセュバアは外の考へで夢中になつてゐたので、曲乘りをしやうとの意識はなかつたのだが、いつもの習慣で、隋勢のつきる所まで車は自然に走つたのであつた。

彼は下車してきいた。『僕に手紙があるかね、ピリップ。』

『ええ、一通だけ。』

セュバアはそれを受取つて手蹟を眺めた。

それはノナから來た手紙だつた。

この小さな、綺麗な、男のやうな書體は、彼に取つて一度は自分の手蹟と同じ程目馴れた、親しみの深いものであつ

た。それは奇妙にも彼の字とよく似てゐた。彼女にもセェパアと同じく一語の綴字を續けて書かない癖があつた。その綴りの良い字は、セェパアの書風も同じく、二三語が寄せて書かれたもののやうに見えた。今日まで一年に一度――いや五年に一度しか彼女から手紙を貰はなかつたのに、封筒へ彼の宛名を書いた彼女の手蹟を、彼はいつも携帯してゐるのも同じことであつた。彼は時々胸の中で、それをひろげて見る事さへあつた。

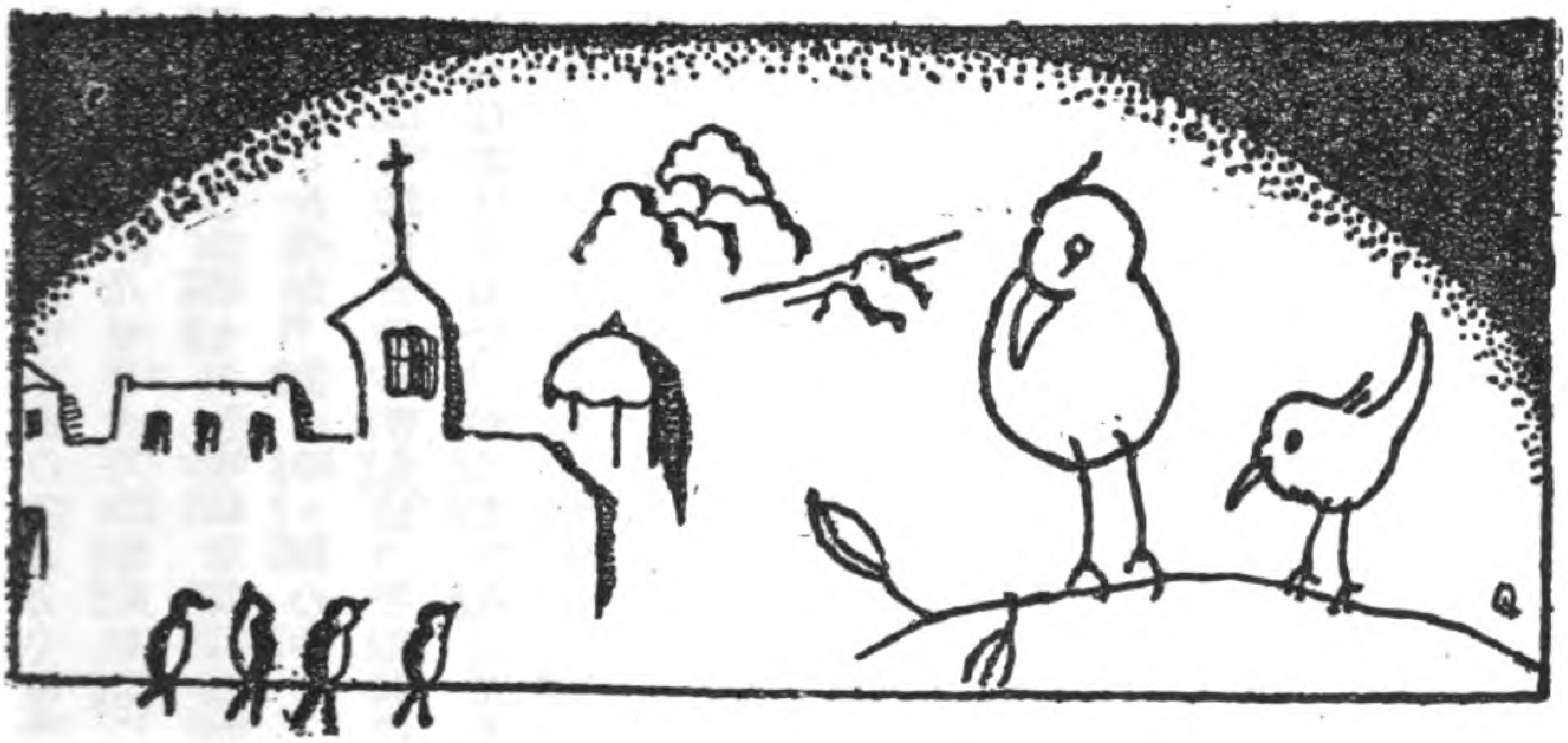
彼はそれをチラと瞥見し、それから眉をよせ、唇をつぼめて、瞥見と云ふよりも稍々長く眺め、最後に封のまゝポケットへしまひこんだ、が又思ひ直したやうに、自轉車を腰にもたせかけて、開封した。

『ノースレップスにて、火曜日』彼女は手紙に日附を書いた事がない。彼はそのことについては今迄に何度彼女に苦情を申しこんだかも分らない。火曜日と言へば昨日である。

なつかしきマルコオよ。あたし達は歸つて參りました。私達は支那から秘露の方まで――殆んど、廻つて來ました。いつか居らつしやいな。旅行の話でうんざりさして上げますから。御機嫌はいかゞ？

ノナより

彼は考へた。『ふしぎだ。今朝會つた時、彼女は今手紙を書いて出した許りだとも何とも言はなかつた。尤も向ふぢや僕がそれを受取りながら默つてると思つて、變な氣がしたかも知れない。今度會つたら言はう。』



失明（入選）

島本久恵

觀音樣に信心のあつい菱藤のおばあさんにつれられて柳谷に來た佛光寺さんは、高い崖の上に鳩の巢のやうな小さな窓をならべてゐる一文字の長屋のやうなふるぼけた建物の南から二つめの室を、いつまでかゝるかしれないおこもりの間寢起きの場所として、觀音寺からあてがはれた。こゝで寢起きして晝夜四度のお祈りにお堂へまゐる、それから科學的にしらべたらラジウムを含んでゐるかもしれないといはれてゐるその名高い靈泉を汲んで來て、もう全く明りを失つた兩眼を洗ふ、その間にはお瀧に打たれて念じたりお百度をふんだりするのであつた。室は四疊半ほどで右も左も壁で、三尺の入り口から入ると正面が崖に望んだ窓であつた。

最初の晩佛光寺さんはこのわびしい狹い室に送つて來てくれた女達と三人で眠つた。佛光寺が代々の菩提所で、その壇中の筆頭でもある有福な帯問屋菱藤のお

ばあさんは、若い時に星眼をわづらつて、それをこの觀音樣に癒やされたといふ感激から、もう久しくこの柳谷千眼講の講中で、何かといつてはのれん相當の奉公をして來てゐる。早くいへばここでも羽振りのいゝ顏であつたので、お寺の客として其方で泊つてよいのだつたけれど、一晩でも一所にゐて佛光寺さんが一人になつた後で困らないやうに、こゝの勝手をよく呑み込ませておかねばならない、佛光寺さんは一つ年上のお律といふ、色のしぐろいきりやうよしの、勝氣な妻があつて、そのお律のつれ子の麟といふのを、私生兒認知をしてやつて、自分の子にして可愛がつてゐた。麟はもう十六で宗の中學の三年になつてゐるし、賢しいたちでお導師さへ近所のお寺の和尚さんに賴めばもう大抵の寺役には差支なかつたので、佛光寺さんの留守中はお律がそれを勵まして何かと壇中へ不都合のないやうに氣を配らねばならない、そんなわけでにはかめくらの不自由な佛光寺さんも附添ひなしでこゝにおこもりせねばならないのだつた。菱藤のおばあさんはそんな事情をあれも思ひやりこれも思ひやりして、わざ〳〵自分が腰を上げてこれまで連れて來たのであつたから、後の後まで氣にかゝつて丁度子供をつれた母の氣持でいろいろの方面に細かしい心づかひをするのだつた。それで寺から提灯をつけて迎ひに來たお小僧に丁寧に斷りを云つて歸してしまふと、下の宿屋から持つて來させた木綿蒲團を三つ並べて敷いて蚊帳をつつておばあさんがまんなかに入つて、窓の方には佛光寺さんを寢かせ、上り端の方には自分の供につれて來た仲働きのお千代を寢かせた。そして自分は後室らしいせまい黒博多の帶をとかないで、浴衣にだけなつて、夜通し大抵坐つて珠數を爪繰つた。この建物の下の崖から落ちてゐる瀧の音がとう〳〵と枕にひゞいて佛光寺さんも眼をさまし勝ちで、眠つたとも眠らないとも分らないやうで、とかくして一夜が明けた。

翌日はこの一日に山の生活を習ふことで、佛光寺さんはなかなか緊張せねばならなかつた。いくら谷間でも夏の夜はほんとに短くあけやすい、それなのに三時半にはもう寺の大玄關のあく音がして誰かこつこつと廣場をすじかひに通つてゆくと思ふと、

ぼおおおん

と早や曉の祈りに谷中のおこもりの人を起す鐘だ、するとさながら沈默を解かれたやうに谷の底の宿屋の方からしだいに起きて出る物音がきこゑ、やがてそれが長蛇のやうな一列になつていちばん古參の男に導かれて、一本の柳の大柳で殆んど最上級までを欝蒼とおほはれてゐる石段を上つて來る。そしてごたごたと堂に上る騷音が、お坊さんなので優待されて、その人々の坐る方とは反對の側の内陣に入れられてゐる佛光寺さんを身慄ひさせた。佛光寺さんは折々うつゝでは思ひもそめぬ淺ましい自分を夢の中で見て、さびしい寢覺に惡寒に襲はれることがあつたが、今はそれがほんとうのことになつたと思はないではゐられなかつた。

だのに、それ程いぢけた惡びれた澤山の盲人のみにくい混亂を感じさせた騷音がぴつたりと止んで、しばらくの間彼等は全く沈默してしまつた。深い深い沈默、彼等はいま默禱するのであらうか、それとも戰ひに向つて氣をたくはへる、そんなものなのであらうか、佛光寺さんは恐らくこの堂の内にもう一人とこんな冷やかな心でゐるもはのなからふと思はれる程おちついた氣持で、珍らしい四圍に耳を開きながら、お經といへば唱んじ盡くし、禮拜に慣れ、たゞ美を念じ、美に感激するお坊さんの自分が何かからおやふく、やがて何か自分を怖れに伏させるやうなものゝ出現するのを、この重々しい沈默から豫感しないではゐられぬのだつた。

やがて拍子木が一つ鳴つた、そして

同行七十五人開眼御願の爲唱へ奉る當國柳谷十一面觀世音菩薩御詠歌……

最も古來の男の發聲につれて、三七二十一打ちの拍子木で低音に急調に、深い深い沈默の底から七十五人の祈りの聲が捲き起つた。

佛光寺さんは果して總身の慄ふのを感じた、一人もみだれず後れず迷はず、沈々として腸から壓し出す聲、それはもう

みじめな盲人を想像することは困難で、思慮ある一揆を見るやうに美しくはげしく、そしてぢいんと痛く佛光寺さんの美しく傷つけてゐた心の奥の心に應へて來るのだつた。

　南無十一面觀世音菩薩

　南無十一面觀世音菩薩

　南無十一面觀世音菩薩

詠歌から觀音經になり、その後に今はもう一途に呼び迫る、その聲は上り上りすさまじく、天井を突き、丸柱をふるはせ、御厨に迫り、大慈大悲の佛の胸を喰ひ破る、ぐわうぐわうとおそろしいその呻きに卷かれて佛光寺さんも言つてみる。

　南無十一面觀世音菩薩

潸然と湯のやうな涙がながれた。

なんまいだ

なんまいだ

なんまいだ

百萬遍だ、猛烈な同志打ち、聲はのぼりのぼりのぼりのぼり相せめぎ、火花を散し、揉み合ひせり上げる、そして身の程しらずのぼりのぼりのぼり切つて終に急落してふつと止む、するともう疲れ切つて誰一人立ち上らうとするものもない、やうやく冷やかな魂が歸つて來て佛光寺さんを淋しくたゝく、しかし、

　南無觀世音菩薩

熱く尊く強く、やつぱりそれが人間の本當の聲に思はれて來る。さういふ思ひをまたこの自分の奇蹟として觀る、有名

な淺山博士に白內障と宣告されてはつきりと諦めてしまつた自分ではないか、それが有名な壇中の柳谷黨に說きつけられて、それらの人々の同情を失ひたくないために餘儀なくこゝに引かれて來た。さういふ自分ではなかつたか、でもいまの自分の心に何かかうよりどころのあるやうな氣持の微光のやうに漂ふのを佛光寺さんはたとへ樣なく淋しんで眺めた。何かしら緊張したらしい佛光寺さんの氣色を菱藤のおばあさんは見のがさなかつた。のびのびとした素直な心のお坊さんなのに憎いほどの おちつきと冷やかな諦めのもどかしさ、それがいま救はれる。

『おゝ、なんといふ有難い……』

おばあさんは本尊さんの方を伏し拜んだ。そしてつとめて大切に、若さもいとしさも我子のやうなこのお坊さんの折角の氣持を守り添へるやうに、出來るだけそつと手をとつて立たせて、崖の上の小さい室へと和らかに介抱しながら、ほんとうに母のやうなうれしさでお堂を下つてゆくのであつた。

やがて下の宿屋から運んで來た食事をすますと、佛光寺さんはおばあさんに手を引いてもらつて何度もお堂へゆく稽古をした。先づ出口の敷居を越えた處で足の向きを右の方へ斜めにきめて、それからまつすぐに足數を勘定しながら體操の稽古のやうに歩いてゆく。さうすると七十四歩でお堂の前の階段に杖の先きがかちりと觸れる、そこで左傍の欄干について上つて、上になつたらそこの柱をつかまへて、さうして草履をぬいで柱の根の處に出來るだけぴつたりと誰にも蹴散らかされないやうに寄せかけて立てゝおく。それからすり足で行つて三本目の丸柱の根の處に坐る。

それからまた何遍か便所へゆく稽古をした。丁度三十二歩でその入り口に達した、それが普通の參詣人といつしよの便所なので一層氣持わるく、おばあさんが幾つか並んでゐる戸を一つ一つあけて見ると一番こちらの端しのがまだしも人に足遠いかして汚いながらもましであつた、佛光寺さんはよくよくその戸の具合や足がゝりなどをおぼえておいた。

夜も晝もほんたうの孤り、めくらになつて柳谷にこもつてゐる……淋しい驚きはハツと來るが、何かしづかにそれを和めてくれるものがあつて、佛光寺さんはいま山の新しい感觸にむしろほの〴〵と生き出る心地をするのだつた。四度の祈りには必ず出る、幾度となく靈水で眼をすゝぐ、また口をすゝぎ、三度の水藥のやうにして服む、水の甘さと冷たさはたとへ樣もなかつた・そしてしみじみと味はふやうに言つて見る、

南無觀世音菩薩

それがまるで生れ變つたやうな響きを發するのに驚かないではゐられない、そしてこの清新な氣色はどうだ、内から光りがほとばしり出る　どうしても眼が開きさうな氣色、人間の魂　の最高調に現じ出される南無觀世音菩薩、だまされるなら一生だまされてゐてもいゝ、一生この素晴しいおのれにだまされるのだ、そして靜かな靜かな佛光寺さんが殆んどおのれに隨喜渇仰する。祈るのは殆んどおのれに祈るのであつた、我心の南無觀世音菩薩、我が罪をすゝぎ、惡業を滅じ、再び我を母の胎より聖きみどり子として生み落し給へ、さう一心に念じつめる。さて身神爽やかにお堂から下つて來て夜の室にひとり坐る、谷の上を川のやうに流れてゐる清澄な夜の空氣の吸ひ心地、細胞の組織を變へるやうな山の冷氣、けれど何となく包まれるやうな小さい室で、またそこになんといふ多情な夜を感じるのだらう。ひとり落ちる瀧の音のさびしさ、みゝずの聲のかぼそさ、夏の夜のものみななつかしく、やみがたく　のがれがたく、餘韻嫋々としてこゝろを刺す。そしてやはやはと隣室の女の微かにみじろぐ氣配がする。さうでなくてももう人妻のはかなさに心淋しい年頃らしく、思ひかねたやうなやるせない起居をするのが、あまりに氣近く、ひたひたと觸れるやうに、さびしく、ものなやましく、肌あたたかく感じられる。佛光寺さんははつとして自分の心を見直すのだつた。人の老ひやすい京都に住んでもう三十六でもあり、自身に備はる美しさが大抵の女の美をおとしめて、誰に觸れてもその人さま〴〵の情のほかには何といふ興味を感じるでもない、それにどうした奇蹟であらう。佛光寺さんはまた夢の中で見る自分にひたと出くはすのだつた。そして

あまりに清秀な自然の息吹きといふものが結句は最もおそろしい魔薬だと悟る、そしてまた靈水にも十一面觀世音にも祈りの聲にも凡て魔の興奮のひそむのを感じる。そして慄然とするけれど、ぢきにまた混沌とあたゝかい感觸の中に眠らされる。

或る午後、日が永くて非常に眠い午後、お堂の中の祈りはどうしてもだらけてしまつて、氣のぬけた辛子のやうに苦々しかつた。そしてぐつたりしたやうになつてお堂を下つて來る盲人の群れの中で、足音ですぐ聞き分けて特に近づいててものをいふ女があつた。

『お隣の和尚さん、ちつとお宜しございますか』

佛光寺さんははつとして、しかしこの人の常で素直に最も自然に答へた。

『いえ一向まだ』

『なんぞちよつとでもお見えやすことでございますか』

『お燈明がちよつと見えたり、それから紐の紫がみつめてゐると見えます、ふしぎです』

『あんたはんも……それがいかんのどすがな和尚さん、私もやつぱり紫の襦袢の襟がそれ一つだけ見えました、それが終ひどしたがな、どなたに聞いても皆さうどす、私はもういまなんにも見えまへん』

この女は涙聲でかき口說いたが、ぢき澤山の盲人にへだてられて何處に行つたか知れなくなつた。佛光寺さんはそれさへ何かねたましいやうで、若くやるせない嗟嘆の聲はあたたかい息になつて身內にひそんでいつまでもあやしくなまみかしく身のおきばもなく淋しませた。

それは佛光寺さんの眼がまだ何の故障もなかつた或日のこと、お律が座蒲團をこしらへた紫のきれの端しで、たゞ氣

まぐれに細いたすきをくけておいた。お納戸のほかにちよつと似合ふ色のないお律の肩に紫は甘えすぎておかしかつたが、それでもかけてゐるといつの間にか矢張りお律のものになつて見られた。その紐がこの間着がへなどをいつぱい包んで麟がさげて來た唐草の大風呂敷の胴締めに使はれてゐて、壁ぎはにしよんぼりと消えかゝる虹のやうに淋しい色を浮かせてゐた。ある時はまた少しも見えない、すると佛光寺さんは或る苛立たしさでぢちと其方に執念深く眼を据えてゐて、そのぼんやりとものなまめかしくかぼそい線を、淋しい淋しい何ものもない鉛のやうな死の明るみの底から、非常な後の疲勞を覺信しても捉へ出さねばならなかつた。そしてそれがたとへ樣もない殘酷のやうな心地がして來て、何かしら遠いお律へ涙がながれる、一人になると一人になれない、佛光寺さんは度々仕方のない自分をながめて悲しい微笑を浮べるのぺつた。

麟はよくその母の代りに罐詰や洗濯した肌着や紙やハンケチや、いろいろなものを土曜日毎に兩手にさげたり脊負つたりして上つて來た。佛光寺さんは風呂敷から出るそれらのものを一つ〳〵取り上げてなつかしさうにさすつて見ながら、

『佛光寺さんがそこひにならはるのも無理はない、お律さんの昔が昔やもの』

さういふ意地の惡いさゝやきの中に一人殘つてゐるお律の心も思ひやられるのであつた。お律といふ女が佛光寺さんの小僧だつた時分の寺の門前の花屋の娘だつたことや、二度も緣づいて二度とも不幸だつたことや、その母親が別に心の惡い人でもなんでもないがたゞ貧から初まつてなか〳〵の軍師であつたことや、そんな詳しい事情を知つてゐる人はなくても、あの旦那からこの旦那へと轉々したどん底の時代のお律さんを知らないものは一人もなかつた。

『何も變つたことはなかつたか』

佛光寺さんはもう寺を出て半年位も經つたやうな氣がして、土曜日土曜日に來る麟にいつもきまつて尋ねるのだつた。

『本家村上の新しい墓の角が一寸程缺けました、誰か塀の外から石でも抛つたらしいのです、けれどそれはもう私が村上

へ知らせに行きました。何か金で枠でもはめると言つてました』
『さうかそれは……』
佛光寺さんはこの子のてきはきした調子に感心しながら、もつともつと近くへ來て上つて欲しいやうな、嘗て知らぬ愛着をなやましい程感じるのだつた。
『それから……』
『まだ何かあつたか』
するとこの少年は急に憂欝になつて、何かたゞならぬ豫感を養父の胸に投ずるのであつた。
『何だつた、なんでも言つてくれ』
『中川といふ人が來ました』
『なかがは？』
『……健作といふ人の……その中川といふ人です』
『はあ……さうか』
そこへ宿屋の女中がお膳をもつて入つて來たので、二人は口をつぐんでしまつた。健作といふのはお律が最初の夫との間に生んでその家において來た子で、お律はそれがもう今年は十九になつてゐる筈だと思ふと、この頃しきりになつかしまれるらしかつた。同じ京都の中で、しかもその家の前を通つて見ると健作の名でちやんと表札が上つてゐる。けれど時計屋だつたのがその中川の出奔によつて店を閉ぢてしまつたので、いつ通つてみてもきちんと格子が閉つてゐて、大きくなつた健作をかいまみることも許されなかつた。色々聞き合せてみると舅姑はまだ達者なやうだし、別段此方に落度があつて離縁になつたのでもないから、そのうちには情を容れて逢はしてでももらひたいやうな心では思つてゐるらしいの

が、りゆつと意氣張つた常のお律と裏表して、佛光寺さんにひどく哀れに感じられた。それだのにまた佛光寺さんはそつと自分を心の何處かで叱つてゐねばならない、ほんとうの處は健作といふその音さへ濁りなく耳に入つたこともなかつた。麟もまたそれがいやで、殊にお律が健作のことをお前の兄といふ風な言ひ方でもすると、はねのけたい程情なかつた。どんな事情があつたにしても、母の對照として自分の父以外の男を記憶させられたくない、その意味で恩あるいまの養父にさへ反感を抱きがちなのに、母の思ひが健作の方によつてゐる時は養父の方に同感した。するとこの養父は何となく若く友達のやうな處があつてよかつた。中川といふ健作の父は放蕩の結果借金のためや何かで身を隱してしまつただり便りがなかつた、それでお律も離縁になつて歸つたので、お律のどん底の苦勞はそれから初まつたとも言へるのだつた。

『その人はぢき歸つたのか。』

佛光寺さんはあとで麟に手を引かれて泉の方へ歩いてゆきながら、そつと聞いてみた。

『ぢき歸りました、お母さんがいきなり今頃何しに來たと怒鳴つたので變にして歸りました』

佛光寺さんはそれで初めてほつとする自分をながめた。

『最初お前が出たのか』

『私が出ました、私にあんたはお律さんの子かなんて聞くんです』

『どんな人だつた』

『少し馬鹿みたいなんです、みなりはちやんとしてゐましたけれど、何だか變におどおどして、それでゐて厚かましくて』

『默つて歸つたか』

『所番を置いてゆきました』

『所番を……あの家ぢやないのか』

『違ひます、あの家を賣つてしまつて、今度安井の金比羅の前で商賣をするんです、何でも上海とかから先月歸つたんだつて云ひました』

『やつぱり時計屋か』

『さうです』

麟のいふことはみな苦汁のやうに佛光寺さんの胸にしみた。父子はながいこと冷い夕方の泉の傍に立つてゐた、どちらも何も言はないで、しらずしらず倚りそふ形になつて限りなくさびしく心ぼそく。赤土の崖の下に灰色の軟らかい岩が自然に水溜をつくつてゐて、その一部からちろちろと銀のやうな細い水が噴いてゐた。一人の盲人がうつむいて土瓶にそれを受けてゐた。ちろちろちろちろいつ聞いても好きな泉の音を佛光寺さんは今日はつとめて聞かうとするのに、どうしてもそれが聞かれなかつた。

『彼方へゆきませう』

といつて麟が手をひき直した。思ひがけない少年の手のあたゝかさ、ほんとうにあたゝかく豊かに、佛光寺さんの淋しい淋しい掌の底にうるほひしみた。

可愛いものよ

しみじみさう思つて佛光寺さんはその手を強くいらただしく握りしめた。麟は何かしらほつと涙を浮べるのだつた。

またしても細い雨でしめじめしかつた六月が去つてほんとうの夏の氣に入ると、この谷間に毎晩佳い月夜がつゞいた。

晩の祈りのすんだあとでいつも絶え入つたやうになつてしまふ眼の見えない人々も、何となくうす明るい谷の微風に袂かなしく瀧の水はとうとうと山を打つて鳴つてゐても一人として打たれやうとするものもない、眠らうとしても眠れないし坐つてゐても靜心なく、宿屋の軒から一人出て來、二人出て來して石段の邊をうろうろするうちに、とう〳〵みんな佛光寺さんの處に集つた。そして世にも淋しい空さんざいがひとりそこに初まるのだつた。この頃はもう佛光寺さんのみないい友達であつた。一人まだ清純な聲を失はないでゐる男があつて細くうたつた。

はるのよの
やみはあやなし
うめのはな
ちれどもかをりは
なほのこる
たもとにきやらのけむりぐさ
きつゝをしめど
そのかひも
……………

さびしく胸にしむ袖香爐のひとふし、きくものはみんな涙を流してゐた。この男は行李の底につぎさをの地歌の三味線を忍せてて來ゐる、折々そつと宿の二階の隅の方でひとり隠れてひくのだつた。

『お前なんかそんだけ彈けたら眼がみえんかて何が不自由や、師匠するのがうるさけら、大道を宵の內流し歩いたかて、一晩に二兩や三兩なんでもないがな』

しやがれ聲でさういふのは一番古參の男であつた。けれど若い男はしんにしみてひとり言つた。

『いや困ります、あいにく見たい顏があります』

『わしがお前ならこんな山ん中にぐづ〳〵してやへんでえ、乞食したかてそのえゝ聲で泣かしてみせる、なんぼ何がつまらんいふて、こんなとこでめくらの音頭とつてる位つまらんことない』

『けどお前はさうしてだん〳〵眼がようなつて來るやないか』

うらやましそうに横からさういふ男もあつた。

『眼か……そら眼はちつとばかしみえて來た、けど考へてみとおくれ、右の眼の底隅でちよつと見せて貰ふのにわしは五年かゝつたんやで五年。それでも嬉しくて大阪の家へいんでみたら弟の子供らが乞食でも來たやうに、遠方に立つてゝ見やがる、兩親はもうないし兄弟は他人の初まりで、今頃わしがほんまに直つて歸ることにでもなれば、さしづめ困るのは彼奴等や、ちよつといんでみたんでさへ、顏見るとぢきに金をくれて、それが早う山へ行けといふ謎や、わしもむつとして、こんな人間でも歸る處はちやんとあるぞといふ氣になつてその日にこゝへ歸つてしもた。お前らもこゝへ追込まれたが最後もう娑婆とは緣がきれたと思へ、これからさきお陰で正眼になつた處で、その時分にはお互に一生がもう大方すんでしもてる』

『これが死ぬる病ひならなあ』

默つて淋しさうにしてゐた袖香爐の若い男もさう言つてためいきをした。

『さうさうこれが死病なら結構なこつちや、死ぬほどらくなことはないなあ』

『けど和尚さんあんたのやうならまた逢ひまつせ、何して食はんならんちう心配もなし』

『いや私も……みんな同しこつちや』

『左様かあんたも……ほんまにかうなつてはもう仕様がおまへんなあ』
『仕様がないほんまに仕様がない』
『仕様がないとこで泣かうより歌へや、一つ元氣に……それ……しのゝめの』
『それ〳〵、しのゝめの、すとらいき……』
誰か佛光寺さんの靈水をのむ茶碗をとつてたゝき出した。

しのゝめの
すとらいき
さりとは　つらいね
とかなんとかおつしやいましたかね
でんきがすとも
あれど
くらがりなんとしよ
わたしやくわんのんさんが
おがみたい
かためでも　あけてほし
よるひる　くらいね
またらんぷにいきあたりましたかね

『これでも和尚さん、この歌柳谷の專賣だつせ』

『わしも仲間に入れとくなはれ』
外からわめいて馬鹿の寺男がのつそりと土間に入つて來た、もとからの馬鹿ではなくてひどい梅毒で腦を犯され、それと同時に殆んど失明してこゝに送られた、それがいまでは半分位見えるやうになつて、しかしもう宿錢もつゞかないので、寺の情で掃除位させて貰つて暮すのだつた。
『お前かいなお前のうたならもう聞かいでもえゝ』
『いやなんでもかんでも聞いとくなはれ、あいたさに、よもないかどを　にどさんど……』
『ごめんごめんゑらい古物や、そんなうたもう下界には蓄音機にかて入つてへんでえ』
『下界か、下界はよかつた』
『わしも下界へ天降りたい』
『和尚さんあんたもなんだつか、やつぱり使ひすぎなはつて、そのおんづもりだつか』
『さうや、みんなおんなしこつちや』
品のいゝ佛光寺さんのそれが氣に入つて皆どつと笑つた。何かクンクン言つて入り口の戸を引つ搔く、
『シロやシロや』
寺男は有頂天になつて戸をあけに行つた。すると大きな白犬が眼にいつぱい涙をためて土間に入つて淋しさうに坐つた。
『何處いてたシロ、馬鹿め、ほんまにこの馬鹿め、何處探したかてお前の相手があるもんかい、お前はなお前はなお山になつた一匹の犬ちや』
『さうやみんな一匹の犬や、立つて歩く犬だけのこつちや』

また滅入つて來て、さうして今夜も更けて行つた。

『もう十時や門を閉めるぞ?』

外から寺のお小僧がどなつた。それでみんな手を引いてぞろ〱と歸つて行つた。

『和尚さん小便に行きなはるなら手を引きまひよか』

いちばん古参の男はさう言つてあとに殘つた。

佛光寺さんは一眠りしたと思ふと、けたゝましい女の叫び聲にめをさまされた。

『和尚さん和尚さん　お隣りの和尚さん和尚さん』

佛光寺さんはびつくりして飛び起きた。たしかに隣りの女だ、それが自分に助けを求める、火事でも仕出來したのではないか、佛光寺さんはがたぴしとあきにくい戸をあけて、探り探り隣の戸口の方へ行つた。

『和尚さん和尚さんお隣の和尚さん』

こちらの音が分らない程女は上つてしまつてゐた。

『どうしました、どうしました』

『こゝあけておくれやす、戸があきまへん』

『あけて上げるが入口が分らん』

『和尚さんどうぞ早よ、こゝどすがそれここどすがな』

女の餘程あはてゝゐる聲で、佛光寺さんはこれはどうしても火事だと思つて、あせればあせるほど入口が分らなかつた。とうとう杖でそこらありたけ探り廻してやつと戸が分つたが、どうしても明かない。

『中から鍵がかゝつてゐるのやないか』

『いゝえかかつてやしまへん、外に突つ張りでもあるのやおへんか』

戸の裏にすりついて女はもうおろ〳〵と泣き聲だつた。とうとう佛光寺さんが棒切れにつまづいて、すつてのことに轉ぶ處だつた。するとがらつと戸が明いた。

『あゝやつぱり突つ張りしときよつた、おほきに和尚さんこの御恩忘れやしまへん』

女は佛光寺さんにかたくかたくとりついて、まだがた〳〵と身を慄はした。

『何でした火事ではないのか』

『いゝえ、彼奴が來よつてからに……毎晩毎晩下の石窟から這ひ上つて窓から入つて來よるのどすがな、けど聲を出すのもあんまりや思て、音がするといつもそつと表から出て隠れます、それで今晩は逃げられんやうに表を突つ張りしといて入つて來よつたんどすがな』

佛光寺さんは呆れてしまつた。すると崖の上の窓の方から、さつきあゝして別れたばかりの例の古參の男のあつかましく執念ぶかい聲がした。

『和尚さんあんたそんなことしなはつて何んになります』

女はいよ〳〵慄へて佛光寺さんにしがみついた。佛光寺さんは默つて女を自分の室へつれて行つた。

翌日女が寺へ行つてそのことを訴へたので寺でも捨てゝおけなくなつて、それから毎晩のいのりがすむと直ぐに盲人達を追ひ下して、嚴重に門を閉ぢてしまひ、十二時頃に一度納所二人が提灯をさげて、宿屋の盲人達がみなその寢間にゐるかどうかを調でてまはつた。そして最後に佛光寺さん達のゐる崖上の建物の入口づたひに一聲づゝ聲をかけて安否を尋

ねてゆくことになつた。

すると佛光寺さんの處では毎晩きまつて、なまめかしい隣の女の聲がしてゐた。あれからといふもの隣の女は一人居ることを怖がつて、晝も夜もなく佛光寺さんから離れない、そして薄情な夫から仕送りの途切れがちなことや、いつそもうこんな體は死んでしまつた方がましかと思ふなど〻泣いて訴へたりするので、佛光寺さんは少からず弱らされてゐた。納所たちはおかしがつてわざと大きな聲で言つた。

『今晩は』

『こんばんは、あ〻もうそんな時分かしらん、そいではお休みやす……あ〻あ人間て毎日かうやつて同しことしてんならんもんかいなあ』

女は探つて出て隣へ歸つた。そしてぐつたりと坐るらしいためいきが微にきかれて、投げやりな亂れた姿態が壁越しに鮮やかだつた。佛光寺さんはやつと緊張を解かれて、わざとあけておいた窓から冷い空氣を一人吸ふた。納所の一人は入つて佛光寺さんの蚊帳を吊つてやつた。毎晩おかしい役割をつとめることだと佛光寺さんはふつと微笑した。

觀音樣の御命日の十七日の午後、佛光寺さんは、昨日でやつと盆がすんだいそがしい京の寺の方を思ひやりながらお堂から下つて來たが、一人の同行ものをいはない、隣の女のこと以來例の男に憎まれて、またその男への遠慮から誰も彼も疎々しなかつた。室に歸ればまたあの女が來るにきまつてゐるし、ちよつと行き處に困つて階段の中程で呆然としてゐると、荒つぽい浴衣着のどう見ても顔役のおふろといつた老婆が參詣に上つて來て、佛光寺さんの左の足をひどく踏んづけてあはて〻あやまつた。その後で非常に吃驚して言つた。

『まあこの綺麗なめくらはんわいな』

老婆はそれから佛光寺さんの頭の先きから足の先きまでつく〴〵と見た。佛光寺さんはこの頃白のたてしぼの單衣に白博多のやゝ馴れた帶をまいてゐて、それがこの人のことなので、おそろしく着道樂に見えるのと髮がのびてゐるのとで、老婆はすつかりめきゝ違ひをしてしまつた。

『あんたまあその顏でたんとわるいことしとおいなはつたやろがな、どうも仕樣がない、なんぼそんな處にうろうろしてたかてあんたばかしは治らへん、諦めてもう下りなはれ』

さう言つて老婆はほんとに努氣を示した。

『そしてもう形も振も捨てゝ、一生懸命罪障消滅をいのりなはれ』

老婆はいくらか涙ぐんで言ひすてゝ、壯者のやうな勢ひですた〳〵と階段を上つてしまつた。後に佛光寺さんは驚いて突つ立つてゐた、何だか老婆の言葉がしんに應へた、そしてお堂の上が急になんだか畏れられた。

『まあ和尚さんあんたこんな處におゐたんか、さいぜんから來て探してゐるのに』

それがお律の聲で、佛光寺さんはすぐその兩手を杖ごと熱く握りしめられた。

『よく來られたなあ……』

佛光寺さんはほろほろと泣いてその手にすがつた。

翌日急に佛光寺さんはお律について山を下つた。

『向町まで辛抱おしや、あこには玉子もあるし牛乳もあるやろさかい』

お律はさういつて叱つたり勵ましたりして、やはり何處となく弱つてゐる佛光寺さんを、おほかたそのすらりと瘦せたさびしい肩と腕にかけて十七丁を下つて行つた。

十三年九月三十日朝

選後に

（第三回募集小說を讀みて）

島崎藤村

　多くの場合に、作品の與へる感じが灰色で、讀後の印象も稀薄であるといふのは、どういふところから來て居ませう。私達が筆を執つて物を書く場合に、斯う書かなければならないといふやうな固定した法則のあらう筈もありません。私は第一回の募集の折にブランデスのアンデルゼン論を引いて『彼（才能を有するもの）はおのれの天性に隨つてその導くままに歩み行くことの出來るまでは、先蹤のために負はさるゝ影響の重荷を負ふことはおろか、邪路にすら彼自身を曝すほどの勇氣を獲得しなければならぬ。』といふ言葉を讀者に紹介しました。例へば、こゝに一人の美術家があるとしませう。その人はセザンヌの繪畫にも、またルノアールの繪畫にも同じやうに深く心を動かされて居るとしませう。斯うした美術家の感受性が鋭ければ鋭いだけ、又、その人の追求力が强ければ强いだけ、全く氣質を異にしたやうな近代の二大家の影響は同時にその人の上に働きかけずには置きますまい。勢ひその人の筆は『影響の重荷』のために濁され易いものとなりませう。斯うした場合が文學上の修業地にも同じやうに起つて來ては居ないでせうか。殊に外國文學の刺激を受けることの多い、全く正反對な氣質から成つたものでも同時にそれを受け入れねば成らないやうな、この飜譯ばやりな今の時代にあつては。

ところで、私が今こゝに紹介しようとするのは、さういふ他の影響から全く離れて居るやうな短篇なのです。今月の當選作として取つた方の一篇が則ちそれです。

『失　明』　島本久惠

『失明』の筋は簡單です。中年で盲人のやうになつた佛光寺の住職がしばらく自分の寺から離れ、お律といふ妻からも離れ、そのお律の連れ子ではあるが自分の息子のやうに可愛い中學生からも離れ、日頃佛光寺の壇徒として信心の篤い一人のお婆さんに連れられて、柳谷といふところの觀音寺にお籠りすることが書いてあります。では、唯それだけのものかと言ふに、なか／＼さうではありません。うまれつき美貌なこの佛光寺の住職はそれだけでも誘惑の多い身で、しかも三十五六といふ血の氣の多い心の動き易い男ざかりの年頃でありながら、さういふ觀音堂にお籠りする眼の見えない男や女の間に身を置いて、人の世のあはれさを思ひ知るといふことも自然に書けて居るし、その山間の空氣を汲ひ靈泉に眼を洗つて、失明した主人公の心がいよ／＼清く澄んで行くといふことがこの短い作の中にかなりよくあらはれて居ると思ひます。最後のところに、妻のお律が主人公を迎へに來ることが書いてありますが、その妻の手に取りすがつたといふのも自然で、血もあり涙もある人間の姿が私達の心を動かします。

この作の主人公には苦しい修道者のやうな努力があるとも感じられません。どうしてこの主人公が自分に取りすがる隣の女のなまめかしさをも許し容れて、その不幸な女をいたはることが出來たかといふに、それをこの主人公の持前の性質とも言ふべき『柔和』から來て居るやうです。私がこの作に心をひかれるのは、さういふ柔和な人間性のあることを私達の眼の前に指摘して見せて呉れたことで、その柔和なしにはこの作の主人公があれほど澄んだ心には達し得られなかつたらうと思はれるところにあるのです。全くこの『柔和』は東洋的だと言つてゐゝやうな氣もします。要するに、『失明』一篇はまだ世に知られて居ない婦人の作者の手に成つた短い作ではありますが、今日世にもてはやされて居る閨秀諸作家の

作に比べて遜色があらうとも思はれません。おそらく作者は涙の多い生涯を送つて來たやうな人でもありませう。この『失明』を書いて出るまでには既に長い支度をして來たやうな人でもありませう。この作には所謂心理描寫の精しいものがあるでなし、筆のたくみもどうか知りませんが、おのづから咲き出でた花のやうに讀む者の心を醉はせるところがあると思ひます。多望なる作者と言ひたい。私はその前途に多くの望みをかけて居ることをも、こゝに書き添へて置きませう。

猶、今月編輯者の方から廻つて來た四十餘篇の應募作のうち、注意すべきものと思つたのは左の五篇でした。

『曳きずられる』　杉村久子
『寂しさ』　矢田清子
『結婚後十年』　二木つゆ子
『賣卜者』　四宮華子
『別離』　田中英子



不孝な少女

網野菊

一

人氣のないT驛の待合室に初子は一人電車を待つて居た。

その日は寒い上に雨がショボ〳〵降つてゐた。初子は、膝の上の教科書の包みの上に凍傷で醜くなつた手を合羽の袖でかくす樣に置いて、思ひ切り悲しさうな眼をして窓から向うの丘の杉の木立を眺めて居た。その時、A大學の制服をつけた一人の學生が這入つて來、初子の前を過ぎて向ふの腰かけの方へ行つた。初子が何氣なく其の方を見ると、學生はツと其處に立止り、此方を見た。それは、いかにも馴々しい、まるで、どこかで前に會つたことのある人のそれのやうな視線であつた。

初子は、その視線を受けた瞬間、「なんていゝやな人だらう！」と思つた。それ

で、悲しさうな顏を更に悲しげにゆがませて、再び、窓越しの木立に眼をうつした。

電車は混んで居た。初子は中まで進まず、後の入口に近く立つてゐた。學生は初子の後から乘つて來、そばを通つて中央の出入口の所まで進んで行つた。そして電車が動き出すと、また、あの馴々しい視線を初子へ向けて投げた。初子は素知らぬ顏をして窓の外を眺めて居た。全然、ひとを吞んでかゝつた態度に反感を覺えたので、初子は出來るだけ其の學生の存在を意識しまいと努めた。

電車が一つ驛を越して二つ目のM驛まで來ると、學生は今までもたれて居たガラス戸から身を起した。が、すぐ眼の前にある出入口から降りようとはせず、初子の方へ向つて歩いて來た。初子は凍傷の手を思ひ出し、ハッと思つた。學生は人込の中をわけて初子の傍まで來ると、ハッキリした聲で、

「失禮します」と云つた。

初子はドキッとした。

「何といふ大膽なんなのだらう！」と思つて、驚いて學生を見送ると、學生は、それきり後を振向かず、頭を眞直ぐに立てゝ、降りて行つた。

二

それから半年近くたつた。春に近い或る日、初子は、いつものやうに學校のかへり、T驛の待合室に腰をかけて電車を待つてゐた。

初子の乘る電車は中々來なかつた。そのうちに反對の方の電車が着いて、人がドヤ／＼と降りて來た。その人達を何氣なく見てゐるうちに、初子は、後の車から降りた人込の中に、いつかの、あの馴々しい振舞をした青年の姿をみつけ、あ

はてゝ視線をそらした。

青年は待合室の中に這入つて來て、そこを通りぬけて行つた。そして初子の前に來ると、極めて輕い、他の人には殆んどわからぬやうなお辭儀をして行つた。初子は氣のつかぬやうな顏をしてゐたが、併し、心の中ではドギマギし、再び、青年の大膽さ、不良さに驚いた。

初子は其の時まで其の青年のことは忘れてゐた。あの、はじめて會つた日の青年の態度は、初子に不純と屈辱の感じを與へた。それで初子はなるべく其の青年のことは忘れたいと思ひ、またそれに、同じ電車でゆきかへりする幾人かの顏なぢみの學生があつたりしたので、間もなく其の人のことは忘れてしまつた。そして、それぎり、寒い、じめ〲した冬の間中、初子は一度も青年のことは思ひ出さなかつたのであつた。

二度目に再び會つてからは、初子は青年に好奇心を惹かれた。二三日の間、また彼の青年に會ひはせぬかといふ輕い期待を持つて停車場を出入りした。併し會はなかつた。初子は、また何時忘れるともなく、青年のことを忘れた。

幾日か過ぎた。或る日初子はA大學の學生大勢と歸りの電車で一緒になつた。學生は驛々でだん〲に降りて減つて行つたが、S驛で乘換へ、E驛まで來ると、一人だけ殘して皆降りてしまつた。その一人は初子の前の席へ來て腰を下した。そして何か原稿紙のとぢたものを讀みはじめた。その表紙には大きくペンで「國威」と書いてあつた。

初子は、その學生が例の青年であるかどうかヘツキリわからなかつたが、その少し年寄りぢみた、やせた顏つきや態度で「もしか」と思つたら、一層顏があげられなくなつた。眼を伏せたまゝでI驛まで來ると、初子は物に追はれたやうに急いで電車を降りたが、初子が席を立つと同時に、學生も急に立上つて、初子より先きに降りて行つた。

初子は、とつさに自分の家の樣子を思ひ出した。小さい、陰氣な煙草店を。それは祖父母が内職に商つて居る店で、父のない初子は母と共に其處に引取られてゐた。初子は、學生が自分とは違ふ方角へ行つてくれればいゝがと願つた。併し、

學生はズン〳〵と初子の家のある方へ進んで行つた。初子は、學生をやり過したいと思つて、わざとぐづ〳〵して歩いてゐた。が、學生の方でも、少し行くと歩みをおそめた。初子は困惑した。ぢつと學生の後姿に眼をつけて歩み澁つて居ると、道が二つに分れてゐる所まで行つた學生は、ツと振返つて初子を見た。

「あ、やつぱり、あの人だ。」

初子は、怜悧さうな顔付を遠くから認めると、さう思つた。と、初子は殆んど無意識に足を早め、手近かの横町へ身をかくした。そして後をも見ずに其の道を歩いて行つた。

初子は、青年を出しぬいたことが愉快であつた。が、また、多少不安でもあつた。途中、本屋に寄つて雜誌を買つたり、なほも廻り道をしたりして、ゆつくり手間どつて家の方への道へ出たが、それでも後の方から見られてゐるやうな氣がして、一遍出た道をわざと再び折れて裏道から家に歸つた。家の二三間手前で立止つてスツカリまはりを見廻してから歸つたが、祖父母達に挨拶をして二階の自分の部屋に這入ると急にガツカリして不快になつた。

初子は、何故今自分はあんな態度をとつて逃げかくれるやうにして自分の家へ歸つたかと思つた。初子は袴をぬぎかけた手をとどめて、そのことを考てへみた。

「あの青年の不良染みた行爲を恐れたのか？　いや、さうでない。私はこの自分の小さい家を、此の祖父のさゝやかな職業を青年に知られることを恐れるのだ。もしも、私の家が立派な門構の家であつたら、もしくは堂々とした店であつたら、私はあんな逃げるやうにしないで平氣な顔をして、脇目も振らず頭を立てゝ歩いて來たかもしれないのだ。」

初子は、たつた今のさき、電車の中で多くの學生達のそばに少しの煩ひもなげに幸福さうな、寧ろ誇らしげな顔さへして乘つてゐた自分を思ひ出した。

「何といふ莫迦であらう！　はじめから、もつと人間の目につかぬやうに愼ましくさへしてゐれば、何もあのビクビクし

た氣持であちこち廻つたりして家へ歸ることはなかつたのだ。」
初子は兩手を顏におしあてた。
「だが、まだ遲いことはない。明日からは必ず無頓着な態度で電車に乘つてゐよう。自分にコケテイツシユな所があるからいけないのだ。何も氣のつかない平氣な顏さへしてゐれば何のことはないのだ。少し淋しいには淋しいが。」
最後に初子はさう思つた。
併し、その初子の決心は、しらず〳〵のうちに裏切られた。初子の眼は、電車の中や停車場のプラットホームに、ともすれば彼の青年の姿を求めた。

三

それから初子は屢々其の青年と顏を合すやうになつた。青年はよくM驛で乘り降りるので、初子はその家がM驛の近くにあるものと想像してゐた。朝、電車がM驛に來ると、初子はそれとなくプラットホームを氣にした。そして、多くの學生や勤人の中に、線路寄りの方に、片足を少しなゝめに出した寬かな姿勢で電車を待つてゐる姿を見ると、初子の顏は赧らみ、眼はあはてゝ別の方へ向けられた。が、ひよつとして青年の姿がプラットホームに見出されない時には、少なからぬ失望を感じた。もう一電車おそくして乘ればよかつたのかしら。それとも別な車に乘つたのではないかしら。さう思ひながらT驛まで行く。其處で吐き出された人込の中にも遂に其の青年の姿を見ないと、初子は沈んだ氣持で學校までの道をたどり、そして歸りの時を待つた。
けれども、歸りに會ふといふことは極くまれであつた。初子の方の學校の時間割も極めて不規則であつたし、青年の方のそれも矢張りさうであるに違ひなかつた。

初子は學校の歸り、青年の方の學校の前を通る時には、よくそつと門の中を見やつた。併し、その門には、學生が歸る時刻には定つて制服のいかめしい門衞が兩手を後に組んで立つてゐたし、さもない時でも、正門のつき當りは市內でも一二と云はれる位有名な美しい庭園が開けてゐて校舍はろくに見えなかつた。が それでも何處か高い窓から青年が、ふと讀書に疲れた眼を往來の方へ投げて居るやうな氣がして、初子は胸をとゞろかせて通るのだつた。

四

ある日、かへりのことであつた。いつもより遲くなつた初子は、全然青年に會ふことを豫期せず電車に乘つた。M驛まで來た時であつた。本を讀んで居た眼を何氣なくあげると、丁度車の出入口から乘つて來た一人の學生の視線に出會つた。それは皮肉な笑ひをたゝへた例の視線であつた。初子は急いで眼を膝の上の本へかへした。青年は落着きはらつた足取りで初子の前を過ぎ、すぢ向ひに空いてゐた席に腰を下した。初子は、小さいポケット型の本に全心を打ちこむように一心に眼を其のすぺ〳〵した洋紙の上の活字に注いでゐた。

初子はS驛で乘りかへた。青年は降りなかつた。乘りかへた電車は空いてゐた。

初子は、ヒヨツとすると青年もS驛で降りるかもしれないと思つてゐたのに降りなかつたので失望は感じたが、併し、ホツとした氣持になつて、人の居ない、ゆつくりした座席に腰をかけた。今までいゝかげんに讀んでゐたツルギエーニエフの「不幸な少女」の英譯を本氣になつて讀み出した。

電車が次のX驛に來ると――其の驛も前のS驛と同じく乘換驛になつてゐた――二三人乘つて來た。その眞先に乘つて來た黑い服の男が初子の左隣に腰を下した。初子はかたくなつた。初子には、その人が誰であるか顏をあげなくてもハツキリわかつた。

初子は當惑した。それに、自分が今英語の本を電車の中などで讀んでゐることを其の人に知られることをいやに思つた。殊に、その小說の題と云つたら……。

"The, Unhappy Gire"

初子は、表題の書いてある上部を、兩手でかくした。

初子の困惑しきつた氣持とはまるで反對に、青年はあくまでも落着き拂つた態度をくづさず、ぢつと視線を前方の窓の外の景色に注いでゐた。

次の停車場で電車がとまると、六つばかりの洋裝の少女とお供の女中とが乘つて來た。ほかにも空席が充分あつたにも拘らず、初子はわざと身を右へしざらせて二人の爲めに席をつくつた。すると青年も平然として身を左へよせて席をあけた。他の席へ行きかけてゐた女中は、二人が身をしざらせたのを見ると、一寸迷つた後、お孃さんをつれて其處に腰を下した。初子は悔を感じた。大體身をわきへよせた直ぐ後からして、初子は「よせばよかつた」と思つてゐた。それが、青年がツと身をよせた時には一層強くなつてゐた。女中が他の席へ行かうかどうしようかと迷つてゐた時には、救はれた氣がしたが、女中は平然として腰をかけて、お孃さんと氣樂に話してゐる。初子が降りる驛までの間には、もうあと二つしか停車場がない。初子は再び青年との間の席が空いてから後に降りたいと思つた。さうなれば二人は仲直り出來るといふ氣がした。が、お孃さんと女中とは次の驛で降りなかつた。そして其の次のE驛では、青年が立ち、降りて行つてしまつた。

初子は其の日中氣がくさ〳〵してならなかつた。それに、あの小說の題が、あの時よりも以上の不快さを伴つて心にかかつて來た。先刻は唯單にセンテイ・メンタルな氣持を強ひるといふやうな感じからいやであつたが、今度は更にその字から何か不吉な豫想が感じられて不快であつた。その何となく不吉な豫想は、初子の心を沈ませずにはおかなかつた。

五

青年は、はじめM驛で多く乘り降りしてゐたが、此の頃は歸りは大抵S驛かY驛で乘りかへてS町驛で降りるやうになつた。初子には、それで、青年の家が何處にあるのかサツパリ見當がつかなくなつた。

ある時、かへりの電車で非常に混んでゐたことがあつた。初子は同じ車であつたが、青年や其の仲間の學生達とはズツと離れた所にゐた。S驛に着いた時、青年は降りさうにもなかつた。初子は暫くためらつた後、思ひ切つてS驛で降りた。それを機會に青年との交渉から自由にならうと、さういふ氣持が心の表面をしめてはゐたが、その底の方には、青年を出しぬくといふづるさもなくはなかつた。

初子は青年にはわからぬやうに人ごみにまぎれて降りた。I驛方面の電車に乘りかへをするためのブリッヂを渡つてゐると、後からバタ〳〵二三人、A大學の學生が駈けて來て追ひ越して行つた。初子は少しも顏をあげずにゐたので、それが誰だかわからなかつた。降り切つてから、ふと向ふを見ると、待合室の後の所に、青年が得意氣な笑を眼に浮べながら、いつものやうに片足をなゝめに出し、こちらを見て立つてゐた。

これもまた歸りのこと、初子は青年と一緒になつた。青年には相變らず大勢のつれがあつた。そして、その人々は多くS町驛で降りる人達であつた。乘りかへした後も、初子は皆と一緒になつた。初子は青年達の立つてゐる出入口のすぐそばに腰をかけてゐた。初子は雜誌を開いてゐた。青年達は快活な聲で話し、笑つてゐた。何を話してゐるかわからない、が、たゞ其の聲の調子を聞くだけでも、その中に青年がまぢつてゐると考へるだけでも、初子にとつては充分幸福であつた。

電車はS町驛に來た。そこでドヤ〳〵と學生達は降りた。青年も降りるに違ひない、さう思つて幾らか淋しい氣になつ

て雜誌を讀んでゐると、

「失敬」といふ聲がハッキリ聞えた。オヤと思つて顔をあげてみると、出入口の所には青年だけが、一人殘つてゐて、降りて行つた連中に聲をかけたのであつた。初子はドキッとした。少し窮屈な氣持になつてゐると、青年は、どうしたのか急にあはてたやうに、初子のすぐ前に腰かけてゐる人の前に進んで來て會釋をしながら其の前の吊革にさがつた。

「君の家はこつちの方か？」

袴をつけた、三十格好の其の人が云つた。

「えゝ。」

青年は少し口ごもつて答へると、どぎまぎした氣持をまぎらすやうに、吊革を兩手で一本づつ持つてウンと力を入れて身體を前後にゆすつた。初子は青年の心持を感じて顔を赧めた。

「E驛で降りるの？」

袴の人は念をおすやうな調子で云つた。

「えゝ。」

青年は、今度はハッキリ云ひ切つて、せはしく頷いた。

初子は、青年が何か迷惑氣であるのを感じて共に當惑を感じたが、また同時に、その袴の人がもつとくはしく聞いてくれることを願つた。さうすれば、此の名も知らない所もしらない青年の素性が多少でもわかるやうな氣がしたからであつた。

けれども、袴の人はそれきり默つてしまつた。青年も、ふだんとはまるきり別人のやうにオド〳〵して默つてゐた。そしてE驛に着くと、二人は、袴の人を先にして降りへ行つた。

六

五月になつた。町の兩側の銀杏の竝木は鮮かな綠の葉をつけはじめた。夜になると、家々の二階などからもれる灯をあびて、その新しい綠の葉が美しく輝いた。

初子の家の近くにある角力小屋では夏場所がはじまり、夕方、ゾロゾロと町を通る人が澤山あつた。

或る夕方、初子の所へ友達から電話がかゝつて來た。初子は、紡績の袷に帶をしどけなく結んで襷がけで掃除をしてゐた、そのまゝのなりで、電話のある店先へ出て行つた。店と奥との界の大阪格子をあけて何氣なく前の通りを見た初子は、思はず其處に立止つた。

電車道一つへだてた向う側の人道の琴屋の前の銀杏の木の下に、あの青年が例のやうに右足を少しなゝめに出した姿勢で立つて、初子の家の方を見てゐたのであつた。

初子は、とつさに自分のみなりのはしたなさに氣がついた。そのまゝ奥へ引込んでしまひたかつた。が、電話へ出ないわけにも行かないので、やむを得ず、店へ出た。

電話の應待をしてゐる間も、初子の心は始終向う側の竝木の下へ飛んで行つてゐた。初子は身のすぼまるやうな思ひをしながら、赫い顏をしてまごついた返事をしてゐた。

電話が終つてからも初子は再び向う側を見ず、逃げるやうにして奥へ駈け入つた。落着かぬ、變に淋しい、腹立たしい心持が湧いて來て、初子はともすると肩をひそめ手をとどめては考へ込んだ。

七

漸く夏らしくなりネルやセルを着る人が見えるやうになつた。初子もネルに着かへた。はじめてネルに着かへた日、初子は青年に會ひたいとふと思つた。初子は、そのネルの着物が自分に似合ふのを知つてゐて、好きであつた。が、その朝は會はなかつた。歸りも、初子は學校の用事でいつもよりズツと遲くなつたので、無論青年に出會ふ筈はなかつた。初子はあきらめなければならなかつた。

T驛に着いたのは、もう夕方であつた。初子は、プラットホームに立つて電車を待つてゐた。何氣なく改札口の方を、見てゐると、一人の、和服に袴をつけた男の人が來た。その人は改札口を通りぬけながら此方を見て初子の姿を認めると親しげな、一寸皮肉な顏つきをした。

「××社のKさんに違ひない。」と初子は思つた。初子の或る友達の父はT驛の近くに雜誌社をもつてゐた。初子は其の友達から××社の人達のことをよく噂に聞いてゐた。××社の人達、とりわけKといふ、友達の從兄に當る人もまた、友達を通じて初子のことを知つてゐるに違ひなかつた。それで、初子は、見知らぬ人であんなに親しさうな顏をしたのはKさんでなければならないと思つたのであつた。年格好から押して、さう思つたのであつた。が、その人がブリッヂを渡つて降りて來るのを見ると、それは意外にも例の青年であつた。セルの上に大島の羽織を着、鳥打をかぶつてゐたので、見違へたのであつた。

汽車が烟を吐きながら通りかゝつた。初子はブリッヂへ背を向けて、袖で顏をおほつた。青年は待合室へはいつた。

暫くして電車が來た。初子は前の車の一番後端に腰をかけた。青年も同じ車に乘つて來、初子の向ひ側の、矢張り隅の席に腰を下した。初子は息がつまるやうな氣がした。顏が自然と蒼ざめて行くやうであつた。初子には、それ程自分を失つたことはこれまで一度もなかつたやうに思はれた。

青年はチラと初子の方を見ると、わざと見しらぬ顏をして、持つてゐた外國の雜誌を讀みはじめた。初子も電車の中で

讀むために小型の小說本を持つてゐたが、それを取出す勇氣はなかつた。初子は、自分の落着かぬ樣子を車内の人に認められることを恐れた。車内の人ばかりでない。青年にそれを知られることを恐れた。

初子は、早くS驛に着いて其處で青年が降りてくれゝばよいと思つた。S驛に着いた。青年は降りなかつた。初子自身には、立上つて降りて行く、それだけの力が殘つてゐなかつた。

S驛の次はY驛であつた。そこでは、いやでも應でも初子は乘換をしなければならなかつた。青年は依然降りる氣配も見せなかつた。初子は青年の前に立つて歩いて行く力が全然自分に殘つてゐないのを知つてゐた。それで、どうかして後になりたいと願つてゐたが、青年は終點までも乘つて行くやうな平然としたそぶりで坐つてゐるので、仕方なく先きに立上つた。と、青年はすぐ後から立つて降りて來た。初子は、長襦袢の袖が着物のそれよりも二寸も短くなつてゐたことに急に氣がつき、一層ひけめを感じた。出來るだけ歩みを遲めて青年をやり過さうとしたが、青年は中々前へ來なかつた。初子は足が宙に浮き、ふら〱するのを感じた。其儘そこに卒倒しさうであつた。

ブリツヂの途中まで渡つて行くと、初子はたえ切れず其處に立ちすくんでしまつた。初子は、あたりの景色でも眺めるやうな風をして、いつまでも其處に立つてゐた。青年は通りすぎて行つた。後をも向かず、まつすぐにプラツトホームの方へ行き、遠ざかつた。

初子は陰鬱になつた。

八

その後暫く初子は青年に會はなかつた。そのうちに暑くなりネルやセルを着る人も見られなくなつた。

或る日のかへり、初子はY驛で乘りかへていつものやうに一番端の席に腰を下して何氣なく向うを見ると、なゝめ前の

席に青年が坐つてゐた。青年はまだセルの着物を着、袴をつけて麥稈帽をかぶつてゐた。久しぶりであつたので、初子は前の日のことを忘れ、青年をなつかしく思つた。が、二人が顏を見合はす間もなく、後から乘つて來た人々のために立ちふさがれて、それきり初子は青年を見ることが出來なかつた。

次の驛でも〳〵人は減らなかつた。そしてS町驛を過ぎ、E驛に來てしまつた。青年はS町驛では降りず、E驛で降りた。降りて行く時も、人にさへぎられて初子は青年の顏を見ることは出來なかつた。

青年は降りると改札口の方へ歩いて行きながらチラと振返り、初子の方を見た。初子はやつと人と人との間から其の瞥を迎へた。それは全くの一瞥で、それきり青年は改札口の方へ行き、外へ出て行つてしまつたけれど、それは、改札口を通る時片方の肩を心持ち上げ體を横にして出て行つた姿と共に、妙に悲しく初子の心に殘つた。

家に歸つてからも、其の悲しみは初子の心を離れなかつた。たつた一度こちらを振り返つた青年の瞳！ それは、いつもに似合はず眞面目な誠實な瞳であつた。初子が青年から受けた唯一の眞面目な瞳であつた。多分不幸に終るであらう自分の青年への氣持に、あのたつた一度の一瞥だけが報となるかもしれない、さう思つて初子は泣いた。

九

或る朝、初子はS驛のプラツトホームに青年の姿を見出した。初子は顏を赧めた。が、青年は初子には氣がつかなかつた。

青年のそばに、初子の下級の或る女學生が立つてゐた。その女學生は美しかつた。青年は其の女學生のすぐ後につゞいて初子の乘つて居る電車に乘つて來た。初子には青年の氣持がわかりすぎる程わかつてゐた。わざと顏をそむけて、青年の方は見まいと思つた。平氣な顏で窓の外の景色を見てゐようと努めたが、顏がこはゞり、ともすれば筋肉がひきつれた。

そして頭の中の血が一時に冷えてしまつたやうな感じを感じた。

初子はT驛に着くまで一度も青年の方を見なかつた。さうして、驛に着くとサツサと降りて、見返りもせずにプリツヂを渡つた。青年はツッ〳〵と後から來て馳けぬいて行つた。そして矢張り不愛想な顔をして、一人足早に改札口を通つて行つてしまつた。

初子は學校へ行つても氣が沈んでならなかつた。庭や廊下などで、あの下級生に會ふ度平氣で居られなかつた。初子は、自分の嫉妬の強いのに驚いた。

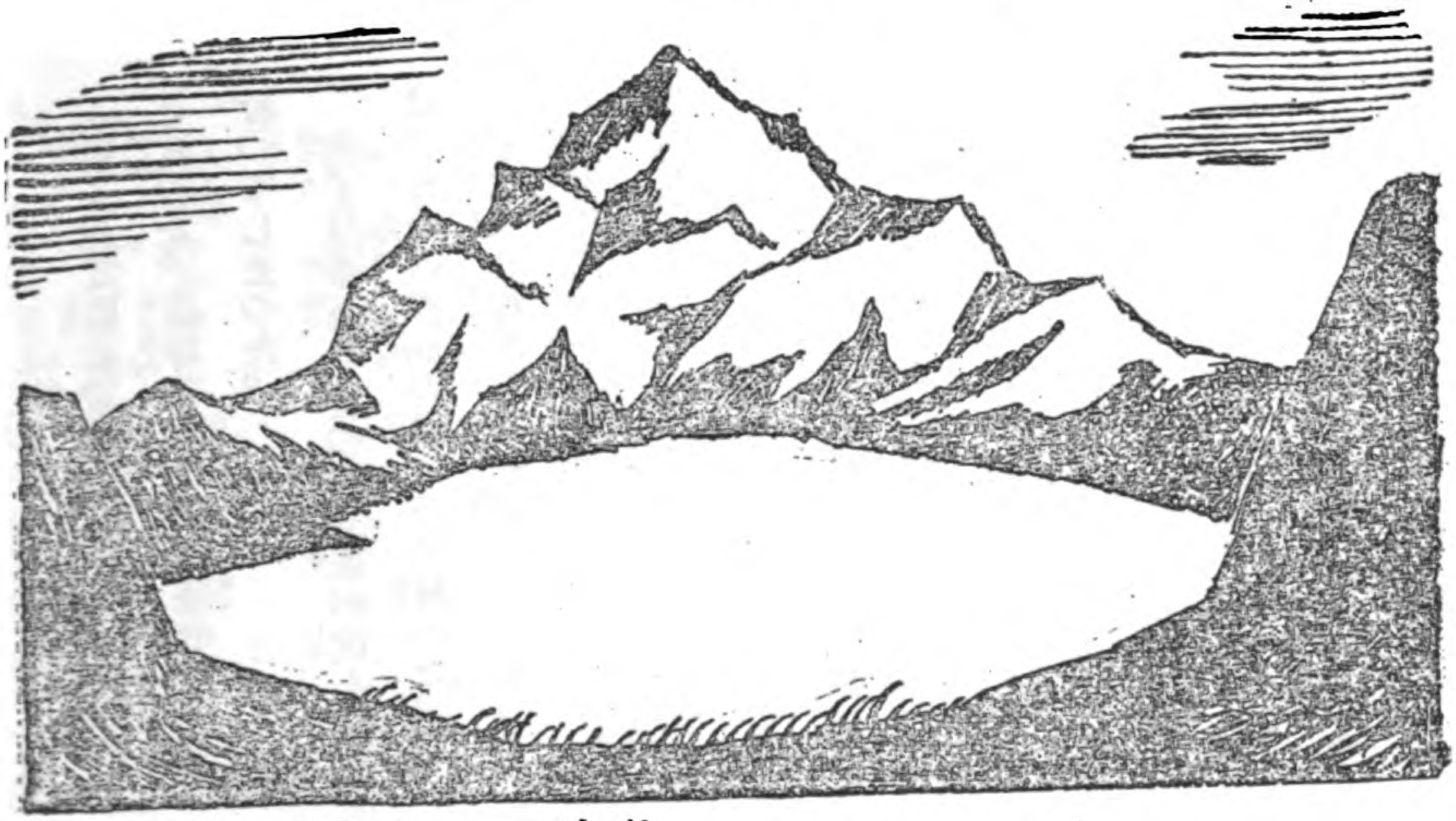
「私は夫れ程あの人を愛してゐるのであらうか？もし、さうであつたら、警戒しなければならぬ。」と思つた。

初子には自分の不幸が見えすいてゐた。そして、今のうちならばまだ、あの青年のことを思ひきり、サツパりした氣持になれると思つた。今のうちに彼の下級生のことがあつたのはよかつたと思つた。

が、その氣持は永くはつゞかなかつた。初子よ理屈なしに青年の全ての振舞をゆるし得る氣持になつた。それのみか、あの日自分がとつた冷たい態度を悔いる氣にさへなつてゐた。

學期の終りも間近かであつた。初子は、も一度夏休みにならぬ前に青年に會ひたいと思つた。こんな氣まづい思ひのままに別れるのはつらいと思つた。が、その機會は遂になかつた。初子は、その後、その學期が終るまでの間に、青年に二度しか會はなかつた。その二度とも、どうしたのか。青年は省線ではなく、反對に初子の通つてゐる學校の方から歩いて來た、その途中で會つたのであつた。そして其の度に初子は眼を伏せたきりで顔をあげることが出來なかつた。

初子はそれきり其の青年を見なかつた。秋が來て再び學校がはじまつた後も、青年の姿は見られなかつた。電車の中にもプラツトホームにも、また町や道のどこにも見られなかつた。



わが生ひ立ち

佐藤春夫

たからもの

そのころ私に一つのたからものがあつた。それはたつた一つの石であつたけれども、私はその後の生涯でも、あれほど長い間、あれほど純粋に愛したものは、二つとないと言つてもいゝやうな氣がする。

その石は、川の傍の不思議なところにあつた。石灰を燒く小屋のあつたところだが、子供ごゝろにはそれが全く不思議なものとして印象された。城山のわきの細い坂道を登つて、川の見えるところへ一度下りて、それから川に沿うてもう一度別の道を上つて下りると、その一面には見も知らない眞白い大きな石が河邊へ積み上げられてあつて、その石の下は深い碧い淵になつて渦を巻いてゐる。そこに帆巻船が繋がつてゐることもよくあつた。

このあたりの變化のある土地は、そのころ私の最も愛した遊び場所であつたが、全くあそこほど私に影響を與へた場所は無いのぢやないかと思ふ。そこは私にはそのころ讀んだお伽噺の森と同じような愛情を持つて思ひ起される。私は時々このあたりを夢にまで見た。――今でも時たまに見るが、もう澤山に夢を見たころには面白い夢や變つた夢は、大ていあそこに關係があつた。どちかと言へば陰氣な子供ごころを怯かすところであつた――そこがまた私にはよかつたのだらうが。だから、夢のなかではきつと樂しいやうな恐ろしいやうな場合にそこが現れた。

私は十六の時に學校の機械體操場から落ちて、左の腕を怪我した事がある。その手術の爲めに麻藥をかけてもらつた時に、私はあの城山の杉の樹の下の道を歩いてゐると思つた。不意に太い枝が低くたれたところへ出て、それをくゞり拔けようとして頭を打つつけた。私は「痛い！」と叫んだ。二十ごろになつて、私は殆んど毎晩夢になやまされた。とりとめのない惡夢で、私は人を殺してしまつてからうろつき歩いたり、泥棒に追ひかけられて逃げたり、或はまた身が流されて救を呼んでゐたりするのは、みんなあの山路やあの渦巻のある淵などが、そのシインであつた。八つのころ私の遊び場所であつたところが、十八のころに私の夢によく出て來たわけである。私は小供のころの遊び場所がそれほど深く心に沁み入つてゐるのに驚くと同時に、私自身氣づかずにはゐるけれども、私の靈はあの土地の景色や氣持によつて養はれたことが尠くないであらうと考へるのである。あの坂道や木下道や石段のあるところや、それらとそつくり同じやうな曲折や高低が、或は私の頭腦の皺のなかにそのまゝのリズムで刻み込まれてあるかも知れないやうな氣持さへする。

周圍のものとは全く別だといふそれらの白い石といふのは石灰石であつたが、そこで産出するのではない。多分、木材を積み出して行つた船が、その歸り路に荷物のない場合、しかたなしに船脚のつもりでどこからか積み込んで來ては、船着きの便のあるさうしてさう邪魔にならないこの深い淵のそばへほり上げて置いてそれを石灰に燒いたものらしい。それは嶮しい崖の下にほんの少しばかりある平地へ一面に、石灰石を積み上げてあつた。この場所はその後二十年たつて――

つまりついこの四五年前、ひどい出水のあつた時に後かたもなくくづれてしまつた。たしかその小屋がそのころまであつたのに、崖の下にすつかり埋まつてしまつたといふことである。或は人死にもあつたのぢやないかと思ふ。私は私の思ひ出のある場所がそんなことになつたのを歎いてゐる。

私のたからものは、實はそこで發見されたものであつた。一たい、最初に誰がこの場所を發見したのだか知らないが、一頃そこは子供らにとつて驚異の地であつた。そこには不思議な美しい石が澤山わけもなく探し出されるといふので。——子供らはそれを小さな水晶が生えてゐると言つたが、石の表面に林のやうに簇がつて尖つて輝いてゐるのは、まつたく小さな水晶に似てゐた。子供らがそれをさがし出して拾つて來ては、學校で見せびらかす。さうして彼等は容易にはそのありかを教へなかつた——ただわざと思はせぶりにとぼけて「ええところにあるんぢや」とだけ言つた。それをやつと或る日に、或るひとりの友だちが私に明して案内してくれた。「あんたにだけ教へたるんぢや。だれにも言ふなよ。きつと」「うん」お前だから特別に教へるのだ、お前もむやみとひとに教へてはならないとその子が言ふと私もしつかり約束をした上でのことである。

子供たちの驚きは激しい代りには、すぐに消えやすい。さうしてそれほどの驚異の地もすぐに忘れられてしまつた。みんなはやがて他の遊び方や遊び場所へうつつてしまつたが、私はその場所になか〳〵飽きなかつた。それにはそこが私の家から近かつたせゐもあるが、それよりも第一にその不思議さが、それほど強く私を捉えたのであつた。美しい石もよかつたし、そこまでに行く道もさびしくてよかつたし、またそこで大人たちのしてゐる仕事がよほど驚くべき事であつた。大人たちは、そのなかから探せばいくらでも面白い美しいのがありさうなものを、その白い石を無雜作にシヤベルにすくつては、小屋のなかの燃えてゐる地下室のやうなところへ、平氣で投げ込んで、紙くづか木ぎれのやうに燃してしまつてゐるのだ。そこには盛んな炎があつた。全く青いのや、全く赤いのや、全く黄色いのや、それぞれの焔が、燃えさかつて

ゐた。石がそのやうに燃えるのであつた。子供にはすべての事がわからなかつたが、そんな疑よりももつと直接に、それは怖ろしく不思議な美しさの光景であつた。その焔や、その無雜作な仕事に骨折つてゐる荒々しい男たちを、私は長い間默つて見物してゐた。大人といふものは何といふ無茶なことをするものだらう。それとも大人はえらいからかも知れないしばらく私は見恍れてから――いつもの事であるのに、私はいつも新らしさで見恍れてから、やつとそれが倦きると、私はこつそりと石の間を探しまはるのであつた。初め男たちがそんなことをしてゐるのを見つけると怒つた。今思へば別にどうといふわけもなかつたのだらうけれども、たゞ子供をおびやかしてみて樂しんだゞけの事だつたのだらう。それとも一時子供があんまり群がつて來てうるさかつたから怒つたのかも知れない。何にしてもしまひにはその男たちも、もう怒らなくなつたのだが、それでも私はやつぱり人のものを盜んで來るやうな氣持でびく／＼せずにはゐられなかつた。

或る日の事、いつものやうに石の間を見まはつてゐるうちに、私はそこで素晴らしいのを發見したのだ。それは今までのやうな小さな水晶のやうなのや、またその水晶が歯のやうに上と下とから喰ひ違つてくつついて仕舞つてゐるやうなのとも違ふ。全然新らしいものであつた。それは大きさも色もまるで白い葡萄の實のやうで透きとほつてゐる。それがしかし、ぽつかりと一つあるのではなく、別の淡紅色の石の間にくるまつてゐる。その代りそれはたつた一つではなくやつぱり葡萄型に十も十五もその一つの石のなかに塗り埋められたやうな工合に嵌まつてゐる。――どうもさうらしい。今まで私がこれに似たものを見た覺えもない珍奇なものが、しかし困つた事に、或る大きな二つの別の石の隙間から少しばかり覗き出してゐるのであつた。しかもそのつまらない石がまたよほど大きい。子供の力ではどうしても動かせないほど大きい。私は手だしも出來ずに、その日はたゞそれを見つけただけで家へかへらなければならなかつた。私の頭のなかにはその美しい珍奇な石がこびりついてしまつた。私はどうにかしてその立派な石を手に入れたい、――それには第一着の仕事として、どうしてもあのやくざな石を先づ取除けなければならない、――しかしそれが子供の力で、それも人に知

られないやうにこつそりとやりとげるといふのは、これはほとんど駄目なことだと考へ込んでしまつた。私はたつた一つの方法として、あの大きなやくざ石を氣永に幾日でもかかつて少しづつでも動かしてやらうと決心をした。その大きな石のぐるりに嵌まつてゐる小さな石を取りのけて、それから大きな石のわきにその石が落込むだけの大きさの穴を掘つて、そこへ大きな石を落し込むやうにしようといふのが私の企てであつた。私はその次の日からその仕事にとりかかつた。しかし運の惡いことには、そのぐるりにあるものはどれもこれも相當な大きなものばかりで、それがまたぎつしりと手の掛けやうもないやうに列へられてゐる。それでも少しづつは捗取つてゐるのだから、私は別にあせりもしなかつた。ただ、秋の頃であつたものだから、まだ日が暮れないつもりでゐるといつの間にか、歸り途が杉の木の下で日がくれてくるのには困つた。ほんの五六町の道だけれども、町のなかとは言へないそんな山道をそんな時頃とほるのは、八つか九つぐらいな子供――わけても神經質な子供にとつては一大事であつた。それにその道のあたりには一つの氣味の惡い傳説があつたのである。

丹鶴城主の姫君の丹鶴姫は子供が好きださうで、夕方、子供がひとりでそのあたりを通つてゐると、緋の袴の姿で丘の上へ現れて來て扇で子供をまねく。招かれた子供は次の日の朝になると死んでゐるといふのである。その丹鶴姫の使が黑い兎で、子供のとほる道の前をひよい〱と横切ることがある。やつぱりそれを見た子供は死ななけやならないともいふ。黑い兎なら、暗がりのなかでは見えないかも知れない。自分で見ないつもりのうちに、もしや黑い兎を見たのぢやないだらうか――私はそんな空想に怯えたこともあつた。丹鶴姫といふのはどんな人だか知らないが、城山の向ふの丘には一つの小さな社があつて、そこを皆が丹鶴姫の墓だと言つてゐる。そのあたりは櫨の樹が澤山あつて美しく紅葉してゐる。びくびくしながら私はその下をとほるうちに、杉の木の下あたりに來て、あたりが暗くなる。日が暮れる上に、そこは木の茂りで日もうす暗いのである。黑い兎に横切られまいと思つて私は驅け出す。それが怖ろしくていやだから今度からはもつ

と早く歸らうと思ふが、またその次になると遲くなつてしまふ。といふのは石灰小屋ではなかなか日のくれるのが判らないのである。水の反射であたりはいつまで明るいし、それに向ふ岸の廣い川原には一めんの夕日が一番最後まで射してゐる。しかもこちらのは山かげで、夕日が落ちかかつてゐるのを見ることが出來ない。もう一つには私はせつせと私の仕事に骨折つて、一日も早くやりとげたいと思ひ込んでゐる。――あの時の私は考ひ出してみると、ものに憑かれてゐたやうな氣持さへする。

或る日、いつものとほりそこへ行つて見ると私は驚いた。きのまでは綺麗に積み上げられてゐた場所が、今日はガバと崩れてしまつてゐる――石を火のなかにくべる男たちが、そこをシャベルでつつ突き壞したのである。さうしてその石を今もしきりに火のなかへ投げ込んでゐる。しかも、その崩された場所といふのは、私の寶物とも思ふ石のすぐわきなのである。私のたからものは、もうかうなつては、いつ彼等のシャベルにすくひ取られて無慈悲に燃されて灰にされないとは限らないのである。いや、このままに捨てて置けば、ほかのがらくた石と同然な運命に遇ふのは決つた事である。燃されて消えて無くなつてしまふ。私はどいふと、私がそれほどに熱中してゐるものを手にも取らず、その正體をも見るひまなしに終るのだ。今までは、ただ氣永にやりさへすればと思つてゐたものは、今日からはもうさう呑氣には構へてゐられないのである。――もし、この珍らしい石に對する私の熱中の程度さへ呑み込んでくれるなら、人々は私のその時の心配を充分に察してくれるだらう。

然し、禍は變じて福になつた。或る日私がそこへ行つて見た時には、きのふ石を堀り崩したシャベルはもう一揃ひで、危く私の石を犯すところであつた。さうして男たちは、今日は昨日くづした石をしきりに燃してゐた。さうして、私の石は恐らくは今日の夕方にはそこから崩し去られて、あすは火のなかへ投げ込まれるのであらう。私の仕事の期日は今日一日であり、しかも嬉しいことに、それは直ぐにもやれるやうになつてゐる。私の石の上にかぶさつてゐるあの大きな

石は、今は、きのふ男たちがすぐ隣まで崩して置いてくれたおかげで、もう一突きに轉がし落とすことが出來るのである。私は兩手をかけると力任せに大石をめくり上げて手を放した。大石は、私の股の間を抜けてガラ／＼と響きながら落ちて行つた。私はその物音に驚いて、自分の後のやや遠くに働いてゐる男たちをふりかへつた。男たちは別にこの物音には注意しなかつたと見えてせつせと彼等の仕事につとめてゐた。私はしめたと思つた。もう一つ、これは前のよりは小さい石をころがし落した。私の目ざす石はやつとその表面をすつかり現はした。つや／＼しい白い玉が十五六、大きいのや小さいのや、それが灰紅色をした一つの石のなかにつつまれてゐる。その石を割つたならばそれらの白い玉が一たい幾つ出て來るだらう？外側には見えないのがなかにもたくさんあるかも知れない。何にしても早くそれをこれらのがらくた石の間から拾ひ上げなければならないのだが、それがまた第二の困難であつた。その石がやはり相當に大きいのだ。さうして見かけよりもずつと奥ふかく埋まつてゐた。それが全く外がわへ取出された時には私は全く泣きたいやうな氣持ちであつたのを忘れない。私は絶望したのだ。何故かといふのに、それはあまり大きすぎてとても自分の手一つではどこへも運ぶことが出來なかつたからである。家へ持つてかへるなどは愚かなこと、三間とは運ぶに困難だつた。それが持ち上げられないのではない。ただそれを精一杯で運ぶところを見つけられて、何をするのだと言はれたら、私が今日までの二十日間に近い――その間には雨の日もあつたから私は二週間ぐらゐこの仕事にかかつたらうが――その私の骨折がは、ふいになつてしまふ。しかも今日のうちにそれをこの場所から取除けなかつたならば、私のたからものは灰になつてしまふのだ。しかも日は今に暮れてしまふだらう。私はたうとふ智惠をしぼり、それから運を天に任すことにして、思ひ切つた態度でその石を持ち上げた。それからさも何氣ないふりをしてその石を、石垣の一番隅のところまでやつと運んだ。それからそこに一旦おろした。私の智惠と私の力とでは出來るかぎりの事であつた。石垣の別の隅のところならば恐らくまだ明日燃されることはあるまいと、私はさう考へたのである。

私の考へは當つてゐた。きのふまでその石のあつたところは取壞されたが、私がきのふ運び移した場所は男たちのところから最も遠かつたのでなかなか手をつけさうにもなかつた。私は用心深く、その石の汚ならしい方を上に向けてかくして置いた。さうしていつか機があつたならば、どうにか工夫して家まで運ばうと思ひつゞけたが、やはり今まで通りに時々その石を、それが果してまだそこにあるか、またまだ燃されさうもないかどうかを見張りするために來て見た。或る日偶然にも石灰燒き達は仕事を休んだらしく、小屋には火も燃えてゐなかつたし人もゐなかつた。私は彼等に見咎められないのを幸に、その石を取り上げると出來るだけの努力でそれを石ころの仲間から遠いところへ運び出した。家へ持つて歸るなどとは思ひも寄らないことであつたから、せめては途中までと思つたが、小屋から二十間と歩かないうちに、私の手はちぎれさうになつてしまつた。それに道は坂であつた私は道ばたの草の上へ石を下して、それからその上を草でかくして歸つて來た。そこならばもうごく偶然のことでない限りは無くなる筈はなかつた。私は安心してゐてもよかつた。さうして時時そこへ訪ねて行つて見ては私はその安否を確めるのであつた。

――そのうちに私はいつの間にかその石のことを忘れてしまつた、ちやうど犬がかくして置いた食ひ物を忘れるやうに。或はまた愛人たちが相手を忘れてしまふやうに。

中學一年生になつて私は鑛物學といふものを學んでゐるうちに、ふと四五年も前に私にあれほどの熱情を湧かせたものは果して何であつたかゞ知りたくなつた。そしてその今が今でもあそこにあるかどうかを案じながら、覺えのある場所へ行つて見た。そこには依然として私の石があつた。もう力の強い私はそれを、しかし兩方の手でうんと持ち上げて道々時々休みながらやつと自分の家まで運んで來た。それからその石を破つて見た。なかから玉が出て來るかと思つたのに、そのなかは案外、ただ乳白色なだけで、またその玉もごくもろく、石の他の部分と同じやうに破れた。私はその破片の――

と言つても兩手に一杯ある塊りを博物の教室へ運び込んだ。さうしてその石は、大部分は大理石で、その中に方解石が眼になつて出來てゐたことを知つた。教師は私がそんな重い標本を遠くから持つて來た熱心を他の生徒たちの前でほめてくれた。この教師は私がもつと重かつたこの石を、もつと熱心に運んだ時の事は知らないのだ。さうしてその時この石が私のたからものであつた事も。さうして昔の私のたからものの上へ稀鹽酸をそそいで泡をふかせて見せた。

校正室より

□先きに生田長江氏がその深違なる思索の結果より成る「婦人非解放論」を本誌に寄せられたに對して、前月號に於いて、山川菊榮夫人が氏一流の明晰なる論調をもつて生田氏の論文に對して婦人の味方としての主張を高調されました。

□本號には、再び生田氏が大論文をよせられ先きの主張を詳論されました。これは近來の最要なる大論戰であつて、苟くも婦人問題を考ふるものの看過すべからざるものであります。

□折から、永井博士の生理學講座は、氏専門の生理學的立場から、男卑か女尊かを講述されました。右の論戰に對して、確かに一根據を與へるものと存じます。

□石原博士の論文は、近來盛んに交換せられた戀愛に關する論戰に最後の止めを刺さうとする意氣で書かゝれたものです。この二つの論文は本月雜誌界の偉觀である事を疑ひません。

□普通學校の教育論はしばしば唱へられてゐますが、暗き影をもつ少年の教育、或は天分に從つてする教育等の特殊教育に就いての研究は今日以後益々深く探られねばならぬ境地であると思ひます。本誌が「兒童の特殊教育」に就いて四氏にお願ひして得たものは教育に從事してゐる方々には勿論、家庭に於いても必讀さるべきものと信じます。

□「農村婦人の生活」はいよいよ發表されました。いかに悲慘なる農村である事よ、そこに棲む婦人のいかにみじめである事よ、たとへその文は文士の麗調はなくとも、そこに描き出された事實は、社會問題を云爲するものをして何物を敵はしめるものがあります。

□此から菊池寛氏の「戀愛病患者」が出版されました。氏の戲曲と小説の粹を蒐めたものなので、内容は今更いふまでもありませんが就中、「戀愛病患者」一篇の如きは是非共若き女性の一讀をおすゝめいたします。

□同じく新刊された河田博士の「家族制度と婦人問題」は、婦人問題の權威者たる氏が心血をそゝがれたもの、前書と同様に現代女性必讀の書と信じます。

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	貳錢
六ケ月分	四圓	郵稅共
一ケ月分	八圓	郵稅共

註文の注意

◇特大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅貳錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は郵送せず
◇郵便切手代用は壹割増のこと
◇拂込みは振替によるが最も便利なり

本誌廣告料一頁 一等百圓 二等七拾圓

●本社廣告取次所 博報堂 正路喜社 日本電報通信社

大正十三年十月十三日印刷納本
大正十三年十一月一日發行
（十一月號定價七十錢）
編輯兼發行兼印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田眞一郎
印刷所 東京市牛込區加賀町一ノ一二 株式會社秀英社
發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話高輪四九九三 振替東京八四〇二

厨川白村集豫

◆本書成るを聞きて遙に書を寄せて曰く◆

一代の才人白村厨川の全集成る。彼が惜しまれし死は、日本に於ける一時(?)恩を失はしめた。彼が透徹せる頭腦と自ら偽らざる感情と純眞なる良心は自由人として怖れなき虹を論壇に吹きかけた。

彼は恐怖を知らぬエツセイストであつた。色々の意味に於て解放者があつたとすれば、白村厨川は日本娘の爲に戀愛を解放したと云ひ得よう。彼は性慾を越えて魂の自由を說いた。彼は偽らざる愛を民衆に敎へた。その爲に彼は誤解せられた。然し彼は魂として高く民衆と傳統の上に出てゐたのだ。彼は解放者であつたのだ。彼は自由人であつた。そして彼の靈鋒は何人も追從を許さぬ光輝を持つて居る。その光芒は時の經つと共に益輝く。大正の天才を思ふもの彼を必ず思ひ出すであらう。彼は今や永遠の位置を保つ。彼は我等を敎へ、我等の蒙を啓く。彼は最も人間らしい豫言者の一人である。日本の書て生産し得た最も美しき批評家として我等は今や彼を憶出す。彼の全靈はその論集の中に躍る。彼は今や永遠に屬す。

賀川豐彦

第一巻　文學論(上)

本卷に收められた『近代文學十講』は事新しく喋々するまでもなく白村博士の不朽の名著であつて、泰西の近代文學を系統的に組織的に、しかも平明の文體を以て說くこと本書の如きは、西洋にもその類例がないといふことは、發刊當時の定評であつたが、今に於ても東西にその比を見ない。恐らくは現時苟も文學を談ずるもので、一度でも本書を繙かなかつたものはないであらう。その明治大正文壇に與へた影響のいかに甚大なるかは、後世の文藝史家を俟つて明らかにせられることだとは信ずるが、本書の需要が今にして盡きず、寧ろ累年その度を高める觀のあるのは、以て本書の內容價値が永遠に不朽であることを充分に證明して居る。

第二巻　文學論(下)

『十講』が近代文學の鳥瞰圖であるならば、『文藝思潮論』は近代に於ける思想文藝の出つて來るところを闡明した系圖である。前者が「文學の地理」であるならば、後者は「文學の歷史」であつて、この二者は彼此相補つて始めて全體的統一を示すものである。また『苦悶の象徵』は、白村博士が遭難の廢墟の中に見出された唯一の系統的述作であつて、博士が晩年に於ける文藝觀は本書に遺憾なく表はされて居る。蓋し、博士は『文學十講』の發表以後に於て、思索上の一大轉機に逢着した。その心的革命から生れたものがこの『苦悶の象徵』であるから、本書を讀まずして博士の文學史上に於ける地位を斷ずるこ

申込所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二　電話高輪西九九三

約募集に就て

とは到底不可能である。たゞ惜むらくはこの「苦悶の象徴」は未定稿であり斷章であつた。よつて本書の後半には「文藝と性慾」「藝術の表現」「東西の自然詩觀」以下七章を拾補して、博士の文藝觀を學究たらしめることにした。

第三巻　文藝評論

前二巻に於て博士の一般文藝に關する識見を知つたものは、本巻に於てその藝術觀が具體的にいかに適用されたかを知らねばならぬ。本書收むるところ、「現代文學の主潮」「藝術より社會改造へ」「わかき藝術家のむれ」以下約二十五章、英米佛獨の文學より白耳義、西班牙、愛蘭に渉つて、或は無言劇を語り或は漫畫を辨じ、筆を更めては勞働問題と文學を論じ、また英國思想界の今昔を説く。博士が博識多才よく古今東西を貫いた佛は、本巻に於いていよいよ玲瓏たるものがある。

第四巻　エッセイと文明批評

博士が文學者として偉大であつたか或は思想家として文明批評家として拔群であつたかは、未解決の問題であるが、ともかく博士が「象牙の塔」を出て「十字街頭」に呼號した時の反響は、寧ろ文學者としての名聲を凌駕した事は確實である。實に博士の文明批評は佶屈聱牙の閑文字ではなく、その明晳流暢なる「エッセイ」體は日本文學の逸品と稱するも過褒ではあるまい。即ち本作の劈頭を飾る「象牙の塔を出て」を白として、そのほか「平和の勝利」に近代厨思想の蹂躙を案じ、「何が故の脩陋ぞ」に世界文明の暗礁たる人種問題を論じ「小泉先生」に薄倖不遇の舊師を偲び、或は女の表情美を讃し或は服裝の墮落を歎き、さては絶筆「人間讃美」に人性の不滅を謳讃するなど、收むるところ凡て十七章、悉く洗練彫琢の文字である。

第五巻　戀愛觀と宗教觀

『近代の戀愛觀』に於ける博士は、文明批評家といふ消極的な立場から一歩を進めた、熱烈なる「社會改造家」である。「戀愛至上」の炬火一度投ぜられて全思想界は愕然としてその惰眠から覺醒した。輓近の思想界に於てこの書ほど大きな反響を喚起したものはあるまい。

戀愛より宗教へ、これは博士の踏んだ當然の道程であつた。即ち金權の結婚、因襲の戀愛を攻擊した博士の筆端は「惡魔の宗教」を剔抉して餘蘊なかつた。

第六巻　印象記。飜譯及び雜纂

博士の北米漫遊は、その生涯に一時期を劃したもので、奇拔なる社會觀、深刻なる現實感、これらは何れもその時に養はれたのであつた。博士を遇するに一介のペダントを以てした論壇は、『印象記』に載せられた社會批評に驚いた。『印象記』は單なる紀行文ではない それは日本人の筆になつた最も卓絶せる「米國研究」の書である。刻下日米問題の風雲急なるの時、本書を熟讀玩味すべきは、單に爲政者のみの問題ではあるまい。

泰西文學の移植に寧日なかつた博士は、また飜譯家としても優に一家をなして居た。博士が京大在學時代から、時々文壇に發表した譯詩譯文は、その流麗さと正確さとに於て、後人の好模範とするに足るものである。そのほか本巻には、博士の講演、序文等、散佚して未だ廣く世人の目に觸れざるをも集大成して、博士の全面目を躍如たらしめた。

◆頒布方法　全六巻・豫約者のみに頒つ◆刊行期日　大正十三年十二月より毎月一冊宛刊行◆體裁　菊判布裝幀天金函入挿繪コロタイプ版挿入◆申込　十月末日迄に豫約金四圓五十錢（最終會費に充當）を添へて申込の事◆會費　毎月拂四圓五十錢（計廿七圓）一時拂廿五圓◆送料　市内十二錢内地廿七錢を要す

【締切十月三十一日限】

申込所　東京銀座新橋　**福永書店**　振替東京四〇四六六　振替大阪一ナ七五六



大正十一年[illegible]認可
大正十二年十月十三日印刷納本

東京秀英舍印刷

復刻版 女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕
第4回配本（第10巻〜第12巻）

2008年12月10日 発行
揃定価（本体60,000円＋税）

発行者 船橋 治
発行所 不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433
印刷所 三 進 社
製本所 青木製本
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6083-5（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6080-4）